

第4節 明青花

本項で紹介する明青花はB-15グリットのS A19・S A20、S A28の三つの遺構の外側（倉庫内部）に発掘坑を設けて掘り下げた際に出土した資料を主体（第58図16、第60図36、第62図44を除く）に記述を行なう。

S A19・S A20、S A28の三つの遺構は、最終的に一連の遺構（倉庫）であることが判明し、完壊した段階で土壤SK01（S A19・S A20、S A28）と名称を冠したが、出土遺物の注記は調査時の遺構番号であるS A19・S A20、S A28をそのまま採用した。

土壤SK01の時期は、出土した遺物の大半が火災によって二次的な火熱を受けていて釉の変色や釉垂れなどが認められ、一括廃棄がなされた状況にあった。共伴した青磁の雷文帶碗などから14世紀中頃から15世紀中頃の時期が予想され、この時期に近い事項を文献にあたると首里城内に1453年に起きた志魯・布里の乱と1459年に発生した倉庫などの失火の二件が該当することが確認された。土壤SK01内の一括遺物の中から鉄製の錠前などが出でていたことからも1459年の倉庫などの失火の際に火熱を受けた資料であることが推定された。従って、明青花の主流は倉庫などの失火があった1459年以前の永楽（1403年～1429年）から天順（1457年～1464年）頃までの時期に将来されたものとみられる。特に明初の永楽から宣徳（1426年～1435年）を中心とする時期の青花が主流かと考えられるところである。

土壤SK01内から出土した明青花の総数は、110点余が出土している。器種は碗、杯（馬上杯を含む）、鉢、皿、盤、瓶、壺の7種類が認められている。特に碗については大振りと小振りの2種類が存在し、復元資料や底部片からの個体数を推定すると碗（大振り67点、小振り20点）87点、杯（馬上杯2点）4個体、鉢1点、皿（盤1点）5点、瓶（玉壺春瓶6点、梅瓶2点、花瓶1点）9点、壺4点が得られて合計すると110個体前後の明染付が倉庫内に存在していたものとして考えられるところであった（第36表）。

以下、碗から順に杯、鉢、皿、盤、瓶、壺の順に分類概念のみを略述し、個々の遺物の特徴などについては観察表（第37表）に示すこととする。

A. 碗（第57図～第60図28～33）

碗については器形や口縁形態などから外反口縁と内湾口縁の二種類に分けられる。更にサイズにより大振りと小振りの両者が存在するようである。文様については、胴部の主文様が宝相華唐草文と雲堂手の二種類を中心に構成ならびに展開していることが認められた。その他の文様を部位別に点検してみると内底面の文様は梅月文、如意頭雲（蘆芝雲）、宝相華唐草文の三種類を基本とすることが確認されている。口縁部の文様は界線と四方襷文を基本に雷文、梵字様などを描いているようである。

以上、器形やサイズ、文様構成なども考慮して分類し、整理したものが以下に記述した分類概念である。

1. 外反口縁碗（大振り碗）

I群碗（第57図～第58図）

I群碗は外反型の碗で腰部が豊かに丸味を持ってやや外側に開きながら張り出し、胴上部よりゆるやかに外反させた口縁を造る大振りの碗である。I群碗は腰部に丸味を持って成形するため、内底面が広く大きくなっている。I群碗のサイズは65個体での平均の口径が14.7cm、高さ7.3cm、高台径5.0cmである。口径の最小は13.6cm、最大が16cm、高さの最低は6.7cm、最高が7.5cm、高台径の最小は5.4cm、最大は7.2cmのものを大振りの範囲内として把握し、分類を実施した。

文様については胴部の主文様が「宝相華唐草文」・「雲堂手」などの二種類の文様構成があり、これをA～C類までの三つに分類した。さらに口縁の内外面の文様やその組み合わせなどからI群A類とI群C類の二種類においてはa～g種までの7種類の組み合わせが認められたが、ここではa種～c種までの三種類を記し、他のd～g種の4種は口縁が細片のため割愛した。I群の器形、文様などを便宜的に整理したのが以下の分類である。

・ I群A類（胴部の主文様が宝相華唐草文を描くもの）（第57図1～8）

a種…外面の文様は口縁に界線を一条施し、胴部に「宝相華唐草文」を描く。腰部は二条一組の界線を施している。内面は口縁に界線と「四方襷文」を施し、内底面に「宝相華唐草文」や「梅月文」を描いているものである。中には「月」を書き忘れて「梅文」のみを描いたものもある（第57図1～6）。

b種…内外面の文様構成は基本的にa種と同じであるが、外面の口縁に二条一組の界線が追加され、三本の界線となるものである（同図7）。

c種…文様構成は両面ともa種と基本的に同じであるが、外面の高台脇と高台際に各々一条づつ界線が追加され腰部から高台までに四本の界線が存在する。内底面に片切り彫りによる陰闇線が施され、その内側に界線と「梅月文」を描いているものである（同図8）。

・Ⅰ群B類（胴部の主文様が雲堂手を描くもの）（第58図9）

外面の文様は口縁に一条ないし二条一組の界線を施し、胴部に「雲堂手」風の文様を描く。腰部には二条一組の界線を施す。内面の口縁には界線と「四方津文」を描き、内底面に界線と「梅月文」を描いているものである（破片資料を含めて3点が得られている）。（同図9）。

・Ⅰ群C類（外面口縁に省略化した雷文と胴部に雲堂手や宝相華唐草文を描くもの）（第58図10～16）

a種…外面の口縁に界線を省略化した「雷文」で文様帶をつくり、胴部に「雲堂手」風の文様を描く。腰部に二条一組の界線を施す。内面は口縁に「梵字」様の文様を描き、同文様の上下に界線を施して区画をつくる。内底面に界線と「如意頭雲文」（靈芝雲）を描くものである（第58図10～14）。

b種…外面の口縁はa種と同様の文様であり省略化した「雷文」を小さく描く。胴部の「宝相華唐草文」は丁寧に描く。腰部は二条一組の界線を施す。内面口縁の文様は界線と「四方津文」を施している点でa種と異なっている。内底面に界線と「梅月文」を描くものである（同図15）。

c種…外面の口縁に界線と「雷文」を描き、胴部に「雲堂手」風の人物を描く。内面口縁に「梵字」様の文様を描き、上下の界線でもって文様帶とするものである（同図16）。

2. 外反口縁碗（小振り碗）

Ⅱ群碗（第59図～第60図28～30）

Ⅱ群碗はⅠ群碗を若干、小型化した小振りの外反口縁碗である。器形は腰部がⅠ群よりも丸味が強くなつてやや内側に閉じ気味に腰下部から立上がり、胴上部からゆるやかな外反で持つて口縁を仕上げている。Ⅱ群碗の基準となったサイズは口径の最小が10.8cm、最大が12.6cmの範囲内に収まるものとした。因みに高さの最低は5.8cm。高台径は最小が4.7cm、最大で5.4cmであった。また、Ⅱ群碗の平均的なサイズ19個体では口径が11.6cm、高さ6.3cm、高台径4.8cmであった。

文様については胴部の主文様である「宝相華唐草文」、「松竹梅文」、「如意頭繫ぎ文」などからA・Bの二種類に大きく分けた。口縁の内外面の文様構成などからa～f種までの6種類に細分した。

・Ⅱ群A類（胴部の主文様は宝相華唐草文・四宝唐草文・松竹梅文・如意頭繫ぎ文を描くもの）

a種…外面の口縁に一条の界線を施し、胴部に「宝相華唐草文」を描く。腰部に二条一組の界線を施す。内面の口縁に界線と「四方津文」で文様帶をつくり、内底面に圓線と「月と草文」、「草花文」などを描くものである（第59図17～19）。

b種…口縁の内外面に一条の界線を施し、胴部に主文の「宝相華唐草文」を描く。腰部と高台間に界線を一条づつ施している。内底面に「福」の吉祥文字を入れて圓線で閉じているものである（同図20・21）。

c種…外面の口縁に二条一組の界線を施し、胴部に「四宝唐草文」を描いている。腰部と高台間に二条一組の界線を二組施し、更に高台脇や高台外面に各一条づつ界線を追加している。内面の口縁には「雷文」と界線で文様帶をつくり、内底面に「草文」、「月と草文」を描いているもの（同図22～25）。

d種…外面口縁に二条一組の界線を施し、胴部に「松竹梅文」を描く。腰部の界線は二条一組のものを一組施している。内面口縁には「雷文」と界線を描き、内底面に「梅文」を描くもの（同図26）。

e種…外面の口縁に「雷文」と界線を施し、胴部に「如意頭繫ぎ文」を描く。界線は二条一組のものを腰部と高台間に二組施している。内面口縁には「梵字」様の文様と界線を描き、内底に「如意頭雲」（靈芝雲）とみられる文様を描くもの（第59図27・第60図28）。

f種…両面の口縁に「雷文」と界線を描き、胴部に「松竹梅文」を描いているもの（第60図29）。

・Ⅱ群B類（胴部に細線描きの波文と奥須描きの魚と花を描く）（第60図30）

本タイプは一例のみ出土している。外面の界線は一条のみ口縁と腰部に施し、二条一组のものは高台脇に施されている。胴部には細線描きの「波文」と呉須描きの「魚文」と「花文」を描く。内面口縁には「雷文」と界線を施し、内底面に「松と月」を描くもの（同図30）。

3. 内彌口縁碗（大振りの碗）

Ⅲ群碗（第60図31・32）

本群碗の器形は腰部での丸味がⅠ・Ⅱ群碗と比較して微弱である。高台脇からゆるやかに丸味を保持しながら口縁までスムーズに移行する内彌型の大振りの碗である。Ⅲ群碗は2点のみ得られている、2点とも口径が16cm求めることができた。高さについては7.7cmと7.9cm、高台径は5.4cmと5.6cmのサイズがそれぞれ求められている。文様は2点とも共通であり、外面口縁に界線と「波濤文」、胴部に「宝相華唐草文」などを描く。内面口縁は界線と「四方禪文」を描く。内底面には「草花文」と界線を施しているものである（同図31・32）。

4. 内彌口縁碗（小振りの碗）

Ⅳ群碗（同図33）

Ⅳ群碗のタイプは一点のみ出土している。器形はⅢ群碗と同じであり、Ⅲ群碗をそのまま小型化した感じの碗である。サイズは口径が13.0cm、高さが6.1cm、高台径4.8cmを求めることができた。胴部への主文様は「水草と泡」を描く。内底面も胴部に描かれた「水草と泡」を描いている。内面口縁には「唐草文」を描いているものである。

B. 杯（第60図34～37）

口縁が外反するタイプの杯が3片得られている。杯には高台を有する杯と高足杯の二種類が認められた。後者の高足杯は一般的に馬上杯と称されるものである。便宜的に高台を有する杯をⅠ類とし、脚が貼り付けられた高足杯をⅡ類とした。その他に器厚やサイズなどから細分を試みて、A・Bの二種類に分類した。

1. 杯Ⅰ類（同図34・35）

杯のⅠ類は高台を有するもので、厚手と薄手の二種類が認められたので、前者の厚手の杯をA種とし、後者の薄手の杯をB種とした。

杯Ⅰ類A種…厚手の外反口縁の杯。胴部に「唐草文」を描くものである。腰下部を欠くが厚味や丸味がある状況から高台を保持した杯として判断される（第60図34）。

杯Ⅰ類B種…薄手の外反口縁の杯。器厚が1.2mm～2.3mmと非常に薄く仕上げている。胴部に「松竹梅」を描き、内面の口縁に「四方禪文」を描いている。内底面に「草文」を描いているものである（第60図35）。

2. 杯Ⅱ類（同図36・37）

Ⅱ類の高足杯（馬上杯）には、脚部や身部の状況から大振りのものと小振りのものが存在する。大振りのものをA種とし、小振りのものをB種とした。特にB種の小振りの杯は身部の外底面を尖らせ気味に成形した後で個別に製作した脚部を貼り付けて完成させたものとして考えられた。

杯Ⅱ類A種…大振りの高足杯の中空の脚とみられる資料で、呉須で脚中央部と脚の下位に「界線」と「竹葉文」をそれぞれ描いているものである（同図36）。

杯Ⅱ類B種…小振りの外反口縁の高足杯である。胴部と内底面に「宝相華唐草文」や「草花文」を描いている（同図37）。

C. 鉢（第60図38）

口径の推算が25.3cmと求められた大型の鉢が1点のみ得られている。口縁が外反するタイプの大鉢である。胴部に呉須で「雲堂手」で人物や風景を描く。内面の口縁には「四方禪文」を描き、内底面に「雷文」を描いているものである（同図38）。

D. 盆（第61図39～42）

皿の器形的な特徴として、腰部で丸味を持った外反口縁の皿と腰部で「く」の字状に屈曲する外反口縁の皿がある。前者をⅠ型として位置づけて、後者のものをⅡ型として二種類に分類した。Ⅱ型の皿については屈曲の度合いからa種とb種の二つに細分した。

1. 盆 I 型（第61図39・40）

I型の盆は器厚や高台が薄く仕上げられたもので、高台がやや内側に閉じ気味に成形されている。文様は外面の胴部に「宝相華唐草文」、内面口縁には「四方禪文」を描いている。内底面には盡端の「麒麟」を主文に描き、周辺に「松」「如意雲」「月」「草」を描いているものである（同図39・40）。

2. 盆 II 型（同図41・42）

厚手の皿で腰部が屈曲するものをII型とした。腰部の折れ具合で、屈曲のきついものをa種（同図41）とし、ゆるいものをb種（同図42）とした。外面胴部の文様は、a・bの二種とも「唐草文」を描く点で共通しているが、内面の口縁の文様ではa種が「雷文」を描き、b種は「四方禪文」を描いている。

E. 盆（第61図43）

鈎縁盤が一点のみ得られている。外面胴部に「宝相華唐草文」を描く。内面の口縁に「唐草文」、内底面は二本の陽圧線と界線で文様を区画し、区内に「竹葉文」「草文」などを描いている（同図43）。

F. 瓶（第62図44～第64図57）

瓶は便宜的に小瓶と大瓶の二種に大別した。前者の小瓶はいわゆる「玉壺春瓶」であり、後者の大瓶は「梅瓶」と「花瓶」である。小瓶の「玉壺春瓶」については胴部の主文様からI類とII類に分類し、主文様以外の文様などの構成からa種からc種までの三種に細分を試みた。

1. 小瓶（第62図44～52）

玉壺春瓶を仮称して小瓶として取り扱ったものである。復元資料は得られていないが、文様や底部資料などから推定された個体数は10個体程度であった。胴部への主文から「雲堂手」と「宝相華唐草文」の二種類と分類し、「雲堂手」の主文のものをI類、「宝相華唐草文」を主文とするものをII類とした。その他に底部資料が4点得られていて、3点の図化を試みた（同図50～52）。

① 小瓶 I 類（同図44・45）

I類の小瓶は胴部の主文様が「雲堂手」を描いているもので2点（同図44・45）のみ出土している。

② 小瓶 II 類（同図46～49）

II類は胴部の主文様が「宝相華唐草文」を描き、頭上部に「芭葉文」を描いているものである。頭上部の「芭葉文」直下の文様の組み合わせからa種からc種の三種に細分した。

II類a種…頭上部の芭葉文帯直下に「唐草文」を描いているもの（同図46）。

II類b種…頭上部の芭葉文帯直下に「雷文」を描くもの（同図47）。

II類c種…頭上部の芭葉文帯が欠いているが、界線直下に「梵字」様の文様を描いているもの（同図48・49）。

2. 大瓶（第63図53～56、第64図57）

大瓶として分類したものは、梅瓶と花瓶の二種類である。梅瓶は2個体分出土していて、いずれも宝珠玉状の握（註1）が貼り付けられた蓋が2個出土している。花瓶は頭部に獅子面と輪を貼り付けたものが1個体出土している。前者の梅瓶をI型とし、後者の花瓶をII型とした。

① 大瓶 I 類（第63図53～56）

I型の梅瓶は蓋と身が文様構成やサイズなどが合致していることが、類似資料（註2）からも裏付けられるようである。蓋（同図53・54）の文様は蓋甲上に「如意頭文」、蓋外面は「唐草文」を描いている。身（同図55・56）の口頭部に「亀甲繋ぎ文」、頭部直下には下向きの「ラマ式蓮弁文」を描いていて、底面近くから上向きの「ラマ式蓮弁文」を腰上部まで描いている。胴部中央の主文は柄の「宝相華唐草文」を描いている。

② 大瓶 II 類（第64図57）

頭部に輪をえいた獅子の面を貼り付けた双耳（把手）の花瓶である。口頭部は盤口となっていて、一旦外反させた後に口縁のみをほぼ垂直に成形した口造りとなっている。腰下部から底面近くまでの形状も口頭部の形態に近似し、腰下部で一旦窄まった後で漸次、下位は外側に開いていて途中でやや内側に縮まり氣味に直に近い状態で底面まで移行している。文様は口縁に「如意雲」、頭上部が「芭葉文」を描く。頭部中央には「唐草文」、頭下部が下向きの「芭葉文」を描く。胴部の主文は「梅」と「松」の樹文を描いている。腰部から下は「波濤文」・

「芭葉文」が展開されているようである。獅子頭えの輪は肩部近くから貼り付けられている(第64図57)。この種の花瓶と類似する器形は、管見の限りでは県内外にもなく、英國のデヴィッド・コレクションにある元至正十一年(1351年)銘入りの青花龍文像耳瓶(註3)が近いようであるが、本品は明代初期～前半頃の資料と見られる。

註

註1. 藤岡了一 「明の染付」 『陶磁大系』 第42巻 平凡社 1980年 (96頁・97頁参照)。

註2、註1と同じ。

註3. 日本経済新聞社「デヴィッド・コレクション 中国陶磁展」1980年（N.O.42のカラー参照）。

G. 壺 (第64図58・59、第65図60・61)

小型壺と大型壺の二種類が確認されている。小型の壺は2個体分が存在し、大型壺は1個体分出土している。他に大型壺に被さる蓋が1点得られている。小型壺をI型とし、大型壺をII型として二つに分類した。

1. 壹 I 型 (第64图58·59)

J型は外面の文様などからA種とB種の二種類に細分した。

I型A種…口頭部に界線を施し、界線直下に間弁を持った蓮弁を下向きに描く。胴部に「宝相華唐草文」を描いて主文とするもの（同図58）。

Ⅰ型B種…顎部直下から丸彫りの「蓮弁文」を底面近くまで施したものである（図59）。

2. 臺II型 (第65図60・61)

いわゆる酒会壺と称されているグループに所属する大型の壺である。蓋と身が各一点づ出土していく両者は文様や身と蓋の噛み合いなどから別種のものとみられる。蓋(同図60)は甲の頂周に14弁花の「捻じ花」を撮の周辺に展開させ、甲の下周に「如意頭雲文」を描いている。身(同図61)の文様は口頸部に「波濤文」、肩上部は八宝を内含する逆さの「ラマ式蓮弁文」を描いている。腰下部にも「ラマ式蓮弁文」を描いている。胴部には主文となる「牡丹唐草文」を大きく描き出しているようである。

第36表 明青花推定個体数

菌種・分類 固化の有無	碗										杯				皿		瓶				計		
	I群					II群					I		II		II		小瓶		大瓶				
	A		B			C		A			B		N群		小計		鉢		盤				
	a	b	c	d	e	f	g	不固	a	b	c	d	e	f	不固	a	b	A	B	I	II	III	
固 化	6	1	1					1	5	1	1				3	2	4	1	2	1	1	23	56
固 化 な し	4		7	1	3	1	5	9	2	6	4	1	2	2	2	3		54					
合 计	10	1	1	7	1	3	1	5	10	7	7	1	4	1	2	2	2	3	4	4	1	23	110

注：小瓶は上記以外に底部4点がある。したがって、個体数は114個体になる。

第37表 明青花観察一覧

() : 推定

調査 団体 番号 遺物番号	名 称 ・ 假 称	分類	口徑 器 高 台 径 (cm)	文 様 構 成	呉須(藍色) の 發 色	軸 色	施軸・素地・貫入など	出土地点 出土層
明 青 花 器 1	外 口 縁 碗 大 振 り 碗	I Aa	14.0 7.0 5.9	外面の口縁と腰部は界線、胴部に宝相華唐草文を描く。内面の口縁は四方禪文と界線、内底に草花文と團線を描いている。	鮮明。呉須が一部黒ずむ。	淡灰白色	総軸後に脛付の外端から高台内面途中まで軸を搔き取って露胎とする。淡灰白色の細粒子。貫入はない。	S A19- 20 第1層
		I Aa	14.4 (7.1) (5.9)	“。内面口縁は四方禪文と界線、内底には團線と梅月文?を描く。	やや鮮明。	淡青白色	高台を欠く。両面に軸が残存。淡灰白色的細粒子。両面に粗い貫入が観察される。	S A19- 20 唯 第2層
		I Aa	13.6 (6.8) (5.8)	“。内面の口縁は四方禪文と界線、腰部に界線を描く。	やや鈍い。呉須が一部軸上に浮遊。	淡灰白色	“。淡灰白色の細粒子。両面に粗い貫入。	S A19- 20 唯 第3層
		I Aa	(13.6) 7.7 6.4	“。内面の口縁は四方禪文と界線、内底に團線と草花文?を描く。	やや鮮明。	淡灰白色	総軸後に脛付の外端から高台内面途中までの軸を搔き取って露胎とする。淡灰白色的細粒子。両面に粗い貫入が認められる。	S A19- 20 唯 第3層
		I Aa	14.8 — —	“。内面の口縁は呉須が軸上で著しく浮遊する為、四方禪文や界線が確認しにくい。	不鮮明。呉須は全て軸上で浮遊する。	淡灰白色	高台を欠く。両面に軸が残存。淡灰白色的細粒子。貫入はない。	S A19- 20 唯 第2層 第4層
		I Aa	16.0 7.4 6.2	外面の口縁と腰部は界線、胴部に宝相華唐草文を描く。内面の口縁に四方禪文と界線、内底に團線と梅月文を描く。	やや鮮明。部分的に黒ずむ。	淡灰白色	総軸後に脛付の外端から高台内面途中までを搔き取って露胎とする。淡灰白色的細粒子。両面に細かい貫入。	S A20 第2層
		I Ab	14.4 — —	外面の口縁に二条一組の界線と新たに追加され単独の界線で三本となる。胴部に宝相華唐草文、腰部に界線が描かれる。内面口縁に四方禪文、内底に呉須描き梅月文と片切り彫りの陰團線を施す。	鈍い。呉須が一部軸上に浮遊する。	淡灰白色	脛付と内底を欠く。両面に軸が残存する。淡灰白色的細粒子。両面に粗い貫入。	S A19 第2層 第3層
		I Ac	15.0 7.3 5.4	外面口縁に界線、胴部に宝相華唐草文、腰部と高台脇にそれぞれ一本ずつ界線が追加される。内面口縁に四方禪文、内底に呉須描き梅月文と片切り彫りの陰團線を施す。	やや鮮明。呉須が一部軸上に浮遊し、黒ずんでいる。	淡灰白色	総軸後に脛付外端から外底までの軸を搔き取って露胎させる。	S A19- 20 唯 第2層
		I B	14.6 6.7 6.0	外面は口縁と腰部に界線、胴部に雲文と草花文を描く。内面の口縁には四方禪文と界線。内底に梅月文と團線を描いている。	やや鮮明。呉須の一部が軸上で浮遊する。	淡青白色	総軸後に脛付外端から高台内面途中までの軸を搔き取って露胎とする。淡灰白色的軸。両面に細かい貫入。	S A20 第3層
		I Ca	15.4 7.4 5.4	外面は口縁に省略化した雷文を描き、雷文の上下に界線を施す。胴部には雲文と草花文を描く。腰部に界線。内面は口縁に界線と梵字様の文様。内底に團線と如意頭雲文(盡芝雲)を描く。	淡い。一部呉須が黒ずむ。	灰白色	“。淡灰白色的細粒子。両面は部分的に粗い貫入がみられる。文様は簡素化され難に描いている。	S A20 第3層

第37表 明青花観察一覧

編番 団番号 遺物番号	名稱・ 假称	分類	口径高 員直径 (cm)	文 横 構 成	呉須(藍色) の 発 色	釉 色	施釉・素地・貫入など	出土地点 出土層
554 国5 11		I Ca	— — 4.8	口縁端部を欠く。外面には省略の雷文と界線を描き、胴部に草花文を描いている。胴部に界線。内面には梵字?と界線。内底に團線と如意頭雲文(靈芝雲)。	やや鮮明。呉須の一部が釉上に浮遊し、黒ずむ。	淡灰白色	前項、10と同一タイプ。淡灰白色の細粒子。両面に粗い貫入。文様は丁寧に描かれている。	S A19· 20畦 第2層
555 国5 12	外 反 口	I Ca	15.4 7.5 5.6	外面は口縁に省略の雷文と界線、胴部および腰部には草花文と界線を描く。内面の口縁には梵字様文と界線。内底に團線と如意頭雲文(靈芝雲)を描く。文様は丁寧に描かれている。	淡く、鮮明。	淡灰青白色	総釉後に疊付外端から高台内面途中までの釉を搔き取って露胎とする。淡灰白色の細粒子。両面に細かい貫入。	S A19· 20畦 第2層 第3層
556 国5 13	縁 碗	I Ca	15.0 7.4 5.0	外面は省略雷文とその上下に界線を描く。胴および腰には草花文と界線。内面の口縁には梵字様文と界線。内底に團線と如意頭雲文(靈芝雲)。	淡く、鮮明。	々	“。淡灰白色の細粒子。両面に細かい貫入。文様は丁寧に描かれている。	S A19· 20畦 第2層 第3層
557 国5 14	(大 振 り 碗)	I Ca	15.2 7.3 5.6	外面の口縁に省略雷文と界線。胴及び腰に雲文・草花文・界線を描く。内面の口縁には梵字様文と界線。内底に團線。	やや鮮明。呉須が一部釉上で浮遊する。	淡灰白色	“。画面に粗い貫入。	S A19· 20畦 第3層
558 国5 15	振 り 碗	I Cb	14.4 7.0 4.4	外面の口縁に省略雷文と界線、胴部は宝相華唐草文と界線。内面口縁は四方津文と界線。内底に梅月文と團線を描く。	鮮明。呉須が一部黒ずみ、釉上で浮遊する。	淡灰白色	“。施釉は雑で高台際が部分的に露胎となる。両面に粗い貫入。	S A19· 20畦 第2層 第3層
559 国5 16		I Cc	15.0 — —	口縁破片。外面の口縁に雷文と界線、胴部に人物と雷文を描く。内面は梵字様文と界線を口縁に描いている。文様は丁寧に描く。	鮮明。一部呉須が黒ずむ。	白色	両面に釉が残存。淡灰白色の細粒子。貫入はない。	B-14 覆土
560 国5 17	外 反	II Aa	11.2 6.6 4.8	外面の口縁と腰部に界線、胴部に宝相華唐草文を描く。内面は口縁に四方津文と界線。内底は草文・雲形・星を描いている。	やや鮮明。	白色	疊付外端から外底までを露胎とする。他は両面とも総釉。淡灰白色的細粒子。両面に細かい貫入。	S A20 第2層
561 国5 18	口 縁	II Aa	11.6 6.4 4.6	“。内面は口縁に四方津文と界線。内底に月と草文を描き團線で閉じる。文様は比較的丁寧に描く。	鮮明。	淡灰白色	疊付外端から高台内面途中まで露胎する。他は総釉。淡灰白色的細粒子。両面に粗い貫入。	S A19 第3層
562 国5 19	碗 (小 振り 碗)	II Aa	11.6 6.1 4.7	“。内面は口縁に四方津文と界線。内底に草花文を描き團線で閉めている。	“。呉須が一部黒ずむ。	淡灰白色	“。“。淡灰白色的細粒子。両面に細かい貫入。	S A19· 20畦 第2層 第4層
563 国5 20		II Ab	12.0 6.3 5.4	外面の口縁・腰・高台際に界線を描き胴部に宝相華唐草文を雑に描く。内面の口縁は界線のみを施す。内底に「福」の字款と團線を描く。	鈍く、不鮮明。一部呉須が釉上で下に流れれる。	淡灰白色	総釉後に疊付外端から高台内面途中までの釉を搔き取って露胎とする。淡灰白色的細粒子。貫入はない。	S A19· 20畦 第2層 第4層

第37表 明青花観察一覧

() : 推定

編目番号 図版番号 書類番号	名 称 ・ 假 称	分類	口径 高 台 径 (cm)	文 様 構 成	貞須(藍色) の 發 色	釉 色	施釉・素地・貫入など	出土地点 出 土 層
新54 図版6 21		II Ab	12.5 (6.5) (4.8)	両面口縁に界線。外面胴部に宝相 華唐草文を描く。内面の腰部には 團線を施す。	やや鮮明。一部貞須が黒ずむ。	白色	両面に釉が残っている。 白色の細粒子。貫入はない。	S A19· 第4層
〃 22		II Ac	12.2 4.7 6.1	外面の界線は口縁・胴・腰・高台 際の4箇所に施す。胴部には四宝 唐草文を描く。内面の口縁には界 線と雷文。内底に草文と月を描い ている。	鮮明。	淡灰 青 白 色	両面施釉の後で豊付外端 から高台内面途中までの釉を搔き取って露胎とする。 淡灰白色の細粒子。 貫入はない。	S A19· 20 第2層
〃 23	外 反 口	II Ac	12.1 6.4 4.7	〃。〃。内面の口縁には 雷文と界線。内底に草文を描き、 月を描き忘れる。	鮮明。一部貞 須が黒ずむ。	〃	〃。淡灰白色的細粒 子。貫入はない。	S A20 第3層 第4層
〃 24		II Ac	11.6 6.0 4.6	外面の界線は口縁・腰・高台際・ 高台の4箇所に施し、胴部へは四 宝唐草文を描く。内面口縁は界線 と雷文。内底は草文と團線を描い ている。	やや鮮明。	〃	〃。淡灰白色的細粒 子。貫入はない。	S A19· 20唯 第3層
〃 25	綠 碗	II Ac	12.6 (5.6) (4.9)	高台を欠く。外面の界線は口縁と 腰部に施されている。胴部に四宝 唐草文を描いている。内面は界線 と雷文を丁寧に描く。	鮮明。貞須の 一部が黒ずむ。	淡 青 白 色	両面に釉が残る。淡灰白 色の細粒子。貫入はない。	S A20 第2層
〃 26		II Ad	12.6 5.8 5.2	外面は口縁と腰部に界線を施し、 胴部に松竹梅の文様を描く。内面 は口縁に界線と雷文。内底に梅文 を書き團線で閉じる。	鮮明。	〃	両面に総釉した後で、豊 付外端から高台内面途中まで の釉を搔き取り露胎とする。 淡灰白色的微粒子。 貫入はない。	S A19· 第2層 第4層
〃 27	小 振 り 碗	II Ae	12.6 — —	高台を欠く。外面は口縁に界線と 雷文。胴部と口縁に如意頭繋ぎ文、 腰と高台際に界線を施す。内面は 梵字様文と界線。内底には團線と 靈芝雲?と團線を描かれる。	鮮明。	灰 白 色	両面とも残存部はすべて 施釉。灰白色的微粒子。 貫入はない。	S A20 第3層
新54 図版 28		II Ae	(11.5) (6.4) (4.8)	口縁と底面の資料を欠く。外面の 胴部に如意頭繋ぎ文を描く。界線 は腰・高台際・高台に施す。内底 に靈芝雲?と團線を描く。	やや鮮明。	灰 青 白 色	高台内面途中から豊付内 端の範囲内は露胎で他は 総釉。淡灰白色的細粒子。 貫入はない。	S A19 栗石 S A20 第3層
〃 29		II Af	10.2 (5.8) (4.1)	腰下部より下位の資料を欠く。口 縁の両面に雷文と界線を施す。胴 部に松竹梅を描く。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	残存部の両面に施釉。淡 灰白色的細粒子。貫入は ない。	S A20 第2層
〃 30		II B	11.4 6.2 4.4	外面の界線は口縁・腰・高台際に 施す。胴部は線彫りの波文に魚・ 花を貞須で描く。内面の口縁には 雷文と界線。内底に松と月文と團 線を描く。	やや鮮明。一部貞 須が黒ずむ。	白 色	豊付を除いて総釉。淡 灰白色的微粒子。貫入は ない。	S A19· 20唯 第1~3層 S A20 第2層 第4層
〃 31	内 寛 口 縁 碗	III	16.0 7.7 5.6	外面の口縁は波濤文と界線、胴部 は宝相華唐草文、腰部に界線を描く。 内面は口縁に四方博文と界線。 内底に草花文と團線を施す。	〃。	淡 青 白 色	総釉後に豊付外端から高 台内面途中までの釉を搔き取 って露胎とする。白色の細粒 子。両面に粗い貫入。	S A20 第2層

第37表 明青花観察一覧

() : 推定

標番号 国庫番号 遺物番号	名 称 假 称	分類	口径 高台径 (cm)	文 様 構 成	呉須(蓝色) の 発 色	釉 色	施釉・素地・貫入など	出土地点 出 土 層
鞆國 國庫47 32	内 口 縁 碗	III	16.1 7.9 5.4	外面の口縁は波濤文と界線、胸部は宝相華唐草文、腰部に界線を描く。内底は口縁に四方津文と界線。内底に草花文と團線を施す。	やや鮮明。一部呉須が黒ずむ。	淡 青 白 色	總釉後に疊付外端から高台内面途中までの釉を搔き取り露胎とする。淡灰白色の細粒子。両面に細かい貫入。	S A19- 20畦 第2層 第3層
〃 33		IV A	13.0 6.1 4.8	外面は口縁に唐草文と界線。胸部は水草・泡を描き、腰に界線を施す。内底は口縁は界線のみである。内底にも水草・泡・團線を描いている。	鮮明。一部呉須が釉上で浮遊し黒ずんでいる。	淡 灰 白 色	總釉後に疊付外端から高台内面途中まで搔き取りを行って露胎とする。両面に粗い貫入。淡灰白色の微粒子。内底面が窪む。	S A19- 20畦 第2層
〃 34	I A	9.0 (4.8) (3.1)	外面は口縁と腰部に界線、胸部に唐草文を描く。内底は口縁に界線のみを描いている。品のみ灰緑色の呉須を用いている。	鮮明。	灰 白 色	残存部はすべて釉が掛けられている。淡灰白色の細粒子。両面に粗い貫入。	S A19 第4層	
〃 35	杯	I B	(6.5) (4.4) 3.5	口縁を欠く。外面の胸部と腰部に梅文と界線を描く。内底の口縁近くに雷文と界線。内底に草文と團線を描いている。	〃。 一部呉須が黒ずむ。	淡 青 白 色	疊付のみ露胎。淡灰白色の微粒子。貫入はない。器厚は最も薄い箇所で1.2mmを測り、丁寧に成形されている。	S A19 第2層
〃 36	高 足	II A	— — 3.8	大振りの高足杯の脚部が得られている。外面は界線を脚中央寄りに施し、脚下位に竹葉文と界線を描いている。	鈍く、鮮明さに欠く。	淡 青 白 色	疊付外端から内面は露胎、淡灰白色の微粒子。内面は絞り目様の指ナデを削り取っているが徹底していない。	C-15- 16 第1層
〃 37	杯	II B	8.8 — —	小振りの高足杯。外面の口縁と腰に界線、胸部に宝相華唐草文を描く。内底は口縁に界線のみ施し、内底に草花文と團線を描いている。	やや鮮明。	淡 灰 白 色	両面とも總釉。淡灰白色の細粒子。貫入はない。杯と脚は個別に製作して、貼り付けで完成させている。	S A20 第2層
〃 38	鉢	鉢	25.3 (11.1) (10.7)	大振りの鉢。外面の口縁、腰部、高台脇に界線、胸部に雲堂手(人物・風景)、腰下部から高台にかけて間弁を持つ蓮弁文を描く。内底の口縁に四方津文と界線、腰部に雷文と界線を描き内底に梅を描く。	鮮明。	淡 灰 白 色	疊付のみを欠く。残存部分は両面とも總釉。淡灰白色の細粒子。貫入はない。腰下部の蓮弁の呉須は一部灰緑色に変色する。	S A20 第2層 S A19- 20畦 第2層
鞆國 國庫48 39	III	I	20.8 4.8 12.2	外面の口縁と高台際に界線、胸部に宝相華唐草文を描く。内底の口縁には四方津文と界線。内底の團線内側には麒麟と月・雲・松・草が繊細に描かれている。	やや鮮明。呉須が一部黒ずむ。	淡 青 白 色	両面を總釉した後で疊付および周辺の釉を搔き取る。白色の微粒子。貫入はない。	S A20 第2層 S A15 西トレンチ 第6層
〃 40		I	20.0 4.4 12.1	〃。内底の口縁は四方津文・界線を描く。内底の團線内側には麒麟と月・雲・松・草が繊細に描かれている。	〃。 〃。	〃	貫入はない。	S A19- 20畦 第2層
〃 41		II a	18.6 5.5 6.7	外面の口縁と腰部に界線、胸部に唐草文を描く。内底は口縁に雷文と界線。内面及び内底に團線を施す。	鈍い。	淡 灰 白 色	露胎部分は疊付外端から高台内面である。淡灰白色の細粒子。両面に粗い貫入。	S A19- 20畦 第2層

第37表 明青花観察一覧

() : 推定

標記 番号 42	名 称 ・ 假 称	分類	口径 高 度 (cm)	文 様 構 成	呉須(藍色) の 發 色	釉 色	施釉・素地・貫入など	出土地点 出上層
標記 番号 43	皿	II b	17.2 (5.0) (6.0)	外面の口縁と腰部に界線、胸部に唐草文を描く。内面に四方溝文と界線。内底に圈線を施す。	純い。呉須が釉上で散っている。	淡灰白色	残存部分は釉が掛けられている。淡灰白色的微粒子。両面に粗い貫入。	S A19- 20畦 第2層
標記 番号 44	盤		18.0 2.3 11.0	外面の胴部に宝相華唐草文、高台に界線を描く。内面は鈎上面に唐草文と界線。内底には陽圈線2本を施し、その周辺に二条一組の界線を2本施して文様の区画とする。区画内には竹葉文を施している。	〃 〃	淡青白色	総釉後に骨付および骨付の両端の釉を搔き取っている。淡灰白色的微粒子。貫入はない。	S A34 栗石 直下
標記 番号 45	I	— — 8.6		外面の界線は胴上部・腰下部・高台際・高台の4箇所で確認される。頭下部は宝相華唐草文、胴部に雲堂手(雲文・人物・草・家)の文様を描く。腰下部は溝文を三個連結した雲とみられるものを描いているようである。	鮮明。	灰白色	釉は内面まで施されている。露胎部分は骨付および骨付の両端のみである。灰白色的微粒子。貫入はない。	S A20 第2層 S A19- 20畦 第2層
標記 番号 46	I	— —		頭下部の上下に梅文を挟んで界線を施す。胴部に雲堂手(雲文・松・人物・家)を描いている。腰部に界線を施す。	〃	淡青白色	〃。淡灰白色的微粒子。貫入はない。	S A20 第2層 第4層
標記 番号 47	小 瓶	II a II b	6.5 4.6 — —	口唇と口縁の上下は呉須で縁取り。頭上部に芭蕉文。頭中央と頭下部は宝相華唐草文を描く。文様は界線で区画されている。	やや不鮮明。	青白色	内面の頭中央から下が露胎する。他は総釉される。灰白色的微粒子。貫入はない。胴上で胴垂ぎされる。	S A19- 20畦 第3層
標記 番号 48		II c	— — —	内面は口縁のみに界線。外側は頭上部から胴部へ、上から芭蕉文・雷文・如意頭雲文・宝相華唐草文を順次配置した構図となる。各文様は界線で区画されている。	〃	淡青白色	〃。淡灰白色の微粒子。両面に細かい貫入。胴垂ぎ痕跡が胴上部で確認される。	S A20 第3層
標記 番号 49		II c	— — —	頭下部から頭中央部の破片。上位に芭蕉文、中央に梵字様文、下位に唐草文を配置し、界線でもって区画している。	やや純い。	淡灰白色	両面に釉が残存する。淡灰白色的微粒子。両面に細かい貫入。	S A20 第3層
標記 番号 50	I	— — 7.6		瓶の高台片。外側は腰部と高台際に界線を施す。腰下部に溝文を三個連結した雲とみられるものを描いている。	〃。呉須の色合いが淡青色となる。	淡灰白色	両面は総釉。外側は骨付と骨付の両端のみが露胎。淡灰白色的微粒子。両面に細かい貫入。	S A19- 20畦 第2層
標記 番号 51	小 瓶 底	— — 7.2		〃。腰部と高台脇に界線が認められる。	やや鮮明。	〃	露胎する部分は骨付外端から外底面までである。灰白色的微粒子。貫入はない。	S A20 第1層 第2層
標記 番号 52		— — 8.6		〃。腰部に如意頭文とみられる文様を描く。高台際に界線。	〃	淡青白色	〃。骨付外端から内端のみが露胎。淡灰白色的微粒子。両面に細かい貫入。	S A20 第1層

第37表 明青花観察一覧

() : 推定

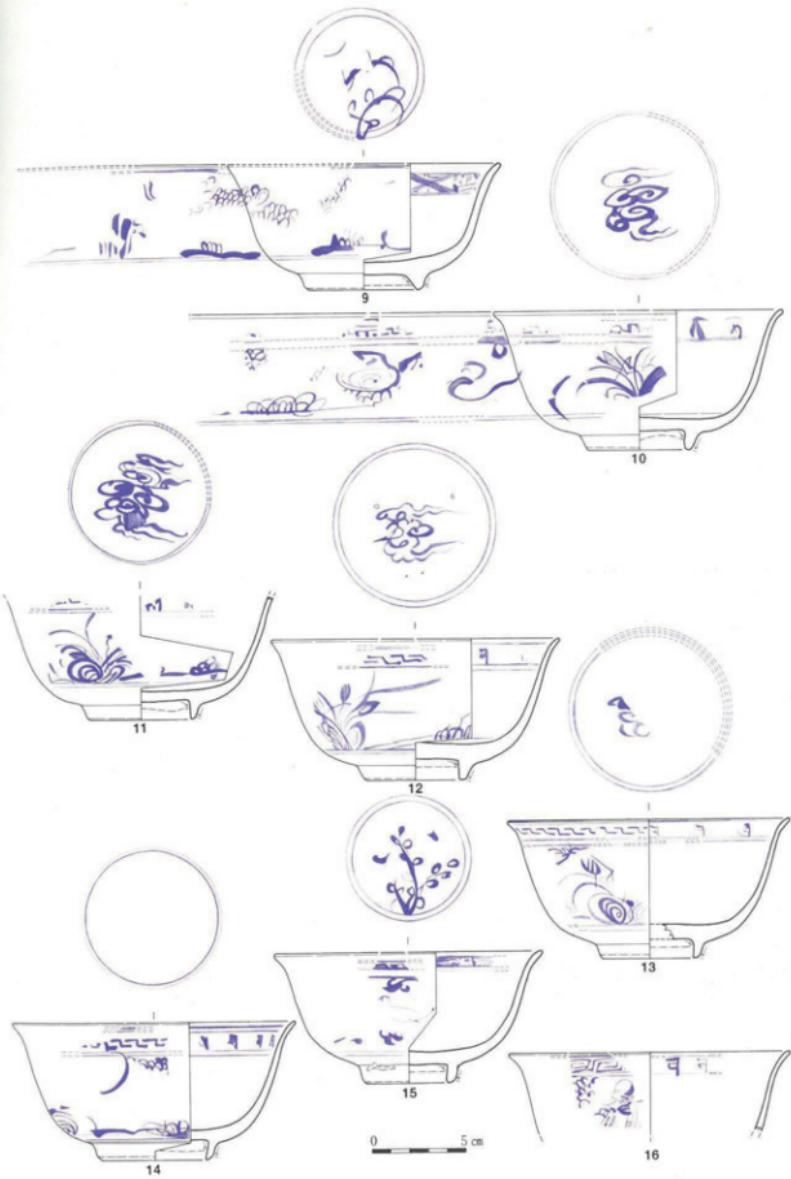
器物番号 団体番号 遺物番号	名 称 ・ 假 称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	文 様 構 成	呉須(藍色) の 發 色	釉 色	施釉・素地・貫入など	出土地点 出土層
第6回 団体50 53	大	I	9.0 (8.4) —	蓋の直径は9.0cm。高さは8.4cmで復元した。蓋甲上面は如意頭文と太目と細目の界線。外面は唐草文と界線を施す。	やや鈍い。	青白色	内面から外面下端は露胎である。灰白色の微粒子。貫入はない。	S A19 第2層
〃 〃 54		I	9.1 (8.4) —	蓋の直径は9.1cm。高さは8.4cmで復元。文様構成は上記した53と同一である。	〃	〃	〃。〃。〃。	S A19· 20畦 第2層
〃 〃 55		I	5.5 35.2 12.3	二本一組の界線が口縁から底部近くまでの間に4本残存している。口縁から腰部には上から順に亀甲繋ぎ文、下向きのラマ式蓮弁、大柄の宝相華唐草文、上向きのラマ式蓮弁を施す。	やや鮮明。	青白色	内面は総釉。底面近くから外底は露胎のまま。灰白色の微粒子。貫入はない。底はベタ底で窓で難に調整。内面の釉色は淡い青白色。	S A20 第2層 S A19· 20畦 第3層
〃 〃 56	瓶	I	5.5 35.9 11.8	二本一組の界線が口縁から底部近くまでの間に5本確認される。文様の組み合わせと配置は、上記55と同一である。	〃	〃	〃。〃。〃。〃。内面の釉色も上記55と同じ色合いで。	S A20 第3層
第6回 団体51 57		II	14.0 41.4 12.8	花瓶とみられる。一条ないし二本一組の界線を口縁から底面近くまで7本施して文様の区画を造る。口縁から底部までの文様は、上位から下位方向へ、如意雲・芭蕉文・唐草文と獅子面・下向きの芭蕉文・松と梅・波濤文を展開している。	やや鮮明。	淡灰白色	釉は内面口縁から外面の底部近くまで施釉。灰白色の微粒子。獅子面と輪は貼り付けである。獅子面は型造り。輪については型物かどうかは判らない。外底面を浅く削り出して、微弱な高台を造る。	S A20 第2層 S A19· 20畦 第3層
〃 〃 58	壺	I A	6.2 (10.2) 6.4	外面は口頭部に界線を施し、そのまま直下に蓮弁を持つ蓮弁文を描く。胴部に宝相華唐草文を描く。腰部に文様を区画する界線を加え、そのまま直下に簡略化した蓮弁文を底面近くまで施す。	やや鮮明。呉須が一部黒ずんでいる。	淡灰白色	釉は両面に施されている。露胎する部分は豊付の部分のみである。釉の掻き取りは難である。淡灰白色の微粒子。外底面を浅く削り出して高台を成形する。貫入はない。	S A19· 20畦 第1層 S A20 第2層
〃 〃 59		I B	6.8 (10.8) 6.2	外面の口頭部に二条一組の界線を施す。頭下部から底面近くまで丸窓彫りによる蓮弁を描く。蓮弁はやや肉厚で丸味を帯びている。呉須による文様は、釉上で流れ落ちて判然としない。	不鮮明。	淡青白色	〃。〃。〃。〃。淡灰白色的微粒子。外底面を浅く削り出して高台を仕上げる。高台内面を意識して成形した為、上記58より丁寧に仕上がっている。貫入はない。	S A19· 20畦 第2層 B-16 排水溝内 覆土
第6回 団体52 60		II	縁直径 26.0 内側 直径 17.4	蓋甲頂部に直径10mmの孔を開けている。蓋甲頂周には呉須で14弁花の捻じ花を描いている。蓋甲下周は如意頭雲(笠芝雲)を描く。	やや鮮明。呉須が一部釉上で浮遊する。	淡青白色	釉は蓋甲から鋸下端(内面縁沿い)まで施している。蓋甲内面にも部分的に釉が掛けられている。淡灰白色的微粒子。貫入はない。	S A19· 20畦 第2層

第37表 明青花観察一覧

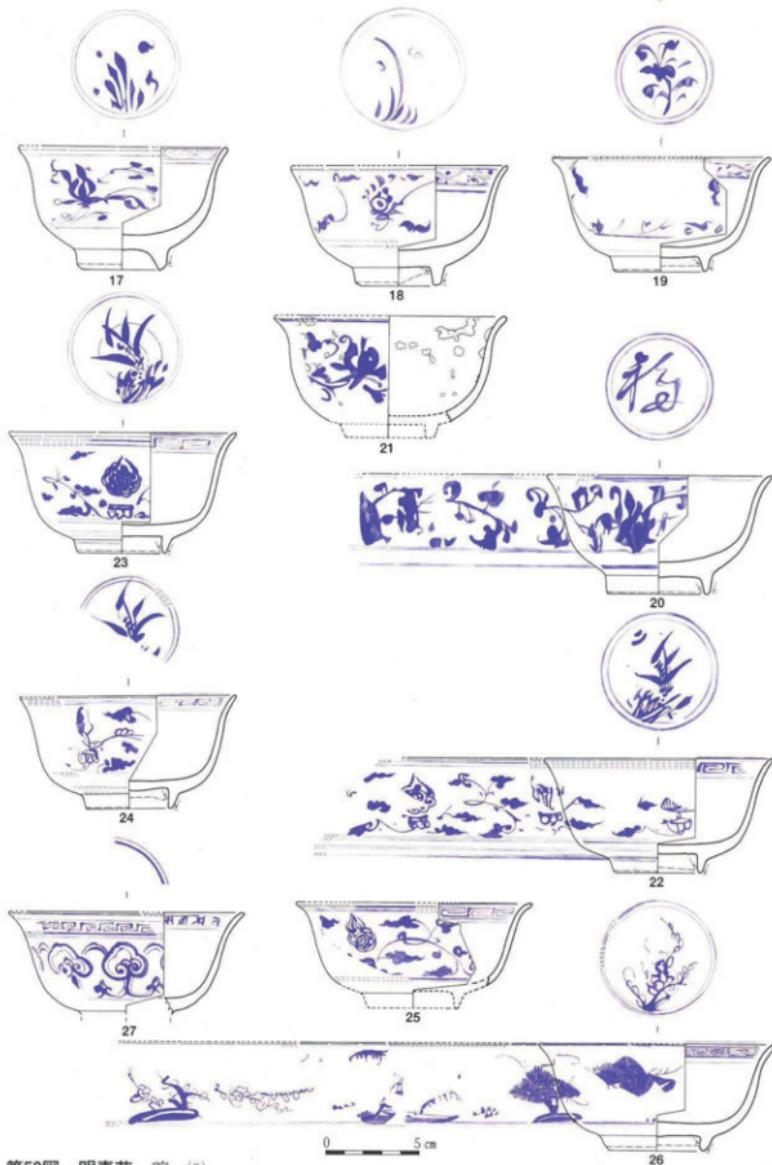
測定番号 国際番号 遺物番号	名称・ 假称	分類	口径高 高台径 (cm)	文 様 構 成	呉須(藍色) の 発 色	釉 色	施釉・素地・貫入など	出土地点 出 土 層
61	壺	II	22.6 37.3 20.9	外面の口頭部に波濤文、肩上部に珊瑚を代表とする八宝をラマ式蓮弁の弁内に描いている。胴の主文様は牡丹唐草文を大きく描く。腰部には葉文と丸文を持ったラマ式蓮弁文を描いている。文様の区画を示す界線は、口縁・頭部・胴上部と胴下部・腰下部に一条ないし二条一組のものを5箇所に施している。	鮮明。呉須の一部が黒ずみ釉上で浮遊する。	白色	底面近くと外底のみが露胎する。内面の釉は雑に薄く掛けられている。一部、僅かではあるが露胎する箇所も認められる。淡灰白色の微粒子。貫入はない。	S A 19- 20號 第3層 第4層



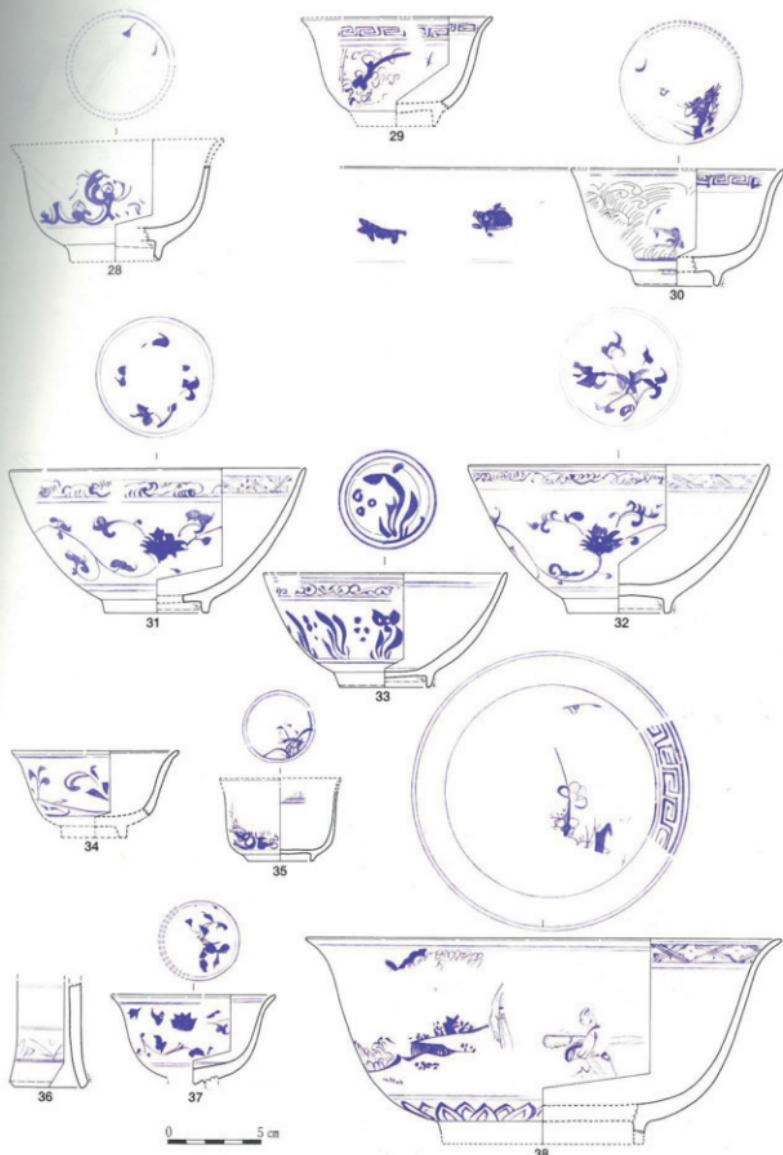
第57図 明青花 碗 (1)



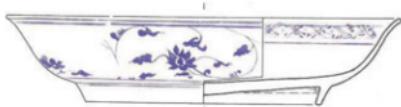
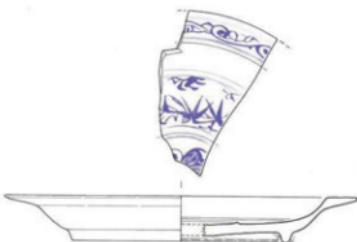
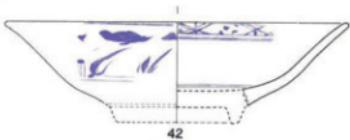
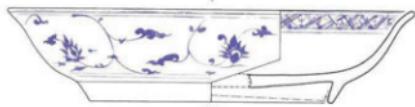
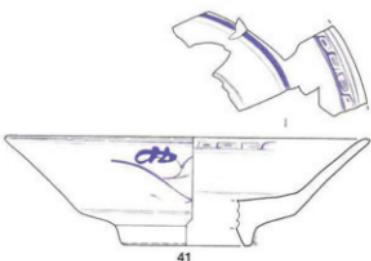
第58図 明青花 碗 (2)



第59図 明青花 碗 (3)

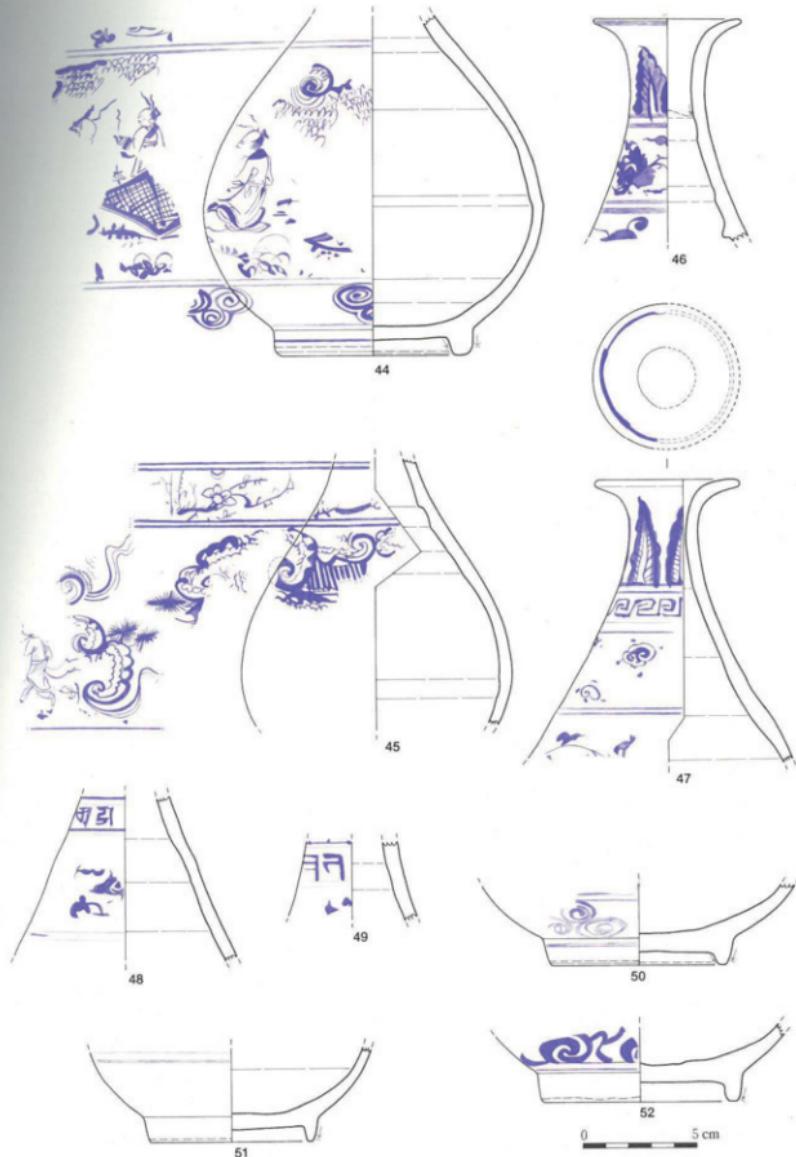


第60図 明青花 碗・鉢・杯

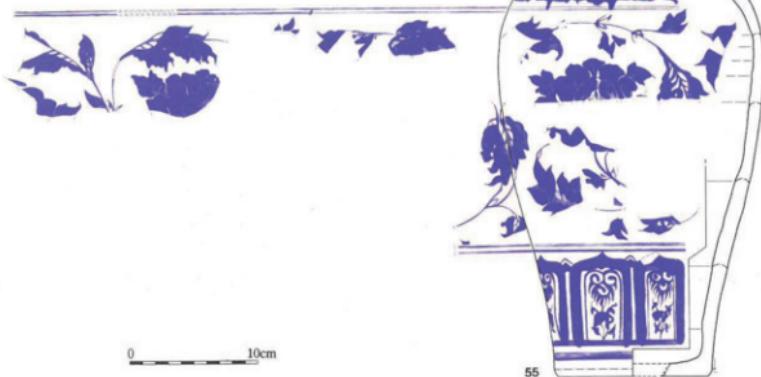
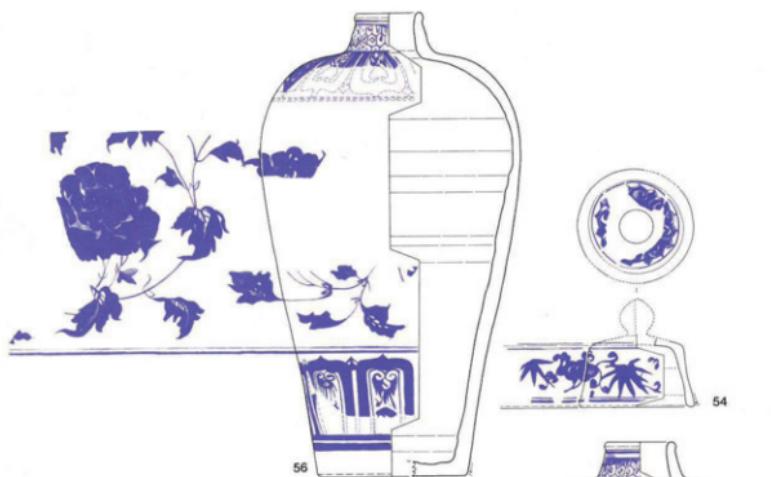


0 5 cm

第61図 明青花 盆



第62図 明青花 瓶

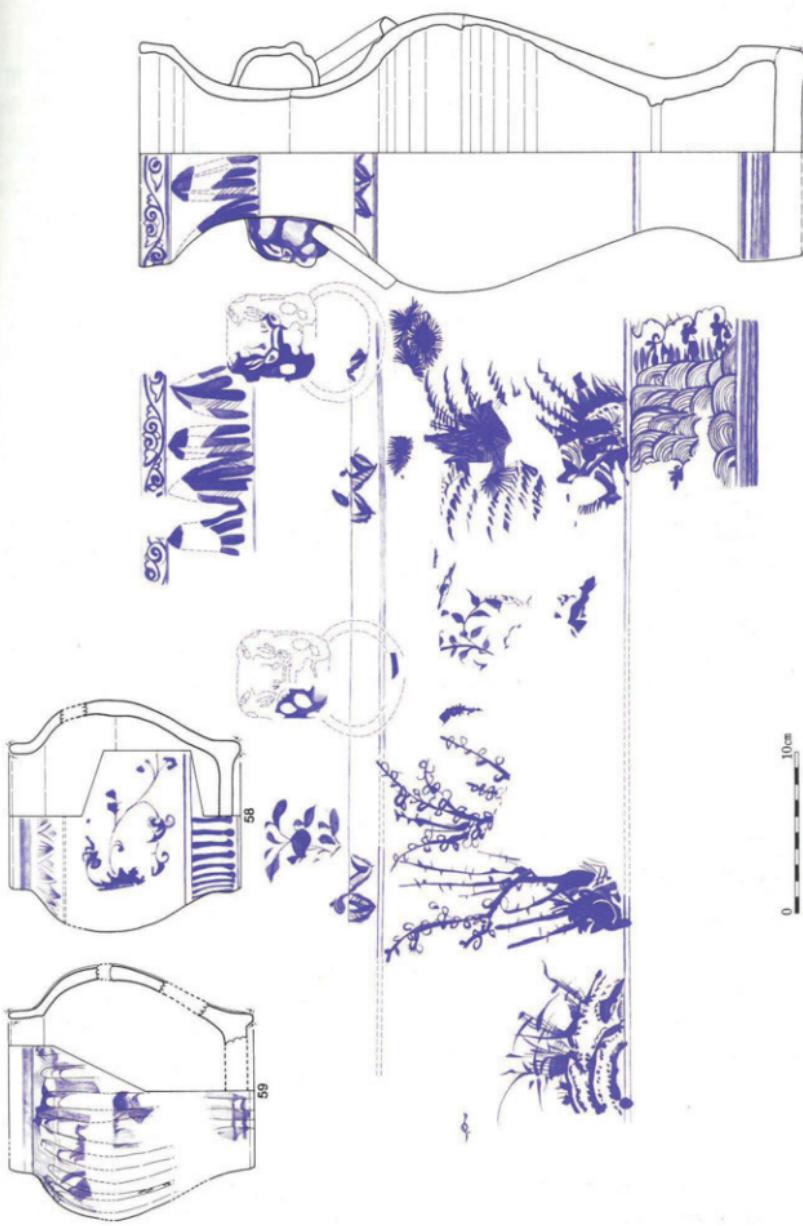


0 10cm

第63図 明青花 大瓶

0 10cm

第64圖 明青花 花瓶·壺



第65圖 明青花 莲



第5節 白磁

白磁については土壌SK01(SA19・SA20、SA28)出土の資料についてのみ報告することにする。土壌SK01より確認された器種としては碗、皿、杯、水注、壺、瓶の6器種が確認されている。量的には碗が多く出土しているようである。これとは逆に最も少ない器種は水注と壺の二種類であり、各一点づつ出土している。

碗の中で注目されたのは中国元朝の枢府窯(景德鎮)で焼成されたとみられるものが一点出土しているようである。杯の資料では古手のものである中国金朝の定窯所産の白磁蓮花杯(12世紀中頃～13世紀中頃)が一例のみ出土している。この種の杯は口縁を口禿げとして口唇に金・銀・銅などの覆輪を掛け用いていたようであるが残念ながら覆輪は確認されていない。参考までに他の遺構や遺物包含層から出土した古手の資料としてピロースクタイプ碗II(13世紀中頃～14世紀前半)(註1)や口禿碗(14世紀)などが得られているが、玉縁口縁碗は今のところ一点も出土していないことが過去の調査報告(註2・3)から窺い知ることができる。さて、土壌SK01から出土した白磁の推定個体数は口縁や高台破片を含めて検討した場合、碗28点、皿30点、杯4点、水注1点、壺1点、瓶11点の合計75個体相当であった。

以下、碗、皿、杯などの順に分類概念を記す。個々の特徴については観察表に表わした(第38表)。

A. 碗(第66図1～11)

土壌SK01より出土した碗の中には、所謂「枢府手」に属するとみられる大振りの碗が一例のみ得られている。碗は大旨小振りの外反口縁碗が多く得られている。碗は器形と施釉などから以下のとおり分類した。

1. 碗I類(同図1)

内側口縁碗で「枢府手」のタイプに所属するものとみられるもので腰下部で丸味を持って膨らみ口縁が内側にする。高台と口縁のサイズを比較した場合、高台は小さく安定感がない。疊付内端から外底へは斜位に成形され外底面の縁沿いは丸味をもって削られている。高台の側面觀がやや「ハ」の字状となるものである。

2. 碗II類(同図2～6)

小振りの外反口縁碗である。成形は全体的に稚で胴部に顯著な輪轉痕が観察される点が特徴のひとつである。この種のタイプは6個体分が得られていて、5点を図化した。II類碗の平均的なサイズとしては口径11.6cm、器高4.6cm、高台径4.5cmであった。施釉の手法は腰下部から高台外面までは無釉であり、器を釉薬に浸して掛ける手法で実施し、その後で内底釉を輪状に焼き取っている。重ね焼きを意識した釉の焼き取りがなされた碗である。

3. 碗III類(同図7)

薄手の外反口縁碗。器壁が2mm前後と薄く均一的で丁寧に成形されている。口縁は外面から削りを加えているため口唇が尖り気味となるものである。

4. 碗IV類(同図8)

口唇の両端に削りを加えて面を取った端反りの碗。口縁に削りを加えて疑似肥厚の口縁とするが肥厚は小さい。

5. 碗の高台資料(同図9～11)

高台の破片が4点得られていて高台の成形などからa種～c種の三種類に分類した。

a種…高台内側から外底は丸味を持たせて削り出して疊付外端を斜位に成形する。高台の内割りは浅い。疊付の幅が極端に狭くなるものや尖るものがある。釉は高台外面で止まるものである(同図9)。

b種…外底面の内割りは極端に浅い。高台内面は斜位に削り成形がなされる。釉は高台脇で止まるものである(同図10)。

c種…高台内側と疊付外端を斜位に削り出しているため、疊付が尖っている。高台内割りは深いようであり、釉は高台外面で止まるものである(同図11)。

B. 皿(第66図12～15、第67図16～20)

皿は口縁形態などから外反型と直口型の二者に大別できるようである。

1. 外反口縁皿

外反型の口縁を有するものをI類とするが内面への文様の有無でa種・b種の二種類に分類した。

皿 I 類 (第66図12~14)

- a 種…無文の外反口縁の皿。外底を平坦に成形するもの (同図12・13)。
- b 種…口縁を欠いているが胴部の形状から外反皿となるもので内面胴部に印花花文を施すもの (同図14)。

2. 直口口縁皿

直口口縁の皿を II 類とした。サイズ的にみて I 類よりも小型の皿である。高台の成形などから a 種・ b 種の二種類に分類した。

皿 II 類 (第66図15、第67図16~20)

- a 種…口径が12cm程度を測る皿で、黄白色の釉を内面から外面胴部まで施すもの (第66図15)。
- b 種…口径が9.2cm~9.8cmの範囲内に収まる皿で、高台に抉りが四箇所入っている。所謂、抉入高台皿と称されるもの (第67図16~20)。

C. 杯 (第67図21~24)

三種類の杯が存在する。杯の中には12世紀中頃~13世紀中頃に位置づけられる中国金朝の定窯のものが含まれる。以下、器形や施釉などの特徴から次のように分類した。

1. 杯 I 類 (同図21)

円筒形の口禿杯で口縁が花弁状となるものである。中国金朝 (1114年~1234年) の時期に河北省曲陽縣定窯で製作されたもので外面に片切り彫りによる蓮花を描くものである。

2. 杯 II 類 (同図22)

外反口縁の杯で、ちょうど、碗 II 類を小型化したような器形である。ただし碗 II 類で認められた内底面へ釉の搔き取りがないものである。

3. 杯 III 類 (同図23・24)

上面観が八角形となる杯 (八角杯) で口縁から胴部を笠で削って面を取る。釉色や貫入の有無などから a 種・ b 種の二種類に分けられる。

- a 種…灰白色の釉を施した杯で、貫入がないもの (同図23)。

- b 種…黄白色の釉を施した杯で、非常に細かい貫入がみられるもの (同図24)。

D. 水注 (第68図25)

13世紀後半~14世紀代に比定された水注が1点出土している。高台を有し全体的に丸味を帯びている。肩上部に管耳を二個貼り付けているので龍泉窯の管耳をモデルに中国南部の窯で製作されたものとみられる水注である。

E. 壺 (同図26)

小型の壺で1点のみ出土している。口縁に小さな玉縁状の肥厚を造り肩部が強く外側に張り出していて「怒り肩」の形態となる。底部はベタ底となり立ち上りの箇所で一旦くびれる。

F. 瓶 (同図27~30)

所謂、玉壺春瓶と称されるタイプのもので4個体分相当が出土している。4点とも釉色や高台の成形などが近似していて同一形態の瓶とみられる。脛付のみ露胎とする。器形は腰下部で丸味をもって膨らみ胴上部から頸部の方向へスムーズに窄まっていく。口縁できつく折れ曲がって外反する。内面の成形は外面と比べて雑であり輻痕が目立つ。本品は当初、福建省博物館の楊 琦 副研究員の同定では青白磁であると判断されていたが、出光美術館理事の長谷部楽爾氏の教示で本項で取り扱ったものである。

G. その他の資料

その他の資料として報告する皿は、当初青磁皿に含めて分類していたが、釉色や高台の成形などから総合的に検討した結果、白磁皿の範疇にあるものとして判断したものである。3点が復元されている。いずれも外反口縁の皿であった。口造りや高台の成形などから a 種と b 種の2種に分類した。

1. 外反口縁皿

a 種…外反口縁の皿で、外体面に顕著な輻痕が観察される。外面の釉は腰部中央で止まり、内底面の釉を輪

状に搔き取り蛇ノ目状とする。高台は低目で置付がやや幅広く成形されているものである（第67図31・32）。

b種…a種と同様に外反口縁の皿である。外面の釉は腰部で止まっている。内底面の釉を円形状に搔き取っている。高台は低目であるが置付外端を斜位に削り取って成形するため置付の幅が狭くなっているものである（同図33）。

註

註1-a. 金武正紀・阿利直治 「ビロースク遺跡」 石垣市教育委員会 1983年。

b. 金武正紀 「ビロースクタイプ白磁碗について」『貿易陶磁研究』 第8号 日本貿易陶磁研究会 1988年。

註2. 當眞嗣一・上原 静・大城聖子 「首里城跡 歓会門・久慶門内側地域の復元整備事業にかかる造構調査」 沖縄県教育委員会 1980年。

註3. 上原 静・我那覇 念 「首里城跡 南殿・北殿跡の造構調査報告」 沖縄県教育委員会 1995年。

第38表 白磁觀察一覧

標識番号 標識番号 物語番号	名 称 ・仮称	分類	口径 器高 台径 (cm)	素 地	施 釉	釉 色	成 形・文 様・貫 入 等	出土地点 出土 層
6664 6663 1	内 外 反 口 縁 碗	I	14.6 7.1 4.8	灰白色 の微粒 子。	置付から外底までは 露胎。他面は總釉さ れ、透明度の高い釉 である。	青白色 の透明 釉。	外面に輪轍痕が観察できる。置付外端 を斜位に深く削っている。外底の内側 には浅く中央で三角錐状に浅く盛り上 がっている。貫入はない。	S A19· 20畦 第2層 S A20 第3層
6664 6663 2		II	12.0 5.4 4.5	黄白色 の細粒 子。	外面の腰部から外底 面まで露胎。内面は 總釉後に内底の釉を 輪状に搔き取ってい る。	灰白色 の釉。	外面に顯著な輪轍痕が認められる。置 付外端を斜位に深く削り込んで面を取 る。両面に非常に細かい貫入。	S A19· 20畦 第3層
6664 6663 3		II	12.0 4.2 4.1	灰白色 の細粒 子。	〃 〃 〃	〃 〃	〃 〃 〃 貫入はない。	S A19· 20畦 第3層
6664 6663 4	碗	II	12.0 4.9 5.0	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃	〃 〃 〃 両面に非常 に細かい貫入。	S A19· 20畦 第2層
6664 6663 5	振 り	II	11.2 5.2 4.9	〃 〃 〃	〃 〃 〃	黄白色 の釉。	外面は全体的に溶けた金属が付着し成 形手法が判らない。内面に非常に細か い貫入がみられる。	S A19· 20畦 第3層
6664 6663 6		II	11.0 4.6 3.4	〃 〃 〃	〃 〃 〃	灰白色 の釉。	外面に輪轍痕が明瞭にみられる。置付 外端を斜位に深く削り込んで面を取る。 両面に非常に細かい貫入がみられる。	S A19· 20畦 第2層
6664 6663 7	薄 手 碗	III	11.2 — —	灰白色 の微粒 子。	両面に釉が残ってい る。	灰白色 の透明 釉。	口唇を尖らせる。口縁に軽い削り調整 を加えるため稜が横走する。貫入はな い。	S A19· 20畦 第2層
6664 6663 8	端 反 碗	IV	11.4 — —	淡灰色 の細粒 子。	〃 〃	灰白色 の釉。	口唇の両端を削って面を取る。口縁を 浅く削って疑似肥厚とする。両面に細 かい貫入がみられる。	S A20 第3層

第38表 白磁觀察一覧

() : 推定

器物名 圖版番号 遺物番号	名 称 假 称	分類	口径高 高台径 (cm)	素 地	施 軸	軸 色	成 形・文 様・貫 入 等	出土地点 出土層
新居 國版53 9		a	— 5.0	灰白色 の細粒 子。	費付外端面から外底 までは露胎。	青白色 の軸。	費付は尖らせて成形する。費付内端か ら外底線は丸味のある削りである。両面に粗い貫入がみられる。	S A19· 20
ク ク 10	台 資 料	b	— 5.7	白色の 微粒子。	内面のみに軸が残る。 外面は露胎のままで ある。	白色の 軸。	費付は丸味を持たせて成形し費付内端 が斜位に浅く削っている。外底は平坦 に削る。粗い貫入がみられる。	S A19· 20畦 第2層
ク ク 11		c	— 7.1	灰白色 の細粒 子。	費付外端面から高台 内側は露胎。	青白色 の軸。	費付は尖らせて成形する。高台の内削 りは深い。両面に粗い貫入がみられる。	S A19· 20畦 第2層
ク ク 12	外反口 縁皿(無文)	I a	16.2 (3.2) 8.2	淡灰白 色の細 粒子。 微細な 黒色鉱 物が僅 かに混 入する。	内面は縦軸。外面は 高台外面まで施軸。	灰白色 の透明 軸。	費付の両端を斜位に削って仕上げてい る。外底面は平坦に削り取って成形す る。両面に粗い貫入がみられる。内底 面に針目の目痕。ベトナム産の可能性 もある。	S A20 第2層 第3層
ク ク 13		I a	11.4 — —	灰白色 の微粒 子。	両面に軸が残存する。	黄白色 の軸。	口縁端部を軽く折り曲げて成形したた め疑似肥厚となる。貫入はない。	S A19· 20畦
ク ク 14	同(有文)	I b	— — 8.0	ク。 高台内側から外底面 までは露胎。	灰白色 の軸。	費付を尖らせて成形。内面胴部に印花 花文、内底面は型押しによって生じた 陽圧線。貫入はない。	S A19· 20畦 第2層	
ク ク 15	直口口 縁皿	II a	12.2 — —	黄白色 の細粒 子。半 磁胎。	内底から外面胴部ま で施軸。	黄白色 の軸。	口縁近くに輪轆痕がみられる。両面に 非常に細かい貫入。厚手の直口口縁皿。	S A19· 20畦 第3層
新居 國版54 16		II b	9.3 2.4 4.6	黄白色 の粗粒 子。半 磁胎で 脆い。	ク。	火熱を 受け黄 白色に 変色。	外面に雑な輪轆痕が観察。内底面に目 痕。費付を弧状に抉っている。	S A19· 20畦 第4層
ク ク 17	直 口口 縁皿	II b	9.8 2.5 4.6	白色の 細粒子。 半磁胎。	内底から高台際まで 施軸。	白色の 軸。	ク。 ク。 ク。 両面に非常に細かい貫入がみられる。	S A19 第2層
ク ク 18	(抉入高台 皿)	II b	9.5 2.5 4.3	黄白色 の細粒 子。	内底から外面の腰部 まで施軸。	灰白色 の透明 軸。	外面は比較的丁寧な輪轆挽きで目立た ない。費付に軸が付着する。内底面に目 痕がみられる。両面に非常に細かい 貫入。	S A20 第2層
ク ク 19		II b	9.2 1.5 4.9	ク。 微細な 茶褐色 の鉱物 が少量 混入。	ク。 。	白色の 軸。	外面胴部に輪轆痕。内底に目痕がある。 両面に非常に細かい貫入。素地は半磁 胎で脆い。	S A19· 20畦 第3層

第38表 白磁觀察一覽

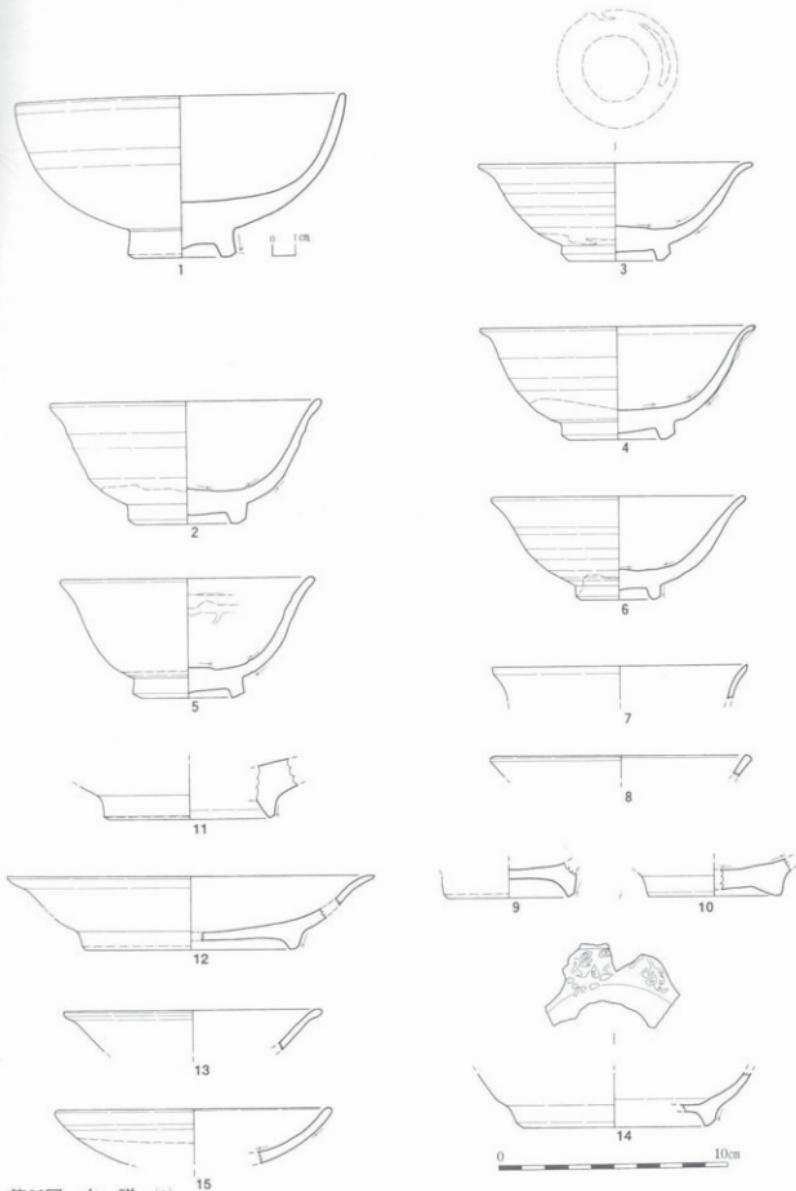
() : 推定

相国番号 国際番号 遺物番号	名称・ 假称	分類	口径 高台径 (cm)	素地	施 釉	釉色	成形・文様・貫入等	出土点 出土層
新國 國54 20	直口 口縁皿 抉入高台皿	II b	9.2 2.1 4.6	白色の 細粒子。 微細な 気孔痕 が僅かに 観察でき る。	内底面から外面胴部 まで施釉。	黄白色 の釉。	脛付の抉りは他と比較して極端に浅い。 外面胴部の削りも浅く削られ軸輪痕が 目立たない。内底面に目痕がある。両 面に非常に細かい貫入がみられる。	S A19 第3層
々々 21	口禿杯	I	10.8 — —	白色の 微粒子。	両面に釉が残ってい る。口唇と口縁内端 の釉を搔き取って口 禿とする。	〃	口唇および口縁内端の釉は面取り成形 を兼ねた搔き取り。外表面は片切り彫り による蓮花を描く。貫入はない。	S A20 第3層
々々 22	外反口縁杯	II	8.0 3.6 2.8	灰白色 の細粒子。 微細な 気孔痕 が僅かに みられる。	内底面から外面腰部 まで施釉。	灰白色 の釉。	口縁がゆるやかに外反する。高台際と 脣付内端にカンナ目が観察される。内削 りは雑で削りによる段差が生じている。	S A20 第2層
々々 23	八角杯	III a	8.2 — —	灰白色 の微粒子。	内面から外面胴部に 施釉。胴下部が一部 露胎。	灰白色 の釉。	口唇を弧状に削って山形の口縁とする。 胴部は面取りして角を取っている。貫 入はない。	S A19 20畦 第4層
々々 24	八角杯	III b	— — —	〃	両面に釉が残存する。	黄白色 の釉。	〃。両面に非常 に細かい貫入。	S A19 20畦 覆土
新國 國55 25	水注		6.8 9.3 5.8	白色の 細粒子。 微細な 気孔痕 が多く みられる。	内底面から腰下部ま で釉を施した後で口 唇の釉を搔き取って いる。	黄白色 の釉。	内底面に渦巻状の軸輪痕が観られ中心 は陶土が盛り上がっている。高台際に カンナ目。脣付外端を斜位に浅く削つて 面を取る。内削りは浅く雑である。 注ぎ口と耳は貼り付けである。注ぎ口 は身の内側より丁寧に穿孔し孔は直径 6 mmを測る。耳の孔は4 mmを測った。 両面に細かい貫入がみられる。	S A19 20畦 第3層
々々 26	壺		8.4 (15.0) 8.8	灰白色 の微粒子。	外面を除いて総釉。	灰白色 の釉。	口縁直下に削りを加えて玉縁状の肥厚 を造る。内面の胴部に胴垂ぎの痕跡が ある。外底は雑な削りが入り線状の傷 もある。外底は浅く窪む。外底縁辺を削 って面を取った後に上位をくびれさせ ていている。貫入はない。	S A20 第3層
々々 27	瓶 (玉壺春瓶)	—	6.7 24.3 9.1	灰白色 の細粒子。 微細な 気泡痕 が僅かに 観察さ れる。	脣付のみ露胎。他は 総釉。	青白色 の釉。	内面に胴垂ぎの痕が2箇所で観察され る。脣付は若干丸味を持たせて成形。 口縁を水平に屈曲させて成形させる。 両面に粗い貫入。	S A20 第2層 第3層

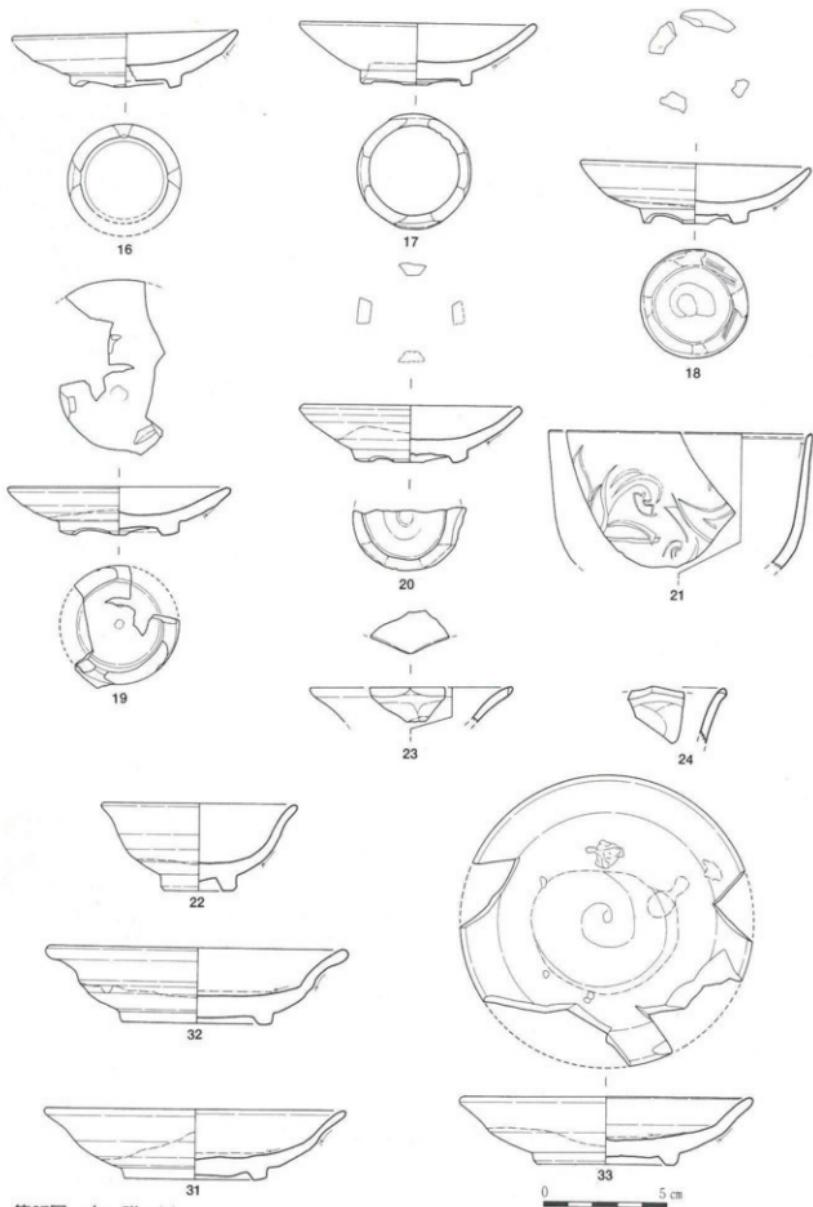
第38表 白磁觀察一覧

() : 推定

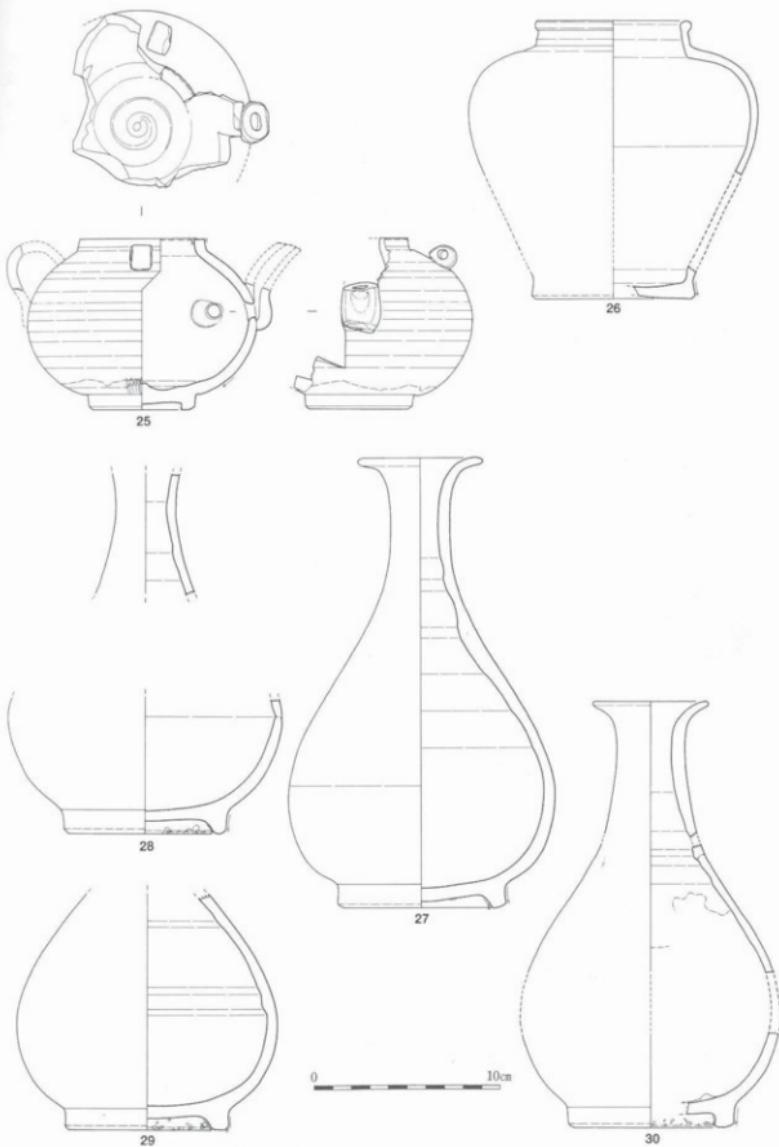
標印 図版番号 遺物番号	名 称 假 标	分類	口径 器高 高台径 (cm)	素 地	施 軸	軸色	成 形・文 様・貫 入 等	出土地点 出 土 層
第6回 図版55 28	瓶 (玉)	—	— 8.8	灰白色 の細粒 子。微 細な氣 泡痕が 僅かに 観察さ れる。	脛付のみ露胎。他は 総軸。	青白色 の軸。	腰下部に胴締ぎの痕が観られる。脛付 の両端は丸味を持たせて成形。外底縁 辺は丸味のある削り。両面に粗い貫入。 内面の成形は推。	S A 20 第3層 第4層
〃 29	壺 春 瓶	—	— 8.8	〃 微細な 気泡痕 が少量 みられ る。	〃 〃 〃	〃 〃	両面に粗い貫入。	S A 19· 20堆 第2層
〃 30		—	6.2 (23.0) 9.0	〃 〃 〃	〃 〃 〃	〃 〃	脣付は全体的に丸味のある削りを加え て仕上げる。内底面は陶土の削り屑が 付着した状態で軸が施される。両面に 粗い貫入。	S A 19· 20堆 第3層
第6回 図版54 31	その他の資料 (外反口縁皿)	a種	12.2 2.9 5.9	灰白色 の細粒 子。	外面は腰部中央で軸 が止まっている。内 面は総軸後に内底の 軸を輪状に搔き取つ て蛇ノ目状とする。	灰白色 の透明 軸。	高台際に削りを加えて高台を強調する。 高台の内削りは微弱で浅い。脣付内側 を斜位に削り取った段階で成形を終え ている。貫入なし。	S A 20 第3層
〃 32		a種	12.3 3.1 6.3	黄白色 の細粒 子。	〃 〃 〃	〃 〃	〃。高台の内削りは浅く、脣 付内側を斜位に削り取っている。	S A 19· 20堆 第2層
〃 33		b種	12.0 2.9 5.7	〃 微細な 黒色鉱 物が多 く混入。	〃。内面は 総軸後に内底面の軸 を円形状に搔き取る。	白濁色 の軸。	脣付の外端を軽く斜位に削り取って面 取りするため脣付の幅は狭い。	S A 19· 20堆 第2層



第66図 白磁 (1)



第67図 白磁(2)



第68図 白磁 (3)

第6節 色 絵

色絵は中国産とベトナム産か中国南部のものが確認されている。推定された個体数は4個体であった。中国産の色絵については当初、15世紀中頃～15世紀末頃の明のものとして考えられていたが長谷部楽爾氏の鑑定の結果、元の色絵として判断された。土壤SK01(SA19・SA20、SA28)出土の資料は中国産のものに限定され、碗2個体、皿1個体の計3個体分であった。以下、産地別に個々の特徴を記述することにする。

1. 中国産色絵(第69図1～3)

元の色絵は碗・皿の二種類のみ出土していて、碗と皿は文様や口造りなどからセット関係にあるものとして考えられる。

同図1は菊花文碗の資料で口縁が軽く外反する。高台は高目に仕上げられているが高台内側は浅く平坦に削り込んでいる。疊付は両端から雜に尖り気味に成形したため鈍く尖った形状となる。灰黄色の透明釉を両面に施しているが疊付外端から外底は露胎のままである。外底面は二次的に火熱を受けて焼けている。色釉は赤茶色と明緑色の二色を使用して外面胴部に主文の菊花文を描き、上下に界線を施して区画をつくる。内面口縁は草文と界線を施し、内底面に草花文と圈線を描いている。素地は灰白色の細粒子で劈開面に微細な気泡痕が多く観察される。復元されたサイズは口径11.8cm、器高6.7cm、高台径4.7cmであった。B-15SA20第2層より出土。

同図2も外反口縁の菊花文碗とみられるものである。他に口縁の細片が1片のみ得られている。内底面は丸味のある溜みで浅い。高台内側は深くやや丸味をもたせて成形し均一的な厚みとなっている。色釉は二次的な火熱を受けて変色している。残存部の色釉の色合いは赤褐色と明青色の二色である。外面胴部には主文の菊花文を描き界線でもって上下の区画をつくる。内面口縁には草文と界線を施している。見込みに草花文とみられる文様と圈線を施している。釉は若干変色し黄白色を帯びる。施釉の手法や疊付の仕上げは同図1と同じである。素地は灰白色的微粒子である。図上で復元されたサイズは口径11.0cm、器高5.9cm、高台径4.4cmであった。B-15SA19第2層より出土。

同図3の皿は碗と同種の菊花文を描いた外反口縁の浅皿である。黄白色の釉を両面に施すが疊付外端から外底面は露胎である。高台内は浅く削り出して平坦に成形するがやや雜な仕上がりである。色釉は赤茶色と明緑色の二種類を使用している。内面は火熱を受けて釉色や色釉は変色している。内面は胴部に草文と「福」の字款を施す。内底面に草花文とみられる文様を描く。素地は灰白色的微粒子である。復元されたサイズは口径7.2cm、器高2.25cm、高台径8.6cmであった。B-15SA19・20の畦第2層と同畦の第3層より出土。

2. ベトナム産色絵(同図4)

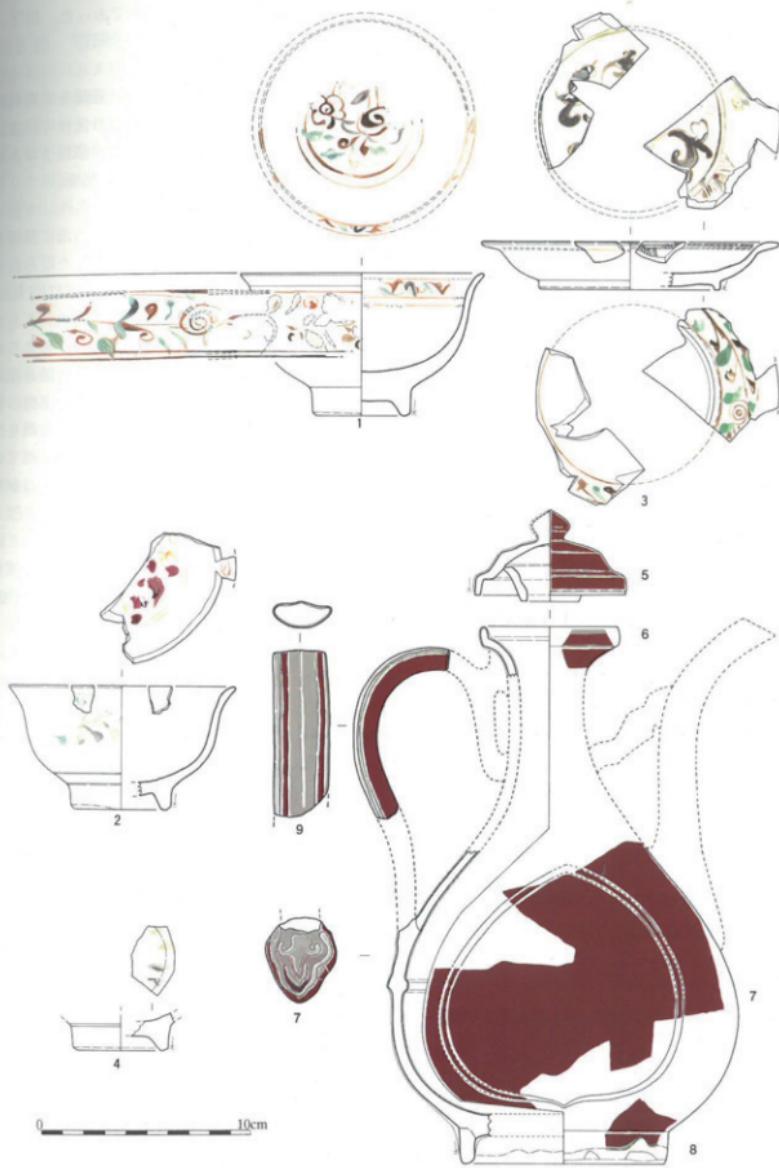
同図4は唯一得られたベトナム産か中国南部の色絵碗の破片である。推算された高台径は4.0cmであった。釉及び色釉は火熱を二次的に受け変色し本来の色を失っている。黄白色の釉は疊付外端から外底面を除いて施す。内底面には浅い陽圧線と花文を描くが色は無く輪郭や絵付けの痕跡のみが観察できる。素地は黄灰色の細粒子で微細な黒色鉱物を僅かに含んでいる。素地はベトナム陶器の三爪龍形の型物水注と類似する。施釉の手法や疊付の成形などは中国産の碗と類似する。D-14SA17の覆土より出土。

第7節 紅 釉

土壤SK01(SA19・SA20、SA28)内および周辺から紅釉が10数片出土していたが、胴・底部の接合が進み5片となった。この中の特徴のある部位や大型片を図化することにした。

本品は全国的にも希有な資料であったため、当初、釉裏紅として指導や助言を得るために紹介した(註1・2)ものであった。長谷部楽爾氏が来沖した際に実見し同定(註3)を依頼したところ国内の遺跡から出土例のない、全国でも初めて確認された中国元朝の紅釉であると判断された。

土壤SK01内及び周辺から出土した紅釉の個体数は破片資料を含めて検討した結果、1・2個体が推定された。また、破片資料を基に器形の推定を試みたところ口縁が盤口状となる玉壺春型で胴部が扁壺氣味となる水注、



第69図 色絵 中国（1・2碗、3皿）、ベトナム（4碗）、紅釉 水注（5～9）

いわゆる仙蓋瓶と称されるものである。紅釉の破片部位は蓋、口縁、胴部、高台、把手であった。以下、復元された第69図を基に部位別に個々の特徴を記すこととする。

1. 蓋

第69図5は仙蓋瓶か瓶の蓋とみられる資料である。蓋頂部には宝珠状の撮を貼り付け、蓋縁を下方に折り曲げて下端に削りを加えて平坦に仕上げている。蓋の内面は中空で逆「ハ」の字状の突起を貼り付けている。釉色は赤茶色の釉を厚く、鋸端から撮まで施している。内面は露胎のままである。素地は灰白色の微粒子である。蓋の高さは4.4cm、径の最大は7.5cm、最小が7.3cmを測った。B-15S A19・20の畦第4層より出土。

2. 口 縁

同図6は仙蓋瓶か瓶の口縁破片として考えられた資料である。口縁が盤口状となるもので、外面に茶褐色の釉を掛けている。内面は青白色の釉を施している。内面の大半は二次的な火熱を受けた際に付着したとみられる煤が観察される。素地は灰白色の微粒子である。推算された口径は6.7cmであった。C-16栗石内より出土。

3. 脇 部

同図7は高台を有する脇部である。脇部の上面觀が梢円形を呈している状況から仙蓋瓶か扁壺が考えられる。脇上部から内側に内傾するようである。脇部の両側面には把手の根元や注ぎ口が貼り付けられた痕跡が認められる。把手の根元部分はパルメットの浮き文が貼り付けられている。両面の脇中央には高台脇から陽蓮弁の花弁を一枚ずつ描いたようである。脇部中央付近に脇縫ぎの痕跡が顕著にみられる。外面の釉は二次的な火熱を受けて赤茶色を帯びて高台外面の途中まで釉が掛けられている。内面の釉色は青白色で内底面まで施されている。同色の釉は高台内面途中から外底にも掛けられている。素地は灰白色の微粒子である。疊付内端に砂目が付着する。脇部の最大径は16.4cm、最小径14.7cmであった。B-15S A19・20の畦第3層より出土。

4. 高 台

同図8は上記の図7と同一個体で、高台の平面觀は梢円形状を呈している。高台近くには上部から施された陽蓮弁の弁尻が小さく施され、弁尻が鋭角に尖っている(型起こし)。疊付の成形は削りを難に加えた段階で終了している。疊付内端に砂目が残っている。釉色や施釉の手法、素地は上記7と同じであった。B-15S A20直上より出土。

5. 把 手

同図9は上記図7の把手破片とみられる。把手の横断面は直で扁平気味の半円形状を呈する。外面の両側沿いに丸彫りの沈線を縁に沿うように施している。外面の釉は沈線部分と把手下方が赤茶色の釉で他は青白色の釉となっていて二種類の釉が対比した状態にある。内面は赤茶色の釉を主体とし部分的に青白色の釉がみられる。素地は灰白色の微粒子である。把手の幅は2.5~2.7cm、厚さ1.2cmを測る。B-15S A20の第3層より出土。

小 結

紅釉は数少ない破片(第69図5~9)を基に図上での復元を試みた。将来の類例資料が確認できれば修正も必要であろうが、参考資料として推定復元を試みた。復元されたサイズは口径6.7cm、器高25.7cm、高台径は長軸9.6cm、短軸9.0cmであった。

土壤SK01内から紅釉と一緒に瑠璃釉の仙蓋瓶が1・2個体出土している。この紅釉と瑠璃釉は一ないし二対でセットとして倉庫に保管されていたことが推察され、両者は色違いではあるが器形が類似するものとみられ、儀式や祭祀と関係する遺物として使用されたのかもしれない。

註

註1. 金城亀信・上原 静 「首里城京の内跡の釉裏紅」『文化課紀要』第13号 1997年3月。

註2. 金城亀信・上原 静 「48 沖縄県那覇市首里城京の内跡」『日本考古学年報』48 日本考古学協会 1997年7月。

註3. 1997年7月8日に県文化課若狭資料室にて長谷部栄爾氏より直接の御教示を頂いた。

第8節 瑞璃釉

土壤SK01(SA19・20、SA28)内より15片の瑞璃釉が出土している。出土した15片の破片資料から推定された個体数は、仙臺瓶が1・2個体、碗の1個体であった。仙臺瓶の資料も長谷部楽爾氏に同定を依頼したことろ中国元朝の所産のことであった。

確認された破片の部位は仙臺瓶の注ぎ口、把手、胴部、高台であった他に碗の胴部が1片得られている。図化を省略した瑞璃釉の碗は器壁が2.8mm~3.2mmと薄く、外反口縁の碗とみられる。この碗も二次的な火熱を受けているが僅かに外面に藍色の釉が残っている。内面も同じような火熱を受けているが青白色の釉を施したものであった。以下、仙臺瓶の資料を各部位ごとに個々の特徴を記す。

1. 注ぎ口

第70図1は注ぎ口の根元に近い部分で破損した資料で火熱を受けている。円筒状の注ぎ口の下は浮文の獸面とみられるものが型合わせで成形されていて、型合わせ後に円筒状の注ぎ口を継ぎ合わせてある。釉は藍色のものを用いて外面に施している。内面は青白色の釉を施しているが一部分露胎となる箇所が存在する。内面には藍色の釉が垂れている。素地は灰白色の微粒子である。注ぎ口の外径は1.8cm、内径が6.3mmを測った。B-15SA20第3層の出土。

同図2は注ぎ口の根元が胴部に貼り付けられた資料で火熱を受けている。胴部に楕円形の粗孔を穿った後に注ぎ口と胴部を継ぎ合わせてある。釉調は外面が藍色で内面が青白色を帯びている。内面に藍色の釉が垂れている。素地は灰白色の微粒子である。B-15SA20の第2層より出土。

2. 把手

同図3は頭下部に貼り付けられた把手の破片である。把手の部分のみ型合わせで仕上げた後に胴部に貼り付けている。把手の内側と内面の一部が露胎している。外面は藍色の釉で内面が青白色の釉を施している。素地は灰白色の微粒子である。B-15SA19の第3層より出土。

3. 胴部

同図4は胴上部から胴下部の大型破片で上面観が扁楕円形となる。胴部の正面には陽蓮弁の花弁を施し、花弁を縁取ったとみられる二本の金箔の界線は火熱を受けた際に焼け落ちたようである。他に金箔が焼け落ちた痕跡から弁内と頭下部に菊花文や草花文を施していたことが確認された。外面に藍色の釉を施している。内面は一部露胎となっているが青白色の釉を掛けている。内面に藍色の釉垂れがみられる。素地は灰白色の微粒子である。B-15SA19・20の畦第1層とSA19の第3層より出土。

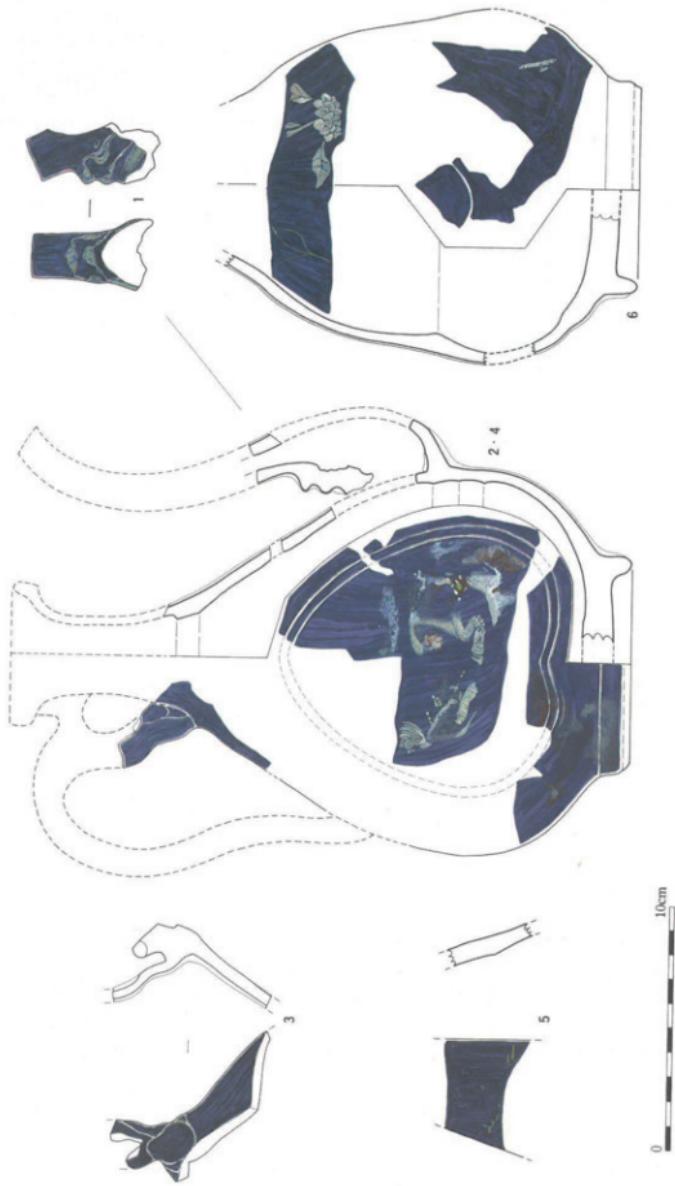
同図5は頭下部から胴上部の破片で、唯一外面に金箔が残存する資料である。金箔で草花文とみられる文様を施している。本品のみ火熱を受けてなく、光沢のある藍色の釉を外面に施している。内面も光沢のある青白色的釉を掛けている。素地は上記の図4と同じである。B-15SA19の第2層より出土。

4. 高台

同図6は高台の平面観がやや歪な円形である。高台径は8.6cmを測った。胴部に逆さの「ハート」型の陽蓮弁の花弁を施している。火熱を受けて金箔が焼け落ちているが、その痕跡から唐草文や二本の界線(花弁の縁取り)が確認された。外面の藍色の釉は高台外面途中で止まっている。高台の内外面途中から疊付は露胎である。内面および外底面には青白色的釉を施している。素地は灰白色の微粒子である。本品は同図4と同一個体であるが直接は接合ができなかった。B-15SA19の第3層と第4層、SA19・20の第2層より出土。

小 結

瑞璃釉の仙臺瓶は、一般的に金襴などの金襴手で花弁の縁取りや花弁内へ主文となる文様を施すようであるが、同図4の胴部の大型破片からは花弁内に主文が施されていたのかは火災による二次的な加熱を受け一部の釉が溶けたため、主文の存在(有無)の痕跡を確認できなかったことが残念でならない。



第70圖 瑞瑪釉 水注

第9節 褐釉磁器

土壌SK01(S A19・20、S A28)内より全国で初めて褐釉磁器の薄手の碗もしくは鉢とみられるものが一個体相当(口縁破片1片、胸部破片1片の計2片)が出土している。褐釉磁器の口縁資料を図化し、以下にその特徴を記述する。

第71図1は口径の推算が17.4cmと求めることのできた薄手の碗もしくは鉢の口縁破片である。口縁がゆるやかに外反するタイプが推定される。器厚は1.6mm~2.0mmと非常に薄く仕上げられている。器厚の薄さと劈開面ならびに釉上の観察では輪轆痕が認められない状況から輪轆成形ではなく、型物成形が考えられるようである。内外体面に茶褐色の釉を施しているが、両面の口縁部分には二次的な火熱を受けた際に煤けて黒ずむ部分が僅かに存在する。釉は本来の色合いを失い、若干薄れるある茶褐色となり、光沢が弱くなっていることが胸部資料と比較して確認された。素地は口縁資料と胸部資料とも同じ淡い灰白色の微粒子である。口縁資料の劈開面から細かい気孔痕が僅かではあるが観察される。口縁資料はB-15 S A 19・20第2層より出土し、胸部資料がB-15 S A 20第3層から出土している。中国景德鎮窯の所産である。

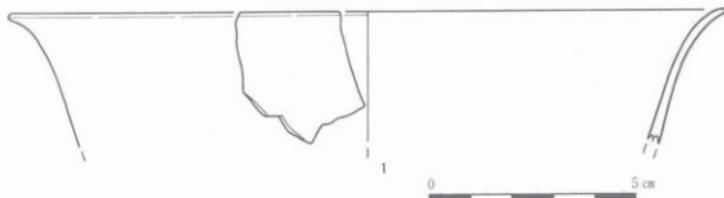
小 結

褐釉磁器の二片の資料については、佐賀県教育委員会の大橋康二氏に鑑定(註1)を依頼した。その結果、国内の遺跡から出土例や類例品のない資料であることが判明した。

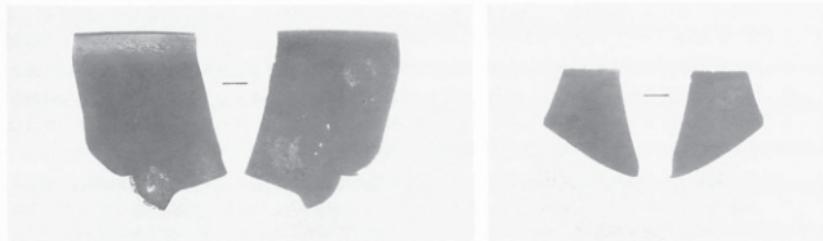
本資料の類例は今のところトルコのイスタンブルにあるオスマン・トルコ帝国の古城であるトプカブ・サライ博物館にあるようである。トプカブ・サライ(宮殿)には歴代のオスマン・トルコ皇帝が15世紀中頃~19世紀前半にかけて収集した1万個の中に褐釉磁器の類例が求められるようである。

註

註1. 1998年2月21日(土)に現物を持参して、大橋康二氏に鑑定を依頼した。記して感謝の意を表したい。



第71図 褐釉磁器



図版58 褐釉磁器

第10節 褐釉陶器

土壤SK01 (S A19・20、S A28) 内より出土した褐釉陶器は、口縁や底部の破片を含めて推定された個体数は145個体であった（第39表）。その中には、外面に白色の釉を施した壺と水注が4個体相当分得られていたので、本項で仮称して白釉陶器として取り扱うこととした。褐釉陶器で確認された器種は、壺、水注、鉢、蓋の4器種であるが、壺の中には特殊な口造りとなるものが1点含まれている。これについては特殊壺として分類することにした。褐釉陶器でもっとも多量に出土しているのは壺であり96.5%を占めている。褐釉陶器の壺について、サイズなどを基本に大型壺、中型壺、小型壺の三タイプに便宜的に分けた。個々の特徴などについては、第40表に呈示した。

1. 褐釉陶器壺

壺は口径や底径などから便宜的に大型壺、中型壺、小型壺の三型式に分け、口縁の肥厚などからⅠ・Ⅱ・Ⅲなどの類やa・b・cなどの種に分けた。以下、大型壺から小型壺までの分類概念を略述することにする。

① 大型壺（第72図1～第74図18）

大型壺は器形や口縁形態などからⅠ類からⅥ類までの6種類に分類した。大型壺全体での推定個体数は129個体であった。

・Ⅰ類壺（第72図1・2・2-A）

Ⅰ類壺は推定で86個体を数え、最も多く出土している壺である。器形は肩部から胴上部が外側に強く張り出す怒り肩のものがすべてであった。口縁の肥厚や頸部の長さなどからa種とb種の2種類に細分した。口径や底径については、第39表に表わした。

a種…口縁部の肥厚は断面が直角な隅丸方形状を呈するもので、頸部と肩上部の部分で「く」の字状に屈曲するものである。破片資料から80個体相当が得られているが、唯一復元されたものを図化した（第72図1）。
b種…口縁部の肥厚は、断面が直角な「ク」の字状を呈するもので、頸部が短かい壺である。口縁の破片資料などから6個体相当が得られている。2個体を図化した（同図2、2-A）。

・Ⅱ類壺（第72図3）

本類に所属する壺は、1個体のみであった。口縁部の断面は、「フ」の字状を呈し、頸下部から胴上部に界線や型起しの「龍」を施して、胴上部に線彫りの「草花文」を描いたナデ肩の壺である。文様のない逆三角形状の縦耳を6個貼り付けているものである（第72図3）。

・Ⅲ類壺（第72図4・5、第73図6～8）

器形はⅡ類壺と同様のナデ肩の壺で、口縁の肥厚形態も近似しているが、文様の施文箇所や縦耳（把手）の文様の有無などからⅡ類壺と区別ができる。文様の施文箇所や縦耳（把手）の文様表現などからa～cの3種類に細分した。

a種…口縁部の断面は、「フ」の字状となる壺である。頸部中央に二本一組の界線を施し、頸下部に陽圏線を加える。胴上部に型起しで浮き文の「龍」を施す。縦耳（把手）外面に二本の縦沈線を加えたものを6個頭下部から肩上部に貼り付けている。推定された個体数は3個体であり1点を図化した（同図4）。

b種…口縁部の断面は、「フ」の字状でa種に近似する形態となるものが主であるが、口縁部の断面が方形状や「て」の字状となるものもある。b種の壺には薄手のものも存在するようである。頸部中央から頸下部まで線彫りで三本の界線を施す。縦耳（把手）の外面に縦沈線を三本施した縦耳6個を頸部中央から頸下部に貼り付けている。肩部から胴上部にかけて型起しの「三爪龍」を施す。推定された個体数は12個体であった。その内2点を図化した（第72図5、第73図6）。

c種…口縁部の断面は、「フ」の字状となるものである。器厚が厚く仕上げられているのが特徴のひとつである。頸部中央に二本一組の界線を施し、頸下部には二本一組の界線と単独の界線を施している。縦耳（把手）の外面に獣面を描いたものを頸部から肩上部に6個貼り付けている。肩上部から胴部は界線で区画された菊花文を描いている。2個体相当が出土していて、これを図化した（第73図7・8）。

・IV類壺（第73図9～11）

ナデ肩で頸部が短くなる壺のグループをIV類とした。口縁の肥厚は、断面が三角形状を呈するものと「フ」の字状を呈するものの2種類が存在する。耳（把手）の貼り付けはないようである。外面の肩部から胴下部まで平行叩きを加え、内側には同心円状の當て具痕がみられるものである。口縁破片などから8個体相当が得られていて、この内の3点を図化した（第73図9～11）。この中の1点には外底面に墨書きで「明」の文字を描いたものがある。

・V類壺（第74図12～16）

怒り肩の壺と丸味のある肩の壺が存在し、前者はa種とし、後者がb種として分類した。V類壺はa・bの2種で9個体相当が得られている。

a種…口縁に玉縁状の肥厚をつくる怒り肩の壺で、横耳（把手）を4個貼り付けている。頸下部に丸範とみられる施文具で、界線を二本施している。釉色はすべて黒褐色のものを用いていて、肩部に吉祥字を型で起している。3個体相当が得られていて、その内の2点を図化した（第74図12・13）。

b種…a種と同様に玉縁状の肥厚をもつ壺であるが、肩部が丸味のある肩となるのが特徴であろう。口縁の肥厚には小さめの玉縁や疑似肥厚のものもある。横耳（把手）を4個貼り付けている。頸下部に丸範で界線を2本施すものもある。外底面に線書きで「二」とも読める字を書いているものもある。口縁破片などから6個体相当が得られていて、3点を図化した（同図14～16）。

・VI類壺（第74図17・18）

怒り肩の壺である。口縁部の肥厚は、三角形状となるものや隅丸三角形となるものである。口縁の肥厚で中には、折り返しでつくるものも存在する。外面の肩上部から胴部には平行叩きが加えられ、内側には円形状の當て具が重なって分銅形や重な隅丸方形状の當て具痕がみられるものである。破片資料などから8個体相当が出土していて、この内の2点を図化した（同図17・18）。外底に墨書きで「一」と「丑」を組み合わせた合わせ文字や「□系書□」とも判読できるものを書いているものもある。

② 中型壺（第75図19～24）

中型壺は器形や口縁形態などからI類からIII類までの3類に分類した。口縁破片を含めて推定で14個体相当が得られている。

・I類壺（第75図19・20）

ナデ肩の壺で、口縁が三角形状に肥厚し、肥厚帯上部は丸範やナデで浅く窪ませている。耳（把手）は確実に存在しない。3個体相当が得られていて、2点を図化した。

・II類壺（第75図21・22）

怒り肩とナデ肩の二者が存在する。口縁部の肥厚は、断面が「フ」の字状となり、肥厚帯外面の幅が狭くなる。頸部が短くなる。6個体相当が出土していて、2点を図示する。

・III類壺（第75図23・24）

II類と同様のナデ肩の壺である。口縁の肥厚もII類と同様に断面が「フ」の字状となるが、肥厚帯外面の幅は広くなる点で異なっている。他に玉縁状に疑似肥厚とするものや口縁が僅かに膨むグループもこれに含めた。5個体相当が出土していて、復元可能な2個体を図示した。

③ 小型壺（第75図25～第76図27）

小型壺も器形や口縁形態などからI類からIII類までの3類に分類した。口縁破片を含めた個体数は24個体であった。

・I類壺（第75図25・25-A・B）

14個体相当が出土していて、器形は怒り肩の小壺である。口縁部の肥厚は、断面が小さな玉縁状となるものや隅丸方形状を呈するものであった。耳（把手）を貼り付けた痕跡がないようである。比較的、大きい破片を3点図化した（第75図25・25-A・B）。

・II類壺（第75図26）

ナデ肩の小壺で、口縁部の肥厚は、断面が三角形状となるものである。紐状の陶土で耳を縦に貼り付けている耳（把手）は4箇所に貼り付けたようである。5個体相当が得られていて、唯一復元された資料を図示した。

・Ⅲ類壺（第76図27）

II類壺と同様にナデ肩の小壺である。口縁部の肥厚は、断面が方形状を呈するものである。耳（把手）の存在については、不明である。5個体相当が得られていて、復元された資料を図化した。

2. 褐釉陶器水注（第76図28-A・B）

水注の口縁破片は3個体相当が得られていて、3点とも口縁形態が異なっている。他に口縁を欠いた胴・底部破片で、口唇を僅かに幅広く、平坦に成形したものや口唇に丸味を持たせ成形した後で、口唇外端に丸彫りである。同図28-A・Bは素地や釉色などが一致していて、同一タイプの水注とみられる。

3. 褐釉陶器鉢（第76図29）

鉢の口縁破片とみられるものが1点のみ出土していたので、これを図化した。当初、蓋として考えていたが、施釉の範囲や口唇の摩耗の有無などから鉢として取り扱った。

4. 特殊壺（第76図30）

口縁がやや内側に内傾し、口縁に鍔状の凸帯を巡らしたもののが1点のみ得られていたので、これを図化した。

5. 白釉陶器（第76図31-33）

外面に白濁色（灰白色）の釉を施した陶器の一群で、仮称して白釉陶器とした。器種は壺と水注の2種類が得られている。口縁破片や底部破片などから壺は3個体、水注が1個体と推定された。

① 白釉壺

壺は口縁に小さな玉縁状の肥厚をつくるものが、全てであった。怒り肩とナデ肩の壺が存在し、大型壺と小型壺の2型式が確認されていたので、これを図化した（第76図31・32）。

② 白釉水注

水注は長頸型のものとみられ、唯一、口縁の破片が得られている。口縁が微弱に肥厚し、あまり目立たないものである（同図33）。

6. 蓋（第76図34）

東南アジア産か中国産のいずれかに所属する蓋が1点のみ得られている。同図34はボタン状の撮（直徑3.5cm）を蓋甲中央に貼り付けている。茶褐色の釉を蓋甲上面にのみ施した後で、縁沿いの釉を搔き取っている。内面は露胎のままであり、指による擦痕が覗られる。素地は茶紫色の細粒子で、細かい石英が多く含まれている。蓋の高さは、4.3cmであった。B-15 S A19・20の第2層より出土。

小 結

褐釉陶器壺のI類の類例は、今帰仁城跡（註1）や湧田古窯跡（註2）などから出土している。壺Ⅲ類a種の類例資料は、与那国島の与那原遺跡（註3）で、口縁のみ欠いた資料が出土しているようである。その他に外底面に墨書で文字などを書いた資料が壺IV類や壺V類で認められている。

特殊壺の類例として、新安海底遺物にある褐釉双耳壺（註4）や博多遺跡群（註5）などから出土している。この種の壺は、杉山 洋分類の有耳壺Ⅱ類A 3型式（註6）の範疇に含まれるようであり、杉山論文によると14世紀に出土する例が多いことを指摘している（註7）。本項の特殊壺は宜興窯の可能性がある。

褐釉水注の類例として、新里村（東）遺跡（註8）や糸数城跡（註9）などで出土しているが、本水注と器形が異なっているようである。器形が近似する水注は、佐賀県の靈仙寺跡（註10）から出土した青磁水注に近いようである。

白釉陶器と仮称したものの類例は、西表島の上村遺跡（註11）で出土しているようである。

註

- 註1. 金武正紀・宮里末廣ほか 「今帰仁城跡発掘調査報告」 今帰仁村教育委員会 1983年。
- 註2. 大城 慧・島袋 洋ほか 「湧田古窯跡(I)」 沖縄県教育委員会 1993年。
- 註3. 金城亜信 「与那原遺跡」 与那国町教育委員会 1988年。
- 註4. 文化公報部 文化財管理局 「新安海底遺物」(図版150 215件釉双耳壺 口径5.5cm 底径6.5cm 高さ35.0cm) 1983年。
- 註5. 大庭康時 「博多」 「福岡市埋蔵文化財調査報告書 第204集」 福岡市教育委員会 1989年。
- 註6. 杉山 洋 「褐釉系陶器の受容と展開」 「東アジアの考古と歴史」 下巻 岡崎敬先生退官記念論集 同朋舎出版 1987年。
- 註7. 註6に同じ。
- 註8. 金武正紀 「沖縄における12・13世紀の中国陶磁」 「沖縄県立博物館紀要」 第15号 沖縄県立博物館 1989年。
- 註9. 金城亜信・黒住耐二ほか 「糸数城跡」 玉城村教育委員会 1991年。
- 註10. 佐賀県東脊振村教育委員会 「靈仙寺跡」 「東脊振村文化財調査報告書第4集」 1980年。
- 註11. 大城 慧・金城亜信ほか 「西表島 上村遺跡」 沖縄県教育委員会 1991年。

第39表 中国産褐釉陶器サイズ別出土状況

サイズ (cm)		8.1 ~ 9.0	9.1 ~ 10.0	10.1 ~ 11.0	11.1 ~ 12.0	12.1 ~ 13.0	13.1 ~ 14.0	14.1 ~ 15.0	15.1 ~ 16.0	16.1 ~ 17.0	17.1 ~ 18.0	18.1 ~ 19.0	19.1 ~ 20.0	20.1 ~ 21.0	21.1 ~ 22.0	22.1 ~ 23.0	小計	破片	合計	
類・種	部位	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底	口	底			
I類	a種	口						6	4	2	1							13	135	148
	b種	口								1	1							2	0	2
III類	a+b	口								1	2	7	2					12	4	16
	a-c	底								1	1	3	2					7	54	61
IV類	口							8	5									13	54	67
	底			1	2	1											4	2	6	
中・小型壺	底		1	1	3	2				3	2	1					6	2	8	
白釉	底			1				1	1								8	6	14	
合計		0	1	2	4	4	10	12	8	6	8	15	18	35	17	5	145	368	513	

注: 小計の145個が推定個体数として考えられた。II類、V類、VI類は復元できる資料は得られなかったので省略した。

第40表 中国産褐釉陶器観察一覧

() : 推定

標識 番号 遺物番号	分類	口径 器高 底径 (cm)	釉色	器面調整	文様・素地など	出土地点 出土層
新規 1	大型 I a	21.6 (60.4) 16.8	茶黒色。 外底面を除いて全面に施す。	口唇は笠ナデや丸笠で形成か。外面の肥厚帯直下は丸笠が指圧で形成か。頸部より底面近くまでは輪轉成形。底面から立ち上がりの箇所は指圧でくびれさせて形成。内面は輪轉痕のみが全体的に観られる。外底面は丁寧なナデを施したようである。	口縁部の肥厚は断面が垂直な隅丸方形形状を呈し、内面口縁下端は蓋などを受ける目的で内側に突出させている。灰褐色の細粒子で、希に粗い石英?や茶色の鉱物が含まれている。外底面は丸味を持って上方に盛り上がっている。	S A20 第3層 S B01 第1層

第40表 中国産褐釉陶器観察一覧

() : 推定

博物番号 国歴番号 遺物番号	分類	口径 器高 底径 (cm)	釉 色	器 面 調 整	文 様・素 地 な ど	出土地点 出土層
第7244 国歴59 2	大型 I b	27.0 84.6 19.0	濃緑色。 外底面と内面 肩部を除いて 全面に施す。	口唇と口縁は鋸削り後に擦痕を加え て成形か。外面は頸部から底面近く まで粗い輪轉痕が観られる。外底は 雑なナデ仕上げで部分的に棒状工具 によるキズが入る。内面は口縁から 頸下部まで回転擦痕や輪轉痕。肩上 部は当て具の跡を輪轉痕でナデ消し している。胴部より底面近くまでは輪 轉痕。内底は丸味を持たせて仕上げ る。	口縁部の肥厚は断面が正な「ク」の字状を呈し、内面口縁 が僅かに内側に突出している。 灰褐色の細粒子で、希に3mm程 度の粗い石英?が含まれている。 外底面は丸味を持って上方に盛 り上がっている。	S A20 第2層
々々 2-A	大型 I b	14.6 (34.1) 11.8	黒褐色。 外面の口縁部 は火熱を受け ている。 口縁から底面 近くまで施釉。 内面は肥厚帯 直下から内底 まで施釉。	口唇と内面口縁は釉の搔き取りを兼 ねて指ナデで調整する。外面口縁は 丁寧に調整されている。頸部から底 面近くは輪轉痕と丁寧なナデ?がみ られる。外底は雑なナデ?と指圧がみ られる。内面の口縁はナデで調整する。 口頭部は輪轉をナデ?で消して いる。肩部は丁寧なナデ?で仕上げ られている。胴中央から下部は輪轉 痕が顯著にみられる。内底はナデ? で仕上げられている。	口縁の肥厚は、断面が正な「ク」の字 の字状を呈す。文様はない。灰 褐色の細粒子で、希に粗い石英 が含まれている。	S A20 第2層 第3層
々々 3	大型 II	20.0 (47.5) 14.6	緑茶色。 外面は口唇か ら底部近くま で施釉。内面 は露胎ままで ある。口縁は 二次的な火熱 で変色し、釉 が禿げる。	外面の口唇から頸下部までは回転擦 痕を主に擦痕のナデを加える。外面 の胴下部に輪轉痕が僅かにみられる。 底面から立ち上がりの箇所に棒状工 具による横線を施し、これを擦痕で ナデ消すが消え切っていない。内面 の口頭部と胴下部から下は丁寧な回 転擦痕を加える。頸下部から下は雜 な指圧や擦痕で調整する。	口縁の肥厚は断面が「フ」の字 状を呈する。頸下部は鋸削りを 加えて段差のある陽界線をつくり 肩部と区別する。逆三角形状の 擦耳を頸下部から肩上部に貼 り付けている。擦耳は6個が推 定された。肩上部には型起しの丸 籠を施す。胴上部に二叉状の丸 籠工具で界線を施し、その直下 から丸籠で草花文を描く。草花 文直下には單独の界線を丸籠で 施している。黄灰色の細粒子で、 粗い石英?、茶色の鉱物、灰褐色 色の鉱物が多量に含まれている。	S A20 第3層 第4層
々々 4	大型 III a	18.9 — 14.8	黄緑色と茶褐 色。 外面は口唇外 端面から胴下 部まで施釉。 内面は露胎の ままである。 僅かに口頭部 へ垂れた釉を 搔き取ってい る。	口唇と口縁部の肥厚帯は丁寧な擦痕 で調整。外面の頸下部から胴下部ま では丁寧に仕上げられていて、部分 的に輪轉痕が認められる。底面から の立ち上がりの箇所は擦ナデと擦痕 の両者が認められる。外底は雑なナ デ?仕上げか。内面の口縁から胴上 部まで丁寧な回転擦痕がみられる。 胴上部は部分的に指圧痕もみられる。 胴下部から内底には回転擦痕と輪轉 痕がみられる。	口縁の肥厚は断面が「フ」の字 状を呈す。頸部中央に叉状の丸 籠工具で界線を施す。頸下部は 鋸削りで段差のある陽界線を浅 く施す。擦耳は外面に二本の継 続線を施したもののが5個頸部中 央から頸下部にかけて貼り付け ている。肩部から胴部中央には 型起しとみられる籠を貼り付 けている。素地は淡灰色と灰褐色 を呈した細粒子で粗い石英?と 灰黒色の鉱物を多量に含んでい る。	S A19. 20 第3層 S K03 西側 第4層 S B01 第1層

第40表 中国産褐釉陶器観察一覧

() : 推定

順番号 国名番号 遺物番号	分類	口径 高 底径 (cm)	釉 色	器 面 調 整	文 様・素 地 な ど	出土地点 出 土 層
新石器 5	大型 III b	18.5 42.0 14.7	灰緑色と黄茶 色。 外面は口縁から胴下部まで施す。 内面は口縁から頸部に施す。 口唇は釉掛けの後で釉を搔き取り露胎とする。	口唇は指ナデ。外面の口縁から胴下部までは丁寧なナデ?で調整。胴下部より下は輪轆痕と回転擦痕を施す。外底面は雑なナデで仕上げる。内面は口縁から胴下部までは丁寧なナデや回転擦痕がみられ、部分的に指ナデや指圧がみられる。胴下部から内底近くは輪轆痕が観察できる。内底面は丁寧な指ナデで調整。	口縁の肥厚は断面が「フ」の字状を呈す。頭部中央には単独の棒状工具で二本の界線を描くが斜めで走っている。胴上部に三爪龍を型で起こしている。素地は灰白色、灰褐色を帯びた細粒子で、粗い灰黒色の鉱物を多く含んでいて希に粗い石英?が混入する。	S A19 第4層 S A20 第2層
新石器 6	大型 III b	18.6 (44.6) 14.0	茶褐色。 口唇は施釉後 に釉を搔き取 る。外面は口 縁から胴下部 まで施釉。 内面は口縁か ら胴上部まで の釉垂れを搔 き取る。	口唇にナデを加える。外面は肥厚帯直下から胴下部まで丁寧に仕上げている。胴下部から底面近くまでは輪轆痕と回転擦痕。外底面は雑なナデ仕上げか。内面は口縁から底下部まで丁寧な擦痕がみられる。胴下部から内底近くまでは輪轆痕と擦痕がみられる。内底は丁寧にナデを施す。	口縁の肥厚は断面が「フ」の字状を呈す。頭部中央に丸窓で圓線を4本施しているが、途中で2本は切れている。同種の丸窓で縦耳に縦沈線を3本施している。縦耳は6箇所に貼り付けている。胴部に竜や草花文の花弁を描いているようである。素地は淡灰色の細粒子で、粗い石英?や灰褐色の鉱物が多く混入している。	S A20 第2層~ 第4層 S A33 栗石直下
新石器 7	大型 III c	19.8 50.8 15.7	黄茶色と茶褐 色。 口唇は施釉後 に搔き取り露 胎とする。外 底も露胎のま まである。両 面とも釉を施 している。	口唇は指ナデで丁寧に仕上げる。外面の口縁から胴下部までは丁寧に仕上げている。胴下部から底面近くまではナデ?や輪轆痕を施している。外底は雑なナデと窓ナデがみられる。内面の口頭部は回転擦痕のみ観察できる。肩部から胴中央部はナデ?仕上げとみられる。胴下部から内底近くは輪轆痕が認められる。内底面は丁寧なナデ仕上げ。	口縁の肥厚は断面が「フ」の字状を呈す。頭部中央と頭下部に棒状工具で二本一組の界線を二組施している。縦耳は6個貼り付けられていて、耳外面には棒状の工具で獅子面とみられる文様を描いている。肩上部、胴上部、胴下部の三ヶ所には棒状工具で二本一組の界線を施して、文様を区画する。肩部には棒状工具で菊花文を描いている。胴中央部にも菊花文を棒状工具で描いている。灰色と灰褐色の細粒子で、粗い石英?や灰褐色の鉱物を多量に含んでいる。	S A19 第3層 S K03 第4層
新石器 8	大型 III c	20.2 (51.6) 17.2	黄茶色。 口縁部は火熱 を受けて変色。 口唇の釉は搔 き取ってある。 外面は口縁か ら胴下部まで 施釉。 内面は茶褐色 の釉を口縁か ら胴下部まで 施す。	口唇は指ナデで丁寧に仕上げる。外面の口縁から胴下部までは丁寧に仕上げている。内面は口縁から胴下部までは丁寧なナデ?で調整か。胴下部は輪轆痕と回転擦痕が観察される。	口縁の肥厚は断面が「フ」の字状を呈す。頭部中央に二本一組の界線を棒状工具で描いている。胴下部は単独の界線を棒状工具で施す。縦耳は6個程度が頭部から肩上部にかけて貼り付けられている。耳の外面には獅子面とみられる文様を棒状工具で描いている。肩部、胴上部、胴下部に二本一組の界線を施して文様の区画をつくる。区画内上段と下段には棒状工具で菊花文を描いている。灰色や茶紫色の細粒子で、精選されている。粗い灰褐色の鉱物と石英?を少量含んでいる。	S A19~ 20 第2層 第3層 S K04 栗石内

第40表 中国産褐釉陶器観察一覧

() : 推定

標番 箇番 遺物番号	分類	口径 器高 底径 (cm)	釉 色	器 面 調 整	文 様・素 地 な ど	出土地点 出土層
第40 箇60 9	大型 IV	12.3 41.9 16.0	黄褐色。 外面の胴下部 から外底面の み露胎で、他 は全釉。	口唇及び口頭部の内外面は擦痕がみ られ、丁寧な仕上げである。外面の 肩部から胴下部までは平行叩きを加 えている。胴下部は輥轆痕が集中し、 底部近くには縱方向の擦痕がみら れる。外底面はナデ?仕上げで調整か、 内面の肩部から胴下部までは同心 円状の当て具痕がみられる。内底 面には刷毛で同心円を描く。	口縁の肥厚は、断面が三角形状 を呈する。頭部が短い短頭垂で ある。黄白色の細粒子で、精選 されている。細かい茶褐色の鉱物 が少量含まれている。内底面 に刷毛による同心円文を描く。	S A19· 20 第3層
〃 〃 10	大型 IV	13.6 41.1 13.6	灰緑色。 残存部分は両 面とも施釉。	口唇及び両面の口頭部は丁寧なナ デ?仕上げる。外面の肩部には平 行叩きが加えられる。内面の肩部に は當て具痕がみられる。	口縁の肥厚は、断面が「フ」の 字状を呈する。灰色や黄白色の 細粒子で、精選されている。微 細な石英?や灰茶色の鉱物が少 量含まれている。	S A19 第2層 第3層
〃 〃 11	大型 IV	— — 18.0	黄褐色。 外面は底部近 くまで施釉。 外底は露胎。 内面及び内底 は施釉。	外底は指ナデを主体として調整され、 部分的に範ナデが加えられている。 内底面は刷毛で同心円文を描く。底 部の立ち上がり部分は外面が難なナ デで調整される。内面は輥轆痕が観 察される。	内底面に刷毛による同心円文を 描く。外底面に墨書きで「明」の 一字を描く。黄白色的細粒子で、 細かい茶褐色の鉱物が少量含 まれる。この時期に比定される墨 書きのある褐釉陶器の出土例は現 内ではないようである。	S A20 第2層
第40 箇61 12	大型 V a	11.4 (39.4) 15.0	黒褐色。 内面の頭部か ら外面の胴下 部まで施釉。	口唇から頭下部まで丁寧に仕上げる。 肩上部から胴中央までは丁寧に成形。 胴下部から底面近くまでは輥轆痕、 擦痕、範ナデがみられる。外底面は 範ナデがみられる。内面は口縁から 頭下部に回転擦痕が集中。肩上部か ら胴中央は丁寧なナデや擦痕がみら れる。胴下部から底面近くは輥轆痕 を指ナデでナデ消すが消え切ってい ない。内底は丁寧な指ナデを加える。	口縁を玉縁状に肥厚させる。頭 下部に丸窓(幅4mm)様の施文 具で不明瞭な界線を二本加えで いる。肩上部にリボン状の横耳 を4個貼り付けている。さらに 同部位には長方形状の棹と 「溥」、「濤」とも読める字款 を型で起こしている。灰褐色の 細粒子である。粗い石英や細か い茶褐色の鉱物を多く含んでい る。	S A20 第2層 第3層
〃 〃 13	大型 V a	12.4 (33.8) 11.6	黒褐色。 内面の頭上部 から外面の底 面近くまで施 釉。	口唇と口縁を丁寧に仕上げる。外面 の頭部から底面近くまでは丁寧に成 形され輥轆痕が観察できない。外底 近くの露胎となる箇所は擦痕がみら れる。外底面はナデを主に施し、縁 辺は範削り後に範ナデを加える。内 面は全体的に輥轆痕と回転擦痕がみ られる。内底面は起伏のある輥轆痕 がみられる。	口縁を玉縁状に肥厚させる。口 縁は僅かに外反する。肩上部に 横耳を4個貼り付けていたよう である。灰白色的微粒子で、25 倍ルーペでも混入物は確認でき なかった。	S A20 第2層 第3層
〃 〃 14	大型 V b	12.0 (39.4) 14.0	黒褐色。 内面の口縁か ら外面の底部 近くまで施 釉。	口唇は釉の搔き取りを兼ねた擦痕が みられる。外面の口縁から肩部ま では丁寧に調整されている。胴下部に 輥轆痕がみられる。外底近くは回転 擦痕が集中する。外底面はナデ?で 平坦に仕上げる。内面は口縁から肩 部までは丁寧な回転擦痕。胴下部か ら内底面近くまでは輥轆痕と回転 擦痕がみられる。内底は回転擦痕で丁 寧に仕上げる。	口縁に小さな玉縁状の肥厚をつ くる。頭下部に丸窓(幅4mm) で界線を二本施す。横耳を4個 貼り付けているようである。灰 褐色の細粒子で、僅かに粗い石 英を含んでいる。	S A20 第2層

第40表 中国産褐釉陶器観察一覽

器物番号 部類 器種番号 測定番号	分類	口径 器高 底径 (cm)	釉 色	器 面 調 整	文 様・素 地 な ど	出土地点 出 土 層
新石器時代 15	大型 V b	11.2 34.6 12.8	灰緑色と黄緑色。内面の頸下部から外面の胴下部まで施釉。内面は全体的に茶紫色の釉(鉄錆)を施している。	口唇から外面の頸下部までは丁寧に成形する。肩上部から胸部は釉上からも轆轤痕がみられる。外底近くは丁寧な回転擦痕を施す。外底中央及び周辺は指ナデを施し、縁沿いは平坦に成形した後に擦痕を加えている。内面の口縁から頸下部は丁寧な擦痕。肩上部から底部近くまでは轆轤と回転擦痕がみられる。内底面は指ナデで調整する。	口縁は玉縁状となるが、疑似肥厚の口縁である。肩部に横耳を4個貼り付けている。灰褐色と黄白色の微粒子である。希に粗い石英(1mm前後)が含まれている。	S A19・ 20畦 第2層 第3層
新石器時代 16	大型 V b	9.8 33.7 10.8	茶褐色と灰緑色。内面の頸下部から外面の胴下部まで施釉。内面は全体的に茶褐色の釉(鉄錆)を施している。	内面の頸下部から外面の頸下部まで丁寧に成形されている(擦痕で調整か)。外面の頸部から胴下部までは轆轤が部分的に確認できる程度で、丁寧に成形。底部近くは丁寧なナデ?を施している。内面の頸下部から内底近くまでは明瞭な轆轤痕と回転擦痕。内底は起伏のある轆轤痕と擦痕がみられる。外底面の中央はナデ?仕上げか。外底縁沿いは平坦に成形。	口縁に小さな玉縁状の肥厚をつくる。頸下部に竪で圈線を一本施している。肩部に横耳を貼り付けている(四耳壺とみられる)。灰褐色の微粒子で、希に粗い茶褐色の鉱物がみられる。外底面に縦書きで、漢数字の「二」とも読める字を崩して書いている。	S A19・ 20 第2層
新石器時代 17	大型 VI	16.0 57.4 13.5	茶黒色。内面は全釉。外面は口縁から胴下部まで施釉。	口頸部の内外面は丁寧に成形か。外面の頸下部直下から胴下部まで平行叩きを加えていることが釉上から観察できる。底部は立ち上がりの部分でくびれていて、轆轤痕や回転擦痕がみられる。外底面中央及び周辺は丁寧にナデを加えている。縁沿いは平坦に成形。内面の頸下部から胴下部まで、半円形状となった当て具痕がみられる。内底近くは丁寧に調整される。内底面はやや雑な調整である。	口縁の肥厚は、断面が三角形状を呈し、内面口縁を斜位に成形する。肩上部に縱位方向の耳を4箇所に貼り付けている。外底面に墨書きで中央に「一」と「丑」の字とみられるものを組み合わせ、その左側に「□彖書□」とも読める四文字を墨書きする。最初と最後の一文字は判読ができない。灰褐色の細粒子で、細かい石英や粗い石英を少量含んでいる。内底面の縁沿いには漆喰が塗り込められている。	S A20 第2層
新石器時代 18	大型 VI	14.4 59.6 9.4	黄茶色。外底面を除いて全面施釉。	口頸部の内外面は丁寧に成形か。外面の頸下部直下から胴下部まで平行叩きを加えていることが釉上から観察できる。外面の底部近くは轆轤痕がみられ、立ち上がりの部分は窓削りで雑に調整する。外底面は浅く、半円形状に窓む。内面の頸下部から胴下部までは歪な分銅状の当て具痕がみられる。胴下部直下から内底近くに轆轤痕がみられる。	口縁の肥厚は、断面が三角形状を呈する。肩上部に縦耳を4個貼り付ける。灰白色の細粒子で、粗い石英を主体に細かい茶褐色や灰黒色の鉱物を多量に含んでいる。	S A20 第2層 S A19・ 20 第3層
新石器時代 19	中型 I	11.2 27.8 15.0	茶黒色。釉の大半は火熱を受け禿げ落ちている。内面の頸部から底面近くまで施釉。	外面の口縁から胴上部までは丁寧に調整し、胴中央から胴下部までは轆轤痕をナデ消したようである。立ち上がりの部分は竪で難な沈線を施しくびれを意識する。外底面は雑なナデ仕上げか。内面の口縁から胴上部は丁寧に成形する。胴上部から内底近くは明瞭な轆轤痕が観察される。内底面は丁寧なナデ?仕上げか。	口縁の肥厚は、断面が三角形状を呈する。肥厚上部は浅く窓ませている。胴上部に帯状の目痕がみられる。灰褐色の粗粒子で、微細な石英?を多量に含んでいる。	S A20 第3層

第40表 中国産褐釉陶器観察一覧

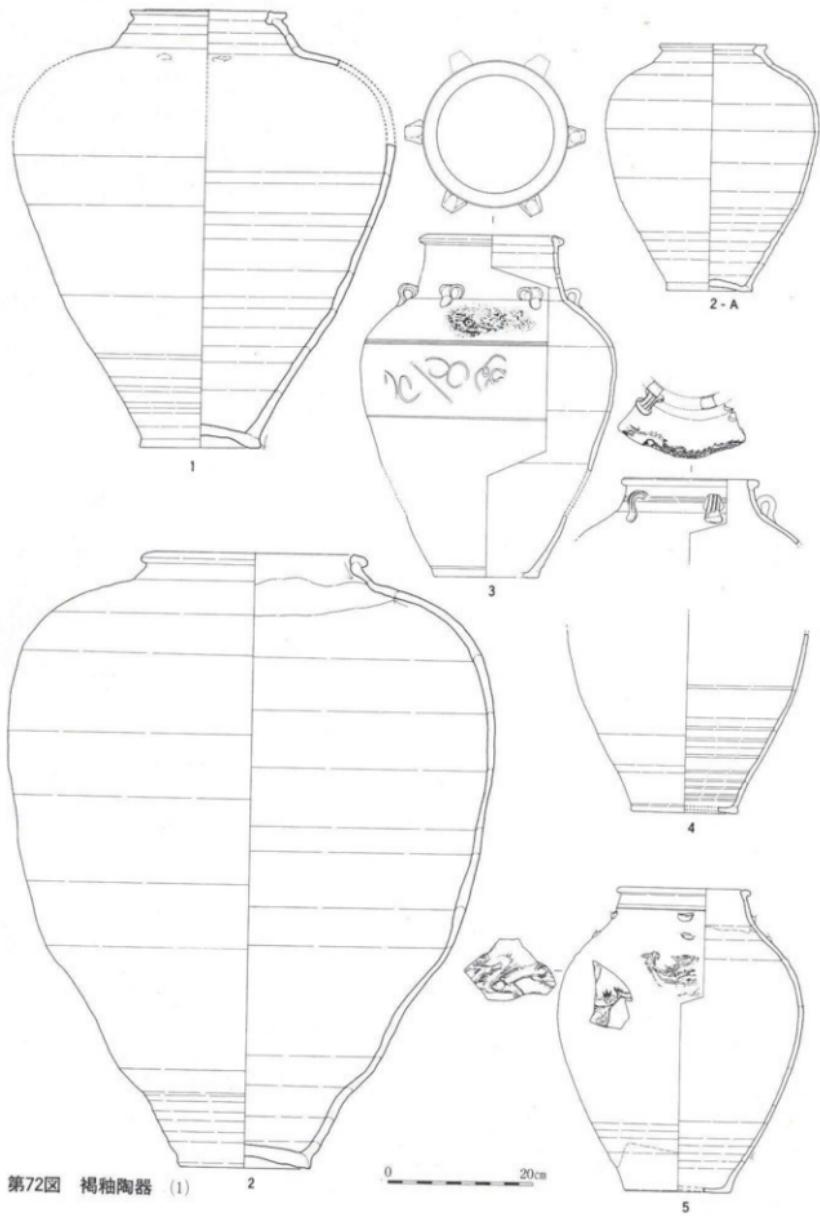
() : 推定

標識番号 団体番号 遺物番号	分類	口径 器高 底径 (cm)	釉 色	器 面 調 整	文 様 ・素 地 な ど	出土地点 出 土 層
第2回 團體2 20	中型 I	10.6 28.1 13.6	茶黒色。 外底面を除いて、両面に施釉。 部分的に火熱を受けて禿げ落ちている。	外面の口縁から胴上部までは丁寧に成形。胴上部から胴下部までは間隔の空いた輪轆痕がみられる。立ち上がりの部分をくびれさせて成形。外底は雑なナデ調整。前面の口縁から胴上部までは丁寧に成形。胴中央から内底近くまでは輪轆痕がみられる。内底面は雜な指圧によって生じたとみられる窪みが全体的に観察される。	口縁の肥厚は、断面が歪な三角形状を呈し、肥厚帯上部を丸笠で浅く窪ませている。胴上部に円形状の目痕や胴下部に継方位向へ二本(胎土目)の目痕がみられる。灰褐色の粗粒子で、微細な石英?を多量に含んでいる。	S A19 第2層 第3層
ムム 21	中型 II	11.2 (23.0) 11.8	茶黒色。 口唇から外面の胴下部まで施釉。	両面の口縁と頸部を丁寧に成形する。外面の頭下部から胴下部まで輪轆痕がみられる。胴下部直下から外底近くまでは回転擦痕と窓ダメがみられる。外底はナデ?で丁寧な仕上げか。前面の頭下部から内底近くまでは輪轆痕や擦痕が観察できる。内底は丁寧な擦痕で調整。	口縁の肥厚は、断面が「フ」の字状を呈し、口唇内端が僅かながら上方へ小さく突出する。頭下部に三角形状の陽陰線を施す。灰褐色の細粒子で、希に粗い石英が含まれている。	S A20 第2層
ムム 22	中型 II	12.0 28.0 11.4	茶褐色。 外底を除いて全面施釉。 口頭部は火熱を受けて変色や釉の剥落がある。	両面の口縁と頸部に回転擦痕がみられ、丁寧に成形される。両面の肩部から底面近くまでは輪轆痕をナデ?消したようである。外底近くに窓ダメを加え、くびれを強調する。外底面は雑なナデ仕上げか。内底面は外側より雜で指圧などによって生じた窪みがみられる。	口縁の肥厚は、断面が「フ」の字状となり、口唇及び口唇外端は丸味を帯びる。肩部に縦耳が2~4個貼り付けられていたようである。灰褐色の微粒子で、希に細かい石英が含まれている。	S A19 第2層
ムム 23	中型 III	11.2 26.3 11.8	茶褐色。 内面は全面施釉。外面は底部近くと底面のみが露胎で他は全面施釉。	両面の口縁と頸部に丁寧な仕上げ。外面は頭下部直下から胴下部まで輪轆痕。胴下部から外底近くまではカンナによる横位方向の削り痕が集中。内底面はナデや指圧で調整。内底面は輪轆痕。	口縁の肥厚は、外側に突出した玉縁状となるため、口唇が僅かに幅広となる。把手は存在しない。灰白色の細粒子で、微細な石英?と茶褐色の鉛物が僅かに混入する。	S A20 第2層 第3層 S A19 第3層
ムム 24	中型 III	10.2 24.1 10.5	茶紫色。 口唇から外面の胴下部まで施釉。 内面は全体的に茶紫色の化粧土が塗付。	両面の口縁と頸部は回転擦痕がみられる。外面の肩部から胴下部までは輪轆痕を主体に削りが加えられている。胴下部から外底近くまでは窓削りが丁寧に加えられている。外底はナデ仕上げで、部分的に指紋がみられる。内面は肩部から内底近くまで輪轆痕や回転擦痕がみられる。内底は輪轆成形か。	口縁が軽く外反するナデ肩の壺。内面の口縁が僅かに膨らむ。胴中央に丸彫りで圓線を一本施している。灰白色の微粒子で、微細な石英?が僅かに混入する。	S A19 20 第3層 S A33 栗石直下
ムム 25	小型 I	10.8 — —	黒褐色。 内面口縁から外面胴上部まで施釉。火熱を受けて全体的に変色。	両面の口縁と頸部は回転擦痕がみられる。外面の肩部から下はナデ?で丁寧に成形か。部分的に輪轆痕がみられる。内面の頭下部から下は回転擦痕で調整。	口縁に小さな玉縁状の肥厚を造る怒り肩の壺である。耳が貼り付けられた痕跡がない。灰褐色の細粒子で、希に粗い石英が含まれている。	S A20 第3層

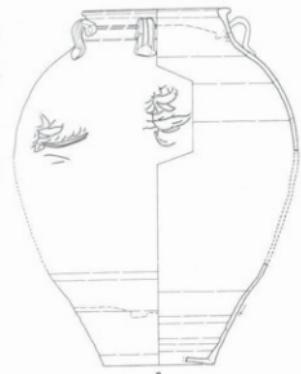
第40表 中国産褐釉陶器観察一覧

() : 推定

標器番号 団体番号 遺物番号	分類	口径 器高 底径 (cm)	釉 色	器 面 調 整	文 様・素 地 な ど	出土地点 出土 層
新石器時代 25-A	小型 I	11.0 21.0 11.8	茶褐色。 内面の口縁端部から外面の胴下部まで施釉。	内面の口縁部と頸部は丁寧に成形され、内面口縁に範ナデ?がみられる。外面の肩部から胴下部は輪轆がみられ、胴下部から外底近くは輪轆を擦痕でナデ消している。外底は雑なナデ仕上げか?。内面の肩部から内底近くまでは輪轆痕と擦痕がみられ、内底近くでは輪轆痕を擦痕で消していいる。内底面では輪轆痕を擦痕でナデ消しているが徹底していない。	口縁に小さな玉縁状の肥厚を造る。頸下部や肩部が強く屈曲する。肩部はほぼ水平に成形する。灰紫色や灰褐色の細粒子で、粗い石英?が多く含まれている。	S A19 第4層 S A20 第2層
新石器時代 25-B	小型 I	9.4 24.9 10.6	茶紫色。 外面の頸下部から胴中央まで施釉。	両面の口縁部は、回転擦痕が顯著にみられる。外面の肩上部から胴下部までは輪轆痕がみられる。胴下部から外底近くは輪轆痕を指ナデでナデ消しているが消えきっていない。外底は雑なナデ仕上げか。内面の肩上部から内底面までは、輪轆痕と回転擦痕がみられ、内底では輪轆痕が擦痕で消されている。	口縁に小さな玉縁状の肥厚を造る。頸下部と肩部の境に陽線を施している。肩部に目痕がみられる。灰紫色や灰褐色の細粒子で、粗い石英?や茶褐色の鉱物を多く含んでいる。	S A20 第2層 S A01 第1層
新石器時代 26	小型 II	10.4 (20.4) 11.0	茶褐色。 内面口縁から外面の胴下部まで施釉。	両面の口縁部と口縁は、回転擦痕がみられ丁寧に調整されている。外面の肩部から胴下部までは輪轆成形で、胴下部から外底近くは輪轆目を擦痕で消している。外底はナデ?仕上げか。内面の肩部から内底近くまでは回転擦痕が主で部分的に輪轆がみられる。内底はナデで仕上げている。	口縁の肥厚は、断面が三角形形状を呈し、口唇が尖り氣味である。頸下部から肩上部にかけて紐状の陶土で縦耳を4個貼り付けていいる。灰褐色の微粒子である。素地に粗い石英が僅かに含まれている。	S A20 第3層
新石器時代 27	小型 III	7.9 17.5 10.4	茶褐色。 両面とも胴下部まで施釉。	両面の口縁部と口縁は、回転擦痕がみられ丁寧に調整されている。外面の肩部から胴下部までは輪轆成形で、胴下部から外底近くは輪轆目を擦痕で消している。外底はナデ?仕上げか。内面の肩部から内底近くまでは回転擦痕が主で部分的に輪轆がみられる。内底は回転擦痕がみられる。	口縁に非常に小さな隅丸方形形状の肥厚をつくる。灰褐色の微粒子であるが、希に粗い石英?が含まれている。	S A19・ 20 第2層 第3層
新石器時代 28 A・B	水注	10.8 — 12.4	茶黒色。 内面は頸下部まで施釉。 外面は胴下部まで施釉。	両面は口縁部に回転擦痕がみられる。外面の胴上部から胴下部まで輪轆痕が観察される。胴下部から外底までは輪轆目を指ナデで消しているが消え切っていない。外底面は平坦なナデ仕上げ。内面の胴下部から内底近くまでは顯著な輪轆痕がみられ部分的に指ナデがみられる。	口縁の肥厚は「フ」の字状の断面となるものであるが、身本体とは直接接合ができなかった。肩上部に注ぎ口を貼り付けていいる。肩上部の穴は、やや斜め上方から内側へ向かって開けられている。穴のサイズは9.8mm~10mmを測る。灰褐色の微細粒子で、希に粗い石英が含まれている。円盤貼り付けの底部である。	S A19・ 20 第3層
新石器時代 29	鉢	21.4 — —	茶褐色。 残存部は両面とも施釉。	外面の口縁部分は釉上から擦痕がみられる。口唇から2cm下には輪轆痕がみられる。内面はナデ?成形か。	口縁が僅かに外側に傾く。口唇から下2cmの箇所で微弱な段差をついている。灰褐色の細粒子で、希に細かい石英?や微細な茶褐色の鉱物を含んでいる。	S A19・ 20 第3層



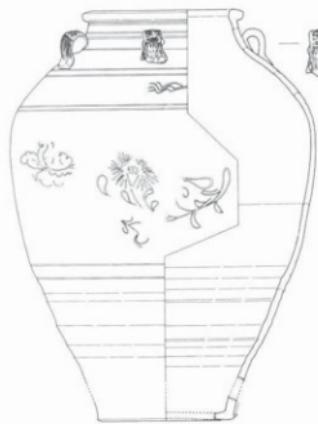
第72図 暗釉陶器 (1)



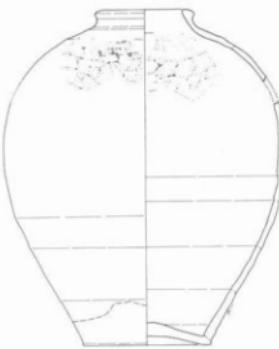
6



7



8



9



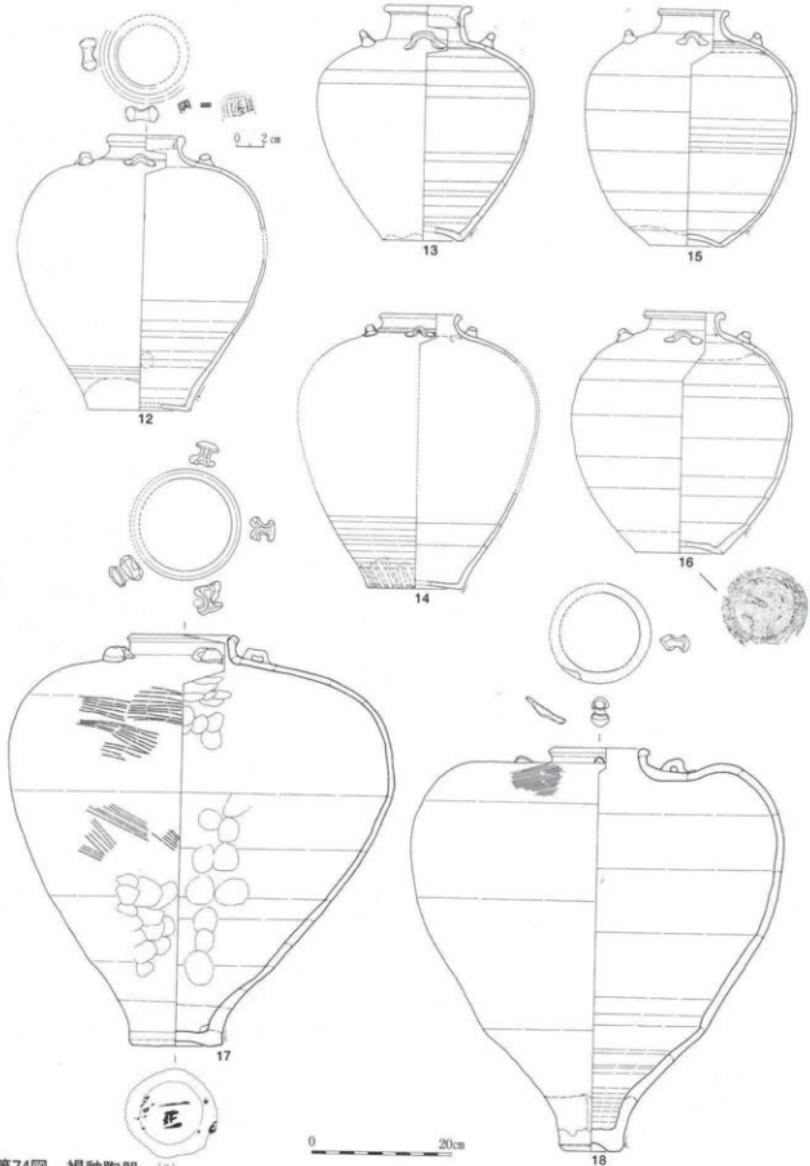
10 0 20cm



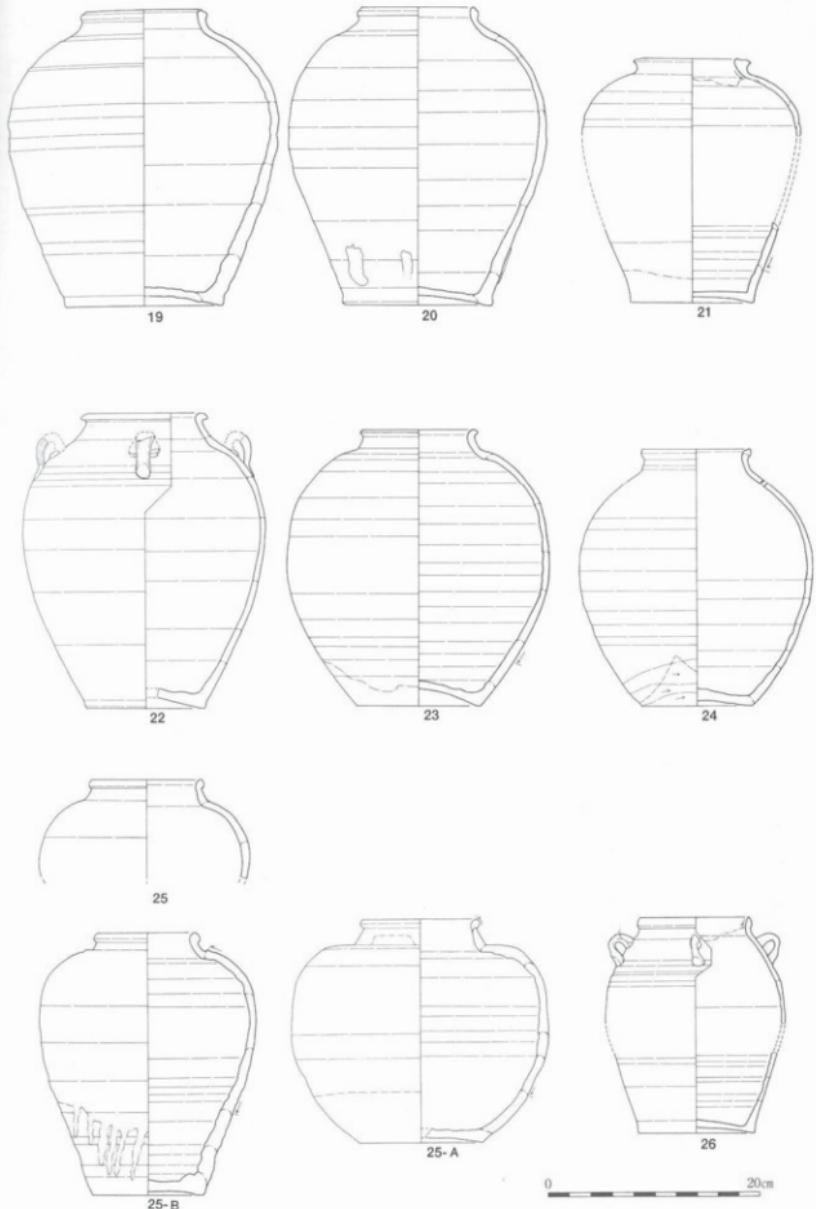
11



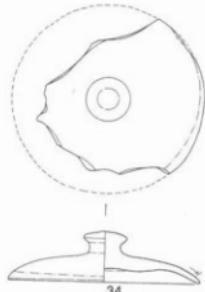
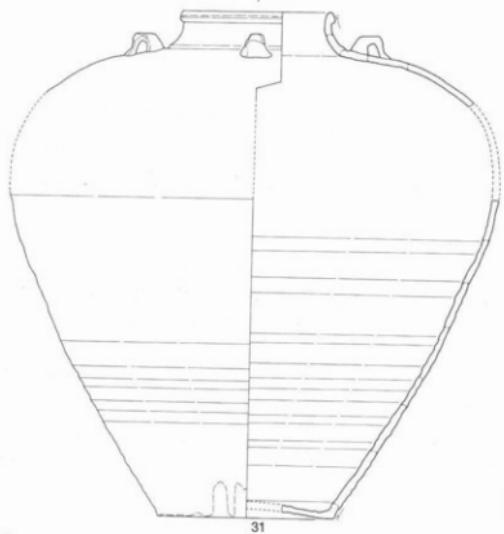
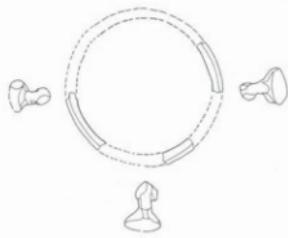
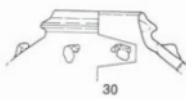
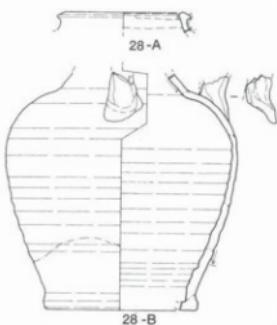
第73図 褐釉陶器 (2)



第74図 褐釉陶器 (3)



第75図 褐釉陶器 (4)



第76図 褐釉陶器 (5)

第40表 中国産褐釉陶器観察一覧

() : 推定

編目番号 断面番号 部番号	分類	口径 器高 底径 (cm)	釉 色	器 面 調 整	文 様・素 地 な ど	出土地点 出 土 層
新規 圖版 30	特 殊 壺	7.0 — —	火熱を受けて 変色。 現状の色合は は緑灰色。内 面の口縁から 外面まで施釉。	内面は丁寧なナデ仕上げ。外面は釉 で判断としないが、残存部分の状況 から觀察するとナデや擦痕で丁寧に 調整されたようである。	口唇から下1cm程度の箇所に鉗 を造っている。灰褐色の微粒子 である。微細な石灰質の砂粒と 細かい石英が少量含まれている。 劈開面の觀察から粘りと光沢の ある陶土を用いている点などか ら中国の宜興窯の製品の可能性 あり。	S A19 第3層
新規 圖版 31	白 釉 壺	12.2 (40.6) 14.4	白濁色。 内面全体は茶 褐色の釉。 外底を除いて 全面施釉。	両面の口縁から頸部までは丁寧に成 形。外面の頸下部から胴上部も丁寧 に成形する。胴中部から外底近くは 部分的に輪轆痕が観られる程度で丁 寧に成形される。外底面には輪轆台 からの切り離しを意図として敷いた 葦の圧痕がみられる。内面は肩部か ら胴中央まで丁寧な擦痕がみられる。 部分的に指圧痕がみられる。胴中央 から内底近くまでは輪轆痕が顕著に 観察できる。内底近くに指ナデが集 中する。内底は丁寧に調整され、部 分的に指ナデがみられる。	口縁は小さい玉縁状の肥厚をつ くる。頸下部直下から肩上部に かけて縦耳を4個貼付けてい る。灰褐色の細粒子である。素 地に粗い石英を少量含んでいる。 外面の口縁は部分的に釉が搔き 取られている。	S A20 第3層 第4層
新規 圖版 32	陶 器	9.0 (25.0) 11.0	灰白色。 内面の口縁か ら外面の胴下 部まで施釉。 火熱を受けて 全体的に変色。	両面の口頭部は擦痕がみられ丁寧に 成形。両面の頸下部から胴上部は輪 轆痕がみられ、内面のみ擦痕も認め られる。両面の胴中央から底面近く には輪轆痕がみられる。内面は輪轆 痕が外面より顕著である。外底近く には窓ナデや擦痕がみられる。外底の 成形は複数部分的に指圧がみられる。 内底面は擦痕が観察できる。	口縁は小さい玉縁状の肥厚をつ くる。頭部が短い壺。口唇の釉 を搔き取っている。灰褐色の微 粒子で、希に粗い石英が含まれ ている。	S A20 第2層 S A19· 20 第3層
新規 圖版 33	水 注	8.0 — —	灰白色。 口唇から外面 に施釉。	外面は丁寧に調整(ナデ?)されて いる。内面は回転擦痕が観察できる。	口縁に微弱な玉縁状の肥厚をつ くる程度で、目立たない。淡灰 色の微粒子で、粗い石英が僅か に含まれている。	S A19 栗石内

第11節 ベトナム陶器

ベトナム陶器の破片は17点得られていて個体数を推定すると11個体であった。土壤SK01(S A19・S A20、S A28)関係の資料は瓶1個体と水注2個体の計3個体であった。確認された器種は碗、盤、壺、瓶、水注の5種類であった。碗が4個体分と多かった。以下、碗、盤、壺などの順に個々の特徴を記述することにする。

A. 碗 (第77図1~4)

同図1は厚手の碗で口縁が外反するタイプである。推算された口径は15.0cmと求められた。釉は灰白色の釉を薄く両面に施している。呉須は濃淡のある暗青色で、外面胴部に主文の唐草文を配置して上下に界線を廻らす。上位の界線は二条一組のものを一組みと下位に単独の界線を三本廻らしている。内面の口縁には蔓草文を描き、その上下に界線を一本ずつ施している。素地は灰白色の細粒子で僅かながら微細な灰黒色の鉱物を含んでいる。B-13の覆土より出土。

同図2・3は薄手の外反口縁碗の細片である。同図2は灰白色の透明釉であり、同図3が黄味がかった灰色の透明釉をそれぞれ両面に施している。いずれも呉須は濃淡のある緑青色のものを用いている。同図2は外面に溝

文状の雲文や界線などを施している。内面は口縁のみに一本の界線を廻らしている。同図3は外面に二条一組の界線とその直下に渦文様の雲を描く。内面も二条一組の界線を施している。素地は同図2が黄白色の細粒子で僅かに灰黒色や茶褐色の微細な鉱物を含んでいる。同図3は淡灰色の粗粒子で微細な灰黒色の鉱物を少量含んでいる。同図2はB-13S A06栗石内より出土。同図3はB-13の覆土より出土。

同図4は碗の高台片とみられるものである。高台径は5.8cmと推算で求められた。脛付は身の大きさに比べ7.4mmと幅広である。高台内側は平坦に浅く内削りをして鉄釉を塗っている。黄白色の釉は内底のみに残っている。暗青色の呉須で見込みに草花文を描いている。素地は黄灰色の細粒子で微細な灰黒色の鉱物が僅かながら混入している。B-12S D06直下の栗石層より出土。

B. 盆 (第77図5・6)

同図5は稜花盤である。黄白色の釉が両面に残っている。呉須は濃淡のある藍色で外面の頸下部に界線を廻らす。内面は萼上面に如意頭文を描き、その直下から界線を胴上部まで二本施している。素地は淡灰色の粗粒子で微細な灰黒色の鉱物を少量含んでいる。両面に粗い貫入がみられる。B-11S A01直上より出土。

同図6は盤の胴部片とみられるものである。黄白色の釉は両面に施されていたようである。呉須は暗青色のものを用いて外面に唐草文を描いている。内面は波濤文の一部と界線が認められた。素地は黄白色の細粒子で微細な灰黒色の鉱物が僅かながら含まれている。C-13S A03直上より出土。

C. 壺 (第77図7)

同図7は壺の胴部片である。黄味を帯びた白色の釉を両面に施す。内面は輪轂痕が顯著に認められる。呉須は淡い藍色のもので外面に唐草文を描いているようである。素地は淡灰色の細粒子で微細な黒色鉱物を僅かに含んでいる。C-12搅乱層より出土。

D. 瓶 (第77図8・9)

同図8は瓶胴部の細片で外面のみに黄白色的釉を施す。内面は露胎であるが部分的に釉が垂れている。呉須は濃淡のある藍色で花形の窓枠、半截された花文が雲文、点描文を描いている。素地は淡灰白色の細粒子で微細な灰黒色の鉱物を少量ながら含んでいる。B-12S A01直上より出土。

同図9は玉壺春瓶型の資料である。胴上部から腰下部に弁先が尖った丸味のある花弁を窓枠として貼り付けている。胴上部から頸部にかけて面取りがなされていて面数は八面を数えた。窓枠内に本品の主文様となったとみられる貼り付けがなされていたようであるが大半が欠落して白ヌキの窓となっている。灰白色の釉は脣付外端から外底面を除いて両面に釉が施される。内面は全体的に黄味がになっている。高台内側から外底には鉄釉が雜に塗られている。文様は濃い青色のもので描かれている。頸部上位から頸部中央までは蕉葉文を描き、頸部中央寄りに鋸闇文を組み合わせたような文様を描き上下の界線で区画帶をつくる。この区画帶直下から高台際までは宝相華唐草文を描いている。窓枠の貼り付けられた箇所は当初から貼り付けを意識して呉須で花弁形に二本線による輪郭を描いている。貼り付けられた花弁には釉は施されていない。素地は灰白色の微粒子であるが、僅かに微細な灰黒色の鉱物が含まれている。推定復元は『陶磁大系』(註1)を参考に比率計算で求めたところ口径9.2cm、高さ29.8cm、高台径9.0cmとなった。B-15S A19・20の畦第3層と第4層より出土。

E. 水注 (第77図10・11)

同図10は鳥形の水注である。型物で内面の長軸方向は底面から胴部の縦ぎ目を雜にナデ消している。注ぎ口(鳥の首)は胴部の型合せ後に貼り付けているようである。外面は黄白色的釉を外底近くまで施している。内面は灰黄色の釉を全体的に掛けている。外底面は範削りを長軸方向に加えている。外底は二次的な火熱を受けて淡褐色を帯びている。呉須は濃青色のものを用いて羽毛や羽を描いている。素地は黄灰色の細粒子である。黒色の鉱物を少量含んでいるが稀に1.8mmサイズの茶褐色の鉱物粒を含んでいる。B-15S A19第2層一括より出土。

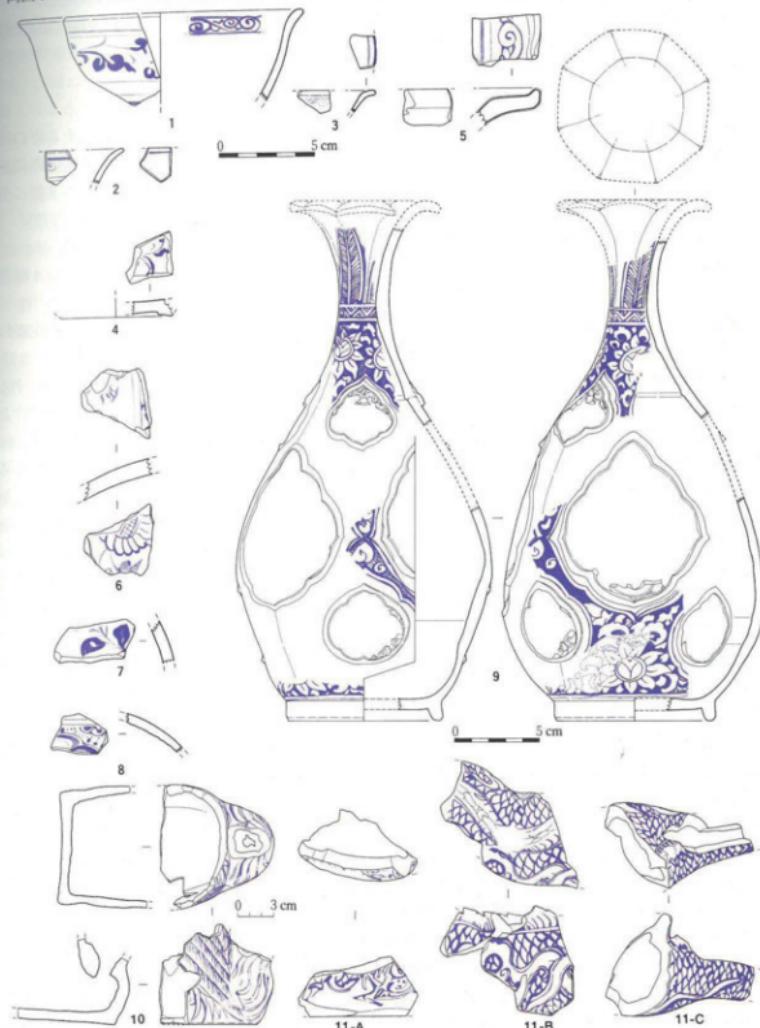
同図11は三爪龍形の型物水注である。龍の胴部分は一部、型本体に別で型取りした型を縦ぎ足して貼り付けたため上面觀が蛇行する形となっている。釉は黄白色を呈し外面にのみに施されている。外底と内底は露胎のままである。外底はナデによって調整されている。呉須は暗青色のもので三爪龍文を描いていて、龍の三爪は底面近くで確認できる。劈開面は型に陶土を詰め込む際に空気が入り型に沿うような気泡痕がみられる。素地は黄白色

の微粒子で、他に鉱物の混入は観察ができなかった。B-15 S A20第2層より出土。

註

註1. 矢部良明「タイ ベトナムの陶磁」『陶磁大系』第47巻 平凡社 1979年 (グラビア版89 青花 松竹梅文瓶 ベトナム 15-16世紀 高さ38.5cm 安宅コレクションを参照)。

同図9の復元に際しては、長谷部楽爾氏よりベトナム青花に関する情報を頂いた。記して謝意を表したい。



第77図 ベトナム陶器

第12節 タイ産褐釉陶器

土壤SK01 (S A19・20、S A28) 内よりタイの褐釉陶器が多量に出土している。器種は壺のみである。タイ産褐釉陶器壺で復元可能な資料は6個体はあるが、口径や底径が推算できた資料から口縁部が41点、76点が求められている状況や半線の蓋の推定個体数62個体などから推察すると底部の76点が現時点では最多数として、考えられる（壺の口縁破片と復元資料を数えた場合、285片が数えられるようである）。（第41表）

A. 褐釉大型壺（第78図1～第80図36）

壺の中には破片資料を含めて考慮した場合、大型、中型、小型の三つの壺が確認できるようであるが、到がら復元できたのは大型壺、小型壺の二種類であった。これらの復元資料を基本にして多量に出土した口縁分類の整理までは至っていない。以下、概略的に口縁部の肥厚形態などからI類からⅣ類までの8類に分必要に応じてa種、b種…と細分した。

1. I類壺（第78図1～3、第79図7～16）

I類壺は口縁破片（復元資料を含む）を含めて106片と最も多く出土している。a種～d種までの4種類に分した。

a種…口頭部がゆるやかに外側へ大きく外傾するもので、口縁部が三角形状に肥厚するものである。22片がられていて、3点を図示した（第78図1、第79図7・8）。

b種…a種と同様に口頭部がゆるやかに外側へ大きく外傾するものと頭部中央からきつく折れて外反するものがある。口縁部は玉縁状に肥厚するが、内面口縁の縁辺部を浅く窪ませているものである。47片と最も多く出土していて、その内の6点を図化した（第78図2・3、第79図9～12）。

c種…口頭部の傾きや外反の具合はb種と同様にゆるやかに外傾するものときつく外反するものがある。口縁部は三角形状に肥厚するが、内面口縁の縁辺部を軽く窪ませているため口唇が上方に突出した形態となる。26片が得られているが復元可能な資料はなかった。その内の2点を図示した（第79図13・14）。

d種…口頭部の傾きや外反の具合はa種と同様にゆるやかに外側へ大きく外傾する。口縁部も三角形状に肥厚する点で、a～c種と同じであるが、内面口縁の縁辺部を意識的に強く窪ませたため口唇が上方に突出した肥厚形態となっている。11片が数えられていて、2点を図化した（第79図15・16）。

2. II類壺（第79図17）

II類壺は破片を含めて2片を数えた。I類d種と口縁形態は類似するが中には口縁の折れがきつくなり水平に近いものが含まれているものもある。口頭部の傾きはI類d種と異なりきつく外反するものである。

3. III類壺（第79図18・19、第80図20～25）

III類壺はI類壺に次いで多く出土していて、79片を数えたが復元可能な資料は得られていない。口縁の形状などからa種～c種までの3種類に細分した。

a種…口縁部の形状はI類d種に近似するが、口縁の肥厚部が指ナデや籠ナデで面取りされているものが主で、希に肥厚部を外側へ突出させるものもある。口唇の上方への突出と肥厚帯下端の突出の具合はバランスがとれているものが多い。44片と多く得られている。大型破片を中心に4片（第79図18・19、第80図20・21）を図示した。

b種…口頭部の傾き具合はゆるやかに大きく外側に外反するものと頭部中央できつく折れて外反するものが口唇が上方に突出するものである。6片を数え、その内の2片を図化した（第80図22・23）。

c種…口頭部の傾き具合は頭部中央できつく折れて外反するものである。口縁の肥厚はb種と同様に下方に突出し、口唇部は上方への突出がないものである。29片が得られていて、2片（第80図24・25）を図示した。

4. IV類壺 (第80図26~28)

口頭部の傾きや外反の具合は頸部中央で屈曲し、外側へ大きく開いた口縁である。口縁の肥厚は他と比較して極端に目立たないので僅かに肥厚する程度であり、ちょうど舌の先が腫れたような舌状口縁である。22片が得られていて、3片 (第80図26~28) を図化した。

5. V類壺 (第80図29~31)

V類壺は口頭部がゆるやかに外側へ外傾する外反口縁の壺と頸部中央できつく外反する壺の2種類がある。口縁の肥厚形態などからa種とb種の二種類に細分した。

a種…口縁の肥厚はI類d種と同じ玉縁状で、口頭部の屈曲や外反も同じであるが、内面口縁を指で水平に成形し、外へスライドさせたような形態となるものである。1片のみ得られていて、これを図示 (第80図29) した。

b種…口頭部はゆるやかに外側へ大きく外傾するものと頸部中央できつく屈曲するものがある。口縁の肥厚が方形状となるものである。4片得られていて、2片を図化 (第80図30・31) した。

6. VI類壺 (第78図6、第80図32)

VI類は外反形の口縁と内傾形の口縁が各1点ずつ存在する。外反形の資料は口縁がタガ状となり、肥厚部を外へ突出させて、口唇を反り気味に尖らせているものである (第80図32)。内傾形は図上復元のみを試みた資料で、口縁が盤口状となるものである (第78図6)。

7. VII類壺 (第80図33~35)

VII類壺はすべて破片資料であった。48片が得られていて、口縁部の形態などからa種とb種の2種類に細分した。
a種…疑似肥厚の口唇で、口縁がタガ状に上方に突出しているものである。19片が得られていて、その内の2片を図化した (第80図33・34)。

b種…口唇を上方に撮み上げた感じで強く突出させ、肥厚部直下も僅かに下方へ突出させたものである。29片が得られていて、1片を図示した (第80図35)。

8. VIII類壺 (第80図36)

口縁をひねり返して大きな玉縁状の肥厚をつくるもので、頸部が短くなるものが主である。8片出土していて、1片を図示することにした (第80図36)。

B. 褐釉小型壺 (第78図4・5・44、第81図40・43)

小型壺の資料は第78図4・5・44、第81図40・43の5点である。推定された個体数は5個体とみられた。口造りは、大型壺のIV類壺に近い形態となるものである。なお、小型壺については、口縁形態による分類は実施していない。個々の特徴についてのみ観察表に記す。

C. 頸部および底部資料 (第81図37~39・41~42)

破片資料の中から比較的大型の破片を5片ほど抜き出して、図化を試みた。大型壺の破片資料とみられるものは第81図37~39と同図41・42の5片である。

小 結

タイの褐釉陶器壺は前記したように時間的な制約もあって分類のみに終始したため、正式な個体数を求めるまでは至っていないが、口縁資料や底部資料などから現段階では76個体相当が推定できる。

今日までタイの褐釉陶器壺が県内遺跡からどの程度の個体数が出土しているかを確認する目的で第44表を作成してみた。これによると北は今帰仁村の今帰仁城跡、西は日本最西端の与那国島の慶田崎遺跡から出土しているようである。京の内資料を除いた遺跡数は18遺跡で63個体余が出土しているようである。18遺跡で最も新しい時期の褐釉陶器壺は南風原町のクニンドー遺跡から出土した復元可能な1点 (註1) のみであった。クニンドー遺跡出土の資料は16世紀前後の時期に位置づけられ15世紀まで遡らないようである。クニンドー遺跡出土の資料は森村健一氏のタイ焼締四耳壺 (ノイ川窯系) のものと比較してみると16世紀中葉~17世紀初

頭のものに類似するようであり、クニンドー遺跡出土の資料（クニンドー遺跡調査報告書挿図の第44図2）は森村編年にみえる16世紀末～17世紀初頭の時期に位置づけられるようである。

ところで京の内資料の1・2点を除いてすべて外反型の褐釉陶器壺であり、クニンドー遺跡出土の資料と同種のタイプのものは存在しなかった。また、森村氏が呈示した編年表（上限が15世紀後半）にも京の内資料のような外反形の褐釉陶器壺と該当するタイプは存在しないようである。

京の内の主体である外反形の褐釉陶器壺の類例を挙げるとすれば糸満市の糸州グスク（註3）から採集した復元可能な資料があり、京の内分類のI類一種に相当するようである。糸州グスクの資料は1980年に描者が実測したものであり、その当時は産地が判らず単に「須恵陶器」として報告したものである。

次に金武正紀氏の「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」（註4）の中で今帰仁城跡から出土したタイの褐釉陶器をみてみると、金武氏分類の大型四耳壺Iと類似するものが京の内分類のIV類に該当するようであり、京の内主流であるI類、III類の壺は報告されてないようである。今後、今帰仁城跡出土の資料との比較、検討が必要であろう。

金武氏は上記した論文中で半練について以下のような見解を示している「今帰仁城跡主郭（俗称本丸）の第2層下部から半練（土器）の蓋が2点検出された。この層は14世紀後半が考えられるので、現在のところ、そこを上限と考えておきたい」と述べ、さらに「歴代宝案に記録されている香花酒をタイの大型褐釉陶器四耳壺に入れ、半練（土器）で蓋をしてタイ国から琉球国に持ち込まれた」とする考え方を示し、検証している。金武氏の説を補強するのが京の内から出土したタイの半練62個体とタイの褐釉陶器壺76個体相当であろう。褐釉陶器壺の中に入っていたのは金武氏が推論したように香花酒として解釈できるのではないだろうか。描者は「沖縄の泡盛もこのシャムとの貿易で製法や技術などが導入され…中略…褐釉陶器壺の中に泡盛が入れられ、蓋が置かれシャムから琉球に持ち込まれたとも考えられる」（註5）と述べたが、泡盛の祖型である酒を意味したつもりであったが説明不足であったことを痛感し、金武氏が述べた香花酒を率直に認めて改めたいところである。

ところで、京の内のタイの褐釉陶器壺でVI類中にある（第78図6）の盤口で内傾形の壺は管見の限りにおいては県内の遺跡からは報告例のないタイプでありクメールの影響を受けた陶器壺であり、14世紀前後もしくは14世紀代に位置づけられる資料（註6）として推察されるものである。

京の内から出土したタイの褐釉陶器壺の製作技法を推察するとすれば大型壺は胴部を含めて、それより下は輪積みもしくは巻き上げで成形したようであり、口縁から肩部までは指ナデや擦痕で丁寧に仕上げられているため判然としない。しかしながらクメールの影響を受けたVI類壺は輪積みもしくは巻き上げで底面から肩部まで積み上げていることが確認された。また、小型壺の第78図4については巻き上げによって底部から胴下部まで成形していることが推定された。

壺の外底面の特徴をみてみると外底面に黄白色や灰黄色の灰とみられるものが付着しているものが存在している状況からも製作時に回転台に灰を敷いたかあるいは焼成時に窯内部に残った灰が焼成によって付着したことが推察されるところである。

以上のような状況から判断するとすれば京の内のVI類壺を初めとするタイの褐釉陶器壺は金武氏が指摘した半練の今帰仁城跡出土の例からも14世紀後半まで遡っていくことが予想されるところである。なお、京の内より出土したタイの褐釉陶器壺の大部分は尾崎直人氏によるとタイのスコタイ県のシーサッチャナライ窯群のコ・ノイ窯の所産であるとのことであった（註7）。京の内のVI類壺（第78図6）については判然としなかったが、素地や混入物は他のI類・II類と近似している点などからシーサッチャナライ窯群の所産であるかもしれない。何故ならシーサッチャナライ窯群は11・12世紀頃から窯が存在するからである。

註

註1. 金城龟信・鳥袋 洋ほか 「クニンドー遺跡」 南風原町教育委員会 1996年。

註2. 森村健一 「畿内とその周辺出土の東南アジア陶磁器—新政権成立を契機とする新輸入陶磁器の採用—」 『貿易陶磁研究』 N o.11 日本貿易陶磁研究会 1991年。

註3. 湖城清・金城亀信「糸満市の遺跡」糸満市教育委員会 1981年。

註4. 金武正紀「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』No.11 日本貿易陶磁研究会 1991年。

註5. 金城亀信「ゲスク出土の“その他の土器”・“移入系土器”について」『文化譜紀要』第7号 沖縄県教育委員会 1991年。

註6. 尾崎直人「タイ・カンボジアの陶磁」福岡市美術館 1996年。

註7. 1997年7月7日に京の内資料を尾崎直人氏に直接実見して戴いた。記して謝意を表したい。

第41表 タイ産褐釉陶器口縁破片数

第42表 タイ産褐釉陶器主要口径一覧

サイズ(cm)		14.1	15.1	16.1	17.1	18.1	19.1	20.1	21.1	22.1	23.1	24.1	合計
類・種		~15.0	~16.0	~17.0	~18.0	~19.0	~20.0	~21.0	~22.0	~23.0	~24.0	~25.0	
I	a										2		
	b				1	1	1	1			1		2
	c					1	1		1				5
	d			1				1	1	1			3
II											1		1
III	a						2				1		4
	b							1			1		2
	c				2				1				3
IV			3		1								4
V	a								1				1
	b								1	1	1		3
VI		1		1									2
VII	a			1	1				1				3
	b					1							1
VIII				1									1
合計		1		6	3	6	4	3	5	4	6	1	39

第43表 タイ産褐釉陶器底径一覧

サイズ (cm)	11.1	12.1	13.1	14.1	15.1	16.1	17.1	18.1	19.1	20.1	21.1	22.1	23.1	24.1	25.1	26.1	27.1	28.1	29.1	30.1	合計
底部	11.0	12.0	13.0	14.0	15.0	16.0	17.0	18.0	19.0	20.0	21.0	22.0	23.0	24.0	25.0	26.0	27.0	28.0	29.0	30.0	31.0
数量	1	2		1	1	1		2	1			1	2	9	5	23	17	9		1	76
合計	1	2		1	1	1		2	1			1	2	9	5	23	17	9		1	76

注※ 最少個体数は底部の合計を採用した。

第44表 沖縄県出土のタイ産褐釉陶器主要一覧

No.	遺跡名	器形	残存部位	サイズ(cm)	数量	実測図	写真	備考	文献No.
①	今帰仁城跡 (12点)	小型壺 中型壺 大型壺	口縁～胴部 口縁～胴下部 口縁～高台 口縁～底部 口縁～胴上部 口縁～胴下部	口径7.6 口径4.6 器高約8.5 高台径約4.7 口径7.6 器高9.8 高台径5.3 口径11.0 器高31.2 底径9.7 口径14.1 口径18.5 器高約64.5 底径約26.0	3 Fig. 4-5 ~ 4-6 1 Fig. 4-7 8 Fig. 5-2 Fig. 5-3	— — — — —	今帰仁城跡主郭 (俗称本丸)より 出土。	註1	
②	尻川原遺跡 (1点)	大型壺	肩部	—	1	第9図 4	PL.13-4	フィリグスクと関連する遺跡。 12～16C。	註2
③	湧田古窯跡 (I)・(II) (2点)	大型壺 大型壺	口縁～肩上部 口縁部	口径19.4 口径18.0	1 1 第60図 5 第39図 11	69図版5 図版36 11	15C中～19C。	註3 註4	
④	首里城跡 (南殿・北殿跡) (2点)	大型壺 大型壺	口縁部 口縁部	口径20.2 口径22.6	1 1 第50図 9 第50図 11	図版60 9 図版60 11			註5
⑤	宮平ノロ殿内遺跡 (1点)	大型壺	頸部～肩上部	—	1	第11図 9	PL.23 9	14・15～18C。 集落。	註6
⑥	クニンドー 遺跡 (2点)	壺 壺	口縁部 口縁～底部	— 口径18.0 器高約51.8 底径17.0	1 1 第42図 1 第44図 2	図版35 1 図版36 2	グスクおよび集落 遺跡。 16C前後。		註7
⑦	阿波根古島 遺跡 (2点)	壺 壺	口縁部 口縁部	— —	1 1 第21図 12 第21図 13	PL.34 12 PL.34 13	集落遺跡。 阿波根グスクと近接。		註8
⑧	糸州グスク (1点)	大型壺	口縁と底部	口径21.0 器高約40.0 底径24.5	1	P46	—	器高を低くして図上復元。当時は「須恵質陶器」として報告。	註9
⑨	糸数城跡 (3点)	壺 壺 壺	口縁部 口縁部 口縁部	— — —	1 1 1 第32図 16 第32図 17 第32図 18	PL.45 16 PL.45 17 PL.45 18	13世紀～15世紀前半頃のグスク。		註10
⑩	カイジ浜貝塚 (1点)	壺	頸部	—	1	第29図 4	PL.38 4	カイジ村跡。	註11
⑪	上村遺跡 (1点)	壺	口縁部	口径19.7	1	第13図 14	PL.17 14	集落跡。	註12

第44表 沖縄県出土のタイ産褐釉陶器主要一覧

No.	遺跡名	器形	残存部位	サイズ(cm)	数量	実測図	写真	備考	文献No.
⑫ 麻来慶田城遺跡(13点)		壺	口縁部	口径17.0	1	第27図	27	図版28	27
		壺	口縁部	口径20.0	1	〃	29	〃	29
		壺	把手	—	1	〃	30	〃	30
		壺	口縁部	口径21.2	1	〃	31	〃	31
		壺	口縁部	—	1	〃	32	〃	32
		壺	口縁部	—	1	〃	33	〃	33
		壺	口縁部	—	1	〃	36	〃	36
		壺	頭部～胴上部	—	1	〃	37	〃	37
		壺	肩部～胴上部	—	1	第64図	16	図版49	16
		壺	口縁部	—	1	〃	17	〃	17
		壺	把手	—	1	第64図	17	図版49	17
		壺	口縁部	—	1	第34図	29	PL. 42	29
		壺	口縁部	—	1	〃	30	〃	30
		壺	口縁部	口径20.4	1	〃	31	〃	31
		壺	口縁部	口径21.0	1	第35図	32	PL. 43	32
⑬ 与那原遺跡(4点)		壺	口縁部	—	1	第34図	29	PL. 42	29
		壺	口縁部	—	1	〃	30	〃	30
⑭ 慶田崎遺跡(2点)		壺	口縁部	口径16.6	1	第25図	212	PL. 25	211
		壺	口縁部	—	1	〃	213	〃	213
⑮ 高嶺古島遺跡(1点)		壺	口縁部	口径13.3	1	第22図	12	PL. 29	12
		壺	口縁部	—					
⑯ 玉代勢原遺跡(8点)		中型壺	口縁部	口径20.5	1	第34図	1		
		大型壺	頭部～胴上部	—	1	〃	2		
		大型壺	胴上部	—	1	〃	3		
		大型壺	口縁部	—	1	〃	4		
		大型壺	口縁部	—	1	〃	5		
		大型壺	口縁部	口径10.5	1	〃	6		
		大型壺	口縁部	口径10.2	1	〃	7		
		大型壺	底部	底径11.5	1	〃	9		
⑰ 御細工所跡(1点)		壺 or 瓢	底部	底径7.6	1	第19図	2	PL. 20	10
		壺 or 瓢	底部	—					
⑲ ヒヤジョー毛遺跡(193片で推定個体数は7点以上)		大型壺	口縁～底部	口径17.0 底径18.0 器高約42.0	1 1 1	第33図	1	PL. 38	1
		大型壺	口縁部	口径23.3	1	第33図	2	PL. 38	2
		大型壺	底部	底径23.8	1	〃	3	PL. 〃	3
		大型壺	口縁～底部	口径16.8 底径27.0 器高約55.0	1 1 1	〃	4	PL. 〃	4
		壺	口縁部	口径21.0	1	〃	5	PL. 〃	5
		壺	口縁部	口径19.5	1	〃	6	PL. 〃	6
		壺	底部	底径10.6	1	〃	7	PL. 〃	7
		壺	口縁部	—					
		壺	口縁部	—					
		壺	底部	—					
		壺	口縁部	—					
		壺	底部	—					
		壺	口縁部	—					
		壺	底部	—					
合計					63個 + x片				

第44表 表中註文献

- 註1. 金武正紀・「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」『貿易陶磁研究』No.11 日本貿易陶磁研究会 1991年。
- 註2. 金武正紀・城間千栄子 「尻川原遺跡」 那覇市教育委員会 1993年。
- 註3. 大城 慧・島袋 洋ほか 「湧田古窯跡(Ⅰ)」 沖縄県教育委員会 1993年。
- 註4. 島袋 洋・金城亀信ほか 「湧田古窯跡(Ⅱ)」 沖縄県教育委員会 1995年。
- 註5. 上原 静 「首里城跡 南殿・北殿跡の遺構調査報告」 沖縄県教育委員会 1995年。
- 註6. 金城亀信 「南風原町の遺跡」 南風原町教育委員会 1993年。
- 註7. 金城亀信・島袋 洋・上地克哉・城間良和・池田榮史 「クニンドー遺跡」 南風原町教育委員会 1996年。
- 註8. 金城亀信・島袋 洋ほか 「阿波根古島遺跡」 沖縄県教育委員会 1990年。
- 註9. 湖城 清・金城亀信 「糸満市の遺跡」 糸満市教育委員会 1981年。
- 註10. 金城亀信・黒住耐二ほか 「糸教城跡」 玉城村教育委員会 1991年。
- 註11. 金城亀信・岸本義彦ほか 「カイジ浜貝塚」 沖縄県教育委員会 1994年。
- 註12. 大城 慧・金城亀信ほか 「上村遺跡」 沖縄県教育委員会 1991年。
- 註13. 金城亀信・金城 透・島袋 洋・仲間留美・上原清乃・仲與根ゆかり 「慶来慶田城遺跡」 沖縄県教育委員会 1997年。
- 註14. 金城亀信 「与那原遺跡」 与那国町教育委員会 1988年。
- 註15. 金武正紀・大田宏好 「慶田崎遺跡」 与那国町教育委員会 1986年。
- 註16. 金城 透・金城亀信ほか 「高嶺古島遺跡」 豊見城村教育委員会 1990年。
- 註17. 中村 恵 「玉代勢原遺跡」 北谷町教育委員会 1993年。
- 註18. 金武正紀・島 弘・玉城安明・内間 靖・島袋春美 「御細工所跡」 那覇市教育委員会 1991年。
- 註19. 金武正紀・城間千栄子 「ヒヤジョー毛遺跡」 那覇市教育委員会 1994年。

第45表 タイ産褐釉陶器観察一覧

() : 推定

神奈川番号 国宝番号 遺物番号	分類	口 径 高 さ 底 径 (cm)	釉 色	器 面 調 整	文 様・素 地 な ど	出土地点 出土層
第78回 図版65 1	I a	21.8 52.5 24.2	胴上部から 上は黄緑色 胴部は黒色	外面の胴下部は範ナデが集中。外底面 は平坦に成形、ナデ仕上げか。口縁の 肥厚部も範ナデで面取り。内面は擦痕 と輪積み痕。	口頭部に三角形状の陽界線を施す。肩部中央に丸彫りで2本の 團線を描き、團線上に縦17mm、 厚さ28mmの把手を横位方向に4 個貼り付けている。茶紫色の細 粒子で精選されている。微細な 石英?が僅かに含まれる。	S A19- 20 第2層
〃 2	I b	23.2 56.0 27.0	火熱を受け ていている。黄 緑色と茶黒 色。	外面の頭部は擦痕。胴下部は丁寧な擦 痕を主に施し部分的に範ナデを加える。 外底面は全体的にアバタ状となるが部 分的にナデを加えたようである。内面 の口縁から肩部までは輪積みで胴上部 に僅かな擦痕。胴下部は範削りが主で 指ナデを加える。	〃。肩部中央に縦16mm、厚 さ18mmの把手を4個、横位方向 に貼り付けている。茶紫色の細 粒子で、微細な石英?や茶褐色 の鉱物が少量混入する。	S A20 第3層
〃 3	I b	19.5 62.0 27.7	両面の頭部 より上は茶 褐色の釉。 頭部中央よ り胴下部ま では黄緑色。 頭下部より 下は黒色釉。	両面の口頭部は擦痕。内面の頭部から 胴中央は丁寧な擦痕で胴部から下は雜 な擦痕を加え素地の継ぎ目が頗著にみ られる。頭部に僅かではあるが刷毛目 や範ナデがみられる。内底は雜な指ナ デ。外面の胴下部から底面近くは範削 りの後に指ナデを加える。外底は平坦に 成形し僅かに範削りの痕跡が窺える。	〃。肩部中央に二本一組の 團線を一条施す。縦17mm、厚さ 13mmの把手を横位に團線上に貼 り付ける。明るい茶褐色の細 粒子である。希に粗い茶褐色の鉱 物や石英?を含んでいる。	S A19- 20 第2層
〃 4	小 型	17.6 (36.1) 16.8	茶黒色と黒 色。	外面の肥厚直下は指ナデで肥厚部の上 半は範ナデである。内面の口頭部は擦 痕。内面の頭下部から胴下部は器面が 全体的に剥落する。部分的に範削りや 範ナデを加えている。内底は指圧痕。 外面の胴下部は指ナデを丁寧に加える が底面近くは範ナデである。外底は平 坦に成形。	〃。〃。胴中央の團線 上に縦14mm、厚さ9mmの把手を 横位に貼り付ける。明るい茶紫 色の細粒子で精選される。微細 な石英?や茶褐色の鉱物を少量 混入。	S A19 第3層
〃 5	壺	15.3 32.2 15.6	黒色。	外面は大半が施釉で不明。胴下部は雜 な擦痕(指)がみられ底面近くは範ナ デや範削りで成形。外底は平坦に成形。 内面の胴下部は範削りを加えているよ うである。胴部は大半が擦痕。	頭下部に三角形状の陽界線。胴 中央に2本の團線を施し、團線 の上に横位の把手を4個貼り付 けていたようである。灰紫色の 細粒子で精選される。25倍ル ーペでは混入物は観察できない。	S A20 第2層
〃 6	VI	17.0 (53.7) 27.1	明るい黄緑 色。	肥厚直下に擦痕。外面の胴下部は擦痕 を主体に範ナデや指ナデを加える。外 底は平坦に成形。内面の頭部から胴下 部まで指ナデで調整。内底面に釉が掛け られる。	肩部に3本1組の半円を交差させながら 描いている。胴部上半には4本1組の團線 で四隅の内文(3本1組)の上下を区画 する。胴下部には丸彫りで團線を3本程度 で施しているようである。素地は淡い橙色と 淡い灰色で1mm前後の茶褐色の鉱物を 少量含んでいる。希に3mmのもの のが含まれている。	S A19 第1層
第79回 7	I a	24.0 — —	黒色。	内外面とも擦痕と輪積み痕。	残存部に文様はない。灰褐色の 粗粒子で粗い石英?と茶褐色鉱 物が少量混入。	S A19 第2層
〃 8	I a	23.2 — —	黒色。	〃。内面胴上部に右上りの指ナデ。	頭下部に三角形状の陽界線。茶 紫色の細粒子で細かい石英?や 茶褐色の鉱物が少量混入する。	S A19- 20 第2層

第45表 タイ産褐釉陶器観察一覧

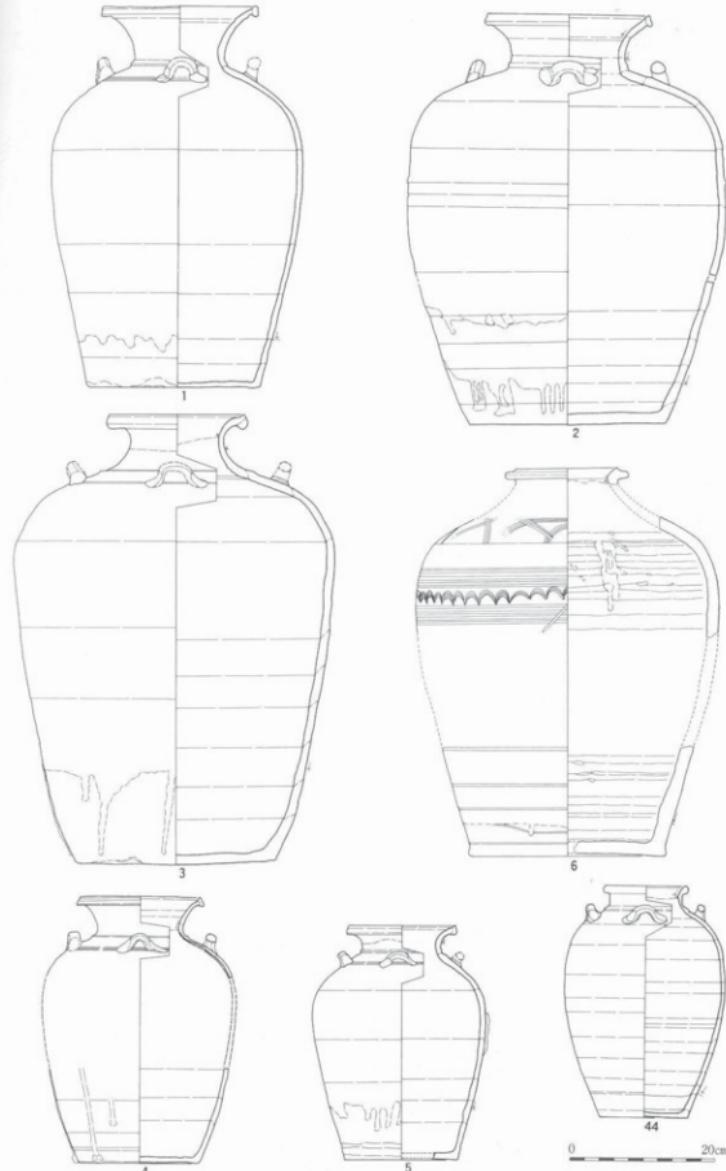
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	口 高 底 (cm)	径 き 径 (cm)	釉 色	器面調整	文様・素地など	出土地点 出土層
第79図 9	I b	18.6	—	黒色。	口縁部に軽く削りを加える。内面口縁を窪ませて突出させる。両面とも擦痕と輪積み痕。	頭下部に三角形状の陽界線。肩上部に縦18mm、厚さ12mmの把手を貼り付ける。灰褐色の細粒子で精選され、細かい石英が僅かに混入。	S A19- 20 第1層 第2層
〃10	I b	20.4	—	黄茶色。	内外面とも擦痕と輪積み痕を主体とする。口縁下半部に箆ナデ。	〃。紫灰色の細粒子で細かい石英?や茶褐色の鉱物が少量混入。	S A19 第2層
〃11	I b	19.8	—	火熱を受け 変色。	釉が溶け大半は観察ができない。僅かに両面で擦痕と輪積み痕。	頭下部に三角形状の陽界線。灰褐色。細粒子で細かい石英?が多量に混入。	S A20 第2層 第3層
〃12	I b	17.1	—	黒色。	両面とも擦痕と輪積み痕。	〃。茶紫色の細粒子で精選される。微細な石英?を少量混入。	S A20 第2層
〃13	I c	19.0	—	火熱を受け 変色。	〃。口縁内端と外面肥厚帯直下を指圧で窪ませている。	〃。灰褐色の細粒子であるが僅かながら細かい石英?や茶褐色の鉱物が含まれている。	S A20 第1層 第2層
〃14	I c	19.8	—	黄緑色と濃 緑色。	〃。口縁内端のみ指圧で窪ませている。	文様は残存部ではない。茶紫色の細粒子で精選されている。希に細かい石英?と茶褐色の鉱物が含まれる。	S A19- 20 第1層 第3層
〃15	I d	21.6	—	火熱を受け 変色。	〃。〃。外面肥厚帯直下に箆ナデとみられるものを加える。	頭下部に方形形状の陽界線。灰褐色の細粒子で精選される。微細な石英?や茶褐色の鉱物が僅かに含まれる。	S A20 第2層
〃16	I d	21.8	—	〃。 黑色。	〃。内外面の口縁近くに指圧を加え窪ませる。	頭下部に三角形状の陽界線。灰褐色の細粒子で細かい石英?や茶褐色の鉱物が多量混入。	S A20 第2層
〃17	II	23.4	—	火熱を受け 変色。	〃。内面口縁端部に箆削り。	〃。灰褐色の細粒子である。希に粗い石英?が混入。主体は微細な石英?で少量含まれる。	S A19- 20 第3層
〃18	III a	24.0	—	濃緑色。	〃。口縁下半部は箆削りか。	残存部に文様はない。濃い茶紫色の細粒子で細かい石英?や茶褐色の鉱物が僅かに混入。	S A20 第2層
〃19	III a	19.2	—	火熱を受け 変色。	〃。口縁内面は強い指圧で窪む。口縁の肥厚は指ナデで面取り成形。	頭下部に三角形状の陽界線。灰褐色の細粒子で希に粗い灰黒色の鉱物が混入。	S A19 第3層
第80図 20	III a	23.0	—	黄緑色と茶 黒色。	両面とも擦痕と輪積み痕を主体とする。外面肥厚帯直下に削りを加える。	頭下部に三角形状の陽界線。肩部に3本1組の陰團線。淡い灰紫色の細粒子で希に細かい石英?や茶褐色の鉱物が含まれる。	S A20 第2層 S A34 栗石直下 B-17 覆土
〃21	III a	20.4	—	茶褐色と茶 黒色。	〃。外面肥厚部下半から同部位直下は細かい擦痕。	〃。〃。肩部に縦17mmと厚さ14mmの把手を貼り付けている。	S A19- 20 第2層

第45表 タイ産褐釉陶器観察一覧

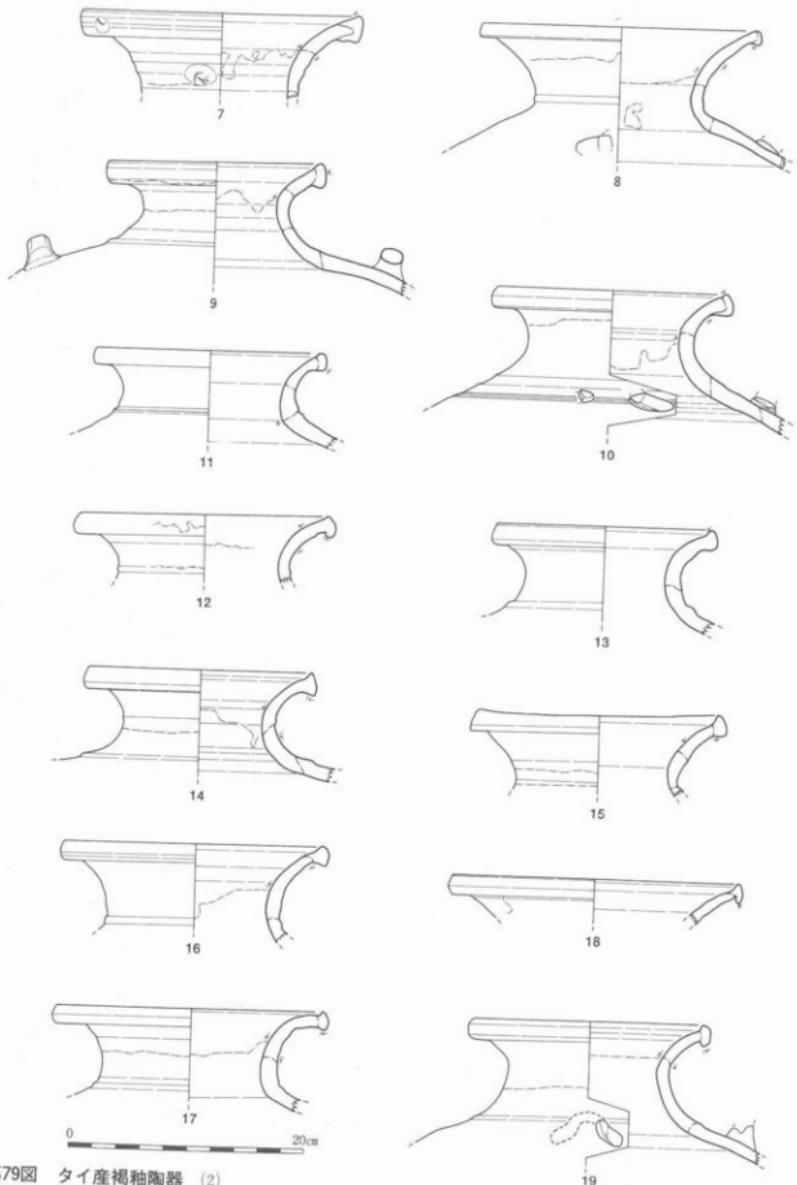
博物館番号 国級番号 遺物番号	分類	口 高 底 (cm)	様 さ 径 (cm)	釉 色	器 面 調 整	文 様・素 地 な ど	出土地点 出土層
第80図 22	III b	23, 4 — —	23, 4 — —	茶黒色。	両面とも擦痕と輪積み痕を主体とする。	残存部に文様はない。灰褐色の細粒子で希に細かい茶褐色の鉱物が含まれる。主体は微細な石英?であり、少量含まれる。	S A19- 20 第2層
〃 23	III b	20, 2 — —	20, 2 — —	黄緑色と濃 緑色。	〃。外面口縁の上半部は竈ナデを加えているようである。	〃。灰紫色の細粒子で微細な石英?を少量含み希に細かい茶褐色の鉱物が混入する。内面に胎土目の目痕。	不明
〃 24	III c	18, 6 — —	18, 6 — —	火熱を受け て変色。	〃。	頸下部にルーズな三角形状の陽界線を施す。灰褐色の細粒子で細かい石英?を少量含む。	S A20 第2層 S A34 栗石直下
〃 25	III c	18, 2 — —	18, 2 — —	黄緑色。	〃。外面肥厚帯直下から頸上部に竈ナデを加える。	頸下部は三角形状の陽界線を施す。灰褐色の細粒子で希に細かい石英?と粗い茶褐色の鉱物を含んでいる。	S A19- 20 第2層
〃 26	IV	16, 2 — —	16, 2 — —	火熱で変色 黒色釉が残 存。	外面は施釉で不明。内面は擦痕を主体に指圧痕がみられる。	残存部に文様はない。紫灰色の細粒子で細かい石英?や茶褐色の鉱物を多量に混入する。	S A19- 20 第2層 第3層
〃 27	IV	16, 9 — —	16, 9 — —	〃。 〃。	内外面とも擦痕がみられる。	頸下部に三角形状の陽界線を施す。茶紫色の細粒子で細かい石英?を多量に混入する。	S A20 第2層
〃 28	IV	18, 8 — —	18, 8 — —	〃。 〃。	大半が施釉で不明。内面の一部に横位方向の指ナデ。	残存部に文様はない。茶紫色の細粒子で精選される微細な石英?や茶褐色の鉱物を少量含む。	S A20 第2層 第3層
〃 29	V a	22, 4 — —	22, 4 — —	濃緑色。	両面とも擦痕と輪積み痕。	頸下部に三角形状の陽界線を施す。灰褐色の細粒子で希に細かい石英?が含まれる。	S A20 第2層 第3層
〃 30	V b	23, 8 — —	23, 8 — —	黒色。	〃。	残存部に文様はない。茶紫色と灰褐色の細粒子である。微細な石英?が少量混入する。	S A20 第2層
〃 31	V b	22, 4 — —	22, 4 — —	濃緑色。	内外面とも擦痕と輪積み痕を主体に施す。外面の肥厚帯直下に竈ナデで成形。	頸下部に三角形状の陽界線を施す。灰褐色の細粒子で精選される。希に細かい石英?や茶褐色の鉱物が含まれる。	S A19- 20 第2層 第3層
〃 32	VI	15, 0 — —	15, 0 — —	黄緑色。	内外面に擦痕。	残存部に文様はない。茶紫色の細粒子で僅かに細かい石英?が含まれている。	S A20 第3層
〃 33	VII a	17, 8 — —	17, 8 — —	濃緑色。	内面は部分的にアバタ状に器面が禿げ落ち不明。外面は施釉のため不明。	〃。灰褐色の細粒子で精選される。希に粗い石英?が混入する。	S A19 第2層
〃 34	VII a	16, 8 — —	16, 8 — —	黒褐色。	施釉により不明である。	残存部に文様はない。〃。希に細かい石英?が混入する。	S A19 第2層

第45表 タイ産褐釉陶器観察一覧

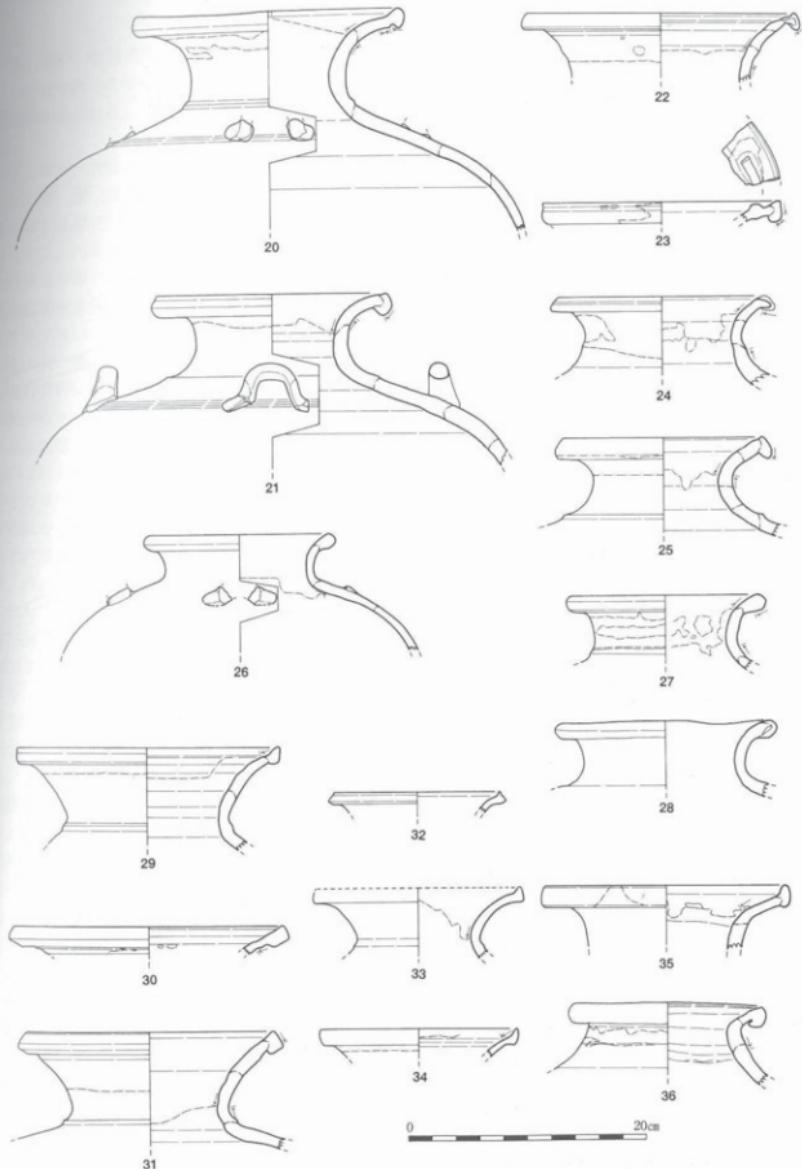
挿図番号 図版番号 遺物番号	分類	口 径 高 さ 底 (cm)	釉 色	器 面 調 整	文 様・素 地 な ど	出土地点 出土層
第80図 35	V b	20.3 — —	黒褐色。	内面は擦痕と輪積み痕。外面は擦痕のみ。	文様はない。灰褐色の細粒子で希に粗い茶褐色の鉱物や石英が含まれる。内面頸上部に胎土目の目痕が3箇所認められる。	S A19- 20 第2層
〃 36	V b	17.2 — —	火熱を受け て変色。	〃。外面は施釉で大半が不明であるが肥厚下端を笠などで面取り調整。	〃。灰褐色と茶紫色の細粒子で希に粗い石英?が混入する。	S A20 第3層 S A34 栗石直下
第81図 37	大型 壺	— — —	黄緑色と茶 黒色。	〃。外面の把手は内面からも指圧を加えている。外面は施釉で不明。	頭下部に三角形状の陽線。肩上部に2本の園線を1本ずつ丸彫りで施す。淡い茶紫色の細粒子で粗い茶褐色の鉱物や石英?を多く含んでいる。	S A19- 20 第2層 第3層
〃 38		— — —	黑色。	内面は擦痕と輪積み痕。外面は部分的に擦痕。	〃。灰褐色の細粒子で希に粗い茶褐色の鉱物が含まれる。	S A19- 20 第2層
〃 39		— — —	〃。	〃。外面は施釉で不明。	〃。肩部に幅14mm、厚さ12mmの把手を横位に貼り付けている。灰紫色の細粒子で粗い茶褐色の鉱物や石英?を少量含んでいる。	S A19 第2層
〃 40	小型 壺	— — —	〃。	〃。〃。	〃。肩部に縦10mm、厚さ8mmの小さな把手を横位に貼り付ける。茶紫色の細粒子で微細な石英?や茶色の鉱物を少量含んでいる。	S A19 第2層
〃 41	大型 壺	— — 24.5	黑色。	外面の胴下部は丁寧な擦痕と輪積み痕が施され、底面近くには笠ナデを加える。外底面は器面の保持が悪く不明。内面の胴下半部は擦痕と輪積み痕、胴中央は指ナデが集中的に施される。	残存部には文様がない。茶紫色の細粒子で精選される。混入物は25倍ルーペでは観察できなかった。外底面の周縁に目痕がみられる。	S A19- 20 第1~3層
〃 42		— — 28.2	黑色。	外面の胴下部は擦痕。底部近くに笠ナデが集中。外底は平坦で丁寧に仕上げられている。笠削りや指圧などが僅かにみられる。内底面および胴上部は指ナデ。胴下半分は笠削りが回転台での被轆引き。	残存部に文様はない。茶紫色の細粒子で、希に粗い茶褐色の鉱物や石英?が混入する。	S A20 第2層 第3層
〃 43	小型 壺	— — 16.8	〃。	外面は丁寧な擦痕が全体的にみられる。部分的に笠ナデや指ナデがみられる。外底は平坦で丁寧に仕上げられている。内底は輪積み痕。内面も丁寧な擦痕がみられる。	〃。茶紫色の細粒子で細かい石英?が少量混入する。	S A19- 20 第3層
第78図 図版65 44		11.1 32.0 12.0	〃。	外面の口縁から頸部までは丁寧に仕上げている。外面の肩上部から胴下部までは、釉上から輪積み痕が認められる。外面の胴下部から外底近くには擦痕と笠削りがみられる。外底の調整は器面がバタ状を呈し不明である。内面の頸部に明瞭な擦痕が観察できる。内面の肩上部から胴中央部までは丁寧に擦痕を加えている。胴中央部から内底面近くは、輪積み痕が明確に認められ擦痕によるナデ消しが徹底していない。内底は複数の指ナデ調整で、指圧痕が目立っている。	頭下部に三角形状の陽界線を一本施している。肩上部は上方に突出した横耳を4箇所に貼り付けていたようである。灰紫色の細粒子で、粗い石英?を多く含んでいる。	S A20 第3層 S A19 第2層



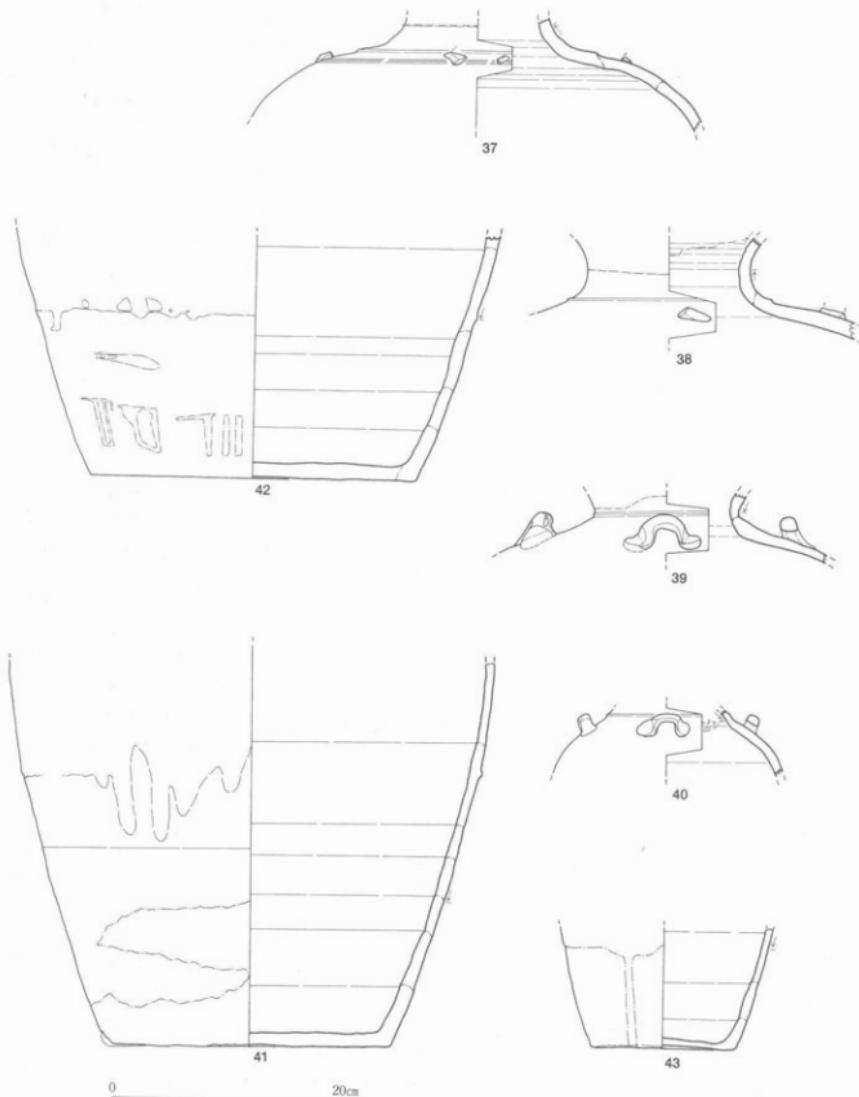
第78図 タイ産褐釉陶器 (1)



第79図 タイ産褐釉陶器 (2)



第80図 タイ産褐釉陶器 (3)



第81図 タイ産褐釉陶器 (4)

第13節 中世陶器

ここで取り扱った中世陶器は土壤 S K01内から出土した本土産の陶器を総称したものである。中世陶器の大半が備前焼とみられる。S K01内からは擂鉢1個体、大甕3個体、壺2個体の計6個体相当が出土しているようである。

以下、擂鉢、大甕、壺の順に個々の特徴を記すことにする。

A. 擅鉢 (第82図1)

第82図1は備前焼の擅鉢(註1)とみられる資料である。口縁部は盤口状の縁帶をもつていて注ぎ口を設けて片口とする。内面のおろし目は7条で一単位の櫛目(幅2cm)を底面から胴上部にかけて施している。外面の成形は内面より雑である。自然釉とみられる茶色の釉が外面に残っている。素地は茶紫色の粗粒子で細かい白色や黒色の鉱物を多量に含んでいる。希に2mm×5mm程度の白色の鉱物や淡茶色の鉱物が含まれている。推定復元によるサイズは口径28.4cm、器高8.7cm、底径13.4cmである。B-15S A20の第2層とS A19第2層より出土。

B. 大甕 (第83図2~4)

大甕の資料は3個体分出土している。その内備前焼の大甕は同図2・4の2点であった。大甕の資料には黄緑色の釉が掛かっている。焼成や素材は同図2が堅緻で陶器質であるのに対し同図3・4の2点は焼成が悪く瓦質である。同図3の1点は器色が灰褐色を帯びている点などから備前焼から外れるようである。

同図2はルーズな玉縁状の肥厚をもった口縁で肥厚は捻返しによって仕上げられている。唯一、黄緑色の釉が掛かった資料である。肥厚帯中央から頸下部には雑な削りとナデがみられる。胴上部には指圧や指ナデによって生じられたとみられる浅い起伏が認められる。内面の口縁から胴部には雑なナデが加えられている。外底面は雑なナデが縦横に施されている。内底面や内面は削りをナデ消しているが徹底していない。成形や調整は内面が丁寧で、外面が粗雑である。素地は淡灰色や黄白色を帯びて粗粒子である。素地に粗い白色や黒色の鉱物を多量に含んでいて希に3~4mm程度の灰黒色や白色の鉱物が含まれている。推定復元によるサイズは口径40.2cm、器高75cm、底径34cmであった。B-15S A20第2層・第3層、S A19第3層から出土している。

同図3の口縁も陶土の捻返しによって玉縁状の肥厚をつくる。外面の肩部に平行叩きを左上がりに斜位へ施している。内面には扁梢円形状の當て具痕がみられる。口縁の外外面には削りやナデを加えている。底部は外面に削りを加えた後にナデを施している。外底面も外面と同様の調整がなされているが雑である。内底面及び内面はナデで仕上げられていて外面に比べて丁寧である。素地は灰褐色の粗粒子で細かい白色の鉱物が多量に含まれている。推定復元によるサイズは口径32.5cm、底径20cmである。B-15S A19第2層と第3層から出土している。

同図4の肥厚も捻返しによって玉縁状に仕上げて玉縁口縁とする。外面の口縁から頸部はナデで仕上げられ肩上部から胴部は擦痕が加えられている。内面の胴部には箆ナデと削りが雑に施されている。内面の口頸部は外面と同様にナデ仕上げである。底部の外表面及び外底面は削りを加えた後にナデを施している。外底面の仕上げは雑である。内底面の調整は丁寧なナデを施し、胴部は雑なナデや指圧を施していく指圧による浅い窪みが回線状に走っている。素地は灰褐色の粗粒子で粗めの白色や茶褐色の鉱物を多く含んでいる。希に6.2~8.9mmサイズの白色鉱物が混入している。推定復元によるサイズは口径34.4cm、器高64.7cm、底径36cmであった。B-15S A19の畦の第2層と第3層より出土。

C. 壺 (第83図5・6)

壺は2個体分出土している。有文の壺は香川県小豆郡内海水ノ子岩の海底から引き上げられたものと類似しているようである(註2)。壺の2点は備前焼とみられる。

第83図5は口縁に小振りの玉縁をもった肥厚をつくる。肩部から胴上部は丸味を持たせて成形されている。口縁から胴部は全体的に刷毛様のナデで調整されている。胴部の一部には5本単位の櫛目で斜位に文様を施している。内面は継位の箆削りをナデで消しているが徹底していない。底部は外面がナデを主体に施していて、部分的に外底に雑なナデと指圧を加えて調整されている。削りは底面から立ち上る箇所と外底面の一部に施されている。底部内面は雑なナデを加えている。茶褐色の釉が口縁外面から外底面まで掛かっている。内面は口縁のみに釉が

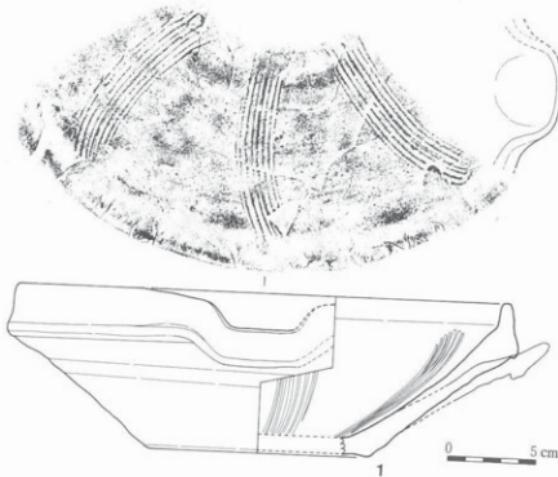
垂れている。素地は灰褐色の粗粒子で粗い白色や灰黒色の鉱物が多量に含まれていて希に3~4mm程度の白色や茶黒色の鉱物が含まれている。復元されたサイズは口径15cm、器高43.5cm、底径19.8cmであった。B-15SA19・2より出土。

同図6は長胴形の壺とみられるものである。玉縁状の肥厚口縁で肥厚は捻返しによって仕上げられている。外面の調整は口縁から胴部はナデを丁寧に加えている。内面はナデを主体に施していく部分的に雑な削りが胴部に観察できる。底部は外面胴下部にナデを施している。底面近くの立ち上りの箇所には横位方向の削りが加えられている。外底の調整は自然釉で判然としない。内面の胴部は横位方向にナデを雑に施している。内底面は釉が溜り器面の調整は判らない。胴部の文様は5本単位の櫛目で横位の沈線を櫛目波状文の上下に施している。櫛目波状文は4本単位の櫛目で描かれている。釉は灰緑色を呈しているが大部分は火災による火熱で変色し灰白色となる。自然釉は外面の口縁から胴中央まで掛かっていたようである。釉は内底面と外底面でも認められる。素地は灰褐色の粗粒子で粗い白色や灰黒色の鉱物が多量に含まれている。希に7.7mm×13.4mmサイズの白色鉱物が混入している。推定された器のサイズは口径17.4cm、器高43cm、底径23cmであった。B-15S A20第2層と第3層から出土。

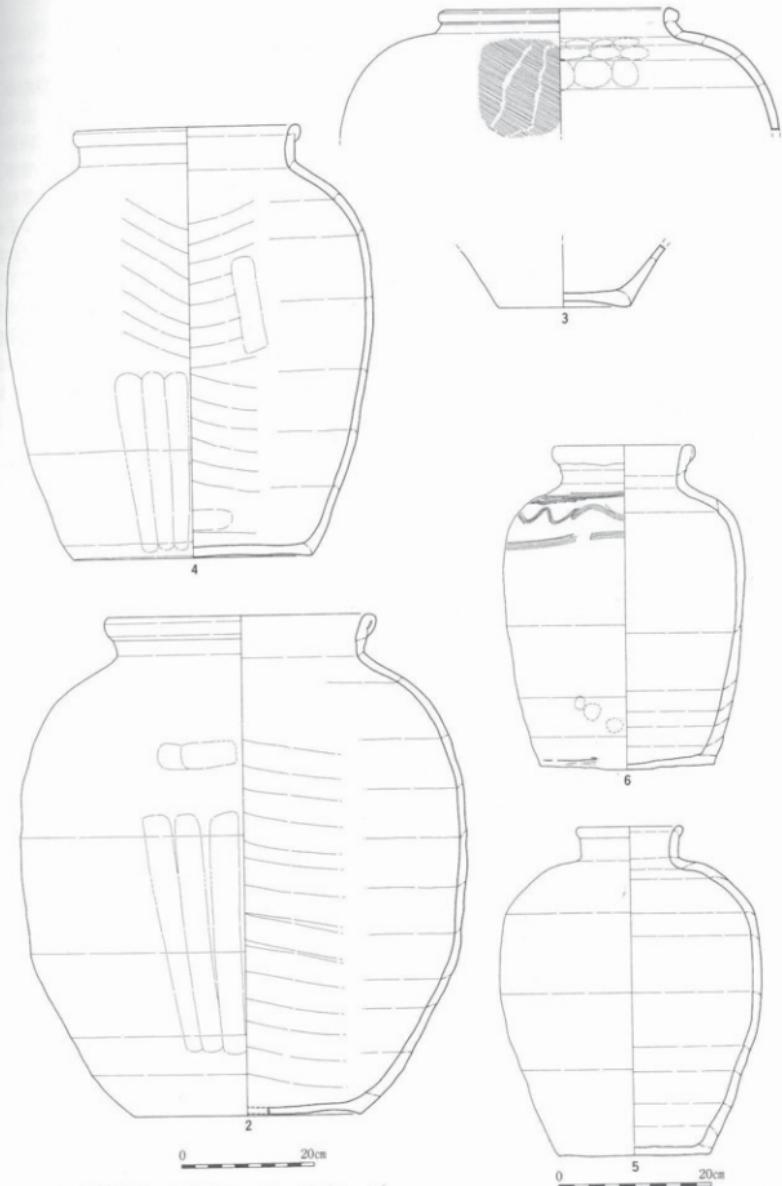
以上、中世陶器について述べたが第82図1の擂鉢と第83図6の壺については間壁忠彦氏の備前編年図表(註3)の第Ⅳ期(14世紀終末~16世紀初頭)に相当する時期に位置づけられるものとみられる。また、壺においては土く合致しているようである。備前焼については国立歴史民俗博物館の考古研究部教授の吉岡康暢氏と岡山県古代た。記して感謝を表したい。

註

- 註1. 間壁忠彦 「備前」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館 1994年。
註2. 伊藤 晃 「15世紀から17世紀の備前焼」「中近世土器の基礎研究」 日本中世土器研究会 1985年。
註3. 間壁忠彦 「備前」『世界陶磁全集3 日本中世』小学館 1994年。



第82図 中世陶器 擂鉢



第83図 中世陶器 大甕(2~4)、壺(5・6)

第14節 黒釉陶器

本節では黒色の釉薬のかかった一連の焼物を黒釉陶器としてまとめた。黒釉陶器の中で、最も典型的なものは黒釉天目茶碗である。黒釉陶器には黒釉天目茶碗、黒釉茶入れ、黒釉碗の三種類が確認されている。京の内跡から出土した黒釉陶器の推定個体数については時間的な制約もあって、詳細な検討を経ていないが取り敢えず口縁破片の一部と高台片数でもって個体数とした。推定個体数は黒釉天目茶碗が20個体、黒釉茶入れが7個体、黒釉碗で4個体の計31個体相当がいまのところ考えられた。土壌SK01(S A19・20、S A28)内からは黒釉天目茶碗が6個体と黒釉碗で1個体の計7個体相当が出土している。黒釉陶器が最も多く出土している遺構は土壌SK03があり、黒釉天目茶碗が推定9個体と黒釉茶入れの5個体相当が出土している。以下、黒釉天目茶碗、黒釉茶入れなどの順に個々の特徴などを記述する(第47表)。

A. 黒釉天目茶碗(第84図1~20)

黒釉天目茶碗については、栗建安氏の「福建省の窯系黒釉茶碗」(註1)と森本朝子氏の「博多遺跡群出土の天目」(註2)の分類試案を参考にしながら首里城京の内跡から出土した天目茶碗の大型破片や特徴的な資料を抽出して窯別に整理と分類を試みたところ、福州閩候県南嶼窯(9個体)、福州閩候県鴻尾窯(4個体)、福州寧德市飛鸞窯(7個体)の三窯を生産地とするであろうと考えられる三種類に分類された。三つの窯別に出土傾向をみると福州閩候県・南嶼窯の製品が僅かに多いようである。なお、個々の特徴などについては第47表に呈示した。尚、森本分類を整理して作成したのが第46表である。

a. 福州閩候県 南嶼窯黒釉天目茶碗 (第84図1~9)

素地は一般に灰黒色もしくは濃い灰色を呈し、やや粗めで気孔も見られるが、今回、首里城京の内西地区より検出された南嶼窯黒釉天目茶碗には、黄灰色やピンク味を帯びた色を呈するものがある。これは焼成温度が上がらなかったことによるものと考えられる。器形は、全体的にほぼ直線的に開き、口縁は胴上部で角度を変えて立たせる。口縁の外反は弱い。高台は低く、高台脇はやや水平に切られている。内割りは浅く雑に削り取られており、上げ底気味である。露胎部と高台の造りは荒削りでぞんざいである。

b. 福州閩候県 鴻尾窯黒釉天目茶碗 (第84図10~13)

一般に素地は灰色もしくは灰白色を呈し、きめはやや粗く黒色・灰色の鉱物を含み、微細な気孔痕が見られるが、このタイプにも、淡黄白色もしくは淡灰白色を呈した焼成不良なものも確認できる。器形は、胴部がほぼ直線的に開き、口縁を胴上部で軽く角度を変えて立たせる。口縁の外反は弱い。高台は低く成形され、高台脇は水平に切られており、内割りは浅く、比較的丁寧に削り取られている。露胎部と高台の成形は比較的丁寧で整っている。

c. 福州寧德市 飛鸞窯黒釉天目茶碗 (第84図14~20)

素地は灰色もしくは灰白色を呈し、黒色・灰色の鉱物を含み、比較的細かい質である。器形は、胴部ではほぼ直線的に開き、口縁を胴上部で軽く角度を変えて立たせる。口縁の外反は弱い。高台は低く、高台脇は水平に切られている。内割りは浅く雑である。露胎部と高台の成形はふぞろいで雑である。

B. 黒釉茶入れ(第85図21~27)

黒釉茶入れの破片が7点検出されている。

21は口径3.6cmの茶入れである。肩部で4mm前後肩が張る。素地は赤紫色の微粒子。暗茶褐色の釉を頸部内面から底部脇まで施している(B-16SK03東側第6層20~30cm)。

22は耳付きの茶入れである。口径は2.7cmで肩部で4mm前後肩が張る。素地は赤紫色の微粒子。黒色の釉を頸部内面から底部脇まで施している(B-16SA24)。

23は口径2.6cmで、3mm前後肩が張る。素地は淡橙色の微粒子である。暗茶褐色の釉を頸部内面から底部脇まで施している(B-16SK03第10層)。

24は胴部片である。胴部径が最大5cmある。素地は赤紫色の微粒子。暗茶褐色の釉を外面に施している(B-16SK03覆土)。

25は高台径3cmを測る底部片である。外底面には糸切り痕が明瞭に確認できる。素地は淡橙色の微粒子で釉は茶黒色の釉を施している（S K03東側第6層10~20cm）。

26も高台片である。高台径は2.6cm、素地は赤紫色の微粒子。暗茶褐色の釉を施している（B-16 S K04第7層）。

27は高台径2.6cmを測る高台片である。胴部には2mm程の陰圈線が走る。素地は赤紫色の微粒子。外面に暗茶褐色の釉を高台脇まで施している（B-16 S K03東側第5層0~10cm）。

C. 黒釉碗（第85図28~31）

釉色等は黒釉天目茶碗に類似するが、器形にかなり差異があるものを黒釉碗とした。

28は口径8.4cm、器高4.1cm、高台径3.2cmの碗である。外底面には明瞭な糸切り痕が確認できる。素地は灰色の粗粒子。暗褐色の釉を内面から高台外面まで施している（B-16西側排水溝）。

29は径3.4cmを測る高台片である。外底は糸切り。素地は灰色の粗粒子で白色の鉱物を少量混入。淡橙色の釉を高台脇まで施している（B-15 S A19一括第3層）。

30も高台片である。高台径は3.4cmで、外底面には明瞭な糸切り痕が確認できる。素地は灰色の粗粒子で黒色の鉱物を少量混入。暗茶褐色の釉を内面から高台脇まで施している。高台外面まで釉が垂れている。（北端）

31は高台径3.4cmの底部片である。外底面には糸切り痕が確認できる。素地は灰白色の粗粒子。暗茶褐色の釉を内面から高台外面まで施す（B-12 S A08第3層）。

小 結

「天目」という名称については、中国浙江省の北部、安徽省との境に位置する天目山の寺の什器であったところからの呼称といわれている。また鎌倉時代、天目山には日本の僧侶が訪れており、その折りに持ち帰ったとも伝えられている（註3）。こうした伝承の正否はともかく、今日一般にいう「天目」とは、建窯で焼かれた建盏などを中心にこれらと同形態の茶碗の総称として広義に捉えられている言葉で、中国産の場合は唐物天目、日本産のものは和物天目と呼び分けられている。今回、首里城京の内より検出された黒釉天目茶碗の多くは、高台脇を水平に削る深目的碗（森本編年試案のⅢ類）と同タイプのものと考えられる。このタイプは14世紀中頃以降には輸入の中心となるが、瀬戸美濃で焼かれた天目茶碗の多くがこのタイプを模倣したものと考えられる。また福建省の各地の窯場でも次々と黒釉が焼かれ、建盏の模倣を競いあい、最終的には建窯を中心とした大規模な黒釉窯群を形成していくわけだが、注目すべきは、県内で出土した黒釉天目茶碗の多くは、建窯などの内陸部の窯場の産ではなく閩候県南嶼窯・閩候県鴻尾窯・寧德市飛鷺窯などの沿岸部の窯場を産地とするであろうということである。建盏タイプの出土例が県内では現在のところ例がないことから、天目茶碗の入手経路を閩候県南嶼窯・閩候県鴻尾窯・寧德市飛鷺窯などの沿岸部に求めたというところに当時の中国との進貢貿易のルートもしくは陶磁器の入手範囲を窺い知ることができるのではないだろうか。今後の研究や発掘調査の成果を期待したい。茶入れの出土例は、北は今帰仁城跡（註4）から南はピロースク遺跡（註5）と広範囲で出土しているが、21~23のような肩が張り出すタイプの出土例は福福遺跡（註6）等で見られるが少なく、今後の検出増加を期待したい。また黒釉碗として分類したタイプの出土例もこれまでには例がなく、黒釉天目茶碗とはあきらかに趣の違う碗であることから仮称しているわけだが、河南地方以南を産とする可能性もあることから、今後の研究課題としたい。

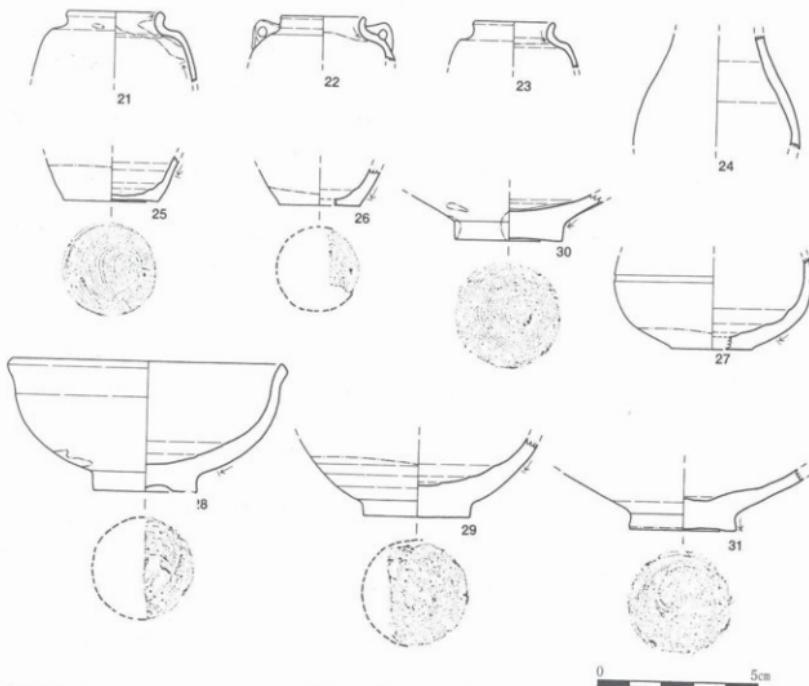
県内の遺跡で黒釉天目茶碗、黒釉茶入れ、黒釉碗がこのように多量に出土した例は今日まで確認されていなかったようであり、特筆されるところである。京の内跡の遺構で注目されたのは土壙SK03内より出土した黒釉天目茶碗（総数160片）と黒釉茶入れ（総数10片）の二器種の出土量であった。その量は黒釉天目茶碗と黒釉茶入れの合計で170片を数えた。土壙SK03出土の黒釉陶器と共伴する陶磁器では青磁鍋蓮弁文碗と白磁外反口縁碗などがあり、土壙SK03の時期は14世紀中頃を中心とする前後の時期が今のところ考えられるようである。

首里城京の内跡発掘調査により検出された黒釉陶器を初めとする中国陶磁器等から首里城においては中国との進貢貿易、そして今帰仁城跡、ピロースク遺跡、福福遺跡などにおいてある程度の並行関係と時間差を保持しな

がら中国との進貢貿易や私貿易が広域的に各地域でなされていたことが改めて認識されたように思える。

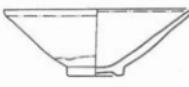
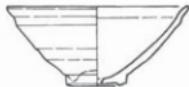
註

- 註1. 栗建安 「福建省の建窯系黒釉茶碗」「唐物天目—福建省建窯出土天目と日本伝世の天目—」 茶道資料館 1994年。
- 註2. 森本朝子 「博多遺跡群出土の天目」「唐物天目—福建省建窯出土天目と日本伝世の天目—」 茶道資料館 1994年。
- 註3. 赤沼多佳 「建盏と天目」「唐物天目—福建省建窯出土天目と日本伝世の天目—」 茶道資料館 1994年。
- 註4. 金武正紀・宮里末廣ほか「今帰仁城跡発掘調査報告書Ⅰ」 今帰仁村教育委員会 1983年。
- 註5. 金武正紀・阿利直治 「ピロースク遺跡」 石垣市教育委員会 1983年。
- 註6. 當眞嗣一・大城 慧ほか 「稻福遺跡発掘調査報告書」 沖縄県教育委員会 1983年。



第85図 黒釉陶器 (茶入れ・碗)

第46表 博多遺跡群出土の天目茶碗分類試案（要約）

分類	器 型	特 微	実測図（縮小1/3）
I類	断面逆三角形の平茶碗	底から口に向かってほぼ直線的に大きく開く平茶碗である。大きく次の三つに分けられる。I-① 胎土は黒灰色に白砂を含み、黒色の厚い釉。I-② 胎土は灰白色、釉は黒褐色を呈す。I-③ 底径は大きく、白覆輪である。	
II類	外反口縁の碗	I類同様、底から口に向かってほぼ直線的に開くが、全体はより深目の器形で、口だけ外反して開く。	
III類	断面逆三角形の深碗	口縁は外反するが、一度口縁下で押さえ、目立たない程の浅いくぼみを作るいわゆる建盏なりの天目茶碗に特有のひねった口縁の萌芽と言える。口径と器高の比が3:2前後、5:2前後のものとでIII-①、②に分けられる。	
IV類	いわゆる「建盏」なりの茶碗	高台脇を深く斜めに削り、そこから角度を変えて直線的に開き、口縁下でもう一度角度を変えて立ち上がる。いわゆる「建盏」なりの形と言えよう。タイプ的に建盏に近いものIV-①、やや遠いものIV-③とに大別した。	
V類	誇張的に表現された天目茶碗	身は大きく開き、口縁下で角度を変えて立ち上がる。内底をくぼめ、内面が曲線的に複雑になる。これは典型的な建盏の各部を誇張的に表現した天目茶碗である。小ぶりのものと、大ぶりのものとでV-①、②に分けられる。	
VI類	口縁のくびれの強い茶碗	V類より、口縁のくびれが強く誇張されたタイプの天目茶碗である。浅い碗とやや深めの碗とでVI-①、②に分けられる。	
VII類	口の内湾する平茶碗	体は大きく開き、半ばで曲線的に立ち上がり内湾気味に終わる。比較的浅い碗である。底部は上げ底であるが、輪高台らしく作るものもある。	
VIII類	高台脇を水平に削る深目の碗	高台脇を水平に切る茶碗は広い底からほぼ直線的に開き、口縁で軽く角度を変えて立つ。口縁のくびれは弱い。外底は浅く上げ底風に削る。	
IX類	丸碗	底部から口縁に丸みをもって立ち上がり、そのまま直口で終わる。	

※森本分類試案の記述のなかで主なものを記載して特徴とした。

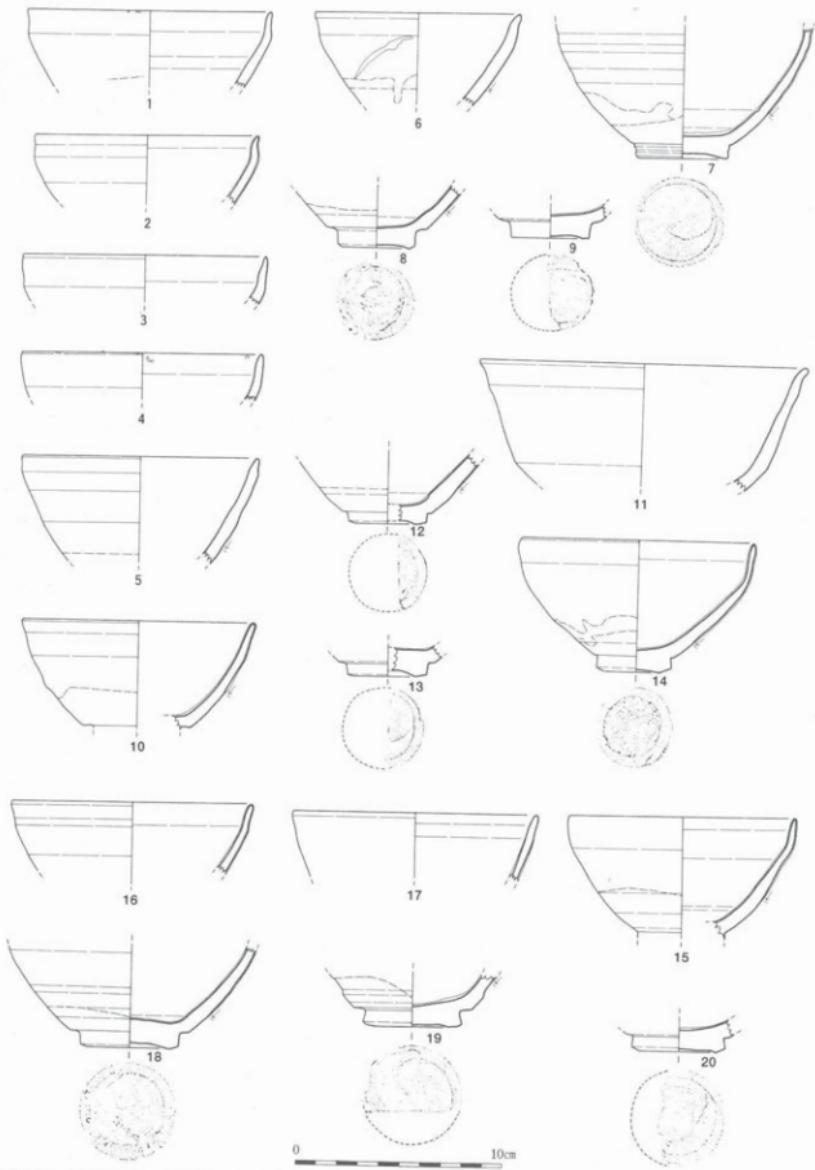
(原図は註2より引用)

第47表 黒釉天目茶碗観察一覧

網番号 団体番号 遺物番号	名稱・ 仮称	分類	口径 器高 高台径 (cm)	器形・成形等の特徴	素地	釉色・施釉	出土地区 出土地点 出土層
第8回 団体57 1	黒 天目 茶碗	開 候	11.8 — —	腰下部からほぼ直線的に開き、口縁で軽く角度を変えて立つ。口唇の外反は弱い。	灰黒色の粗粒子。 微細な気泡痕。	茶褐色の釉を腰下部まで施釉。 口唇の釉は非常に薄く、濃い褐色を呈す。内面から腰下部にかけて施釉。	B-15 S A19 —括 第5層
2			11.0 — —	“。 “。	灰色の細粒子。 “。	茶褐色の釉に厚い黒色の釉を二度掛け。 両面に施釉。	B-15 S A20 第3層
3			11.8 — —	腰上部で口縁を内側に軽く角度を変え、垂直気味に成形する。口唇は鋭利に尖る。	黄灰色の粗粒子。 “。	厚い黒色の釉に茶褐色の釉を二度掛け。	B-16 S K03 第10層
4			11.6 — —	腰上部から口縁にかけて丸味をもって立ち上がり口縁を垂直気味に成形する。	“。 “。	“。	B-16 S K03 第11層
5			11.6 — —	腰下部からほぼ直線的に開き、口縁で軽く角度を変えて立つ。口縁の外反は非常に弱く、口唇は尖る。	灰黒色の粗粒子。 “。	“。口唇は茶褐色を呈す。 内面から腰下部にかけて施釉。	B-16 S K03 第10層
6		釉 天目 茶碗	10.0 — —	“。 “。腰上部に4cm弱の回線(輪轍痕)。	灰白色の細粒子。	茶褐色の釉に厚い黒色の釉を二度掛け。 “。 “。高台近くまで釉が垂れている。	B-16 S K03 東側 第4層 20~30
7			— 4.4	高台脇を平坦に削る深目の碗。内割りは浅い。「の」の字状に外底を焼き取っている。露胎部と高台の造りは荒削りでぞんざいである。	黄灰色の粗粒子。 微細な気泡痕。	厚い黒色の釉に明茶色の釉を二度掛け。 見込みに2mm程の釉溜り。内面から腰下部にかけて施釉。	“ II 6
8			— 3.8	“。内割りは非常に浅い。 “。 “。	灰白色の細粒子。 “。	薄い茶褐色の釉に厚い黒色の釉を二度掛け。 内面から腰下部にかけて施釉。	B-16 S K03 東側 第6層
9			— 3.8	高台は低く、内割りは浅い。露胎部と高台の造りは荒削りでぞんざいである。	灰白色の粗粒子。 “。	薄い黒色の釉を施釉。	東地区 採集
10			11.4 — —	高台際を水平に削る深目の碗。腰下部からほぼ直線的に開き、口縁で軽く角度を変えて立つ。口縁の外反は非常に弱く、口唇は尖らない。露胎部と高台の造りは比較的丁寧である。	灰色の微粒子。 “。 灰黒色の微粒子を少量混入。	厚い黒色の釉に薄い茶褐色の釉を二度掛け。内面から腰下部にかけて施釉。口唇の釉は非常に薄く、深い褐色を呈す。両面に糸目が見られる。	B-13 S A06 栗石内
11		開 候 茶碗	16.0 — —	高台脇を深く斜めに削り、そこから角度を変えて直線的に開き、口縁直下でもう一度角度を変えて立ち上がる。“。	灰白色の粗粒子。	薄い黒色の釉に薄い茶褐色の釉を二度掛け。両面に施釉。	B-16 S K06 北側 トレント
12			— 3.8	高台際を水平に削る深目の碗。高台は低く、胴部には不明瞭な稜が走る。露胎部と高台の造りは比較的丁寧である。	灰色の粗粒子。 “。黒色と白色の微粒子を少量混入。	“。内面から腰下部にかけて施釉。	B-16 S K06 III 6

第47表 黒釉天目茶碗観察一覧

編目番号 国庫番号 書物番号	名称・仮称	分類	口径 高台径 (cm)	器形・成形等の特徴	素 地	釉 色 ・ 施 釉	出土地区 出土地点 出土層
黒44 国庫67 13	開 候 県 瀬 尾 窯	— — 3.8	高台際をほぼ水平に削る碗。高台は低く、内削りは比較的深い。露胎部と高台の造りは比較的丁寧である。	黄白色の粗粒子。微細な気泡痕。	やや厚めの黒色の釉を施釉。	B-16 S K03 東側 第4層 赤土	
14		11.2 6.4 3.6	高台脇からほぼ直線的に開き、口縁で軽く角度を変えて垂直気味に成形する。口唇は尖る。高台は非常に低く、内削りは非常に浅い。露胎部と高台の造りは荒削りでぞんざいである。	灰色の細粒子。	黒色の釉に茶褐色の釉を二度掛け。口唇は濃い褐色を呈す。内面から腰下部にかけて施釉。高台脇まで釉が垂れている。	B-16 S K06 第3層	
15	黒 釉	寧 德	11.0 — —	腰上部から口縁にかけて丸味をもって立ち上がり口縁を内側気味に成形する。胴部には不明瞭な稜が走る。	灰色の細粒子。微細な気泡痕。黒色の微粒子を少量混入。	薄い黒色の釉に薄い茶色の釉を二度掛け。口唇は深い褐色を呈す。内面から腰下部にかけて施釉。内面に禾目がみられる。	B-16 S K03 西側 第9層
16	天 目 市	德 飛	11.8 — —	胴部からほぼ直線的に開き、口縁で軽く角度を変えて立つ。口縁の外反は非常に弱く、口唇は尖る。	灰色の粗粒子。黒色の微粒子を多量混入。白化粧を施す。	薄い黒色の釉に薄く濃茶褐色の釉を二度掛け。両面に施釉。	C-14 覆土
17	茶 碗	飛 騰	11.8 — —	“ ” “ ” “ ”	淡灰色の粗粒子。微細な気泡痕。黒色の微粒子を少量混入。	薄い黒色の釉に非常に薄い明茶色の釉を二度掛け。両面に施釉。	B-16 S K03 第10層
18		騰 鸞	— — 4.8	高台際を水平に削る深目の碗。「の」の字状に外底を搔き取っている。露胎部と高台の造りは荒削りでぞんざいである。	灰色の粗粒子。“ ”	淡い黒色の釉を施釉。“ ”	B-15 S A20 第2層
19		鸞 窯	— — 4.8	“ ”。内削りは浅い。「の」の字状に外底を搔き取っている。高台脇に明瞭な稜が走る。	灰色の粗粒子。黒色の微粒子を少量混入。	やや厚めの黒色の釉を施釉。両面に施釉。	B-13-14 暗褐色土層
20			— — 4.6	高台は低く、内削りは浅い。露胎部と高台の成形は荒削りでぞんざいである。	灰白色の粗粒子。微細な気泡痕。黒色の微粒子を少量混入。	黒色の釉を施釉。“ ”	B-13-14 S A-20 —括 第2層



第84図 黒釉陶器 (茶碗)

第15節 屋瓦

屋瓦はすべて破片からなり総点数26,321点余を数えた。得られた破片は造瓦技術の違いから高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦、大和瓦の4種類に分類された。時期的に高麗系瓦と大和系瓦が中世に相当し、明朝系瓦と大和瓦が近世及びそれ以降にあたる。出土量は第48表のとおり明朝系瓦17,218点(65%)、高麗系瓦4,687点(18%)、大和瓦2,530点(10%)、大和系瓦1,884点(7%)の順になっている。

屋瓦は調査地の約2,000m²全域から出土したが、便宜的に分けた東、西、南、中央地区別からすると、西地区が最も多く、次いで東地区となり、他の地区は希薄な状況を呈している。さらに造瓦技術別にみると大和瓦の場合に限って西地区と東地区に偏在していた。ただこれら古瓦の出土状況は西、南地区における建物の存在、また変遷ないし造成を物語る資料であるが、戦後の著しい搅乱によるため明確に建物遺構との関係を示す出土状況はみられなかった。

報告に当たって古瓦は特徴的なものを図化し、他は数量化した。

第48表 各種瓦の地区別出土状況

種類	出土地					合計
	西地区	東地区	南地区	中地区	地区不明	
高麗系瓦	軒丸瓦	22	1			23
	軒平瓦	11		4		17
	丸瓦	821	43	10	5	4
	平瓦	3,403	229	84	26	14
	有段瓦	6	1		1	8
大和系瓦	軒丸瓦	5	1			1
	軒平瓦	2	3			5
	役瓦	1	1			2
	丸瓦	440	59	62	8	2
	平瓦	776	234	214	49	11
	雁振瓦	13	1			15
明朝系瓦	軒丸瓦	31	30	2		3
	軒平瓦	27	7			34
	丸瓦	2,508	1,066	71	121	24
	平瓦	8,102	4,341	303	264	125
	不明瓦	103	33	10	46	1
大和瓦	軒丸瓦	1				1
	軒平瓦					0
	丸瓦	166	268		1	1
	平瓦	1,699	377	5	9	3
	不明瓦					0

第49表 各種瓦別の平瓦厚さ状況

法量: cm

厚さ 分類	0.5~1.1	1.2~1.6	1.7~2.0	2.1~2.3	2.4~2.6	2.7~3.0	3.1~3.3	3.4~3.6	合計
高麗系瓦	2	481	1,362	411	62	5	3	1	2,327
大和系瓦	8	402	721	95	10	2			1,238
明朝系瓦	645	9,872	1,465	46	5	1			12,034
大和瓦		4	6	1					11
計	655	10,759	3,554	553	77	8	3	1	15,610

A. 高麗系瓦

本系統の瓦はこれまで浦添城跡や当首里城跡を中心に出土する還元焼成炎で焼かれた古瓦を称する。取り分け平瓦の凸面に「癸酉年高麗瓦匠造」、「大天」、「天」銘や格子状模様の叩き目痕を特徴とする。丸瓦は玉縁の付く模骨巻きの二枚割り造りで、両瓦とも凹面側から切り込みを入れて分割する造瓦法でなされている。

京の内からは先にもふれたが、総数4,687点を数え明朝系瓦に次ぐ二番目に多く出土をみた古瓦である。ただ得られた資料は全て破片で接合して完全な形をみるものはない。特徴的な破片の形態から種類を分けると、軒丸瓦〔鎧瓦〕(23点)、軒平瓦〔宇瓦〕(17点)、丸瓦〔男瓦〕(883点)、平瓦〔女瓦〕(3,756点)、有段式平瓦(8点)の5種を確認しえた。

1. 軒丸瓦

軒丸瓦は23点出土している。図化したのは比較的破片の大きなもので、6点を選んだ。第86図(図版69)1~6である。文様の種別の確認ができるのは僅かで、大川清分類の浦添1類に該当する。ただし現段階では大川分類が二種類に細分できることが可能になっているため若干の修正を必要とする。つまり軒丸瓦Aタイプは花芯の中央が窪み、さらに外縁と筒部の縁辺に半円形の管文をめぐらしたもので、軒丸瓦Bタイプは花芯の窪みや管文がみられないものである。今回得られているのは後者のBタイプに当たるものであった。ところで今回の出土地区からは大川分類の浦添第2類は得られていない(註1)。

第86図1は瓦当面の約三分の一程度残す資料で、丸瓦部分は欠落している。瓦当の文様中央に乳房状の蓮子1個をおき、その周辺に鰐形をした花弁を配している。蓮子は取れて破損面を露出している。外区の内縁には珠文を、外縁は素文になる。文様面に近い筒部が幸い残っているが、特に文様はみられない。色調はやや褐色味をおびた灰色である。瓦当径は15.2cm、半円の西地区B-17覆土。

2は文様構成は1と同じもので半分を大きく欠落している。灰色で硬質観をみせる。西地区B-16S D07。

3も先述の二資料と同じ文様構成をなすタイプで、外区をみせる破片である。灰色。西地区B-16覆土。

5は珠文のみが残る破片である。外区に相当する部分には竹管文等はみられない。灰色。西地区B-16の覆土。

4は瓦当の半分を欠損した破片で、5枚の花弁をみることができる。瓦当径15.4cmになる。西地区B-15 S A20出土。

6も瓦当面の小破片で、花弁の一部が残っている。灰色。西地区S A14外側トレンチ第5層。

2. 軒平瓦

軒平瓦は17点得られた。本種類も細片化が進み全体の形をみるものはないが、特徴的な文様の種類と部位から5種の瓦当を確認することができた。大川清分類の浦添3類A~D類、浦添4類に相当する。第86図(図版69)7~11、第87図(図版70)1~8・10。

第86図7は瓦当面と平瓦部分の取り付き部分の資料である。瓦当面は破損のため一部に唐草の蔓がみられるのみである。灰色。西地区B-14・15東西トレンチ第4層。

8は瓦当面に8枚の花弁を配した文様部分を残した資料である。灰色。裏面の上端に平瓦の接合面が残っている。S A03表土。

9は側面の破片で、縁に平行した垂直の線と蕾模様が認められる。側面及び裏面の整形は丁寧である。厚さ2.4cm。西地区B-15 S A19第5層出土。

10は軒平瓦の右隅側の資料である。瓦当面に花と葉の文様の部分を一部にみることができる。灰色。西地区B-14・15東西トレンチ第5層。

11は蔓のみられる瓦当部の破片である。灰色。B-14外側トレンチ第5層。

第87図1~8・10も蔓や花の一部が認められる資料で、瓦当の側面や縁端が残っている。

3. 平瓦

平瓦は破片総数3,756点を数えた。まず色調に幾つかの違いがみられるため巨視的に灰色と褐色に分類をおこなった。灰色90%、褐色10%となっている。

第50表 高麗系瓦の平瓦造瓦技術状況

技 法 色	部 分 片		問 面		凸 面										凹 面										有 目 数	
					I類					II類					III類					IV類						
	端 部	間 部	糸切り	布 目 痕	指 線	ヘ 不 明	タ ラ	明	a b c d	突 西 年	格 子 様	天	地 壁	叩きなし	a b c d e	不 明	縫 太	不 明	1 / 3	半 2 / 3	整 形 处 理					
端 部	端 部	間 部	糸切り	布 目 痕	指 線	ヘ 不 明	タ ラ	明	a b c d	突 西 年	格 子 様	天	地 壁	叩きなし	a b c d e	不 明	縫 太	不 明	1 / 3	半 2 / 3	整 形 处 理					
角	側面	側面	右左	左右	指 線	ヘ 不 明	タ ラ	明	a b c d	突 西 年	格 子 様	天	地 壁	叩きなし	a b c d e	不 明	縫 太	不 明	1 / 3	半 2 / 3	整 形 处 理					
分 断	灰 土	1 17	107	8 21	14 13	26 19	16 2	3	4 11	9 4	8					3	32 48	21 78	48 15	1						
日 安	灰 土	4	1			1											1 4	4 1	1 1							
粘 土	灰 土	7 7	9 11	7 8	2 1	2			1	1	1	3				1	10 8	10 6	3 1	1 1						
合 金	灰 土	2			1		1				1	1				1		1								
高 鉄	灰 土	7	17	8 7	5				1 5 1							2	4 13	2 2 16	4 2	2						
無上鉄	灰 土	2				1											1 2	1 2	1 2							
無上鉄	灰 土	186 323	1,398 292	169 1,287	293 232	149 18	5 18 3 1	107	85 107	38 2	40 12					3	1 472	654 462	187 149	37 44	6					
不 明	灰 土	6 8 30	214 12 11	180 32 19 20	5 1 2				5 4	5	1 4					5	97 115	61 15	9 4	5						
(b) 129 194 456	1,417 328	1,300 326 252	165 22 5 21 3 1 0	113 101 117 43 2 5 21 12 0 0 0 9 0	113 101 117 43 2 5 21 12 0 0 0 9 0	1 158 723 495	287 204 59	48 7																		
計	灰 土	6 8 38	215 12 11	180 33 20 21 6 1 2 0 0 0 0	5 4	6 0 1 4 1 0 0 0 0 5 0 0	0 58 120 63 21 12 0 2 5 1																			
合 計	灰 土	135 292 494	1,632 340 209 1,480	359 272 186 28 6 23 3 1 0 118	105 123 43 3 155 13 0 0 14 0 0	1 526 843 556	308 216 60 53 8																			

破片に残る特徴の中から、まず凹面側に着目し分割目安のあるもの、粘土合わせ目のあるもの、その両方を有するもの、判断がつかない不明破片の4視点から分類すると112点：22点：21点：2,725点の状況にあった。さらに凹面に残る造瓦の技術痕等を細分した表が第50表である。

凸面の叩き目についてみると、「癸酉年高麗瓦匠造」「格子模様瓦」「大天」「天」の四種類の瓦が出土した。出土量は250点：123点：43点：3点となり、「癸酉年高麗瓦匠造」「格子模様瓦」の文字に属する瓦が多く「大天」「天」は少ない状況がみられた。

側面の造瓦技法については、分割のため付けられた笠痕を、三分の一までのもの、半分までのもの、三分の二までのもの、丁寧な整形のあるものの四種類に分類すると308点：216点：60点：53点の違いがみられた。

以下特徴的な資料を第87図(国版70)9・11-14、第88図(国版71)1~5、第89図(国版72)2・5・7、第90図(国版73)9に図化した。

第87図(国版70)9・11-14、第88図1は「癸酉年高麗瓦匠造」の銘が一部みられる資料である。凹面には縦位の糸切り痕と布目痕がシャープに残る。いずれも灰色。9・11は西地区、12は中地区出土、第88図1は西地区出土。

13・14は「癸酉年高麗瓦匠造」在銘瓦で、文字が重なりあって。灰色。前者は西地区B-14・15東トレング出土。後者は西地区B-17覆土。

第88図(国版71)2は端部資料で凹面に面取りが認められる。西地区SA19、東トレング栗石間出土。

第88図5は有孔資料で、凸面側に盛り上がりがみられる。口径1.5cm。灰色。東地区B-12S R01上層。

3は「大天」銘のある平瓦で、叩き文字が重なることなく並列してみられる。側面には分割面が残されている。中地区西18第3層出土。

第89図(国版72)2と第90図9は端部資料で、表裏面とも叩きがみられず、糸切り擦痕のみが残る資料で注目される。2は灰色。厚さ1.9cm。西地区B-14第1層。後者は厚さ3.0cm。褐色。B-15S A15西側トレング。

第89図7は「格子模様瓦」の比較的大きな破片である。ほとんど格子模様側がシャープに押されている。西地区B-16S K03黒色土層の直上。

第89図5は平瓦の小破片であるが、凸面に叩き目が認められる特殊な資料である。叩き目文は羽状文と銘にともなう区画線がわずかに観察される。凹面は風化も進んでいるが、無文で整形痕もみられない。器面及び胎土中に白砂粒子があり、注目される。灰色瓦。西地区D-16出土。

4. 丸 瓦

丸瓦に属する破片は883点出土している。平瓦と同じく色別に二分すると灰色84%、褐色16%となった。また、破片を分割目安のあるもの、粘土合わせ目のあるもの、その両方のを有するもの、判断がつかない不明破片で分類すると678点：3点：7点：388点の状況にあった。側面の分割の状況を、半分までのもの、三分の一までのもの、三分の二までのもの、丁寧な整形のあるものの四種類に分類すると116点：115点：55点：21点の違いがみられた。

第88図(国版71)7は凸面に細かい綾杉状の叩き文様がみられ、凹面には布目が認められる。側面には分割面

がある。色調は褐色で、胎土中央は灰色。西地区 S A 19 東トレンチ出土。

同図10は丸瓦の有孔部の資料。凹面側に盛り上がりがある。褐色で胎土中央は灰色。器面は風化のため凸面は無文である。凹面には布目がみられた。B-14・15 東西トレンチ。

5. 有段式平瓦

平瓦に鈎がついた形態の瓦で僅かに8点みられた。その内図化したのは内2点である。第89図(図版72)1は凸面は無文、凹面は布目痕が残され、凹面の玉縁裏は面取りされている。玉縁の幅3.6cm。褐色。中地区西側F-16瓦溜まり出土。

2は玉縁の長さが前者より短いもので、1.5cmを計測した。凸面側に目の大きい叩き文があり、凹面には糸切り擦痕がみられる。西地区B-14 S A 15西側トレンチ。

6. 役瓦

4の資料は小片ながら両側の側面は当初の面を保持している。いずれも凹面側の半分はヘラ切りされ、残る半分は分割破口面になっている。全体の形状は短冊型をなしてて熨斗瓦の範疇に入るものと考えられる。

B. 大和系瓦

本種瓦はこれまで勝連城跡、崎山御嶽遺跡等から出土し注目された還元焼成炎の灰色瓦である。造瓦技術上、平瓦は一枚造りの無文瓦で、丸瓦は模骨巻き二つ割り造りである。側面の整形は先述の高麗系瓦と異なりすべて整形する造瓦技術を有する。軒丸瓦の文様は蓮華文や巴文がみられ、軒平瓦は唐草模様が施されている。出土瓦の中では最も少ない量で1,884点を数えている。本瓦も破片化が著しく接合して完全形をみるものがないが、特徴的な部位から、軒丸瓦(7点)、軒平瓦(5点)、平瓦(1,284点)、丸瓦(571点)、雁振瓦(15点)、役瓦(2点)等の6種類が確認された。

第51表 大和系瓦の丸瓦にみられる叩き目状況

叩き文様の組み合わせ バリエーション(遺存状況)	地区						
	西	東	南	中			
	繩目	151	23	18	4		
	A						
	B		1				
	C	7		3			
	B G	1					
	CBIE	1					
	C G E	1	1				
	C G	6		1			
	G	41	12	4	1		
	I						
	D	2	1				
	E		8				
	F						
	H						
	G D	3					
	I D			1			
	G E		1				
	H G	1					
A	B	C	D	E			
F	G	H	I	J			
				合計			
				384	65	53	10

1. 軒丸瓦

軒丸瓦は7点出土した。文様では大川分類の勝連1類と崎山1、2類に対応しているが、資料の増加とともに現段階では再分類の必要が生じてきている。今回は仮称で軒丸瓦蓮華文と軒丸瓦巴文のA、B、Cタイプに細分類した。今回は蓮華文と巴文のAタイプが認められた。

第90図6は瓦当に巴文様の破片である。色調は表面が褐色で胎土中央が黒灰色を呈する。西地区D-14第1層出土。文様面には横方向の筋が認められ木版が使われていたことが推測される。巴の頭は太く厚さがあり、尾につれ低く細長くなっている。圓線は一条あり、その外区に三個の珠文を施している。

第90図(図版73)10は單弁が施された瓦当面の一部資料である。珠文が弁と弁の間に認められる。色調が灰色。瓦面の表面には横位の擦痕がみられ、押型の跡であることが推測された。色調が灰色で西地区C-13・14SA34覆土出土。

同図13は圓線と珠文の一部がみられる破片である。文様の状況から巴瓦の資料と判断される。色調は灰色瓦。西地区C・D-16表土。

2. 軒平瓦

軒平瓦は5点確認できた。文様の分類が可能な破片からすると大川分類の宇瓦崎山1類であった。第90図1は瓦当面に向かって左側隅の一部資料で、唐草の一部と圓線がみられる。色調は表面が褐色で、中央が灰黒色をおびる。西地区B-16 SA26の西側覆土。

同図2、3は瓦当面の右隅破片で唐草の巻きひげがみられる。圓線が一条囲みとなっている。色調は2が灰色、3が褐色瓦。2は瓦当面に細かい白砂が付着している。いずれも表面採集。

3. 平瓦

平瓦は1,284点の破片が得られた。無文様の瓦で僅かに粘土塊から粘土板を取り去る際に付いたとみられる糸切り痕がみられる瓦である。側面の形態は第52表に示すようにa～cタイプの三類に分類してみた。量的にはbタイプが165点、cタイプが150点、aタイプが39点であった。本瓦類の特徴は器面上に白砂や石英等の砂粒が付着するもので、その付着の状態で観察すると次の量になった。白砂：白砂以外の砂粒：みられないもの=1010点：51点：237点の出土量であった。

第52表 大和系瓦の平瓦造瓦技術状況

色調 混入物	側面				筒部片	端部片	角
	a	b	c	その他			
灰 色 白砂以外の鉱物粒	27	115	94	23	475	92	34
	2	4	9	1	24	5	2
	3	18	22	4	118	29	5
褐 色 白砂以外の鉱物粒	6	23	20	3	83	10	5
			2		2		
	1	5	3	2	21	5	1
計	39	165	150	33	723	141	147

第53表 大和系瓦の丸瓦造瓦技術状況

色調 混入物	叩きの種類				不明	側面	筒部	玉縁	角
	繩目	目	羽状	叩き目					
灰 色 白砂	149	16	82	110	104		25	21	
	2	2	8	4	6			1	
	33	32	72	45	63	11	11	16	
褐 色 白砂以外の鉱物粒	9	7	14	9	12	3	4		
			4	3	2			3	
	3	40	36	25	41	11	11	11	
計	158	23	96	119	116	28	25		
	2	6	11	6	8	0	4		
	36	72	108	70	104	22	27		
合計	196	101	215	195	228	50	56		

第88図(図版71) 9は破損した端面に継ぎの刻みが施された資料である。軒平瓦の瓦当部の欠落の可能性もあるが、造瓦法に若干相違が認められるため本項目で記述した。灰色。器面上には白砂が付着する。東地区C-12攪乱層出土。

4. 丸瓦

丸瓦は571点が出土した。凸面の叩き痕は基本的に縦目叩きと羽状叩きからなる。その出土量は196点:101点となった。後者の羽状叩きの全体の姿を検討するため、現段階では第53表に示す様に端部、中央部、端部と中央の間の文様の三種類に分類してみた。今後の資料の追加により全体の叩き文の様子がつかめるものと考えられる。第89図(図版72) 4は比較的大きな破片で、凸面は羽状の叩き目が付されている。凹面は極めて特徴的で、網刺状の紐痕が全くみられない資料で、布目のみである。側面の仕上げからして明らかに大和系瓦であるが、高麗系の様相もみせている資料である。西地区B-15S A20出土。

同図6、8の資料はいずれも褐色を呈する。側面の整形は面取りを二面におこなう。凸面には綾杉状の叩き目と凹面には紐痕がみられる。前者は西地区B-14S A15南北トレンチ。後者は南北トレンチF-11表採。

5. 雁振瓦

15点出土している。丸瓦と平瓦が接合した形態をした瓦である。圓化したのは第88図(図版71) 6、8の2点で、いずれも小破片であった。両資料とも褐色をおびた丸瓦と平瓦の接点部の破片である。器表面には白砂の付着がみられる。6は小破片のため文様はみられないが、8は凸面に綾杉状の叩き文の一部がみられる。凹面は撫で整形のためか何の痕跡もみられない。胎土中央は灰色。前者はB-16S A16栗石内。後者は東地区B-13出土。

6. 役瓦

この種類は2点確認できた。第90図(図版73) 7、8は小破片のため全体の形状は不明であるが、何らかの造形がなされ指紋も多数観察される。7は胎土中には細かな白色砂粒が無数に混ざっているのが認められる。表面は褐色をなし内面は灰色を呈する。東地区C-10・11SS01出土。

8は半球状に破損した資料で、前者と同様に全体の形態は不明。表面上ではかすかに光る細かい砂粒がみられる程度で前者とは異なり混入物はみられない。西地区B-15SD07溝の中。

第54表 明朝系瓦の焼成(色調)別分類状況

種類	平瓦					丸瓦							
	端部		側面	角	筒部	小計	端部		側面	角	玉縁	筒部	小計
	広端	狭端					端部	側面					
灰色 Ia	96	97	332	108	1,473	2,106	37	95	50	532	157	871	
褐色 Ib	17	28	65	16	294	420	7	16	12	91	20	146	
灰色 IIa	171	129	479	194	1,190	2,163	25	87	51	128	39	330	
赤色 IIb	936	682	1,163	710	3,682	7,173	241	514	420	362	359	2,396	
暗褐色 IIc	20	18	35	43	89	205	1	2	4	3	2	12	

第55表 明朝系瓦の分類別厚さ状況

単位: cm

分類	厚さ	明朝系瓦の分類別厚さ状況								
		0.5~1.1	1.2~1.6	1.7~2.0	2.1~2.3	2.4~2.6	2.7~3.0	3.1~3.3	3.4~3.6	合計
明	灰色 Ia	47	1,505	514	26	4				2,096
朝	褐色 Ib	9	299	107	5					420
系	灰色 IIa	106	1,524	546	8					2,184
瓦	赤色 IIb	446	6,393	288	7		1			7,135
	暗褐色 IIc	37	151	10		1				199
	合計	645	9,872	1,465	46	5	1			12,034

C. 明朝系瓦

本瓦は中国明代に著された『天工開物』の瓦に酷似した造瓦技法によった瓦である。平瓦は桶巻き4枚割造り、丸瓦は模骨巻き二枚割造りで、いずれも側面は割り取った後何ら化粧しないのが特徴である。本類は出土瓦中で最も多く出土し、軒丸瓦(66点)、軒平瓦(34点)、平瓦(13,135点)、丸瓦(3,790点)等の4種、総数17,218点を数えた。同瓦は素地、焼成、色調から五種類に細分してみた。まずは還元焼成炎による灰色瓦と酸化焼成炎による赤色瓦の2種に大別され、さらに硬度差や器面上の釉の存在等で前者が2種に、後者は3種に細分された。特徴を記述すると次の様になる。

- I a 類 還元焼成炎で焼かれた灰色瓦。吸水性がある印象を与える。金属の釘などにより容易に傷がつき焼成はやや弱い一群である。
- I b 類 還元焼成炎で焼かれたものと判断されるが、酸化したため全体に褐色をおびる。これも吸水性がある印象で金属の釘などにより容易に傷がつき、焼成はやや弱い群である。
- II a 類 還元焼成炎で焼かれた瓦で、灰色を呈するが、前者のI a 類とは異なり焼きがよく、後述のII b 類と同じ焼成をなす。したがってII b 類の赤瓦とは単に色調が違うという程度のものである。
- II b 類 酸化焼成炎で焼かれた赤色～明褐色を呈する瓦群。
- II c 類 酸化焼成炎で焼かれた赤褐色～暗褐色をおびる。焼成は最もよく焼き縮められた陶器質になるもので、部分的に自然釉がかかるものが多い。

平瓦と丸瓦の出土状況については、平瓦が12,067点、丸瓦が3,755点が得られている。その種類の内訳は第54表に示したとおりである。

平瓦の厚さについて計測結果では、薄いもので0.5～1.1cmのものがあり、厚いもので2.7～3.0cmのものが認められた。集中したのは1.2～1.6cmの80%で、統いてその前後の1.7～2.0cmと0.5～1.1cmであった。I a 類、I b 類は傾向として1.2～1.6cmを中心として1.2～1.6cmにより厚みがあり、II a 類～II c 類は1.2～1.6cmを中心にして0.5～1.1cmにより薄手になっている。

文様について、西のアザナ出土の上原静分類からすると軒丸瓦はI、III、V、VI、IX、Xの6文様系が認められ、軒平瓦はI～VIIの7文様系が確認された（註2）。

灰色系瓦

1. 軒丸瓦

軒丸瓦は第91図（図版74）1・2・5にあたる。1は表面が褐色をおび、素地は暗灰色を呈している。珠文は0.9cmと大きく、上に延びる兎の耳状の花弁が一部にみられる。B-16 S K03。径推算12.8cm。

2は瓦当面の一部の資料である。灰色瓦。京の内東端部分。

3は淡褐色をおびる灰色瓦で、珠文が0.4cmと小さくなる。径推算14.6cm。文様の花弁が両サイドに広がっている様子がみられる。西地区B-11・12 S A01。

2. 軒平瓦

軒平瓦は第90図（図版73）4、第91図（図版74）7～12、14である。

第90図4は花文の簡略化されたタイプの資料で、花芯とその周辺の状況を残している。右側の葉は葉脈を強調しているため拓影ではソテツの葉状にみえるが、明らかに厚さのある葉を形づくっている。中地区西側D・E-19、SA016西側第1層出土。

第91図（図版74）7は軒平瓦の右隅資料で、細片のため文様等の特徴的な部分がみられない。西地区B-16。

9は中央の花文部分の資料で、文様系は後者の11と同じである。器面は風化し磨滅のみられる灰色瓦である。西地区C・D-15覆土。

8は軒瓦の瓦当の左隅部分の資料である。葉の一部が認められる。西地区B-14 S A21栗石内。

11は瓦当面の全体の形をよく残した製品である。褐色を呈した灰色である。花芯、花弁、茎、葉、蔓等が明

瞭に描かれている。花芯は碁盤目状の刻みになっている。B-10・11 S K01。

10は軒平瓦の瓦当面の中央部のみの破片である。文様は風化のため明瞭ではないが、花弁の華やかさや、花芯、茎、蔓等が具体的に描かれているのが分かる。西地区C-15覆土。

14は表面が赤褐色を呈し、素地の中央部が黒色を帯びてサンドイッチ状になっている。表面が風化のため器面にメリハリがなくなっているが、碁盤目状の刻みのある花芯や花弁、さざれ状葉が瓦当面に認められる。中地区E-16盛土。

12は葉の部分の小破片である。葉の縁辺部に棘状の尖り部分が観察できる。西地区搅乱層。

赤色系瓦

1. 軒丸瓦

第87図(図版70) 15は小破片であるが花弁と珠文が認められる瓦当資料である。花弁の先端はY字状に分かれている。西地区S A34栗石直下。

第91図(図版74) 4は褐色で器面の風化がみられる。牡丹模様。西地区C-17。第90図(図版73) 11・12は小型の軒丸瓦である。前者は文様はシャープで有軸の花弁が描かれている。珠文や園線はみられない。西地区B-C-11フーチン⑧の西側。

2. 軒平瓦

第90図(図版73) 5は簡略な進んだ牡丹文様の瓦当破片で、右隅の葉文様が認められる。拓影ではソテツ様の葉脈が強調されているが葉全体も凸状に浮き彫りされている。西地区4石垣出土。

第91図(図版74) 6は焼き縮めがなされた赤褐色をおびる瓦である。牡丹文様の一部がみられる。西地区S A27北側覆土。

13は葉脈が強調され、葉脈が棘状に飛び出して表現されているためソテツの葉とも記述されている。西地区B-15 S A23覆土。

3. 平瓦

第91図(図版74) 3は側面に高麗系瓦にみられた分割目安部分に窓入れが認められる資料で、この技法が明朝系にも存在することを示す興味深い資料で取り上げた。東地区C-12 S A09。

D. 大和瓦

上記3種類の瓦とは造瓦技法が明らかに異なる瓦で、今回暫定的に仮称したタイプの瓦である。前述の大和系瓦の中世瓦とは異なり、器の厚さは一定し、瓦器面の仕上げも平滑で、銀粉をまぶした様な光沢を伴なった、いわゆる灰色の煙瓦となっている。離型剤としての白砂はみられず、かつ胎土中央が灰白色をおびるものが多い。これまで僅かではあるが首里城歓会門・久慶門内郭(註3)、識名園跡(註4)、御細工所跡(註5)などから出土している。京の内からは軒丸瓦(1点)、平瓦(2,093点)、丸瓦(436点)の3種類が確認された。今回は軒瓦に恵まれていないが、これまでの報告資料からすると軒丸瓦は巴文、軒平瓦は唐草文が施されていることが知られ、近世以降の棟瓦系統の瓦群と考えられる。本瓦の利用形態として漆喰の付着するが多数認められることから、明朝系瓦と同様の漆喰併用が伺われる。

1. 平瓦

代表的な資料を第92図(図版75) 1、2に図化した。第92図1は全体に灰褐色をおびる資料である。凹面は磨面に近い仕上げになっている。また使用の痕跡で丸瓦との接点に使用された漆喰が残されている。側面および端面も丁寧な仕上げとなっている。西地区C-16・17 S B01土壤内。

2も褐色が部分的に入る灰色瓦である。仕上げは前述の資料同様に凹面は凸面に比べ磨面に近く丁寧な仕事をしている。屋外での使用を配慮していることが容易に理解される。西地区C-16・17 S B01土壤内。

2. 丸瓦

第92図(図版75) 4はスタンプ文字が認められる小破片である。破損が著しいが「谷川□大□…」と一部を読むことができる。凸面は焼された灰黒色をおび、反光沢を呈する。凹面は黒色で横位の平行線としてシャープにみとめられ、コピキによるものと判断される。素地は白色で細かな石英が混ざる粗い土である。東地区C-11フー
チン8の西側出土。

同図3は凸面に魚型の叩き目のみられる資料である。凹面は糸切り痕がみられるのみで、網刺し状の粗痕がなく、屋瓦であるか確証がないことから瓦器の可能性もあり明確な所属の決定は今後の課題としたい。西地区B-14S A15栗石内。

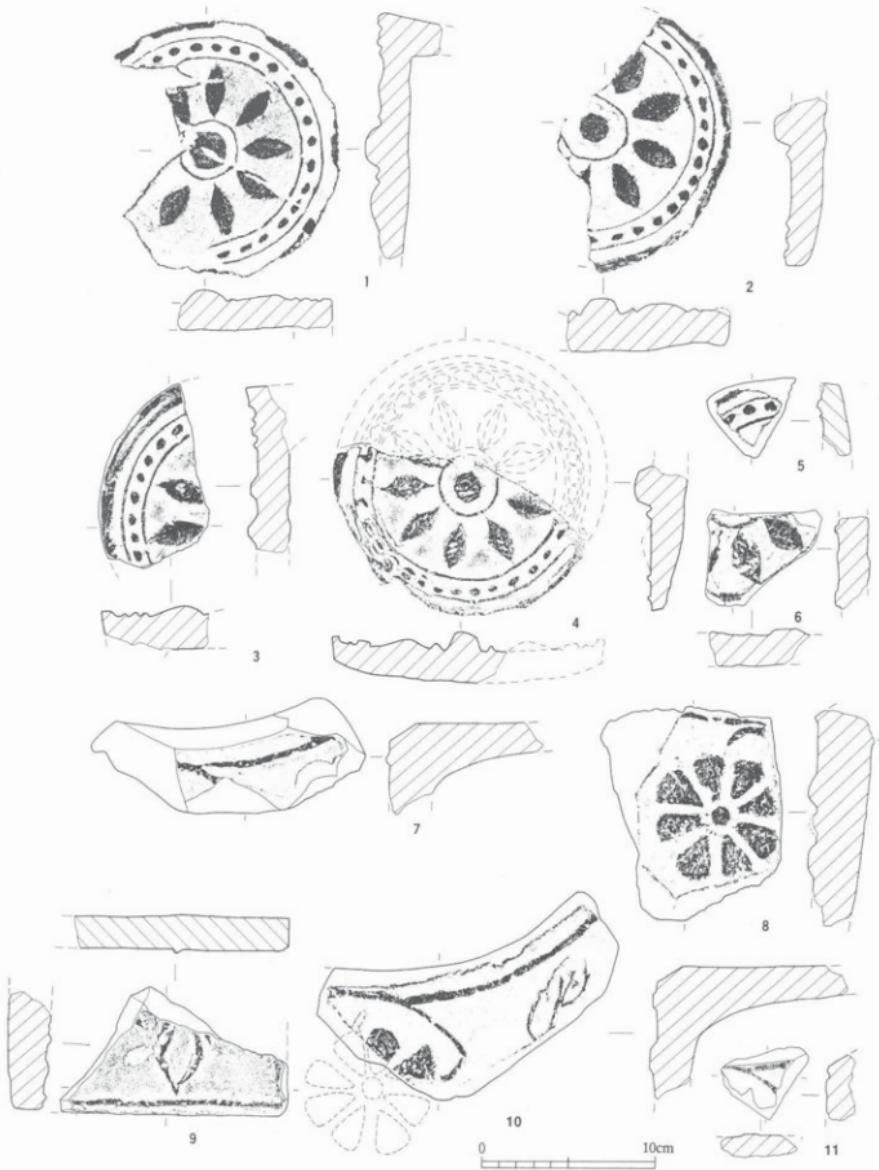
ま と め

以上、京の内地区から基本的には高麗系瓦、大和系瓦、明朝系瓦、大和瓦の4種の瓦を確認することができた。このことから当地区が多様な瓦葺建物との関わりがあったことを知る手がかりが得られたものと思う。

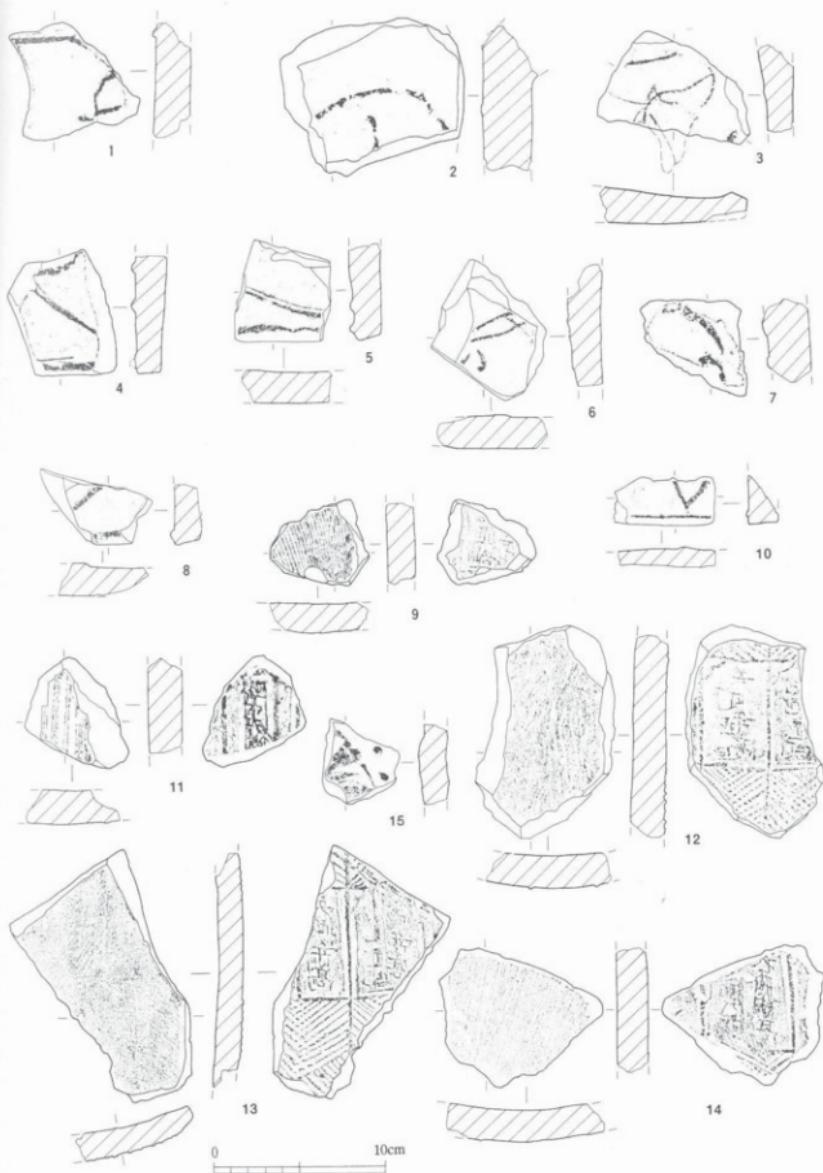
今回北地区B-15土壙S K01 (S A19・20、S A28) の陶器のだまり(一括資料)の層位の関わりから、高麗系瓦と大和系瓦は14~15世紀前半に伴なうことが確認された。また、出土量では高麗系瓦が大和系瓦に比較し優位を占めていることが確かめられた。次に、前二者の古瓦より後代の明朝系瓦は二種類に分けられ、さらに細分され五種類のバリエーションが存在することが分かってきた。巨視的には、灰色~褐色系の比較的厚手の1類と灰色から赤褐色までの比較的薄手で、焼成の好い2類に大別されたが、とくに後者に漆喰が付着している点も考慮すると二系統の時期差としてみることが予想される。また今回新型式として暫定的に仮称している大和瓦も漆喰が付着し、明朝系瓦2類との関連が知られた。出土状況が西地区(S B01)及び東地区(S D03)に偏在している点から昭和初期の廃施設ではないかと考えられる。

計士

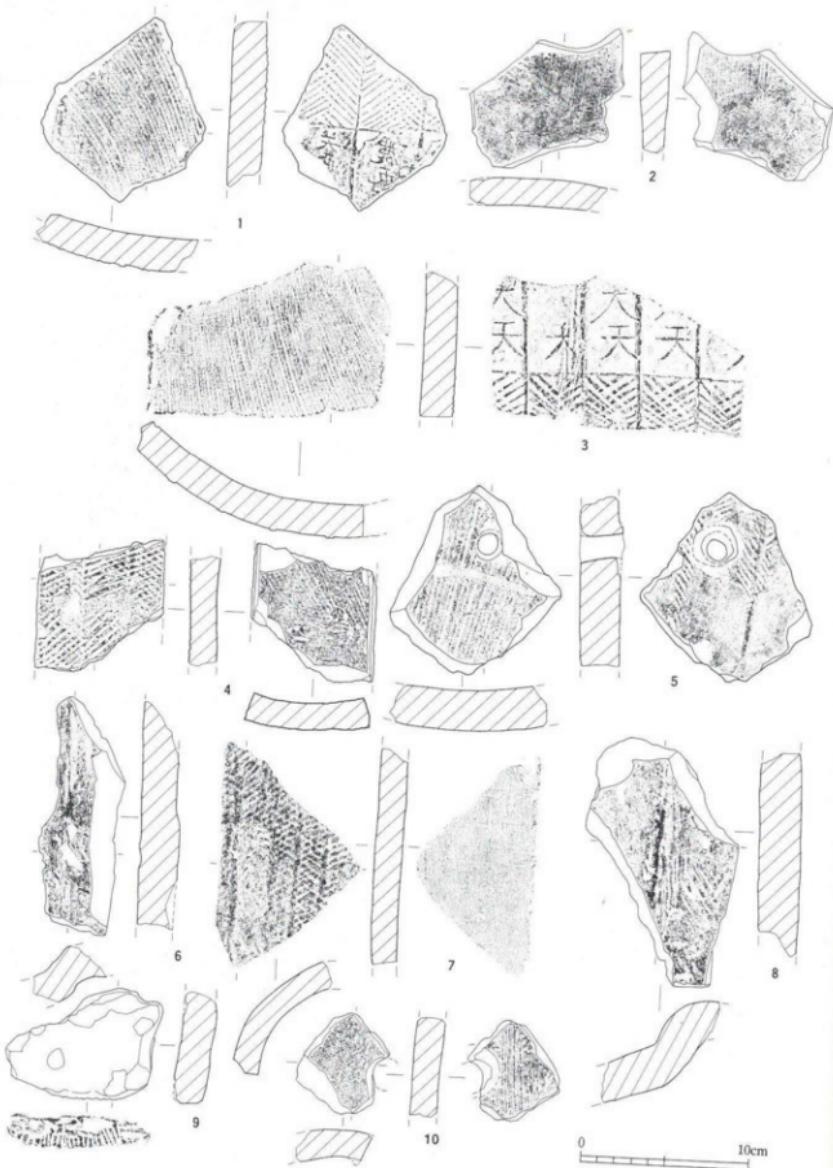
- 註1. 大川 清 「琉球古瓦調査抄報」「沖縄文化財調査報告書」 1978年
 診2. 上原 静 「首里城跡のアザナ地区出土の明朝系瓦とその推移」「南島考古」第14号 沖縄考古学会 1994年
 診3. 沖縄県教育委員会 「首里城跡」歓会門・久慶門内郭の遺構調査 1986年
 診4. 名勝識名園環境整備委員会 「名勝識名園環境整備事業報告書（I）」 1977年
 診5. 那覇市教育委員会 「御綱工所跡」城西小学校建設工事に伴う緊急発掘調査報告 1991年
 診6. 第90図7、8の資料について、原廣志氏（鎌倉考古学研究所）、栗原和彦氏（九州歴史資料館）の両氏から鬼瓦片の可
 能性をもちつとも、当面は役瓦として報告した方がよいとの御意見を賜った。



第86図 高麗系瓦 (軒丸瓦 1~6、軒平瓦 7~11)



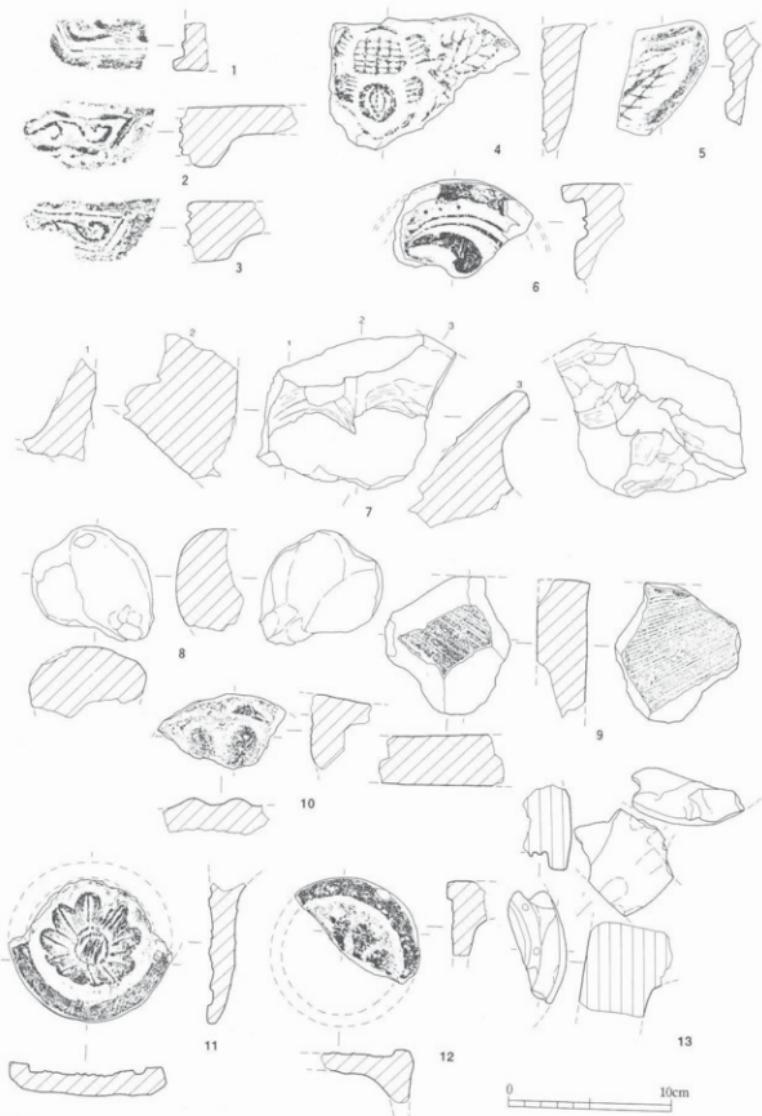
第87図 高麗系瓦（軒平瓦1～8・10、平瓦9・11～14）明朝系瓦（軒丸瓦15）



第88図 高麗系瓦（平瓦1～5、丸瓦7・10）大和系瓦（雁振瓦6・8、平瓦9）



第89図 有段式平瓦（1・3）高麗系瓦（平瓦2・5・7）大和系瓦（丸瓦4・6・8）



第90図 高麗系瓦（平瓦9）大和系瓦（軒丸瓦6・10・13）明朝系瓦（軒平瓦4・5）

“（軒平瓦1～3）

“（軒丸瓦11・12）

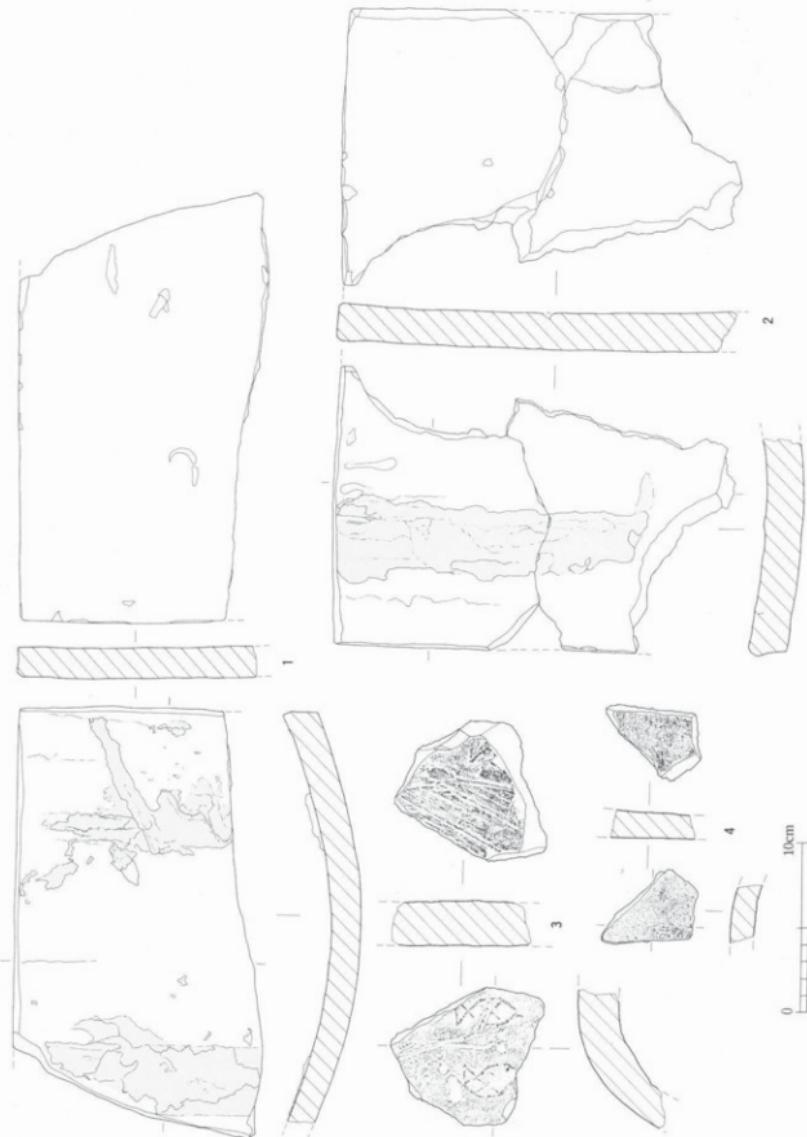
“（役瓦7・8）



第91図 明朝系瓦 (軒丸瓦 1・2・4・5)

“ (軒平瓦 6~14)

“ (平瓦 3)



第92図 大和瓦(平瓦1・2、丸瓦3・4)

第VII章 調査の成果

平成6年度より発掘調査が開始された「京の内」跡で、陶磁器類が一括で出土した土壌SK01(SA19・20、SA28)を中心に報告した。土壌SK01内より出土した遺物の量は、平成6年度の調査区全体から出土した量の3/4を占めていて、首里城の陶磁研究や陶磁の編年上欠くことのできない遺構として判断されたため、土壌SK01内より出土した一括遺物を早急に整理し報告することにした。これによって今後の発掘調査で検出された遺構の時代観の設定が容易となり、「京の内」の石積み復元と御獄(拝所)の復元整備などに反映される可能性が高くなるからであった。ここでは土壌SK01の時代観と注目された出土遺物を述べることにする。

A. 遺構 SK01 (SA19・20、SA28)

首里城正殿前には1458年鋳造の万国津梁の鐘が掛けられていたようである。鐘の銘文のひとつに「琉球国は南海の勝地にして、三韓の秀を鍾め、大明を以て輔車と為し、日城を以て腎臍と為す。この二つの中間に在りて湧出する蓬来の島なり。舟楫を以て万国の津梁と為し、異産至宝は十方利に充満せり」(註1)とある。万国津梁の鐘が鋳造された1458年の翌年である1459年に首里城内で倉庫などの失火(註2)があったようであり、1459年に焼失した倉庫跡が今回、報告した土壌SK01(SA19・20、SA28)と土壌内より出土した一括遺物である。出土遺物の内容からも万国津梁の鐘の銘文を裏付けるように中国、タイ、ベトナム、日本との交易によって得られた陶磁器類が多く含まれていた。残念ではあるが土壌SK01内出土の一括遺物の大半は二次的な火熱を受けているものが目立ち、釉調・素地の変色などで本来の色合いを失っている。これらの一括遺物は発掘調査時点では一括廃棄か、あるいは倉庫内部にあった多量の陶磁器類とともに焼け落ちた状況ではないかと推察された。

発掘の進行に伴ない陶磁器類と一緒に鉄製の錠、鏡小札、兜鉢、小玉、青銅製の香炉の把手、刀の鍔なども検出され、石積SA19・20、SA28が一連の遺構となり、SA28は階段であることが判明したため倉庫跡として判断し、土壌SK01と仮称した。倉庫跡となった土壌SK01の下部構造は小振りの切石積みであることは判ったが、上部の構造については後代の造成土や削平で判らなかった。また、倉庫の規模についても後代の石積みなどの構築や基礎の捨て石を投入する際に取り壊されたため判断しなかった。

土壌SK01の時期的な位置づけとして、出土した青磁雷文帶碗や染付の状況から15世紀前半～15世紀中頃の倉庫跡として大まかに設定できたが、精度を高める目的で文献で絞り込んだところ、この時期の記録として中山世譜(註3)にみえる尚金福4年(1453年)に起きた志魯・布里の乱の際に正殿とともに王庫が焼失している。次に明実錄(註4)の英宗実錄、天順三年三月癸未[甲申] 禮部奏・琉球国王尚泰久奏稱・本国王府失火、延焼倉庫銅錢貨物(礼部の奏では琉球国王尚泰久の奏稱により、本国の王府が火災に遭い倉庫の銅錢、貨物なども全部焼けた。)の記録があり、これが尚泰久5年(1459年)に起きた失火である。この二件が15世紀前半～15世紀中頃に起きた火災で焼失した倉庫の記録として残っている。「京の内」の調査区内で1453年に起きた志魯・布リの乱と関係する遺構と遺物は東側中央寄りで検出された石積みSA05であり、SA05前面に設定したトレンチ内から鏡の小札と金物や大型の鉄製角釘がトレンチの下層から出土している。石積みSA05は丁寧に加工された大型の切石を用いているに対し土壌SK01(石積みSA19・20、SA28)は小型の切石を用いている点などから1453年の志魯・布リの乱以降の時期が推定された。他に土壌SK01(SA19・20、SA28)の平面観が「L」字状の形状であり、階段(SA28)も残存している状況から他の石積みとは異なっていた。以上の状況から土壌SK01は尚泰久5年(1459年)に焼失した倉庫そのものではないかと判断した。

ところで1453年に起きた志魯・布リの乱の際に王庫が焼失した歴史的事実からも王庫内にあった多量の陶磁器類などの宝物は廃棄されたものとみられる。志魯・布リの乱で消失した多量の陶磁器類をはじめとする宝物を補なうには、前述した明実錄の英宗実錄、天順三年三月(尚泰久5年)の記録の中に品物は別であるが中国側の対応と処置が記されている。内容を直訳すると「永楽宣德年間に起きた例に照らして、貢船に載せる蘇木など貨物をお返しのかわりに銅錢を賞賜の願いがあった。中略、その六割は京庫から支給するほか、また絹匹などを賞賜し、残り四割は福建布政司に知らせて紵絲紗羅絹布など物をおさめて、時期が来たら支給するように奏に従う」

(註4) とあるようであり、中国側が琉球王国に対する対応と処置についてのひとつのパターンが読み取れる。多量の陶磁器類を含む宝物を焼失した際は慣例により6割を北京の京庫（紫禁城倉庫か）から支給し、残り4割を福建布政司に報告し、琉球側がこれと変わる貢物を完納して初めて多量の陶磁器類や宝物を入手したのではないかと想定される。土壌SK01内より出土した白磁の枢府手碗、定窯の白磁蓮花杯、元の紅釉水注や瑠璃釉水注、青花龍文馬上杯、青花大合子、青磁牡丹唐草文大瓶などの高級品（少量）とその他の高級な宝物類が京庫から支給され、残り4割が福建布政司が調達した民窯の青磁や染付（多量）と珍品などであったことが予想された。

土壌SK01内より出土した元青花と元代の青磁などの少量の高級品と明青花や青磁などの多量の民窯製品が中国側の琉球王国に対する対応と処置の結果が表面化したものとして読み取れるのではないだろうか。これからする6:4の割合は数量ではなく、6割は北京の京庫（紫禁城倉庫か）にあった官窯で焼成された優品の宋・元代の将来品（紅釉水注・瑠璃釉ほか）を主とする優品の陶磁器類、生絹など良質の品物であり、量的には極めて少量であったことが予想される。残り4割は福建および周辺地域の民窯で焼成された日用雜器類である明青花雲堂手文碗や青磁碗などの他に質が劣る沙羅などの品々であり、量的には6割の高級品を越えた量であったものとみられる。このような視点で考えていくと土壌SK01内の出土品が明代陶磁器を主体とする中で高級な宋・元代の陶磁器が少量混在しても不思議ではないのではなかろうか。

1453年の志魯・布里の乱で正殿とともに消失した王庫を再び再建し、1459年の失火による倉庫の消失までの6年間の間に中国、タイ、ベトナム諸国の品々を収集した時期の一括遺物が土壌SK01のものとみられるのではないかだろうか。土壌SK01内より一括で出土した遺物の上限は1453年から下限が1459年に絞り込まれ、元代の青花や青磁は北京の紫禁城内にあった京庫（倉庫）内に保管されたと想定された優品の陶磁器は中国明朝より琉球王国へ明代陶磁器と共に分配され、混在していたものとみられる。混在した陶磁器の中には琉球王国が収集したものが多く、東南アジア・日本本土の陶磁器類も含まれていたものとみられる。

B. 主要遺物

土壌SK01内より出土した遺物の中で注目されたものを記すこととする。

1. 青磁碗

青磁碗の中ではラマ式蓮弁文碗がある。この種の碗は龜井明徳氏がジョージH・ケア氏が波照間島のアタンシ（美底御嶽周辺遺跡）より採集されたラマ式蓮弁を観描きした碗（註5）の破片資料から注目されたものとみられる。この種の碗はその後の発掘調査で与那国島の与那原遺跡（註6）、西表島の慶来慶田城遺跡（註7）、沖縄本島南部の糸数城跡（註8）、阿波根古島遺跡（註9）などで出土していて各遺跡から1・2点と断片的に出土していく中で量の少ない碗でもあり、文様を特定することができなかったため「ラマ式蓮弁に類似する文様を施す碗」（註6）、「ラマ式蓮弁に類似する碗」（註9）、「ラマ式蓮弁類似（文）碗」（註7・8）などと仮称して使用してきた。龜井氏がこの種の碗の破片を紹介して以来、実に15年を経て今回の資料で文様が確実にラマ式蓮弁そのものを描いていることが明らかとなった。今後、「ラマ式蓮弁文碗」として提唱してもよいものではなかろうか。

2. 青磁壺

II群の大型壺（酒会壺）で元代～明代に比定されるものとしてII群A類a種（第46図3）は胴部中央に「酒」などの吉祥字を描いた鏡文壺で類似品が東京国立博物館の収蔵品の中にもある（註10）。その他にII群C類a種（第49図16・17）やII群C類壺の蓋（第49図19）と同一タイプとみられるものが韓國的新安海底遺物の中にも存在する（註11）ため、元代のものと長谷部栄彌氏に鑑定を頼んだ（註12）。その他に明代のものとみられる壺としてII群A類d種（第47図7・8）の2点が存在するようである。

3. 青磁大瓶

中国元朝の時期に比定された青磁牡丹唐草文大花瓶のI群は、管見の限りにおいて国内の遺跡からは全体を窺うことのできる資料は報告がないようである。県内遺跡においては今帰仁城跡から同種の大花瓶の破片が唯一報告されているのみである。青磁牡丹唐草文大(花)瓶で有名な資料としてイギリスのデヴィッド・コレクションにある泰定四年（1327年）銘入りの青磁牡丹唐草文大瓶（註13）や韓國的新安海底引き上げ遺物の中にある青磁陽刻牡丹唐草文大花瓶残欠（註11）があるようである。京の内出土の資料は口造りのひねり返しや外体面最下にあ

る蓮弁の弁尻を区画する大きめの三角形状の凸帯文が特徴とみられデヴィッド・コレクションや新安海底引き上げ遺物の大花瓶には認められない要素である。

4. 青磁大鉢

外体面に雷文帯と牡丹唐草文を描き、内体面にも同様の牡丹唐草文を描いた大鉢が1点のみ得られている。青磁の大鉢で器形を窺い知ることのできる資料は器形や文様は異なるが宮古平良市の住屋遺跡（註14）のものが唯一である。京の内資料は青磁壺のⅡ群A類d種（第47図7・8）と平行期かとみられる。

5. 青磁花盆台

県内遺跡からこれまで報告例のなかった青磁花盆台（第54図1）が1点のみ出土している。花盆台とした根拠としてサイズなどから夜学台や袴腰香炉を支えた台ではなく、前述した青磁牡丹唐草文大花瓶などの大振りの瓶を支えたものであることが予想されたので花盆台として報告した。同種の花盆台の完形品は東京国立博物館の収蔵品（註10）に見える。

6. 元青花

元の青花で注目された資料として印花龍文馬上杯（第55図9）と大合子（第56図10～12）であった。印花龍文馬上杯の研究については矢部良明氏によってなされていて、矢部氏の見解では印花龍文馬上杯は世界でも20点（註15）はあろうかと個体数を推定しているものであり、矢部氏の見解に準じた場合、世界で21点目が京の内跡から出土したことになるようである。印花龍文馬上杯が首里城跡から出土した意義は大きく、当時の中国側からするとひとつの国家として「琉球王国」を承認したことを陶磁器から窺い知ることのできる遺物のひとつではなかろうか。

矢部氏によると印花龍文馬上杯の結論として「さきの青花龍文馬上杯をはじめとして、龍文様がかなり好まれた重要なパターンの一つであったことに気付くが、結果としては五爪龍ではなく、四爪と三爪とに限られて描出されていることが確認されるのである。中略、すでに述べた延祐元年（1314）の詔を頂点にしてくりひろげられた一連の五爪龍文様の禁令と深く結びついているとみるのが隠当であろうと考え、私は単色釉と印花龍文様などで装飾した一群の小品を元王朝の御器と考えてみた」（註15）と述べている点からも印花龍文馬上杯の価値を知ることができるのではないだろうか。

元朝の大合子の出土例についても印花龍文馬上杯と同様に国内の遺跡からは報告がないものとみられる。大合子には仕切りのある中蓋もあり特殊な器として利用されたものとみられる。大合子を観察していると琉球漆器で17・18世紀に製作された県指定有形文化財の朱漆山水樓閣人物描絵丸型東道盆（註16）の三足の脚を除くと外觀が類似していて、蓋甲周辺の段差や蓋甲下周の肥厚、口縁の肥厚のあり方が大合子のものと一致している。漆器と陶磁器の関係を窺い知ることができ、琉球漆器の原形のひとつが陶磁器でみえたように思える。ひとつの考え方として琉球漆器の編年研究に役立てば幸いである。大合子は今のところ祭祀や儀式などと関係する遺物として考えられる。

7. タイ産褐釉陶器壺

タイの褐釉陶器壺については金武正紀氏が指摘した「香花酒」の酒壺（註17）として判断された。この壺の蓋である半練も出土していて、改めて半練がタイの褐釉陶器壺の蓋であることが両者の推定個体数からも窺えた。タイの褐釉陶器壺に「香花酒」が入っていると仮定した場合、「京の内」の性格上、やはり祭祀や儀式の際などに用いられた酒壺であったと考えた方が素直ではないだろうか。

C. 土壙SK01と「京の内」

これまで各章や前記で述べてきた土壙SK01（S A19・20、S A28）と土壙SK01内出土の遺物から「京の内」との関係を考えた場合、「京の内」で行なわれた祭祀や儀礼の際に使用された祭祀遺物が含まれていることが考慮されるのではないだろうか。土壙SK01内から出土した陶磁器などから往時の御嶽前の器物配置状況を想像すれば御嶽前に青磁牡丹唐草文大花瓶・明青花花瓶・青磁香炉³・青銅製の鼎形香炉⁴が置かれ、香炉の前には青花大合子や青磁盤、明青花皿などに盛り付けられた供物が供えられ、倉庫内からタイの褐釉陶器壺に入っていた「香花酒」を青磁大壺（酒会壺）へ注いだ後に御嶽前に置き、青磁大壺からさらに青磁水注と青磁や白磁の玉壺

春瓶に分け入れて、最後に青磁馬上杯や染付馬上杯に注ぎ入れて琉球王国最高神女である聞得大君を頂点とする高級神女等によって祈願や託宣を実施したのかもしれない。

その他の土壙 S K01内からは多量の陶磁器以外に鏡の金物類、兜鉢、刀の鐔、青銅製の鼎形香炉把手破片、ガラス製小玉などの遺物が出土している。遺物の中で、直接的に祭祀との関係の薄い、鏡、兜、刀の在り方を考えた場合、以下のオモロから武器や武具である刀や鏡などが祭祀の道具として使用されたことを推察することができるのではないだろうか。「おもろさうし」の第1巻「首里王府の御さうし」(註18)の5・25を例として記す。

あおりやへが節
5 「一 聞得大君や赤の鏡 召しよわちへ 刀うちい 大国 鳴響みよわれ 又 鳴響む精高子が 又 つ月
しろは さだけて 又 物知りは さだけて」
あおりやへが節
25 「一 聞得大君ぎや 初め軍 立ちよ わちへ 合あて 行き通り 敵 治あわちへ 又 鳴響む精高子
が」

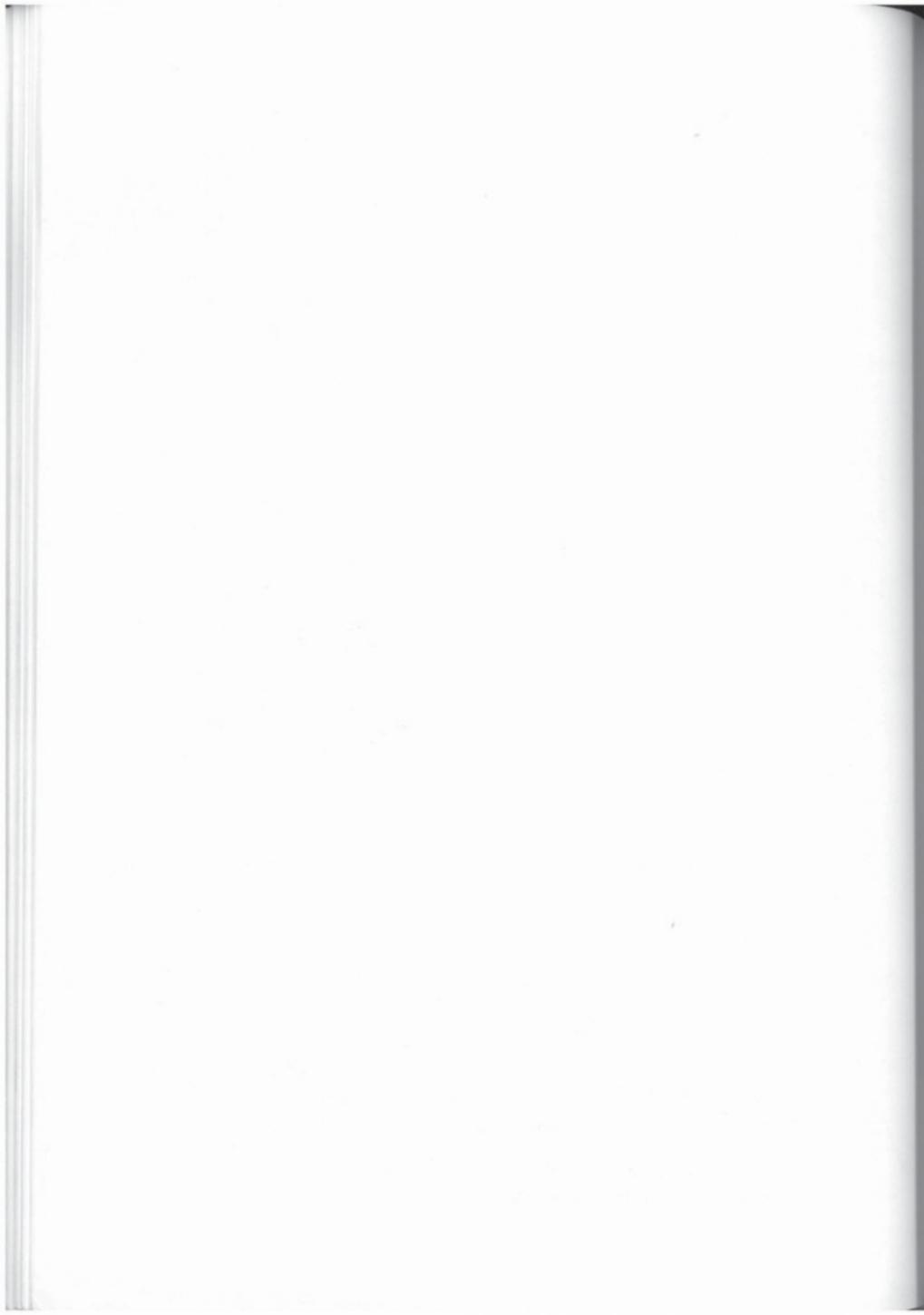
とオモロにある。

取敢ず以上のような成果などから結論を述べるとすれば「京の内」跡の土壙 S K01より出土した陶磁器類は1453年から1459年を下限とする時期に限定された輸入陶磁とみられるが、元代の陶磁器も将来されてきており、これを含めた場合14世紀中頃～15世紀中頃の時期となり時代幅が広くなる。いずれにしても土壙 S K01内より出土した資料には国内でも一級資料が含まれている点やその他の陶磁器を含めて考えた場合、日本の陶磁器研究や編年に少なからずも影響を与えるものと思慮される。

註

- 註1. 外間正幸 「万国津梁の鏡」「写真集 首里城」 首里城復元期成会 那覇出版社 1987年。
- 註2. 日本史料集成編纂会 「中国・朝鮮の史籍における 日本史料集成明實錄之部 1」 国書刊行会 1979年。
- 註3. 沖縄県教育委員会 「祭温本 中山世譜」 1986年。
- 註4. 日本史料集成編纂会 「中国・朝鮮の史籍における 日本史料集成明實錄之部 1」 国書刊行会 1979年。
- 註5. 亀井明徳 「先島諸島採集の輸入陶磁」 「沖縄出土の中国陶磁(上) ージョージH・ケア氏調査収集資料一 先島編」 沖縄県立博物館 1982年。
- 註6. 金城亀信 「与那原遺跡」 与那国町教育委員会 1988年。
- 註7. 金城亀信・島袋 洋・金城 透・仲間留美・上原清乃・仲與根ゆかり 「西表島慶来慶田城遺跡重要遺跡確認調査」 沖縄県教育委員会 1997年。
- 註8. 金城亀信・黒住耐二ほか 「糸数城跡 発掘調査報告書Ⅰ」 玉城村教育委員会 1991年。
- 註9. 金城亀信・長嶺 均・島袋 洋・照屋 孝 「阿波根古島遺跡」 沖縄県教育委員会 1990年。
- 註10. 東京国立博物館 「東京国立博物館図版目録・中国陶磁編Ⅱ」 1990年。
- 註11. 矢部良明 「元代の青磁器」「世界陶磁全集」 第13巻 小学館 1993年。
- 註12. 1997年7月7日に県文化課若狭資料室にて実見して頂いた。
- 註13. 東京国立博物館・京都国立博物館・名古屋市博物館 「英國デヴィッド・コレクション中国陶磁」 1980年。
- 註14. 砂辺和正 「住屋遺跡 平良市新庁舎建設に伴う記録保存の為の緊急発掘調査概報」 平良市教育委員会 1992年。
- 註15. 矢部良明 「元の染付」「陶磁大系」 第41巻 平凡社 1980年。
- 註16. 沖縄県教育委員会 「沖縄の文化財 Ⅲ 有形文化財編」 1995年。
- 註17. 金武正紀 「沖縄出土のタイ・ベトナム陶磁」「貿易陶磁研究」 No.11 日本貿易陶磁研究会 1991年。
- 註18. 外間善・西郷信綱 「おもろさうし」「日本思想大系」 18 岩波書店 1972年。

図 版





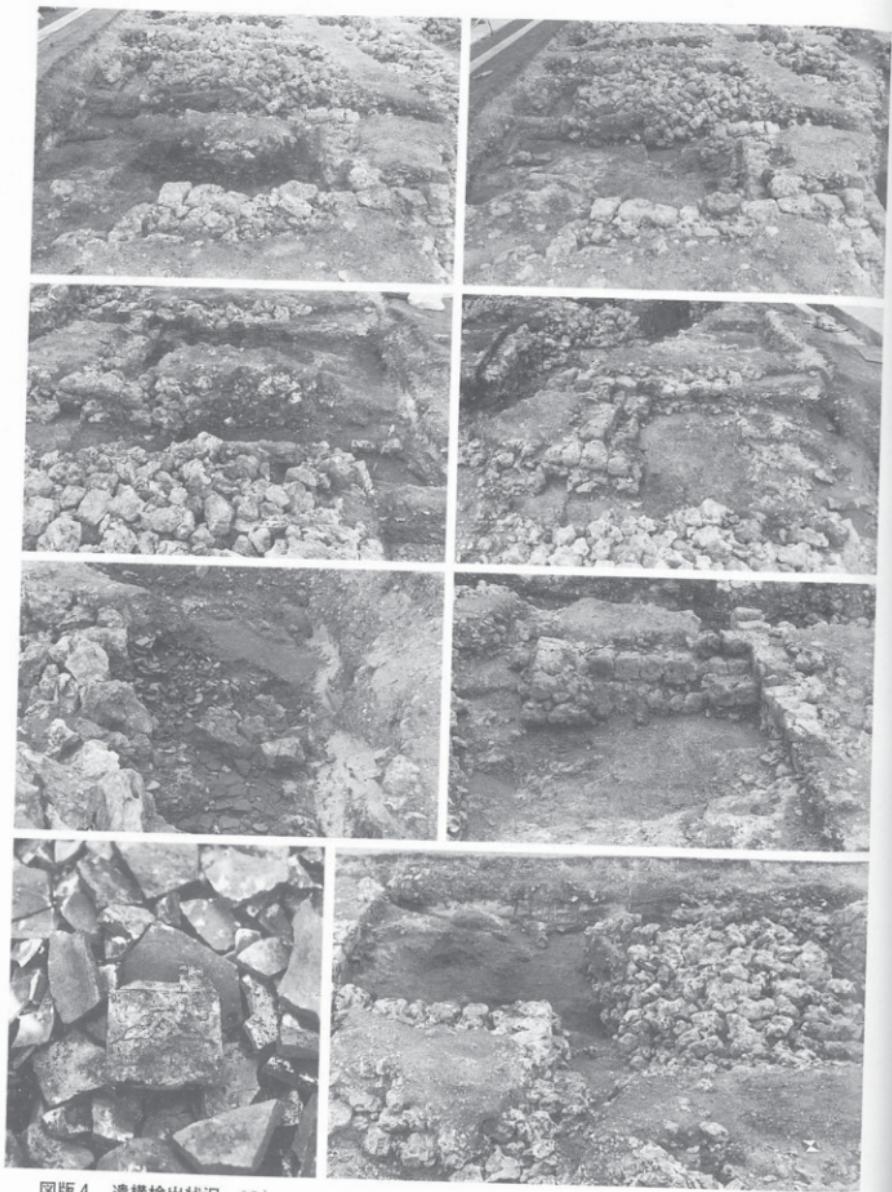
図版1 首里城航空写真（1944年）の米軍撮影



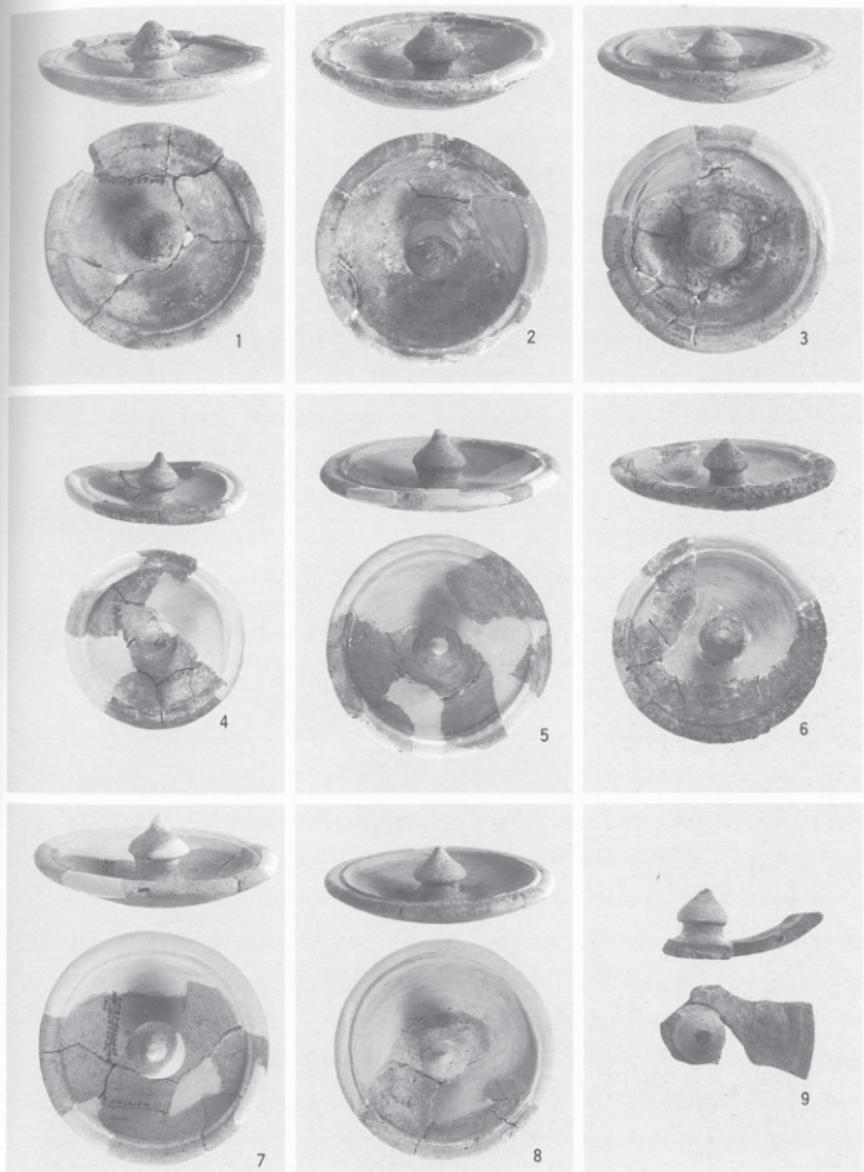
図版2 遺構検出状況 (1) 上: 調査区全景 (南側から)、下: 調査区全景 (西側から)

图版3 遗構検出状況（2）

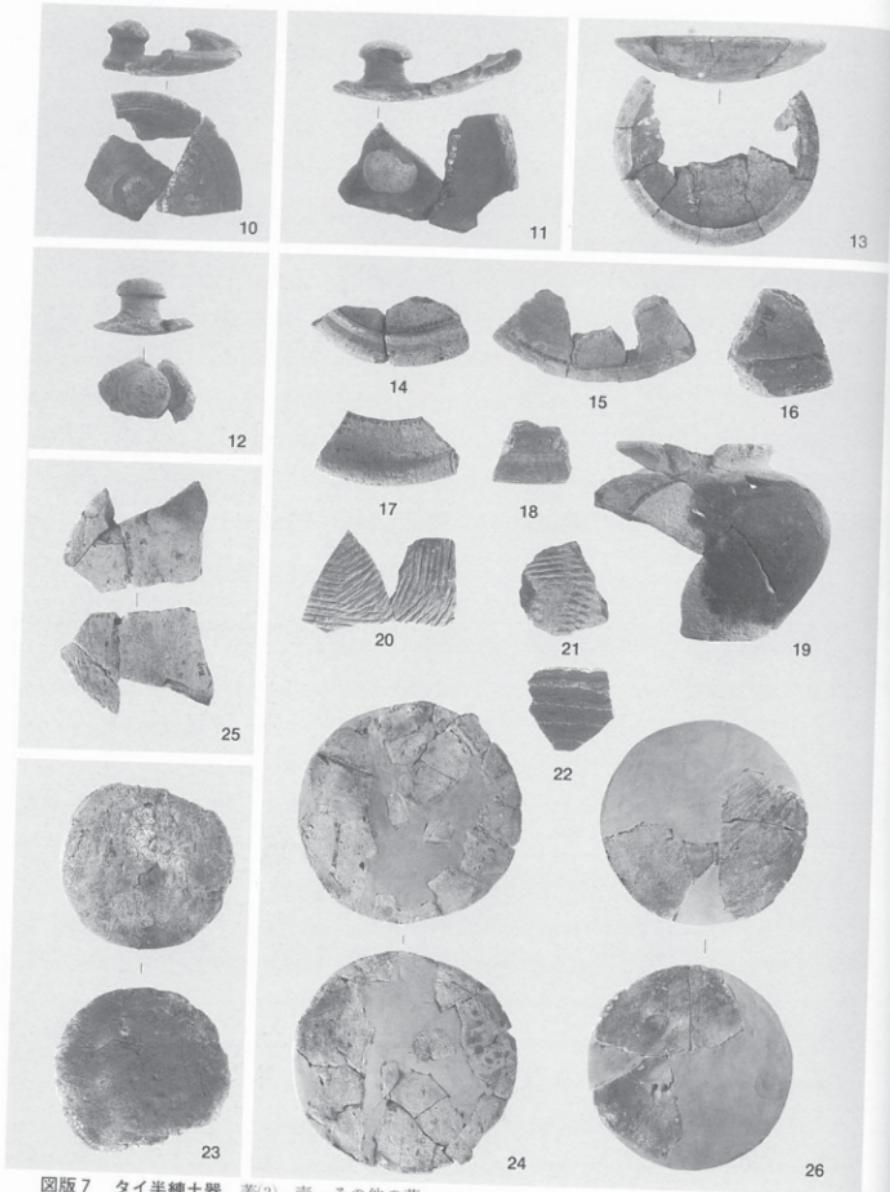




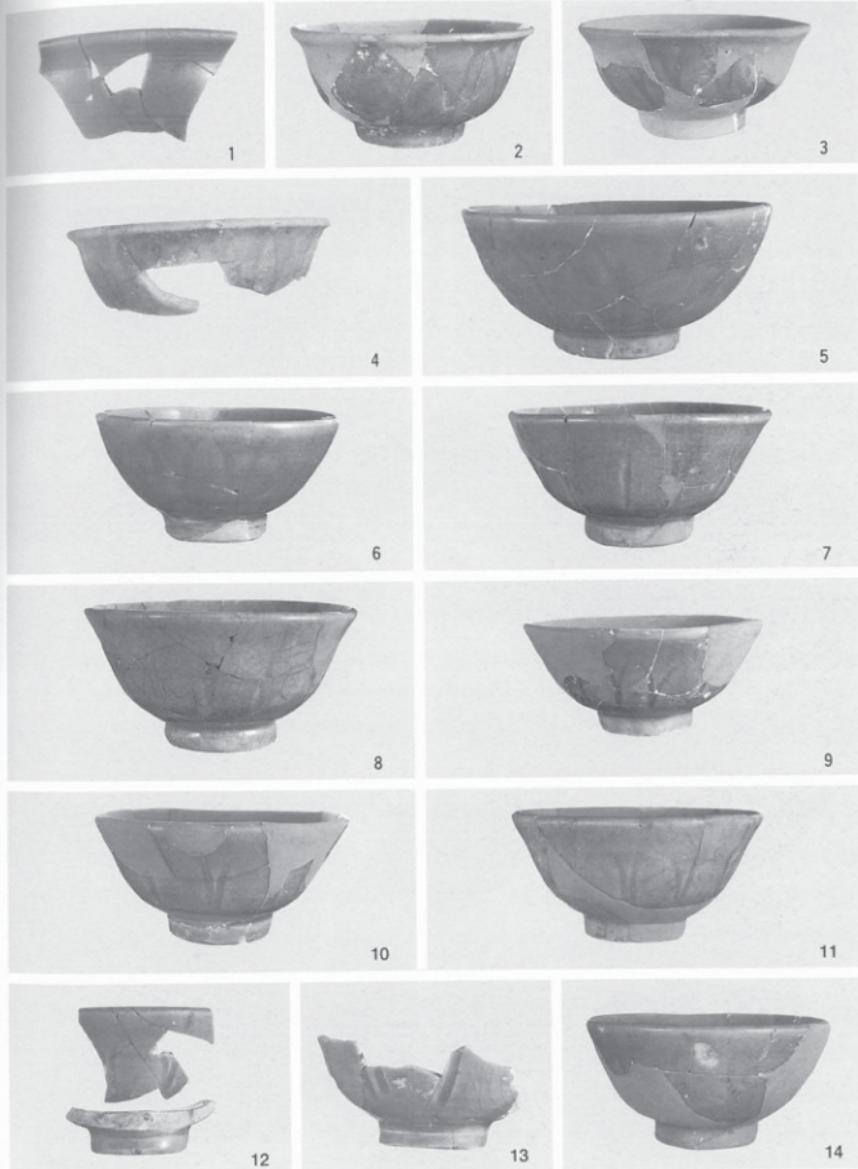
図版4 遺構検出状況 (3)



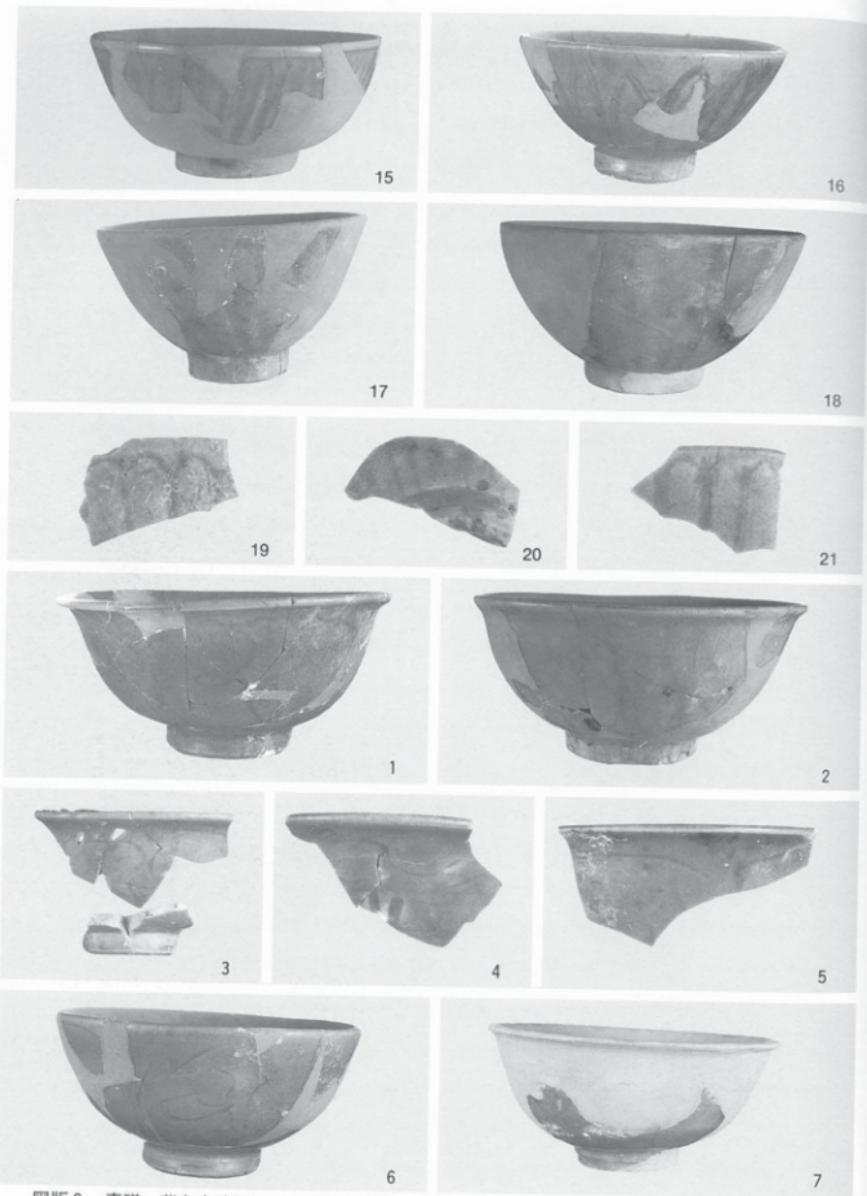
図版 6 タイ半練土器 蓋(1)



図版7 タイ半練土器 蓋(2)、壺・その他の蓋



图版 8 青磁 莲瓣文碗(1)



図版9 青磁 蓮弁文碗(2)、ラマ式蓮弁文碗



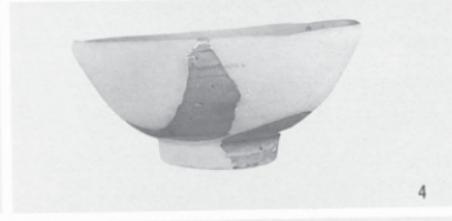
1



2



3



4



5



6



7



8



9



10

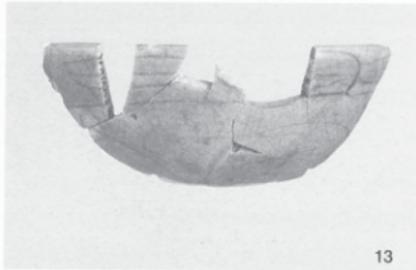
图版10 青磁 雷文带碗(1)



11



12



13



14



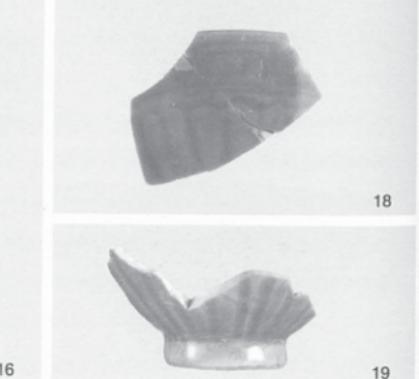
15



17



16



18

図版11 青磁 雷文帶碗(2)



20



25



21



26



22



27



23



28

図版12 青磁 雷文帶碗(3)



29



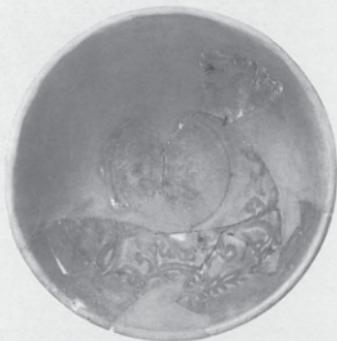
30



31



34



32



33

图版13 青磁 雷文带碗(4)



35



36



37



38



39



40



41



42



43



44

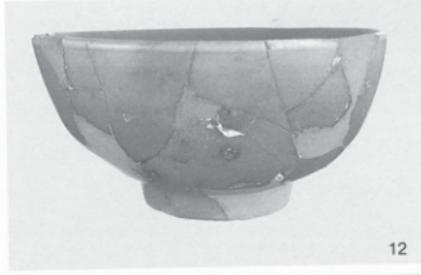
圖版14 青磁 雷文帶碗(5)



図版15 青磁 無文口縁碗(1)



11



12



13



14



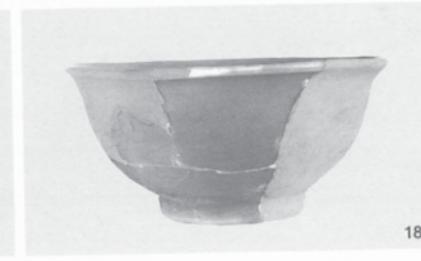
15



16

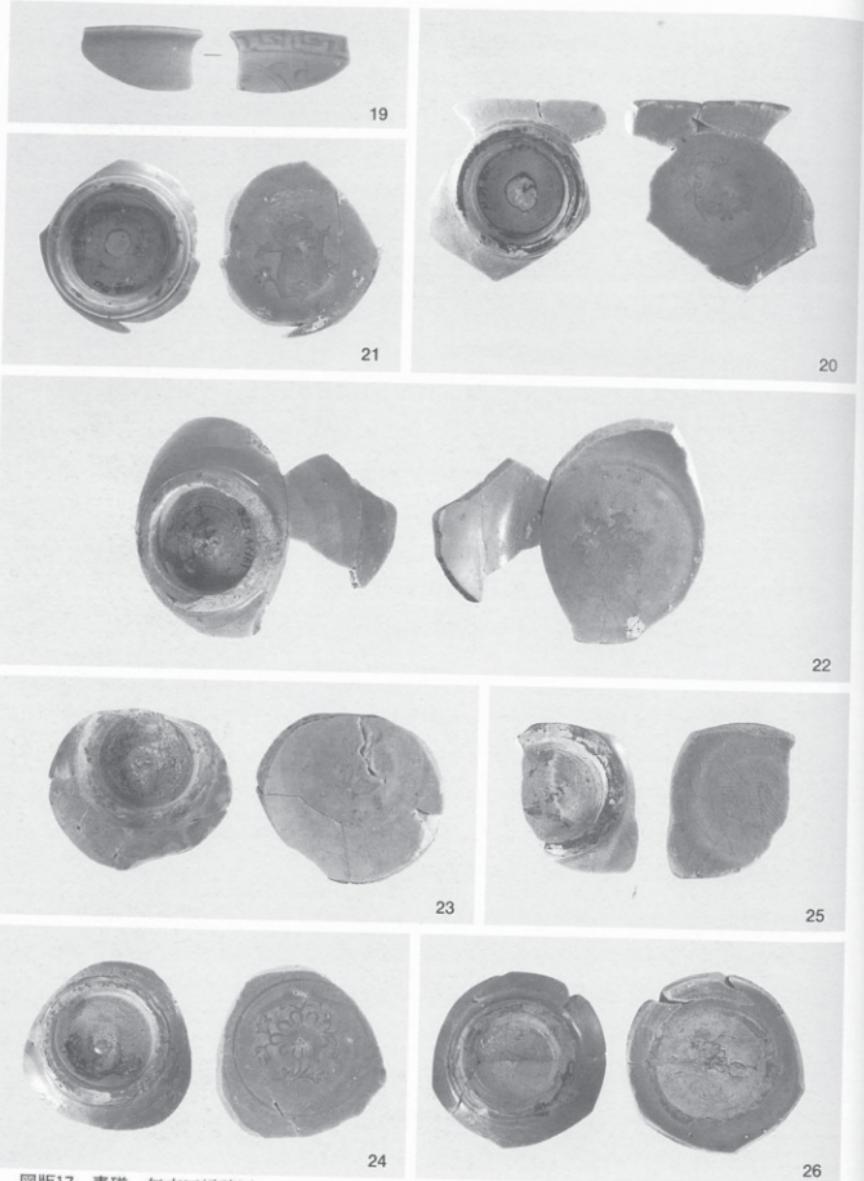


17



18

図版16 青磁 無文口縁碗(2)



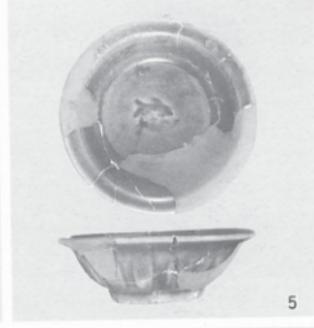
図版17 青磁 無文口縁碗(3)



1



2



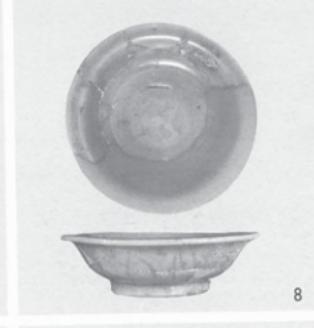
5



6



7



8



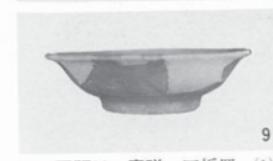
10



12-A



3



9

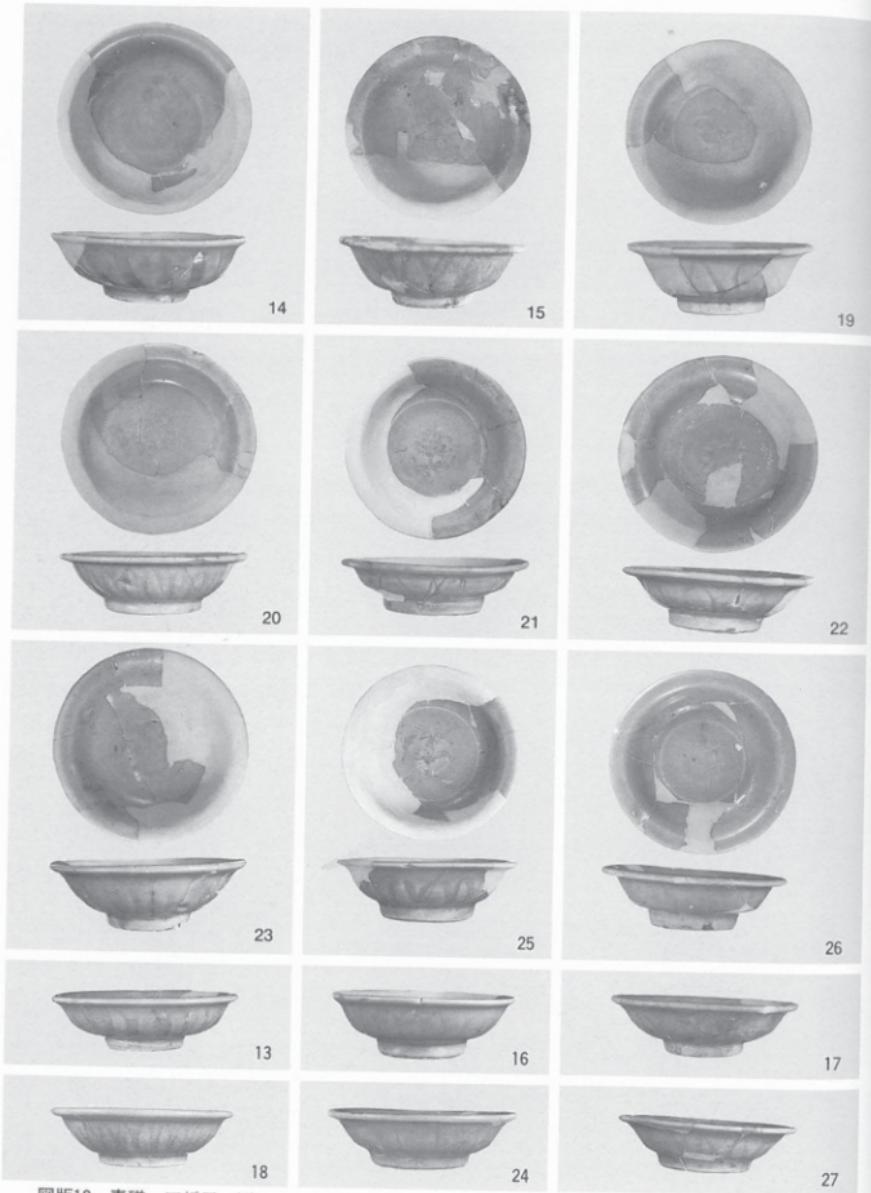


11



12-B

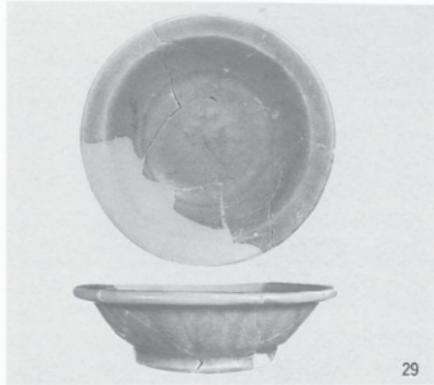
图版18 青磁 口折皿 (1)



図版19 青磁 口折皿 (2)



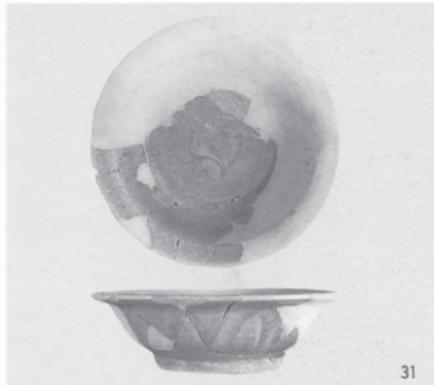
28



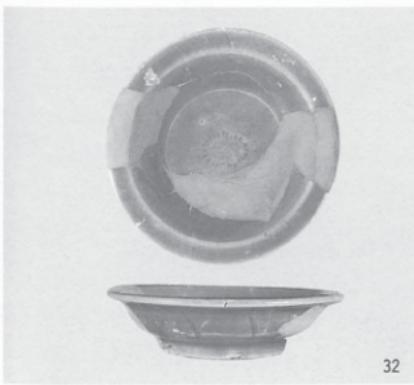
29



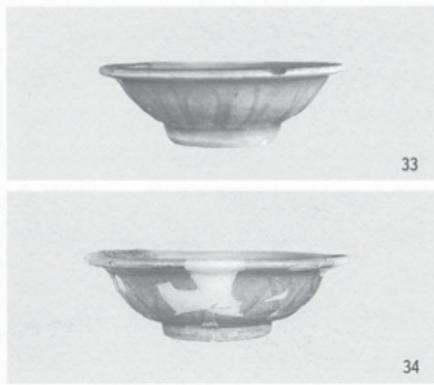
30



31

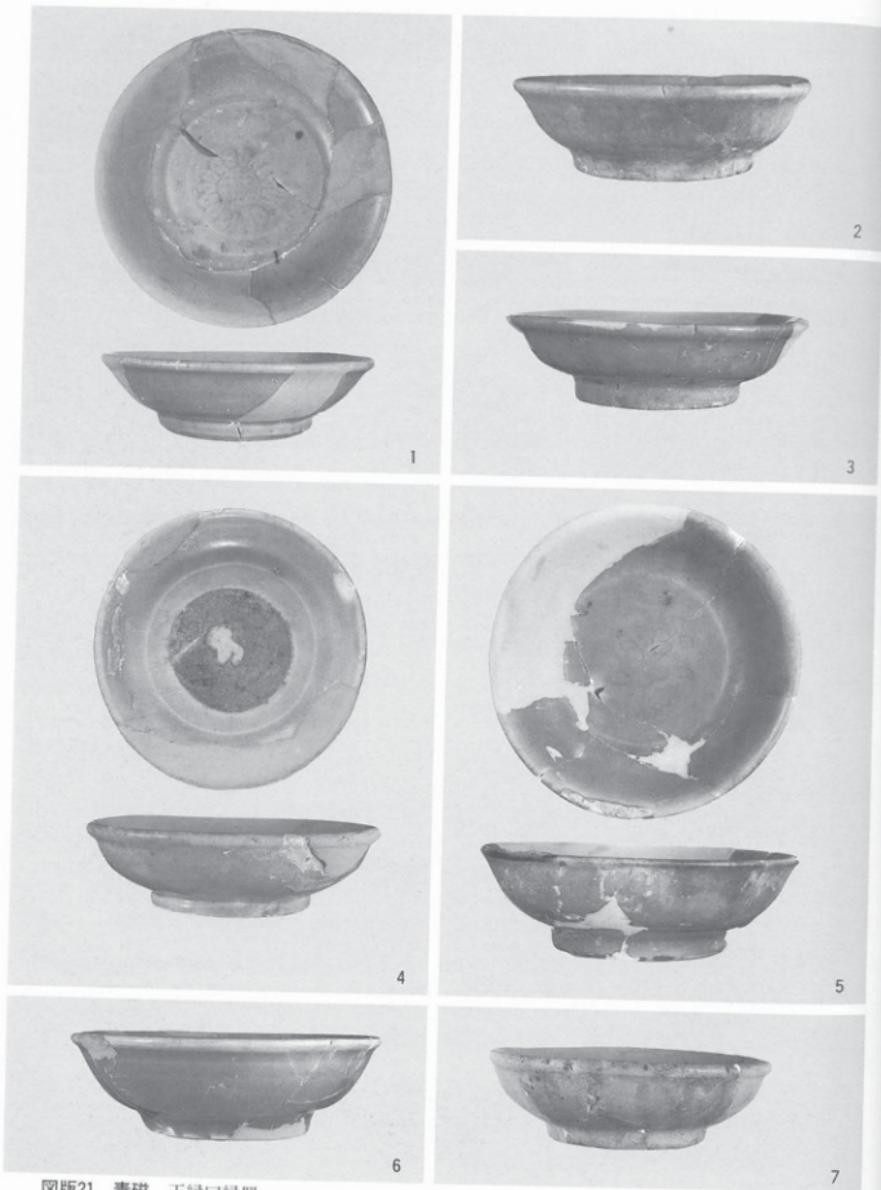


32

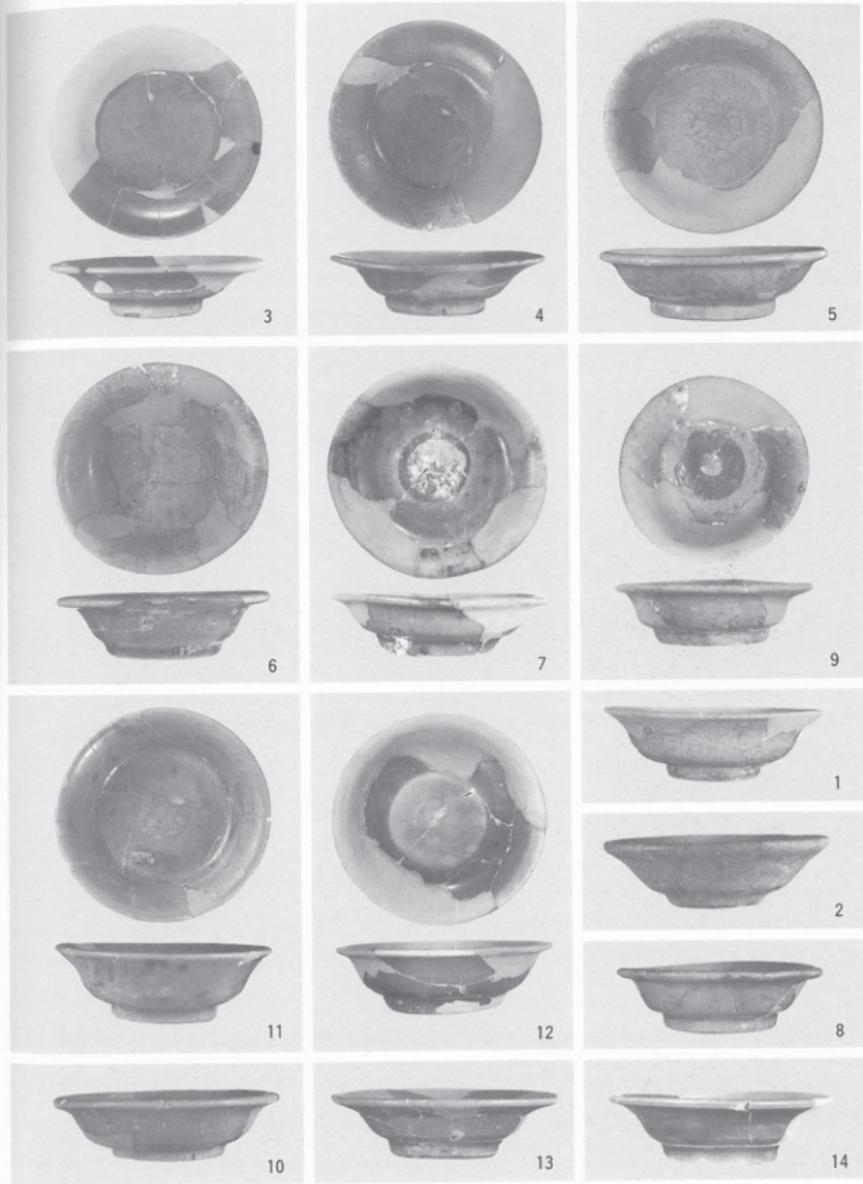


33

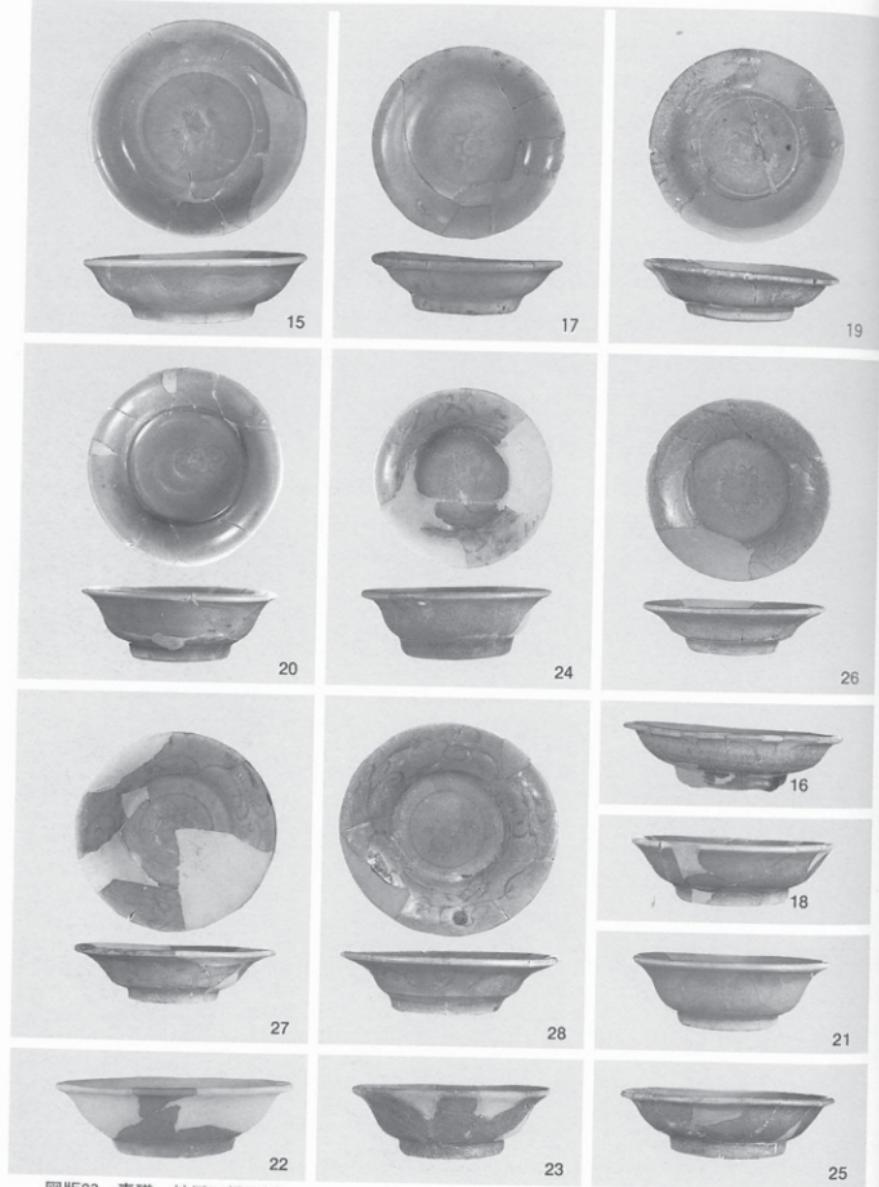
図版20 青磁 口折皿(3)



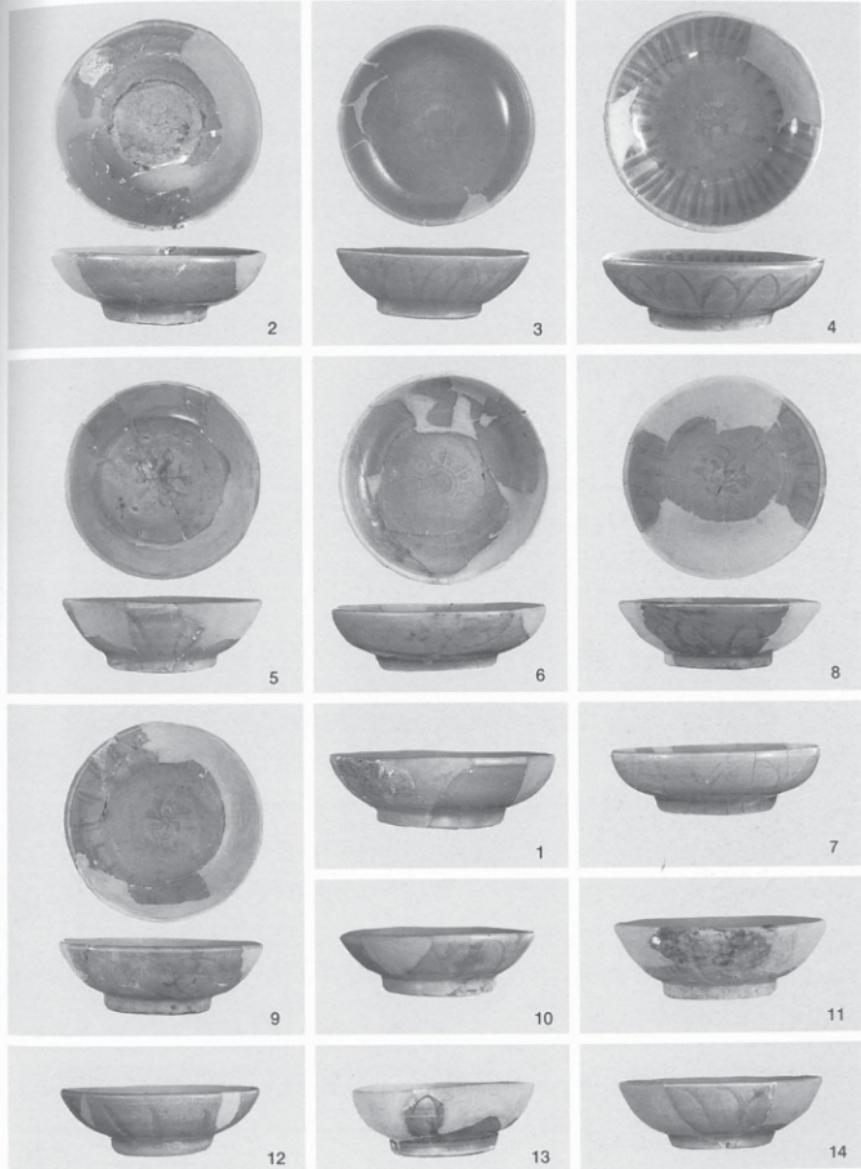
図版21 青磁 玉縁口縁皿



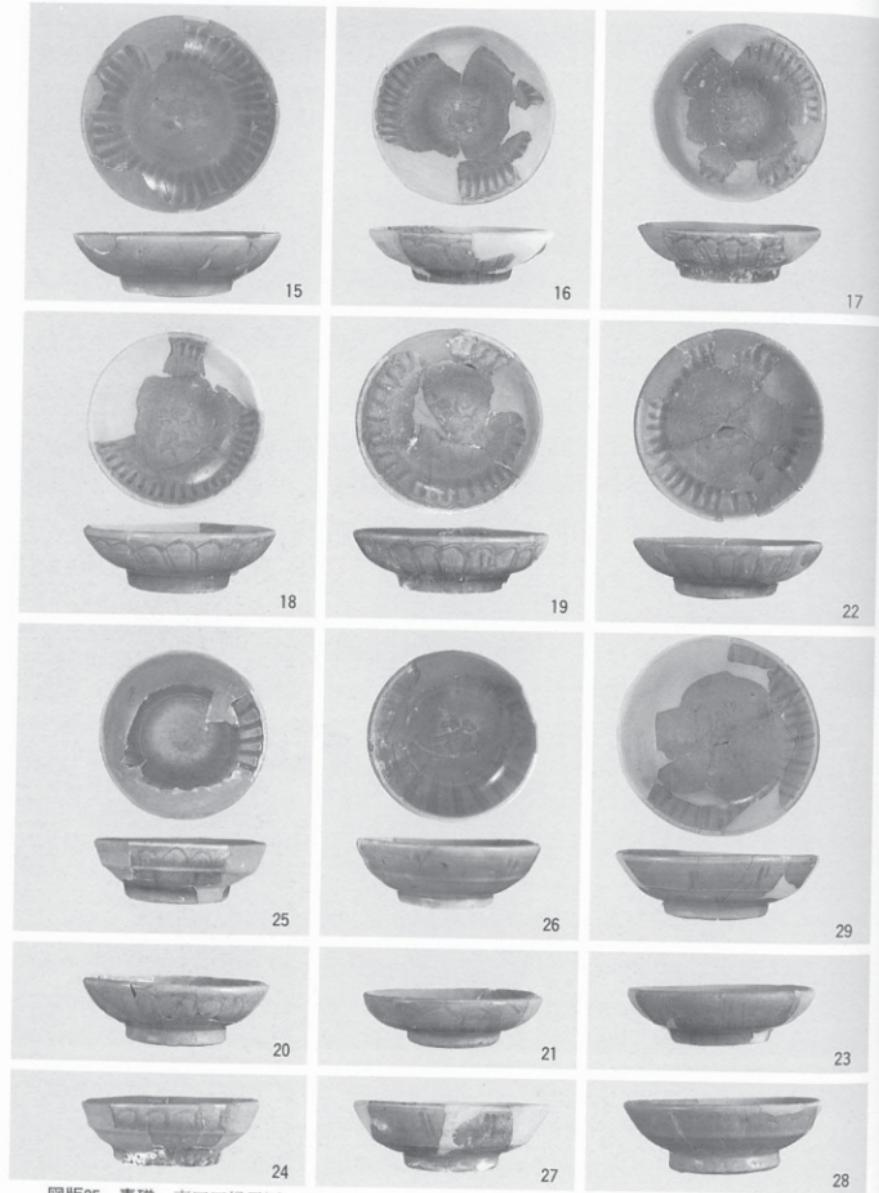
图版22 青磁 外反口缘皿(1)



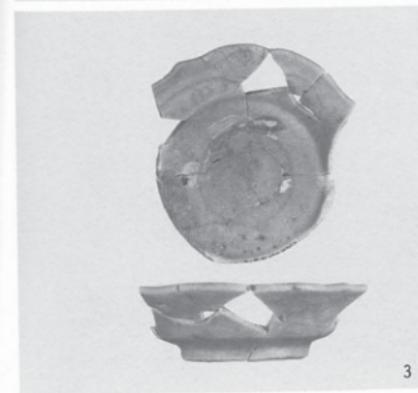
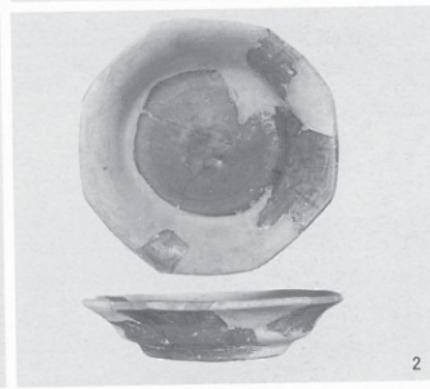
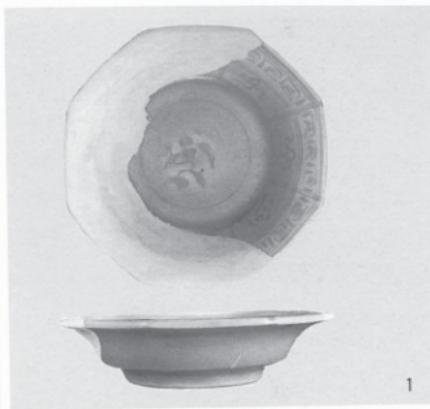
図版23 青磁 外反口縁皿(2)



図版24 青磁 直口口縁皿(1)



図版25 青磁 直口口縁皿(2)



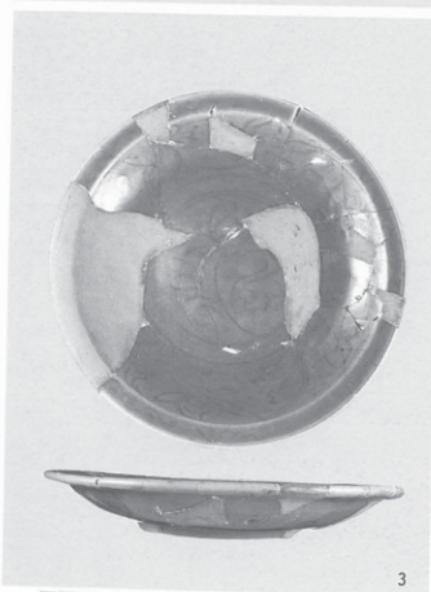
图版26 青磁 稷花皿·八角皿



1



2



3



4

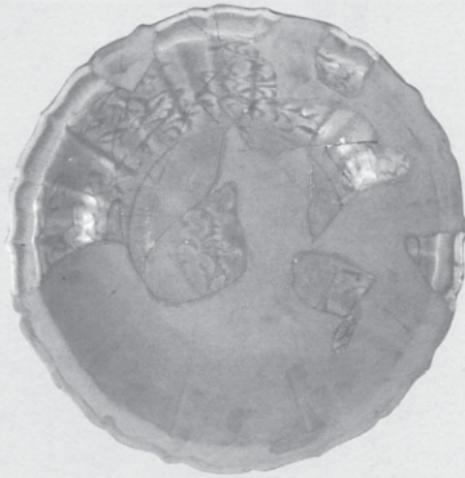
図版27 青磁 盤(1)



5



6

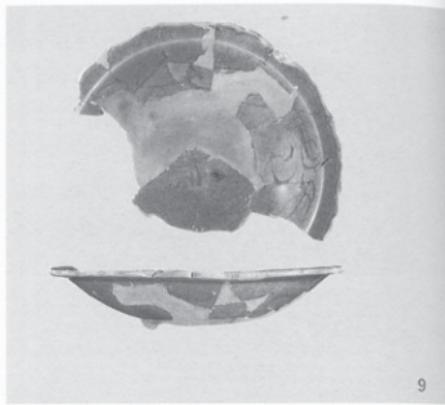


7

図版28 青磁 盘(2)



8



9



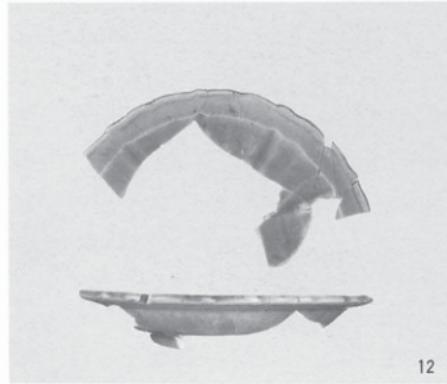
10



11



13

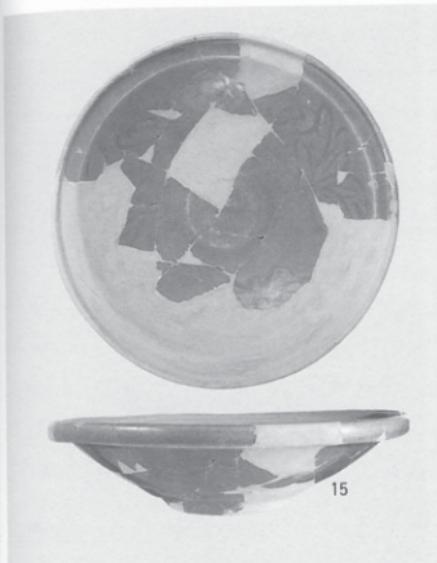


12

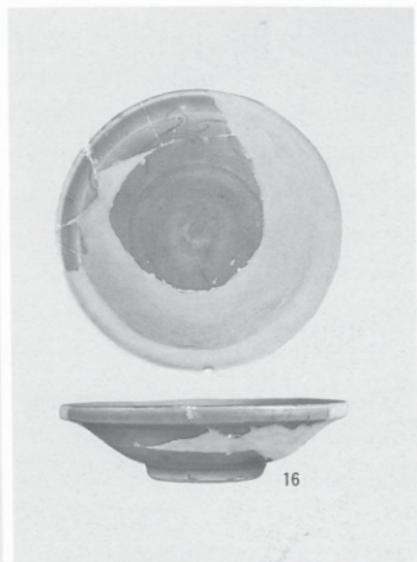


14

図版29 青磁 盤(3)



15



16



17



18

図版30 青磁 盤(4)



19



20



21



22

図版31 青磁 盤(5)



23



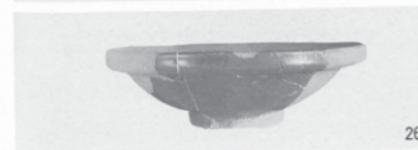
24



25



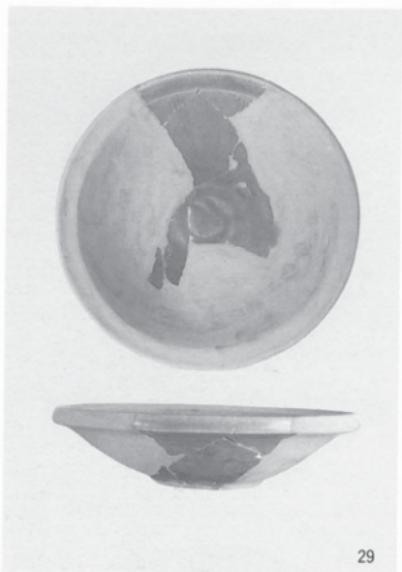
26



27



図版32 青磁 盤(6)



29



30



31



32

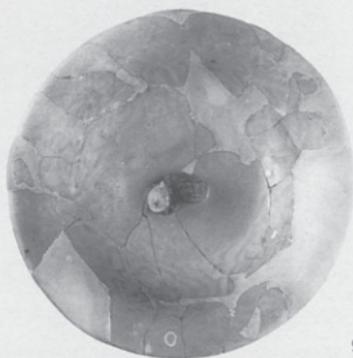
图版33 青磁 盘(7)



1



2



9



3



6

圖版34 青磁 壺(1)



7



11

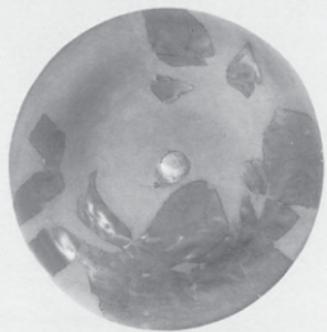


8



5

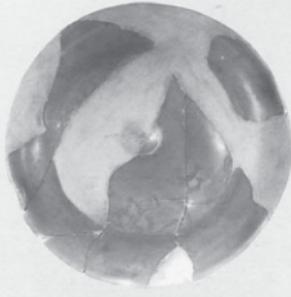
図版35 青磁 壺(2)



10



4



12



14



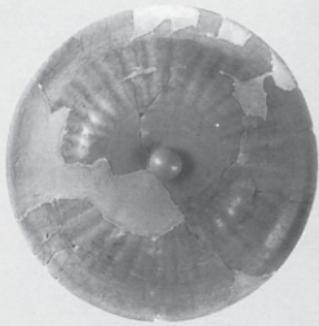
20



図版36 青磁 壺(3)



13



19



15



18



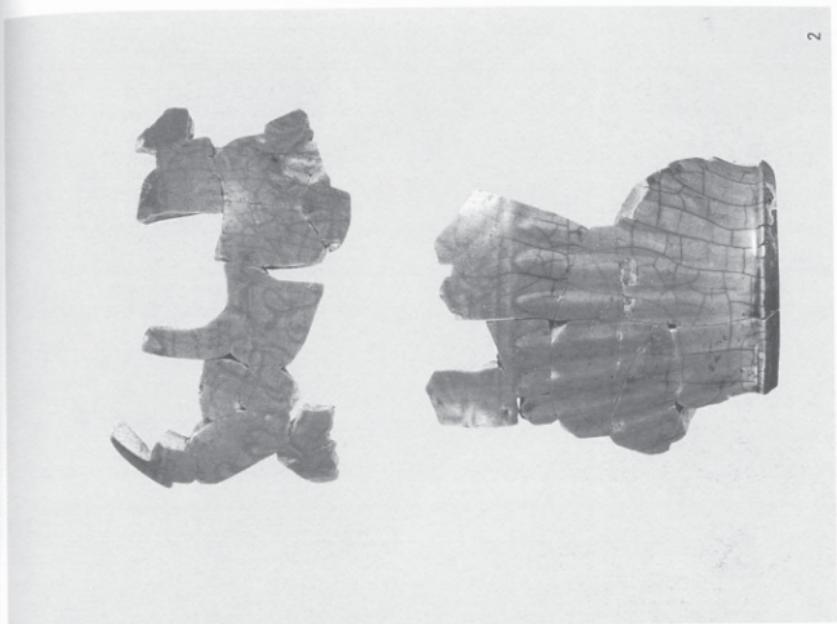
16



17

図版37 青磁 壺(4)

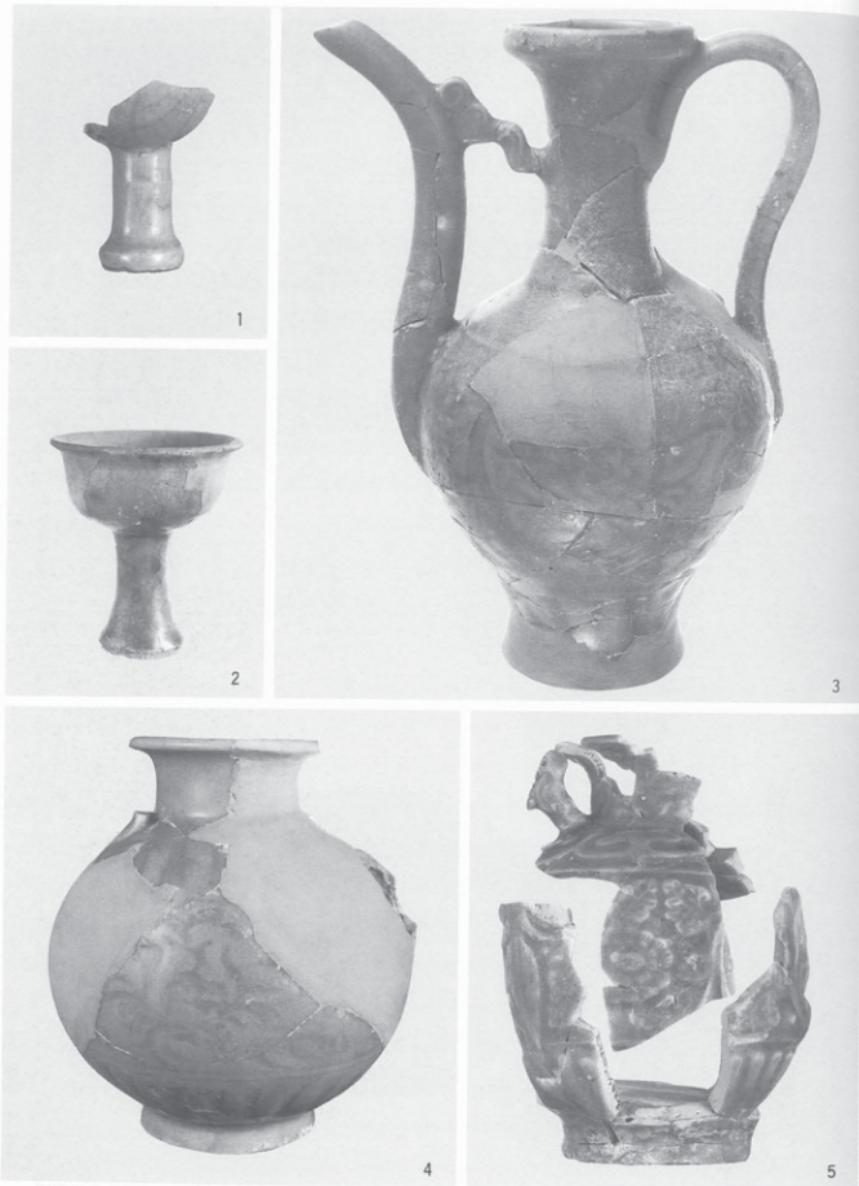
2



1



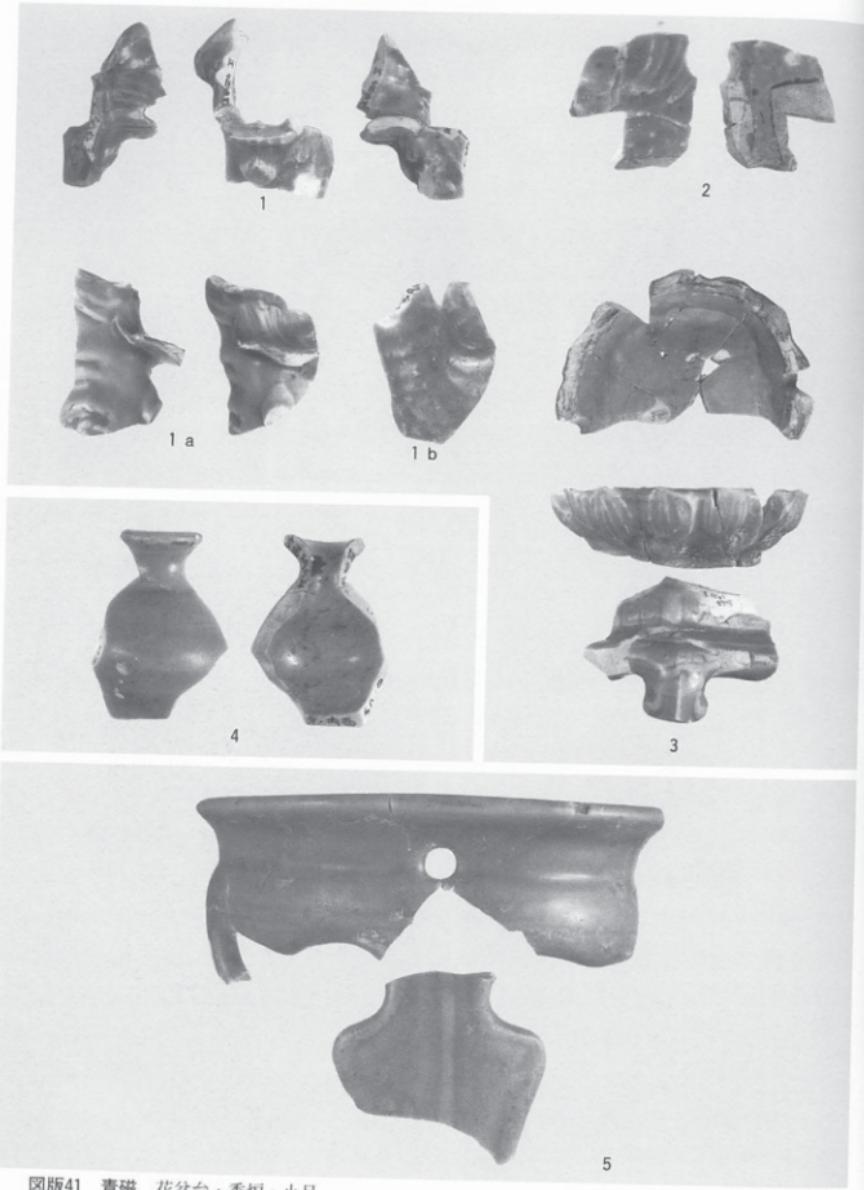
图版38 青磁 大花瓶、大瓶



圖版39 青磁 馬上杯·水注



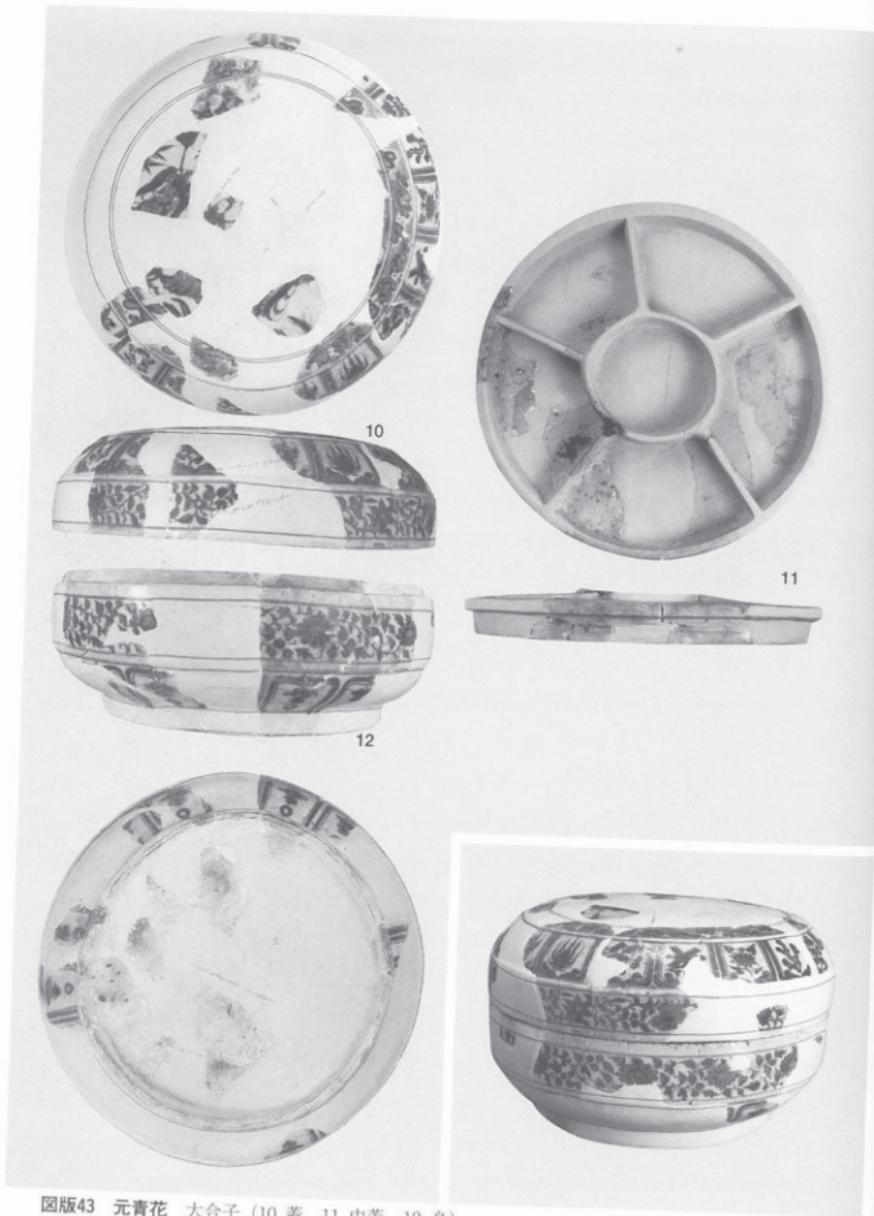
图版40 青磁 瓶（1~4）、大鉢（5）



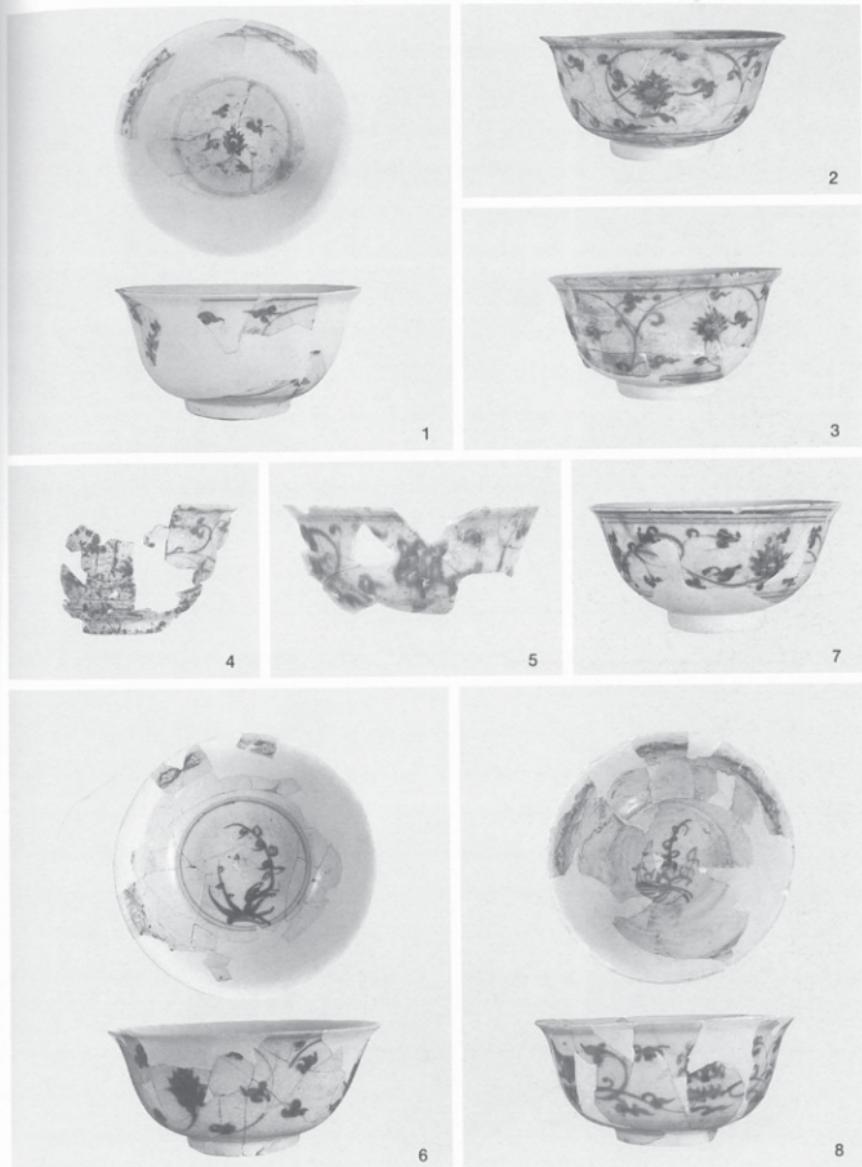
图版41 青磁 花盆台·香炉·小品



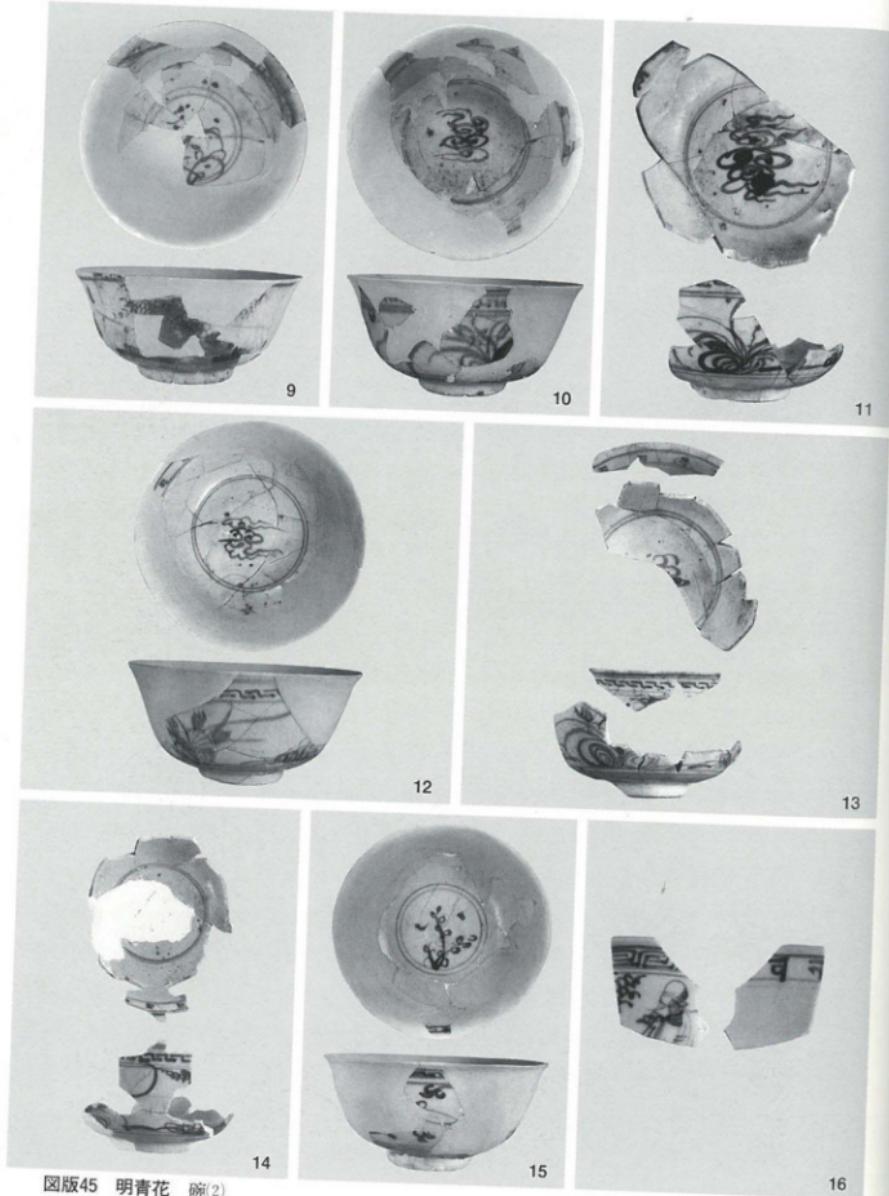
図版42 元青花



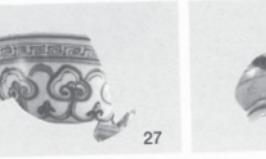
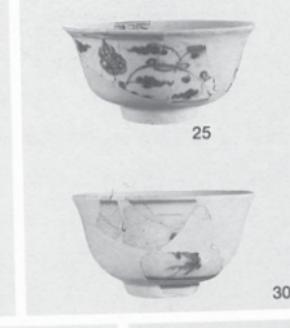
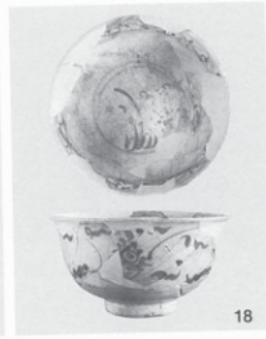
圖版43 元青花 大合子（10 蓋、11 中蓋、12 身）



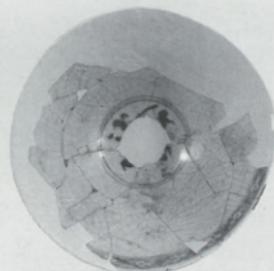
図版44 明青花 碗(1)



图版45 明青花碗(2)



図版46 明青花 碗(3)



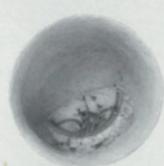
31



32



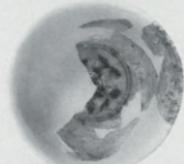
33



35



36



37



38

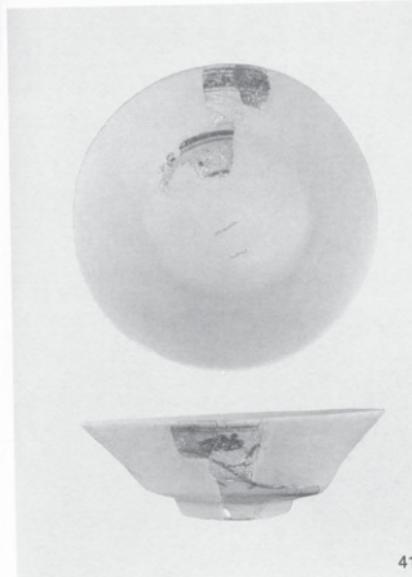
図版47 明青花 碗(4)・鉢・杯



39



40



41



42



43

図版48 明青花 盆



44



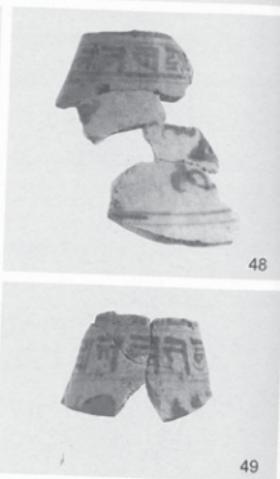
45



46



47

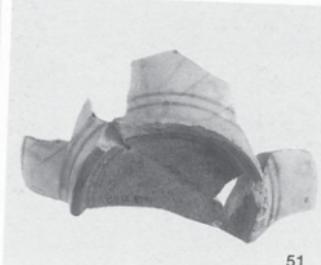


48

49



50



51

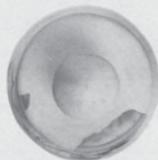


52

図版49 明青花瓶



54



53



56

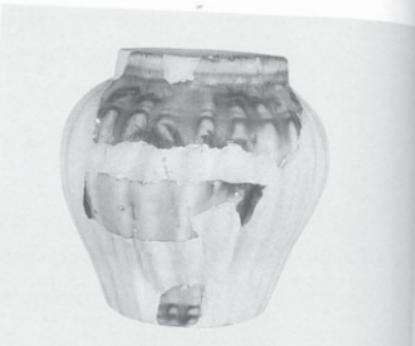


55

図版50 明青花 大瓶



58



59



57

图版51 明青花 花瓶·壺

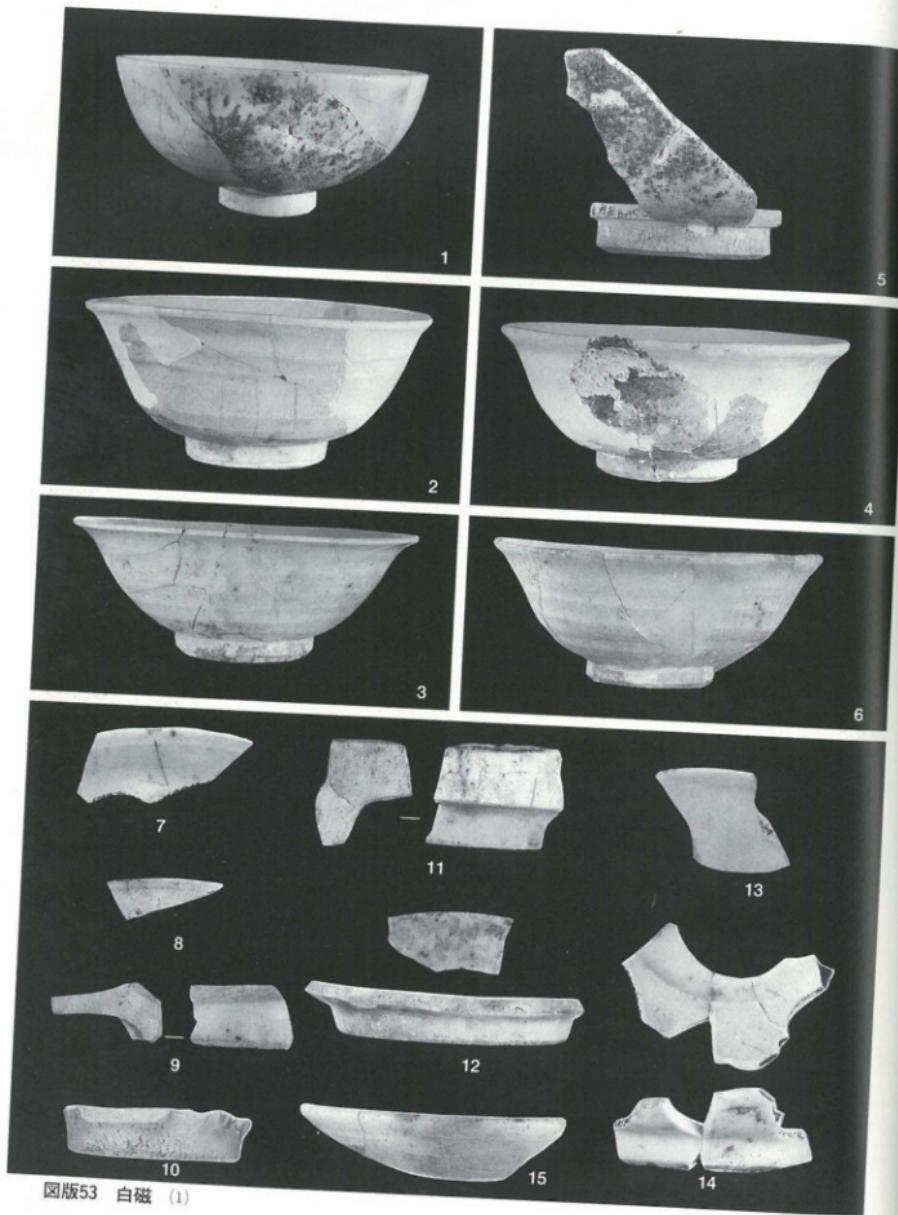


60

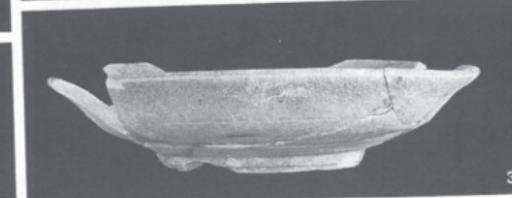
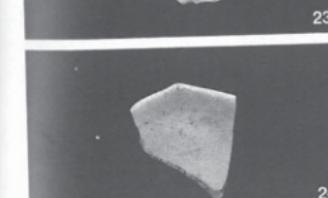
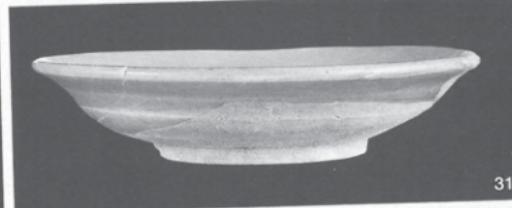
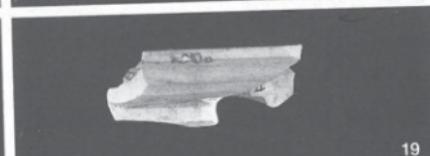


61

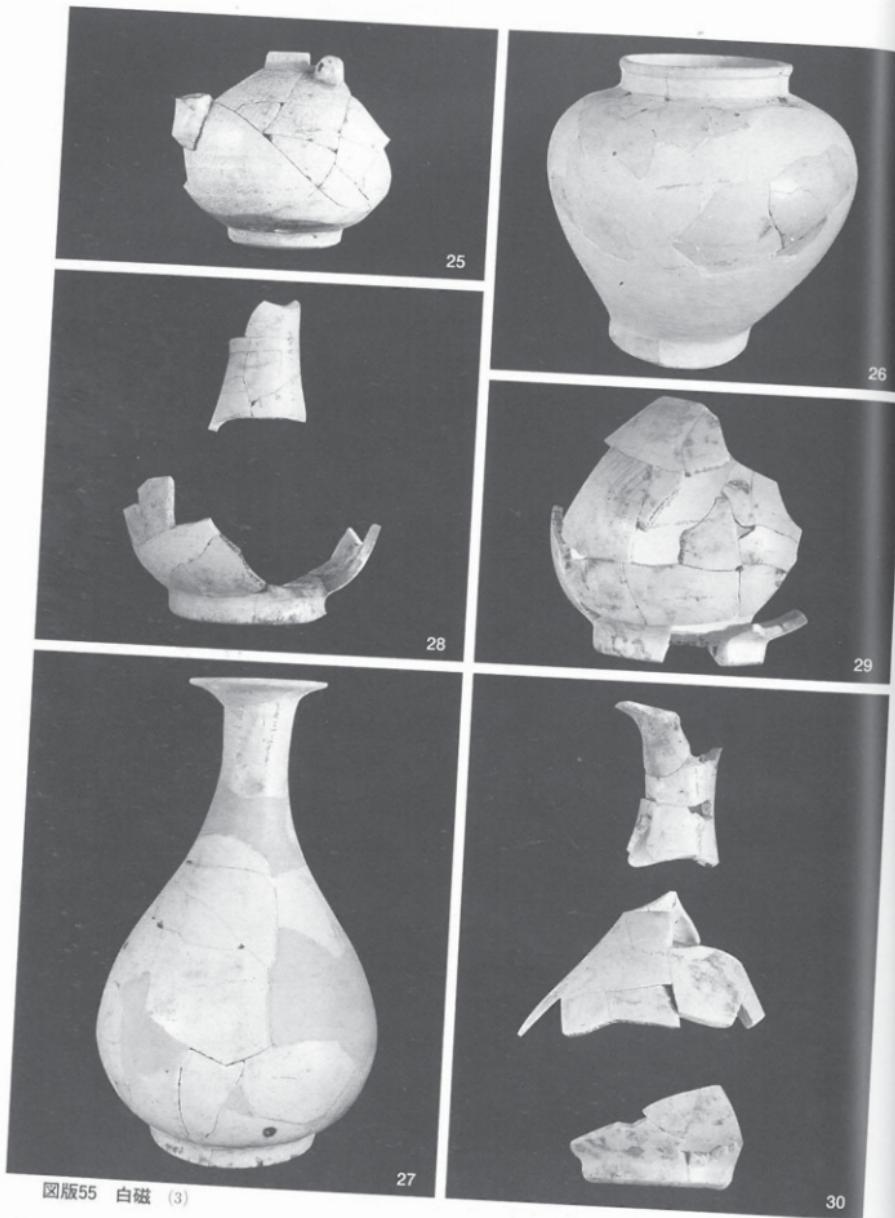
图版52 明青花 壶



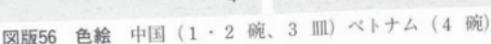
図版53 白磁 (1)



図版54 白磁 (2)



図版55 白磁 (3)



図版56 色繪 中国（1・2 碗、3 盆）ベトナム（4 碗）



圖版57 紅釉水注（左）、瑠璃釉水注（右）





1



2



2-A



3

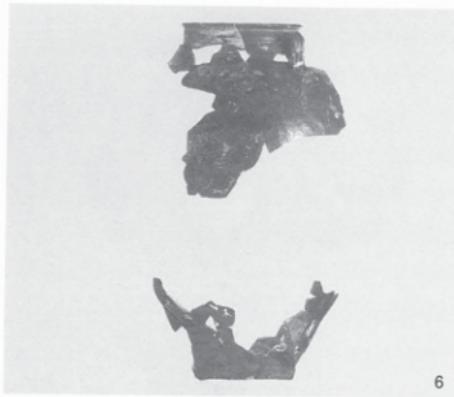


4

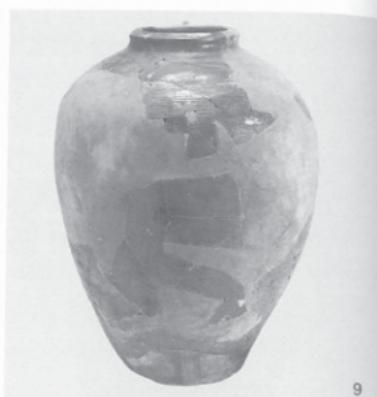


5

图版59 褐釉陶器 (1)



6



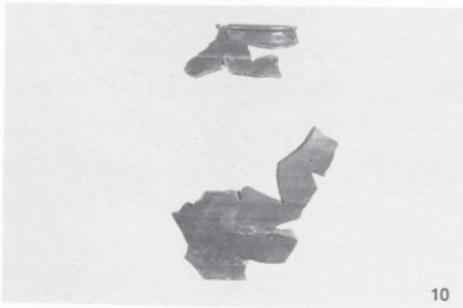
9



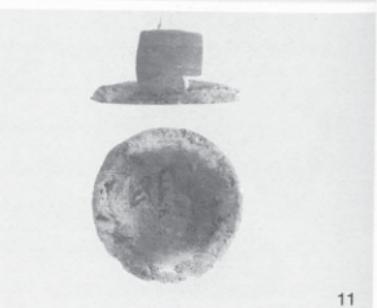
7



8



10



11

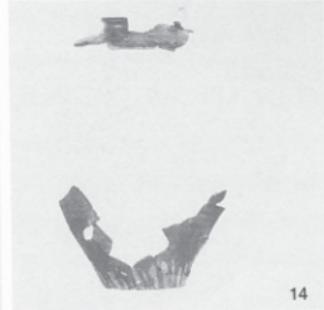
図版60 褐釉陶器 (2)



12



13



14



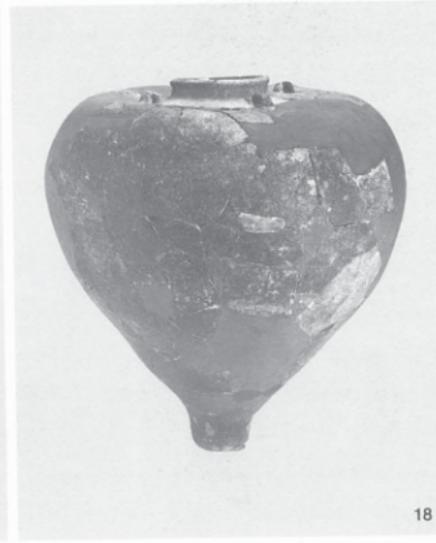
15



16



17



18

図版61 褐釉陶器 (3)



19



20



21



22



23



24



25



25-A

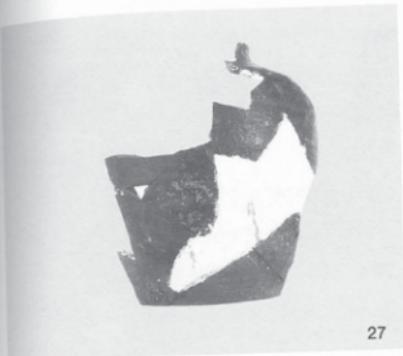


25-B

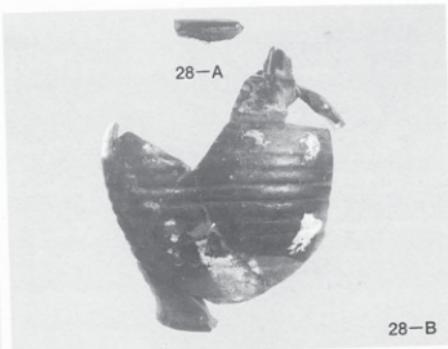


26

図版62 褐釉陶器 (4)



27



28-A

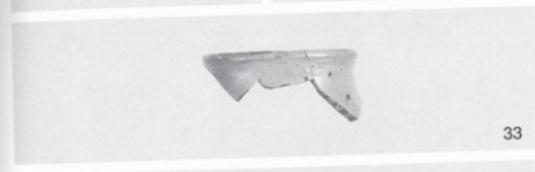
28-B



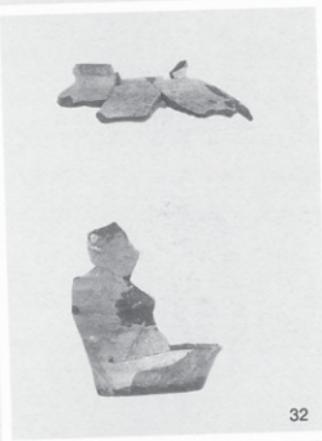
29



30



33



31

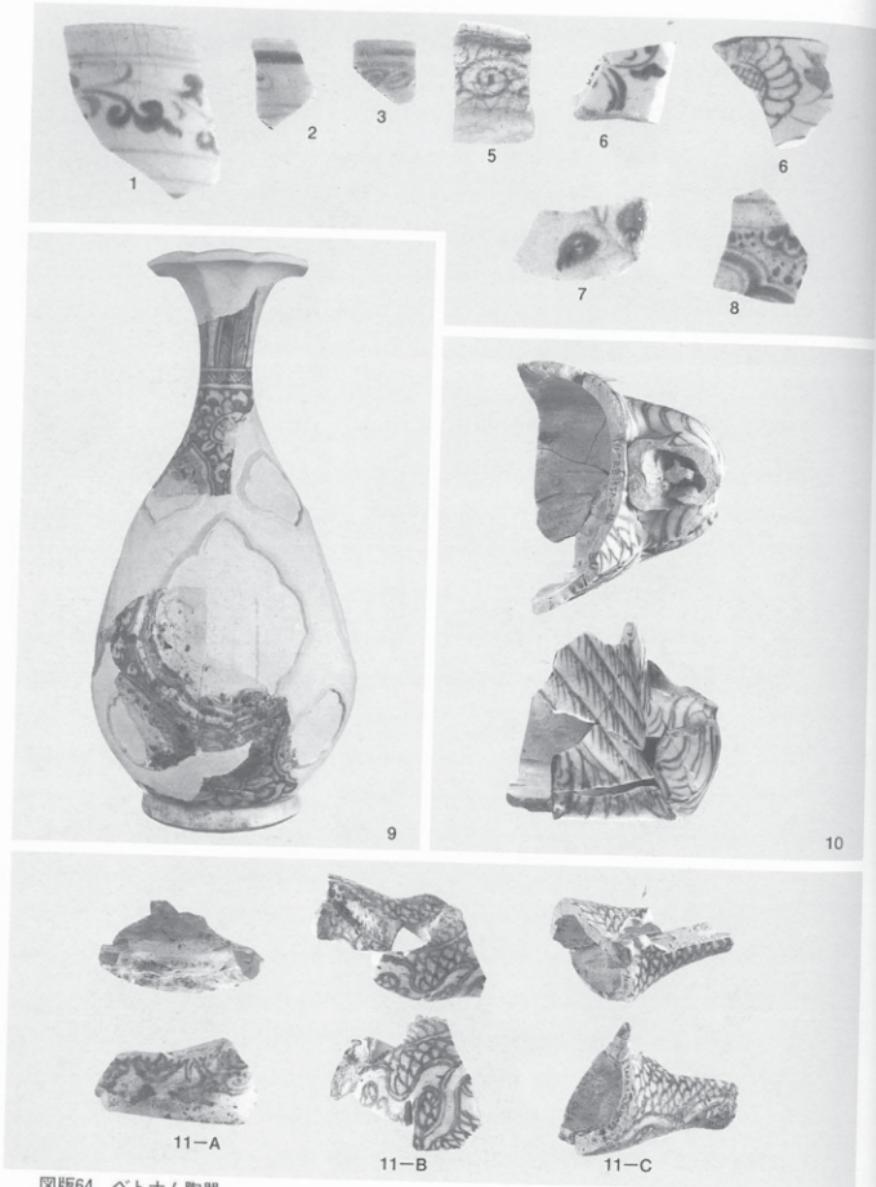


31

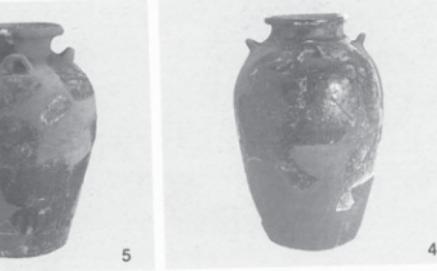
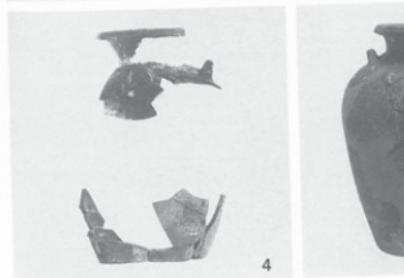
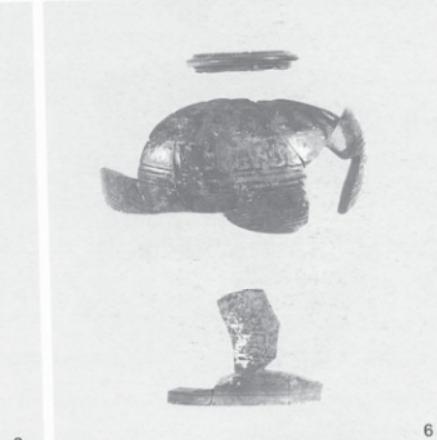
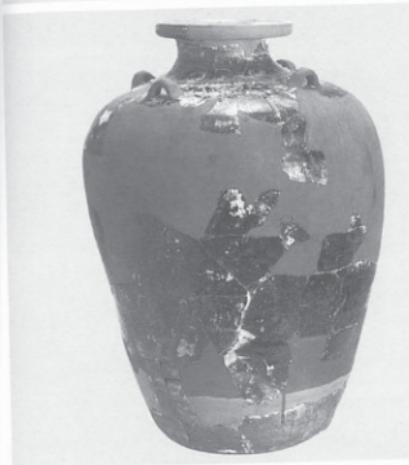
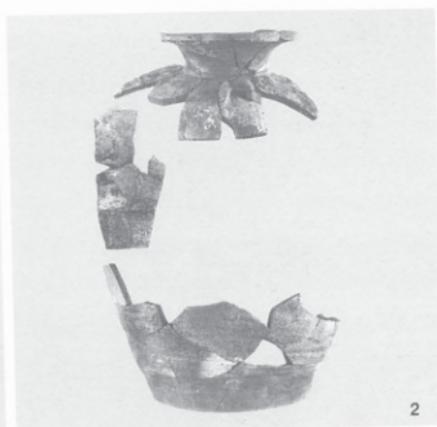
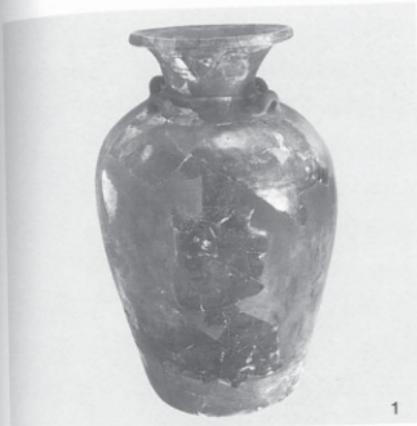


34

图版63 褐釉陶器 (5)



図版64 ベトナム陶器

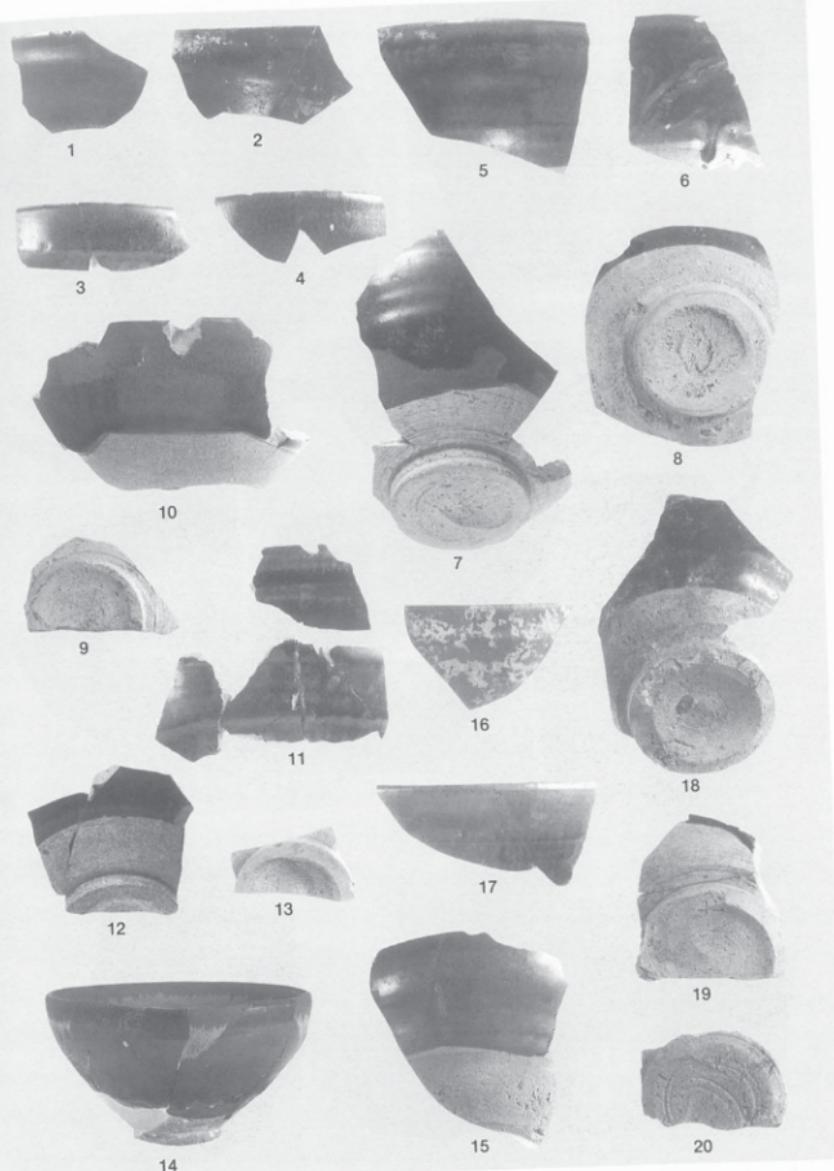


44

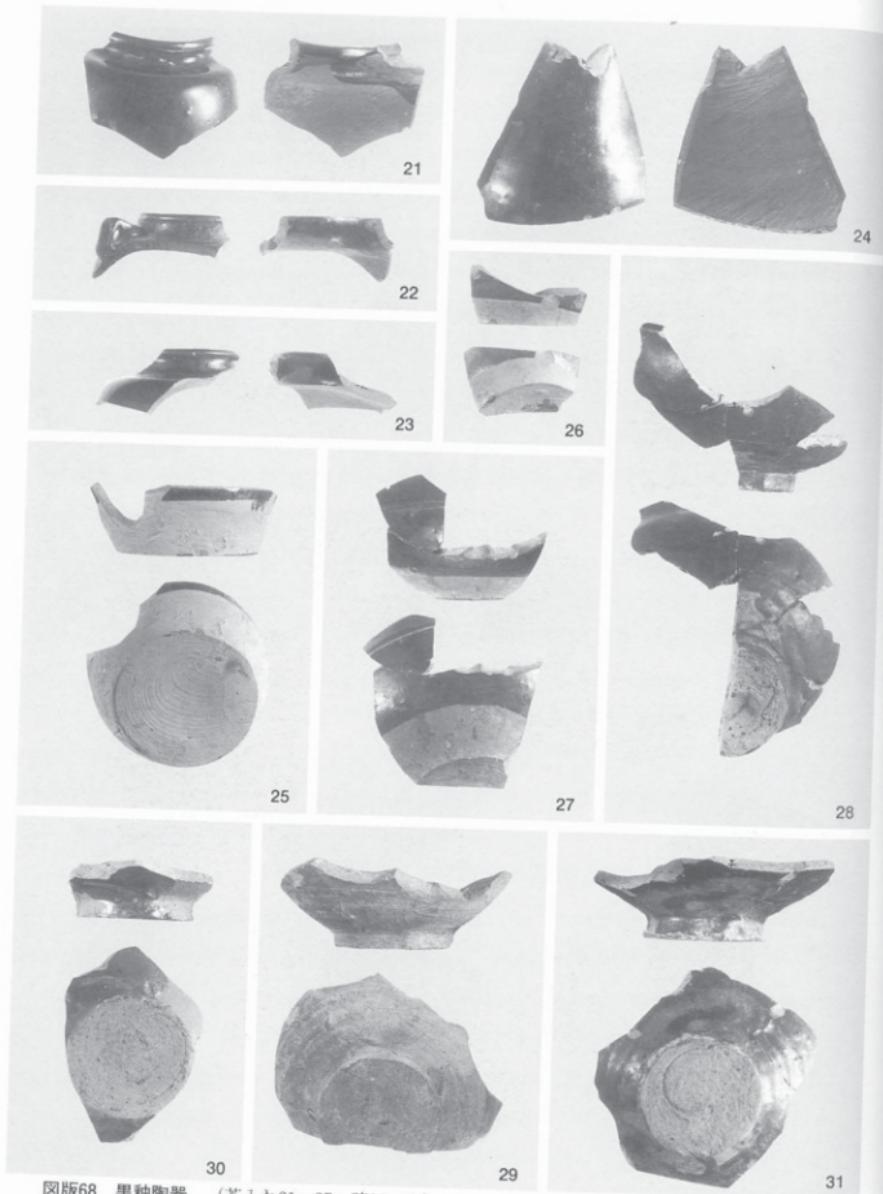
図版65 タイ産褐釉陶器



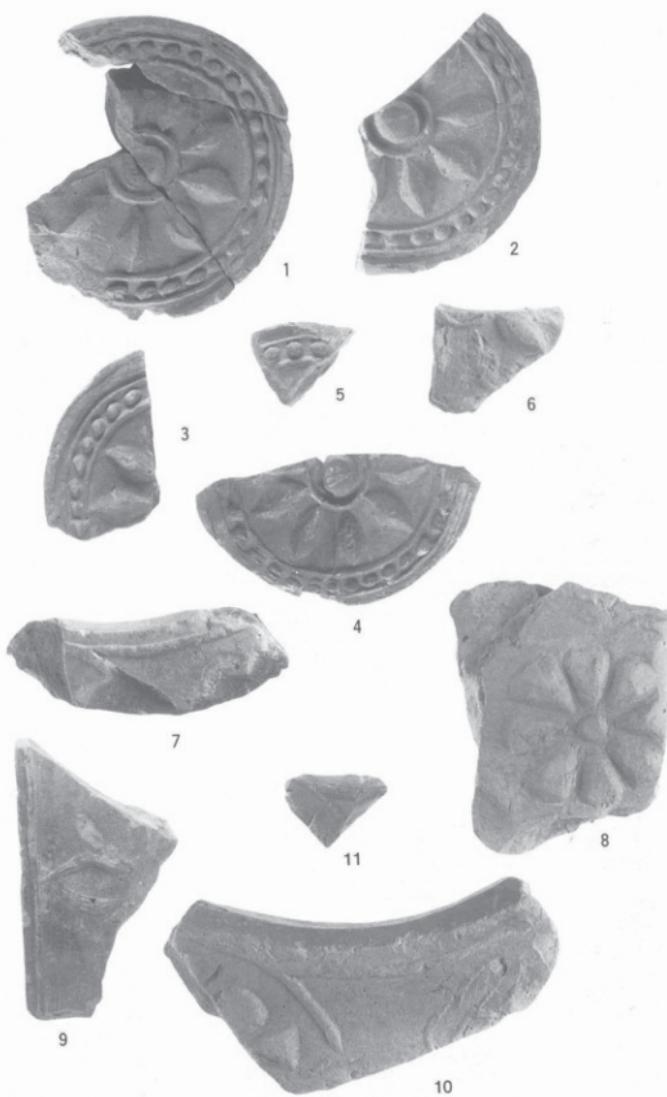
図版66 中世陶器 (擂鉢1、大甕2~4、壺5・6)



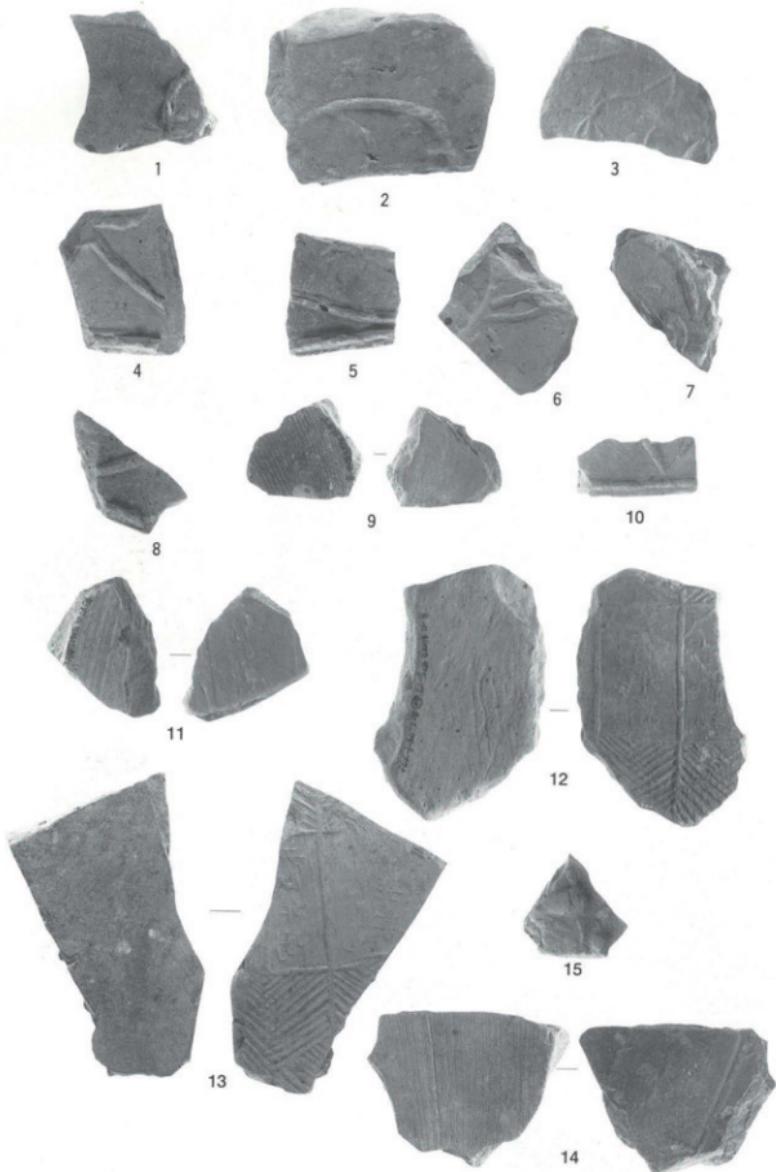
図版67 黒釉陶器 (茶碗)



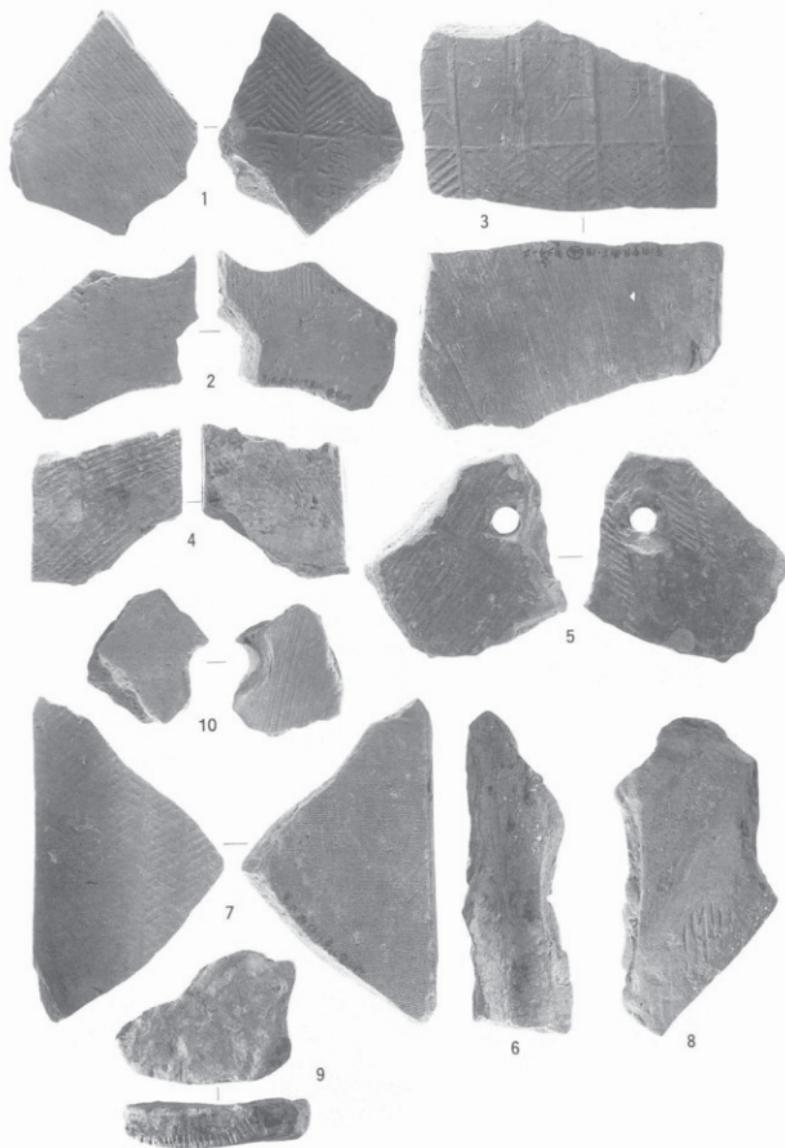
図版68 黒釉陶器
(茶入れ21~27、碗28~31)



図版69 高麗系瓦 (軒丸瓦1~6、軒平瓦7~11)



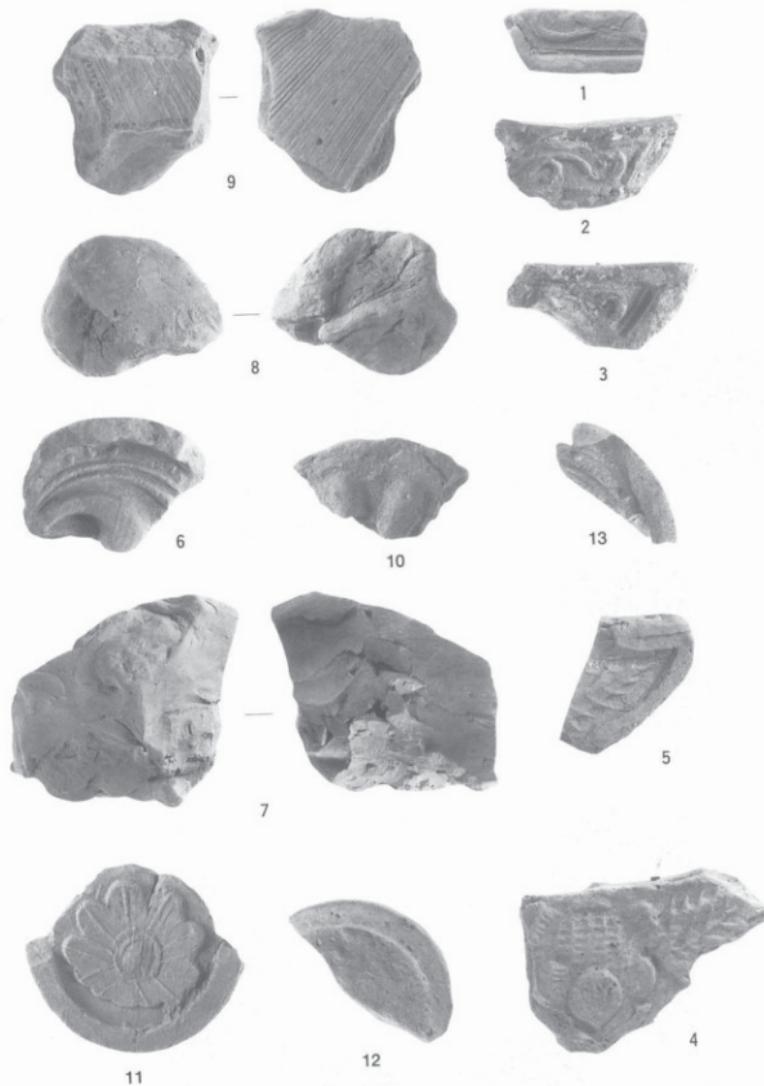
图版70 高丽系瓦 (軒平瓦 1~8·10、平瓦 9·11~14) 明朝系瓦 (軒丸瓦 15)



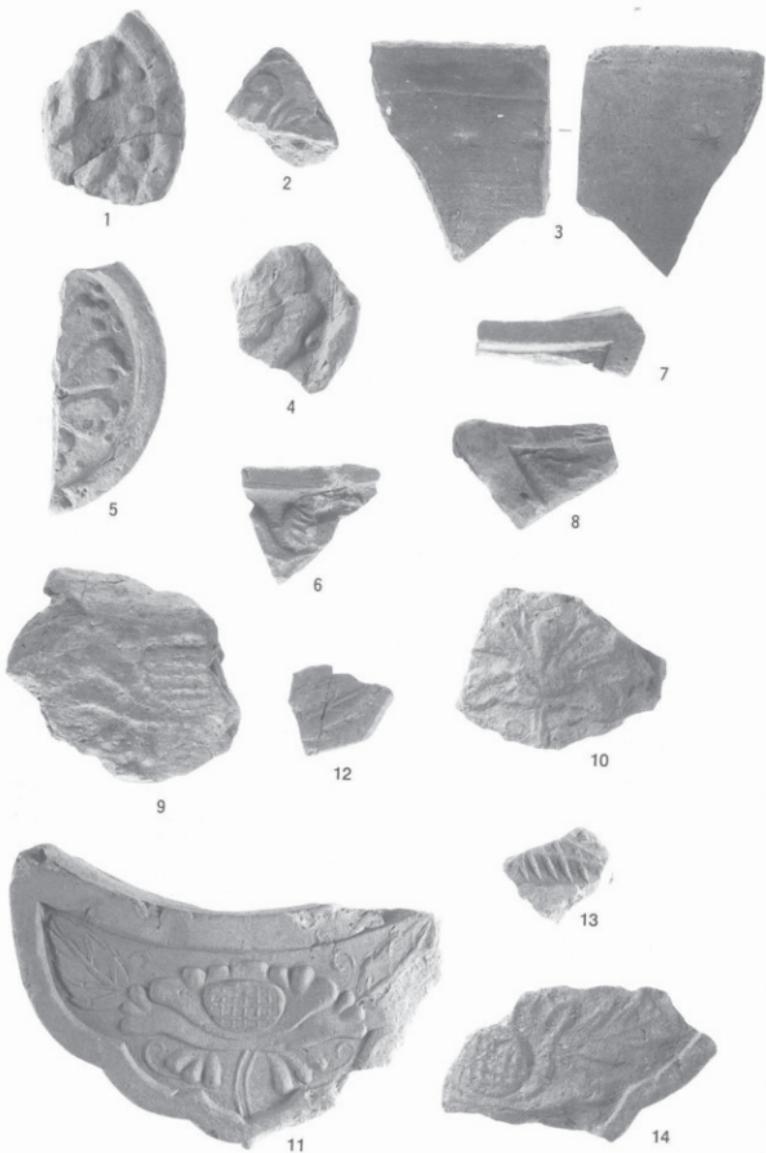
图版71 高丽系瓦 (平瓦1~5、丸瓦6~10) 大和系瓦 (雁振瓦6、8、平瓦9)



图版72 有段式平瓦 (1·3) 高丽系瓦 (平瓦2·5·7) 大和系瓦 (丸瓦4·6·8)



図版73 高麗系瓦（平瓦9） 大和系瓦（軒丸瓦6・10・13） 明朝系瓦（軒平瓦4・5）
 „ （軒平瓦1～3） „ （軒丸瓦11・12）
 „ （役瓦7・8）



図版74 明朝系瓦 (軒平瓦 1・2・4・5) (軒平瓦 6~14) (平瓦 3)



1



1



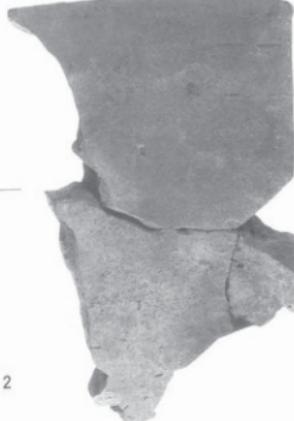
3



4



2



2

図版75 大和瓦(平瓦1・2、丸瓦3・4)

付 編

付編1

首里城京の内出土朱漆器の科学的分析

漆器文化財科学研究所所長 四柳 嘉章

I. はじめに

首里城の奉神門南西の京の内は、首里城内では最高所に位置し初期の城や御嶽が所在した重要な区域として知られている。ここから1995年度の調査によって15世紀中葉に比定される朱漆器が出土し、琉球における現存最古の漆器として注目された。今回は1996年2月に現地を見学し、そのおり採取した試料について、分析結果を報告する。

II. 研究方法

漆製品の製作は漆樹の植栽から漆液の採取、精製、塗装、加飾、胎の製作、顔料・下地粉の調製、工具の製作などからなるトータルな手工業である。これだけでも漆工史から高分子材料科学等にわたる各種分野が介在しており、どの分野に比重を置くかによって研究姿勢が異なる。筆者が「漆器考古学」あるいは広く「漆器文化財科学」と呼称するものは、下記の「表面の観察から得られる情報」と「内面の分析から得られる情報」を統合したものである。

まず「表面の観察から得られる情報」とは器形、紋様、加飾技法・材料などで、ある程度の漆工史の知識を身につけることによって、考古学者がタッチできる分野である。研究の柱としては以下のようないものを実施している。

①観察および実測図の作成 土器類と異なり漆塗りの状態や意匠、漆絵・蒔絵・沈金など加飾技法に留意して実測図を作成することが大切である。また木地の木取りも必ず観察しておくことが肝要である。

②漆器編年 土器類以外の年代尺度を追加することによって、相互の補完関係をより精度の高いものにする。また食器類の組成比率から、遺跡・遺構の性格に追ることも可能であるし、加飾・器形や分析成果と合わせて流通などの経済的諸問題にも貢献できる。

③計量分析 分類や型式認定にあたっては主観的との問題点を克服するために、多変量解析を活用し、客観的データの提供と多角的な視点から特色を浮かび上がらせる。その他の統計的データ処理も当然これに含まれる。

④実体顕微鏡による加飾材料の観察・計測 実体顕微鏡はふだん使い慣れない考古学者でも扱いやすいものであり、より微細な情報を得るためにも必要である。

⑤蛍光X線分析法 非破壊で彩漆や蒔絵顔料などを同定する。

次に「内面の分析から得られる情報」とは塗膜の微細な塗膜を採取して、自然科学的方法により漆の実態を解明する方法である。

⑥塗膜分析 塗膜片をポリエチレンやエボキシ系樹脂に包埋し、これを薄く研磨の後、金属・偏光顕微鏡で塗装工程や下地材料を分析し、品質や生産地などの手掛かりをえる。

⑦赤外線吸収スペクトル法 塗料の同定は塗膜分析では間接的であるため、赤外線を照射して塗料を同定する。長年の時間経過や保存状況による塗膜の劣化、変質などから、古いものほど漆や柿渋などの良好な吸収が得られにくい。しかし長年の各種状況に応じたデータの集積から判断を行っており、その有効性は高いと考えている。

⑧蛍光X線分析法 彩漆や蒔絵顔料などを同定。また微量の下地では同定に困難があるが、琉球石灰岩や珪藻土など特徴的なものには有効である。

⑨樹種の同定と木取り分類

以上の各方法を駆使して漆器の製作技術、形態、機能などを総合的に研究し、他の容器素材と比較検討しながら、食生活様式、食文化、精神文化、生産、流通などを解明し、地域社会総体の発展過程の筋道を明らかにすることが漆器考古学のねらいである^[註1]。

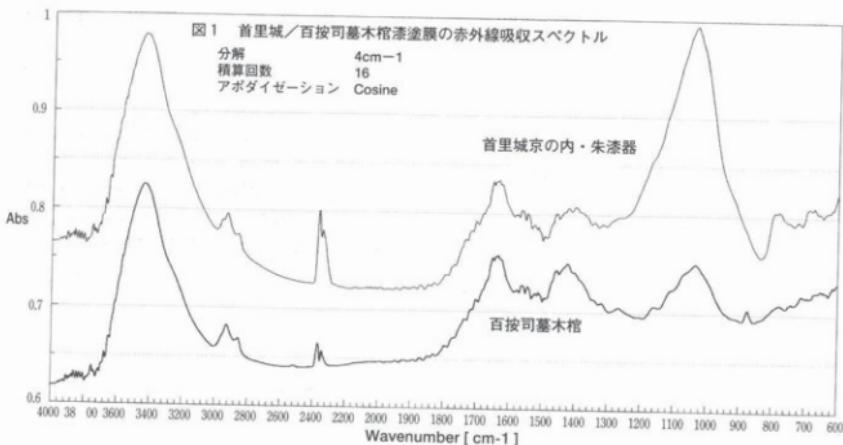
III. 分析結果

表面観察

分析漆器は塗膜だけで木胎は遺存せず、器形・木取りなどは不明である。上塗漆の色調（図版1-1）は、ほぼ黄丹（マンセル値9 R6/12）に近く、光沢も良好といえる。

塗膜分析

塗装工程（探査）は下から、①地の粉漆下地層。層厚最大は121μm。地の粉（鉱物粒子）は斜長石・石英・雲母などから構成されている。二次的焼成はみられない。ごく少量であるが藍色（インジゴ）の粒子がみられる（図版1-2・4）、その粒径は5~8μm程度である。次に②黒色漆層が施される。層厚は平均すると30μm前後である。一見すると通有の漆層に見えるが、よく観察すると油煙による黑色顔料が薄く沈殿している（図版1-2~4）。③上塗は朱漆であり、層厚は平均32μm前後。朱(HgS)粒子は1~0.5μmほどの極めて均一な微粒子から構成されている（図版1-5）。蛍光X線分析では朱(HgS)の他に若干の鉄分(Fe)も含まれていた。図1はフーリエ変換赤外分光光度計による琉球では最も古い年代の今帰仁村百接司木棺との比較スペクトルである。紙数の関係で詳細ははぶくが、ともに1040cm⁻¹付近のゴム質と1650cm⁻¹付近のアミドIとよばれるC=O振動によるバンドの吸収が強く、ここに経年変化による塗膜の特色がよく表れている。



IV. 小結

以上、京の内出土朱漆器について分析結果を報告したが、沖縄県では伝世の琉球漆器については浦添市美術館が総合的な調査をおこなっているが、出土漆器については本例が最初となる。多くの琉球漆器が地元産かどうかが検討課題となるが、本例は木胎が遺存しないので困難をともなうが、若干所見を述べておくことにしたい。

まず木胎（木地）の上に施される漆下地の地の粉構成物であるが、微量であるため詳細は検討できなかったが、斜長石・石英・雲母などが確認できた。伝世の琉球漆器の調査では地の粉はすべて焼成されたもので、酸化鉄に富むものとそれが希少なものとに大別され、前者は「火成岩グループ」と、泥岩・砂岩の「堆積岩グループ」に細分した。堆積岩グループに属するクチャはアルカリ性粘土の第三紀泥岩、ニービーは斜長石・石英・石灰岩・雲母・鉄分・貝片などを含む第三紀砂岩、コラルサンンドは石灰質砂である^{[3][4]}。試料に近いのはニービーやクチャであるが、情報量の少ない現状では产地の特定はできない。今後の検討課題としたい。

次は下地にわずかに含まれた藍色粒子の問題である。このインジゴについては、伝世品でも見られることを先の調査で確認した。それは浦添市美術館蔵の「黒漆桐鳳凰螺鈿東道盆」（印籠蓋造の方形四脚東道盆）。外面は黒色

漆、内面朱漆塗。蓋表には螺鈿による鳳凰と桐樹を対角線構図で配する。螺鈿には金箔や毛彫りが加飾されている)と「朱漆牡丹尾長鳥螺鈿卓」(外面は朱漆塗、天板裏と脚内面、足裏は黒色漆塗。入饌の天板表には螺鈿による大輪の牡丹と太湖石に乗る尾長鳥が配され、脚や足には花唐草を巡らす。こうした意匠と技法は初期琉球漆器の特色)である。前者では2個の楕円形藍色粒子が確認でき、サイズは $7.8 \times 13.4 \mu\text{m}$ と $13.4 \times 17 \mu\text{m}$ である(他に微細なものがいくつか分散)。後者では長径 $24.7 \mu\text{m}$ の楕円形藍色粒子であった。

藍色粒子については「緑漆牡丹唐草石疊沈金臘」(浦添市美術館蔵)の緑漆(青漆)顔料に用いられた藍と他の藍色粒子は、ともに偏光顕微鏡下で干渉色を示す形状・サイズともに同一であることが判明。これらは琉球藍の可能性が強いと考えるにいたった。いまでもなく琉球における藍利用の歴史は相当に古いものと思われるが、15世紀後半に与那国島に漂着した3人の朝鮮人の記録である「成宗大王実錄」には藍染めのことが取められている^(注3)。参考までに図版1-6に1993年製造の琉球藍(藍玉)の偏光顕微鏡写真(十二コル)を掲載した(試料提供は浦添市美術館)。中世の藍製造がこれと同じであったとすることは現物がないので証明ができず、ゆえに京の内漆器のインジゴが琉球藍であったと断定もできない。しかし、同時代の本土や中国漆器の下地に藍を混入するものは現状では認められず、偶然の所産ではあろうが藍の検出は琉球漆器特定に有力な材料として、検討する価値はある。

今ひとつ気になることは、目白漆芸文化財研究所の室瀬和美氏らとともに調査最終日ごろの2月26日に遺構面を踏査したおり、漆器の出土地点に隣接するS A20周辺から、細かな夜光貝の散布をかなり確認したことである。なかにはそのまま螺鈿工用として利用できる薄い薄片があり、同伴者たちとともに驚いたことを記憶している。周知のように国学・首里孔子廟跡からは夜光貝が大量に出土し、「球陽」記載の貝摺奉行所あるいは御摺奉行所跡と考えられているが^(注4)、京の内でもそうした工房があったとすれば、当然漆器も製作されたであろうし、青漆顔料の1つである藍が下地に混入されたとしても不思議ではない。京の内の性格として、御嶽とそれを構成する神庭(斎場)とする見解と城としての機能を優先して整備されたとする見解があるとうかがっている^(注5)。夜光貝が何らかの祭祀に用いられたのか、それとも15世紀段階の螺鈿を用いた琉球漆器がここで製作されたのか、夜光貝のチップがどの工程段階のものなのか、子細に検討することによって何らかの解答が得られるように思える。わずか1点の事例ではあるが、内包する問題は大きい。大方のご検討をいただければ幸いである。

末筆ながら分析に当たっては沖縄県教育庁金城亀信氏、浦添市美術館から何かとご便宜をはかっていただいた。厚く御礼申し上げる。

註

註1. 四柳嘉章「漆器」「概説中世の土器・陶磁器」真陽社、1995年。

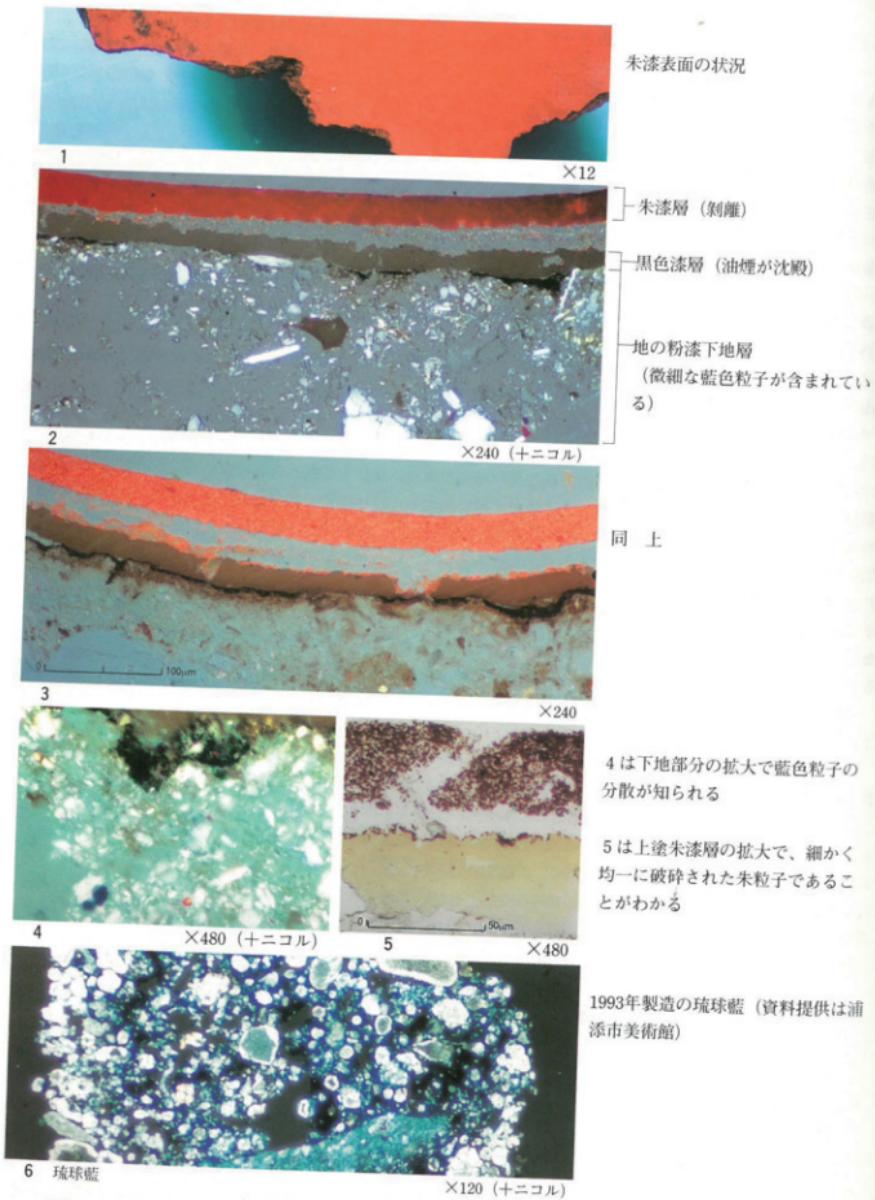
四柳嘉章「漆器考古学の方法と中世漆器」「考古学ジャーナル」401号、1996年。

註2. 四柳嘉章「琉球漆器の髹漆技法について—塗膜の科学的分析報告(1)」「浦添市美術館紀要」第6号、1997年。

註3. 「沖縄の職物—日本の藍」染色の美18号 京都書院、1982年。

註4. 上原 静・島袋 洋「国学・首里孔子廟跡の調査」「沖縄県教育委員会・文化課紀要」第7号、1991年。

註5. 沖縄県教育庁文化課「京の内発掘調査の成果について」「定例記者会見資料」1995年4月12日。



図版1 漆器塗膜顕微鏡写真

付編 2

首里城跡出土の青銅製品の科学分析調査～平成 8 年度事業～

依頼：沖縄県教育委員会
分析調査：九州テクノリサーチ 大澤 正己

1.はじめに

首里城跡（第1図）の発掘調査は国営沖縄記念公園事務所から沖縄県教育委員会が委託契約を請けて昭和63年度から平成8年度までの9カ年間にかけて発掘調査が実施されてきたが、9カ年間に出土した遺物の中で青銅製品などの本格的な金属学的調査は実施されていなかった。

首里城跡出土の金属器の産地・成分組成などについてはペールに包まれたまま今日の金属分析に至っている。

このような中で京の内地区の発掘調査が平成6年度より実施され、京の内北側部分の発掘面積2,000m²で多量の鉄器と青銅製品が混在して集中して出土した場所がみられた。多量の鉄製品に混じって青銅製の鼎形香炉¹、鐘立物などが出土していた。また、平成7年度の京の内南地区発掘面積1,000m²内で多量の中国古銭（「洪武通宝」ほか）と青銅を溶かした痕跡を示す鑄銅炉跡（小物の鋳造用）が10数基（直径20cm、深さ10cm、平面形円形状）が確認された。以上の状況から銅を多量に産出しない沖縄県で、何の目的を持って首里城の聖域である「京の内」で鋳銅を実施したのか疑問をいただき青銅製品の金属学的調査の必要性を痛感しての依頼であった。

2. 調査方法

首里城から出土した青銅製品8点（第1表）は、以下のような調査項目で調査した。

調査項目

- (1) 肉眼観察
- (2) マクロ組織
- (3) 顕微鏡組織一試料調整、外観写真、ミクロ組織、硬さ (Hv)

試料は製品の調査箇所を指定し、指定箇所を抽出してベークライト樹脂に埋め込み、エメリーワイヤー研磨紙の#150、#240、#320、#600、#1,000と順を追って研磨し、最後は被研面をダイヤモンドの3μと1μで仕上げ、顕微鏡観察を行った。なお、鉄器の金属鉄は、ピクリル（ピクリン酸飽和アルコール液）で腐食（Etching）して炭化物（バーライトとセメンタイト）チェックをして次にナイタル（5%硝酸アルコール液）で腐食してフェライト結晶粒の観察を行った。又、銅の腐食は、水：3、フッ素：1、硝酸：1の混合液で8秒間浸漬している。

(4) ピッカース断面硬度

金属鉄、銅の組織や鉄滓の鉱物組成の同定を目的としてピッカース断面硬度計（Vickers Hardness Tester）を用いて硬さの測定を行った。試験は鏡面研磨した試料に136°の頂角をもったダイヤモンドを押し込み、その時に生じた窪みの面積をもって、その荷重を除した商を硬度値としている。サンプルは顕微鏡試料を併用した。

(5) CMA (Computer Aided X-ray Analyzer) 調査

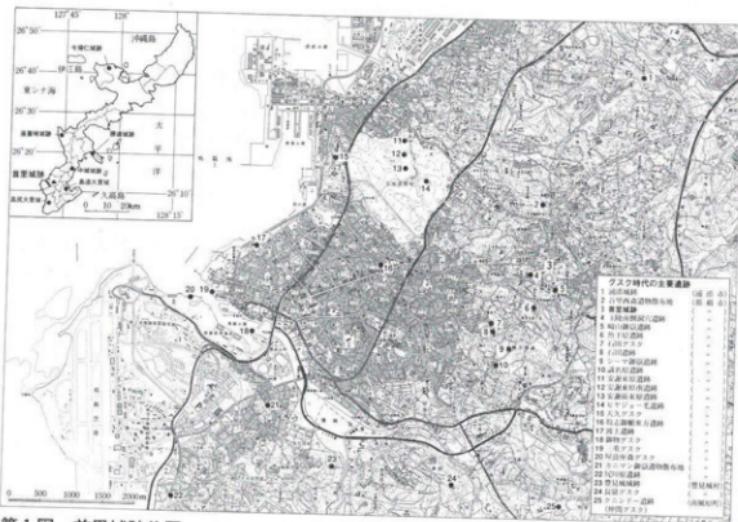
EPMA (Electron probe Micro Analyzer) にコンピューターを内蔵された新鋭分析機器である。旧式装置は別名、X線マイクロアナライザとも呼ばれる。分析の原理は、真空中で試料面（顕微鏡試料併用）に電子線を照射し、発生する特性X線を分光後に画像化し、定性的な結果を得る。更に、標準試料とX線強度との対比から元素定量値をコンピューター処理としてデータ解析を行う方法である。

3. 調査結果

(1) SUR-1：鼎形香炉

① 肉眼観察

最大胴径が34cmの青銅製の鼎形香炉²の可能性をもつ胴部の破片である。鋳型の継ぎ目が認められて鋳造による



第1図 首里城跡位置

符 号	試料名称	年 度	出 土 位 置	推定年代	計 測 値		調 査 項 目			調査結果の概要	硬 度
					大 き さ (mm)	重 量 (g)	露頭 調査	ピカズ 調査	CMA 調査		
SUR-1	應慶香炉	H6年	S S33-34 栗石直下土層	15世紀 中頃	170×100×3.5	390	○	○	○	鉛入り青銅 : 9.7% Pb - 9.2% Sn - 90.7% Cu	75.9Hv
SUR-5	鍾立物	H6年	S K01-B 第3層出土	タ	79×55×1.0	24	○	○	○	純銅 : 96.2% Cu - 3.2% O	35.0Hv
SUR-6	被 熱 中国貨錢	H7年	G-15 第2層上面	タ	48×41×35	95	○	○	○	鉛入り青銅 : 18.9% Pb - 17.9% Sn - 47.3% Cu	169Hv
SUR-7	銅 釘	H7年	H-12 第5層	タ	38×4×5	4	○	○	○	純銅 : 96.5% Cu - 3.4% O	64.4Hv
SUR-8	青 銅 滴	H7年	G-15 第2層上面	タ	19×13×7	7	○	○	○	鉛入り青銅 : 4.0% Pb - 12.2% Sn - 89.1% Cu ; 2.1% Pb - 12.7% Sn - 74.2% Cu	96.2Hv
SUR-9	酸化銅塊 小 片	H7年	G-15 第2層上面	タ	12×9×8	5	○	○	○	酸化物 : Pb - Sn - Cu	169~ 217Hv
SUR-10	燒 目 錢	H7年	G-15 第1層	初鑄造年 1534年	ø20×0.5	0.3	○	○	○	鉛・銅合金 : 5.9% Pb - 98.9% Cu	70.6Hv
SUR-11	琉球貨錢 (世高通宝)	S63年	報告歎会門・ 久慶門地区	初鑄造年 1446年	ø23		○	-	○	鉛入り青銅 : 15.2% Pb - 7.4% Sn - 74.2% Cu	-

第1表 供試材の履歴と調査項目及び調査結果の概要

製法と考えられた。文様は「流雲文」・「雷文」・「爬龍文」と刻みを入れた縦位の凸帯で文様を区画している。

(註1) 調査試料は口唇部左端破損部先端から採取している。

② 顕微鏡組織：Photo. 1の①～③に示す。銅の基地に淡茶褐色の硫化銅斑点が散在する。また、硫化銅集合個所は点触されやすく、これを起点として錆の進行が認められた。

③ ピッカース断面硬度：Photo. 1の③に銅基地の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は75.9Hvであった。この値は純銅(45 Hv前後)より硬く、錫(Sn)合金の傾向をもつ(註2)。

④ CMA調査：Photo. 4のSE(2次電子像)に示した淡茶褐色粒状部を中心に高速定性分析を行った。その結果がFig. 1である。A-Rankで検出された元素は、銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)が中心で、硫黄(S)、酸素(O)と、錫化に伴なう塩素(Cl)などである。B-Rankでは砒素(As)とアンチモン(Sb)が検出された。

高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性X線像と定量分析結果をPhoto. 4に示す。分析元素の存在は、白色輝点の集中度によって読み分ける。銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)は、大部分が基地に溶け込んでいるが、硫黄(S)は、淡茶褐色斑点部に集中する。定量分析値はSE(2次電子像)の12の番号をつけた硫黄(S)が検出される淡茶褐色斑点は、76.5%Cu-20.3%Sで硫化銅(CuS)の組成となる。これには鉛(Pb)が1.9%固溶される。

次にSE(2次電子像)に13の番号をつけた個所は硫化銅斑点の白く輝く個所で、91.5%Pb-34.4%Cu-5.6%S-7.2%Oの組成となり、この個所にのみ鉛(Pb)の偏析が認められた。また、基地の14の番号個所は、90.7%Cu-9.2%Sn-9.7%Pbとなり、当金属組成は鉛入青銅と推定される。

(2) SUR-5：鐘立物

① 肉眼観察：兜の前面につく眉庇につづいた飾板(前立)の鍔形であろうか。現存長さ7.9cm、幅5.5cm、厚み約1.0mmで長さ方向約1/3で大きく弯曲する。表面は局部的に濃緑青の錆が発生し、裏側は灰色粘土が薄く覆っている。

② 顕微鏡組織：Photo. 1の④～⑧に示す。組織写真は白くみえるが顕微鏡視野下では赤銅色の基地上に粒晶界を黒く細い線が走り、更に亀甲状交点は黒く侵されて腐食が進行した個所があり、ここは亞酸化銅(Cu₂O: Cuprite)となる。

③ ピッカース断面硬度：Photo. 1の⑦と⑧の2個所に硬度測定の圧痕を示す。硬度値は軟質で38.6Hv、32.8Hvを呈した。合金元素の添加がない純銅である。

④ CMA調査：Photo. 5のSE(2次電子像)に示した酸化結晶粒界と亞酸化銅(Cu₂O: Cuprite)の灰色個所を対象とした高速定性分析結果をFig. 2に示す。A-Rankで検出される元素は銅(Cu)であり、添加元素の痕跡はなく、酸素(O)と塩素(Cl)の含有であった。B-Rankでの亜鉛(Zn)の検出があったのは、随伴微量元素の存在であろう。

次にPhoto. 5の特性X線像をみると、結晶粒界と腐食個所から酸素(O)と塩素(Cl)に白色輝点が集中して、それらの元素の存在を知ることができる。また、SE(2次電子像)の9の番号をつけた腐食個所の定量値は、94.4%Cu-10.7%OとなりCu₂Oを裏付ける。更に10の番号の基地では103%Cuとなる。純銅を現わす。(100%94.4%Cu-10.7%OとなりCu₂Oを裏付ける。更に10の番号の基地では103%Cuとなる。純銅を現わす。) 検証の目的で、35μm中エリヤで分析すると96.2%Cu-3.2%Oとなった。繰り返すが純銅成分である。

(3) SUR-6：被熱中國貨錢

① 肉眼観察：中国貨錢が火災で癒着した塊。初鑄造年が明代の1368年となる洪武通宝が多い。穴開き貨錢が20枚前後で被熱癒着したもので、最表面は薄く緑青で覆われている。

② 顕微鏡組織：Photo. 2の①に示す。銅基地に腐食物の亞酸化銅(Cu₂O)を残す個所や結晶粒界が認められ、これに亞酸化銅以外の茶褐色析出物の存在が確認された。

③ ピッカース断面硬度：Photo. 2の①に組織と兼用させたもので、硬度測定の圧痕を示す。硬度値は、169Hvと硬質である。合金組成が想定された。

④ CMA調査：Photo. 6のSE(2次電子像)に示した銅基地と、結晶粒界析出物及び茶褐色不定粒子の高

速定性分析結果をFig.3に示す。A-Rankで検出された元素は、銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)主体に、アルミニウム(Al)、硅素(Si)、酸素(O)など一部汚染元素の侵入が認められた。

高速定性分析結果の面分析である特性X線像と定量分析結果をPhoto.6に示す。SE(2次電子像)の中で6の番号をつけた茶褐色不定形結晶は、白色輝点が錫(Sn)と酸素(O)に集中して定量値が81.9%Sn-28.3%O-3.9%Cuとなる。錫(Sn)の偏析粒が確認できた。

また、SE(2次電子像)の7の番号個所は基地であって93.1%Cu-28.3%O組成となり、被熱の影響が現われた。同じく8の番号の結晶粒界は、鉛(Pb)が135.3%と異常値が出ているが、これも被熱による晶出と推定される。

なお、銅基地の35 μ m中エリアでの定量分析値は、47.3%Cu-17.9%Sn-18.9%Pb-15.3%Oとなっていて、被熱にともづく錫(Sn)と鉛(Pb)の変動が大きいことが読みとれた。

(4) S U R - 7 : 銅釘

① 肉眼観察：現存長さ3.8cm、0.4×0.5cm幅厚みをもつ角かい折状の銅釘である。全面に淡く緑青が覆う。先端側より試料採取を行った。

② 顕微鏡組織：Photo.20の②～④に示す。汚染や腐食の少ない銅基地であるが、極く局部的に紡錘状の亜酸化銅(Cu₂O: Cuprite)が認められた。

③ ピッカース断面硬度：Photo.20の④に基地銅の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は64.4Hvであった。純銅であるが鋳造仕上げが施されて、硬度値は若干高め傾向にあがっていた。

④ CMA調査：Photo.7のSE(2次電子像)に示した銅基地と亜酸化銅(Cu₂O)の高速定性分析結果をFig.4に示す。A-Rankで検出された元素は、銅(Cu)と酸素(O)であって純銅と推定される。Photo.7の特性X線像では、紡錘状の亜酸化銅(Cu₂O)に酸素(O)が検出されて、4の番号個所での定量分析値は93.2%Cu-11.1%Oの組成となった。また、SE(2次電子像)の5の番号の基地銅は104%Cuが提示されて純銅を現すものとなっている。因みに35 μ m中エリアでの定量分析結果では、96.6%Cu-3.4%O組成となった。合金元素の添加のない純銅に同定される。

(5) S U R - 8 : 青銅滴

① 肉眼観察：楕円状7gの表面張力から球状化した青銅滴である。表面は風化で肌荒れを起こしてザラつきを呈し、灰色粘土が薄く覆う。

② 顕微鏡組織：Photo.20の⑤～⑦に示す。銅基地の結晶粒界交点に黒色腐食と析出物の混在する個所が点在する。⑤は粒界析出物の拡大組織で錫の酸化物が想定される。

③ ピッカース断面硬度：Photo.20の⑦に基地の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は96.2Hvであり、合金元素の添加が予測される。

④ CMA調査：結晶粒界の交点を2視野分析した。その一つは、Photo.8のSE(2次電子像)に示した個所で、これの高速定性分析結果をFig.5に示した。A-Rankの検出元素は、銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)中心に、酸素(O)、ボロン(B)、銀(Ag)、塩素(Cl)などである。この結果を視覚化した面分析の特性X線像と定量分析結果がPhoto.8である。SE(2次電子像)の9の番号を付けた35 μ mエリアの個所は、銅(Cu)と錫(Sn)、鉛(Pb)、酸素(O)に白色輝点が集中し、定量分析値は、29.5%Cu-42.3%Sn-25.3%Pb-16.8%O組成で、僅かに1.4%B-2.1%Clを含む。基地の10の番号個所は、88.7%Cu-12.7%Sn-2.1%Pb組成となる。また、11の番号個所は100%Cuで合金元素の混入のない純銅域であった。

次にもう1個所調査を行ったPhoto.9のSE(2次電子像)に示した結晶粒界の高速定性分析結果をFig.6に示す。A-Rankで検出された元素は、銅(Cu)、錫(Sn)、鉛(Pb)、酸素(O)である。この結果の面分析となる特性X線像と、定量分析値がPhoto.9である。結晶粒界の偏析成分となる白色部を35 μ mのエリアでみると、(7の番号個所)78.5%Cu-23.2%Sn-8.6%Pbとなる。基地の8の番号個所は、89.1%Cu-12.2%Sn-4.0%Pb組成となり、粒界の錫(Sn)、鉛(Pb)の約1/2の数値となっていた。被熱中國貨銭に近似した成分系となっている。

(6) S U R - 9 : 酸化銅塊小片

① 肉眼観察：銅滓として挙げられていたが被面は緑青をふく酸化銅が露出する。全面を白色粘土が薄く覆う。5 g の小片。

② 顕微鏡組織：Photo. 3の①～③に示す。金属銅はなく酸化銅となり、結晶粒界が明瞭となる。

③ ピッカース断面硬度：Photo. 3の②は白色粒内に硬度測定の圧痕を、③は淡茶褐色粒の硬度圧痕を示す。硬度値は、前者が217Hv、後者で169Hv であった。酸化物となっていて組織同定はできなかった。

④ C M A 調査：Photo. 10の4層に分かれた個所の高速定性分析結果をFig. 7に示す。A-Rank で検出された元素は、銅 (Cu)、錫 (Sn)、鉛 (Pb)、硫黄 (S)、酸素 (O) でスラグ成分はほとんどなく、マグネシウム (Mg)のみの含有である。錆化の進行で塩素 (Cl) の検出があった。

高速定性分析結果を視覚化した面分析の特性X線像と定量分析結果をPhoto. 10に示す。S E (2次電子像) に3の番号をつけた暗黒色部は錆化度の多い個所で、48.3%Cu-21.5%O-19.7%Cl となる。亜酸化銅 (Cu₂O: Cuprite) に塩素 (Cl) の侵入した化合物である。

S E (2次電子像) の4の個所は、錫 (Sn) の酸化物で、82.8%Sn-29.5%O 組成となり、5の番号個所は鉛 (Pb) の酸化物で、測定誤差が現れて13.9%Pb-14.9%O となる。ここからは硫黄 (S) が強く検出されて10.2%S の定量値が得られた。

更にS E (2次電子像) の6の番号個所は、86.8%Cu-12.0%O-3.5%Pb で亜酸化銅の成分系であった。なお、マグネシウム (Mg) は全体に散在した状態であり、該品は滓としての傾向は読みとれなかった。

(7) S U R - 10 : 鳩目錢

① 肉眼観察：琉球貨銭で、一部を欠損した鳩目錢である。直径2.0cmで中央に7.5mm方形の穴があく。厚みは0.4mmであった。表面は淡い緑青と灰色粘土被膜で覆われる。

② 顕微鏡組織：Photo. 3の④～⑥に示す。組織は硫化銅 (CuS) の斑点を有するが、他に特徴をもたない。

③ ピッカース断面硬度：Photo. 3の⑥に基地の硬度測定の圧痕を示す。硬度値は70.6Hv であった。高価な錫添加のない鉛 (Pb) 一銅 (Cu) 合金程度の硬度値である。

④ C M A 調査：Photo. 11のS E (2次電子像) に示した基地銅と、円形茶褐色介在物の高速定性分析結果がFig. 8である。A-Rank で検出された元素は、銅 (Cu)、硫黄 (S)、塩素 (Cl)、酸素 (O) であった。この結果の特性X線像と定量分析結果をPhoto. 11に示す。S E (2次電子像) の1の番号をつけた円形茶褐色介在物は、硫黄 (S) と銅 (Cu) に白色輝点が集中し、75.4%-19.7%S-4.8%Pb 組成となり硫化銅が同定された。次に基地に2の番号をつけた個所は、98.9%Cu-5.9%Pb となり、鉛 (Pb) 一銅 (Cu) 合金を表わす、鳩目錢は安価なコストを狙った合金配合であった。

(8) S U R - 11 : 琉球貨銭 (世高通宝)

① 肉眼観察：初鋳造が1446年の貨銭であり、非破壊調査の要請だったので側面をペーパー研磨・バブ仕上げで調査した。全面緑青をふくが遺存度は良好である。

② 顕微鏡組織：Photo. 3の⑦に示す。基地銅中に茶褐色不定形異物の硫化銅 (CuS) が点在する組織をもつ。

③ C M A 調査：Photo. 12のS E (2次電子像) に示した3層の異物の高速定性分析結果をFig. 9に示す。A-Rank で検出された元素は、銅 (Cu)、錫 (Sn)、鉛 (Pb)、硫黄 (S)、磷 (P)、酸素 (O) などである。この結果を視覚化した面分析の特性X線像と定量分析結果がPhoto. 12である。

S E (2次電子像) に1の番号をつけた茶褐色不定形異物は、銅 (Cu) と硫黄 (S) に白色輝点が集中し、81.6%Cu-21.1%S 組成となり硫化銅 (CuS) が同定される。鉱石からの未溶解鉱物に由来されよう。

S E (2次電子像) で白色にみえる2の番号個所は、鉛 (Pb) が強く検出されて異常値となり、100%を越えた偏析粒となる。また、白色濃度の若干低い3の番号個所は、92.6%Cu-8.3%Sn で青銅組成で、以上を総合すると、鉛入り青銅組成となる。これを裏付けるのが35 μm 中エアリアの定量分析値で、74.2%Cu-7.4%Sn-15.2%Pb 成分となる。なお不純物として1.0%S-0.5%P-1.8%O が検出された。

4. まとめ

グスク時代の首里城内で鋳銅工房が存在した事は、1994年の銅粒含みの羽口や銅滓の出土から推定できたが（註3）、今回調査した出土遺物の中の銅滴からも裏付けられる。

城内での鋳銅作業の目的は何であろうか。日常装飾品の製作もあったろうが、一つの大きな目標は貨銭の铸造ではなかろうか。原料となる銅は、リサイクル品で、例えば純銅は鎧立物や銅釘があり、合金製品は被熱中国錢なども充当された。

琉球貨銭は、鳩目銭は高価な錫（Sn）の添加はなく鉛（Pb）一銅（Cu）合金で済ませ、世高通宝になると、鉛入り青銅合金（74.2%Cu-7.4%Sn-15.2%Pb）の成分系となる。銅が多量に産出しない琉球王国では、銅素材は当時の政治・経済の情勢によって中国側へ求めたり日本側へ寄ったりの実態と考えられる。その現れが被熱中国貨銭であり、鎧立物の出土であろう。

註

- 註1. 金城亀信「首里城跡京の内出土の青銅器」『南島考古だより』第52号 沖縄考古学会 1995.6.2。
註2. 大澤正己「国分遺跡・曾谷南遺跡出土鍛冶関連遺物の金属学的調査」「市川市出土遺物の分析」～古代の鉄・土器について～（平成7年度市川市埋蔵文化財調査・研究報告）市川市教育委員会 1996年。
註3. 大澤正己「カイジ浜貝塚出土の鉄器及び周辺遺跡出土遺物の金属学的調査」「カイジ浜貝塚」（沖縄県文化財調査報告書第115集）沖縄県教育委員会 1994年。

第2表 銅塊の化学分析値と硬度の関係

項目 試料	遺跡名	試 料	推定年代	化 学 組 成 (%)								ビッカース 断面硬度 Hv	
				Cu	Sn	Pb	Zn	Sb	Ni(Ag)	Fe	As		
SMK-11	国 分	銅 素 材	8C初頭～中頃	90.7	0.004	0.002	0.001	0.13	0.13	1.63	1.07	0.62	46.0
KB - 1	金 井 B	銅 塊	中 世	92.1	0.56	4.67	0.000	0.086	—	0.065	0.342	—	45.4
H - 9 1 8	尾 崎	粘土隕石侵入岩	9 C 代	97.2	—	0.12	0.000	0.008	—	0.005	2.29	—	78.2
C - 8 7 3	太井(その1)	銅 片	平 安	92.3	0.014	2.55	Nil	0.20	0.013	0.035	—	—	67.4
KIOI - 3	紀尾井町	銅なまこ	江 戸	98.9	0.010	0.64	Nil	0.010	0.017	0.013	—	—	72.5
KIOI - 4	紀尾井町	青銅インゴット	江 戸	82.3	15.44	0.26	Nil	0.038	0.010	0.086	—	—	98.8

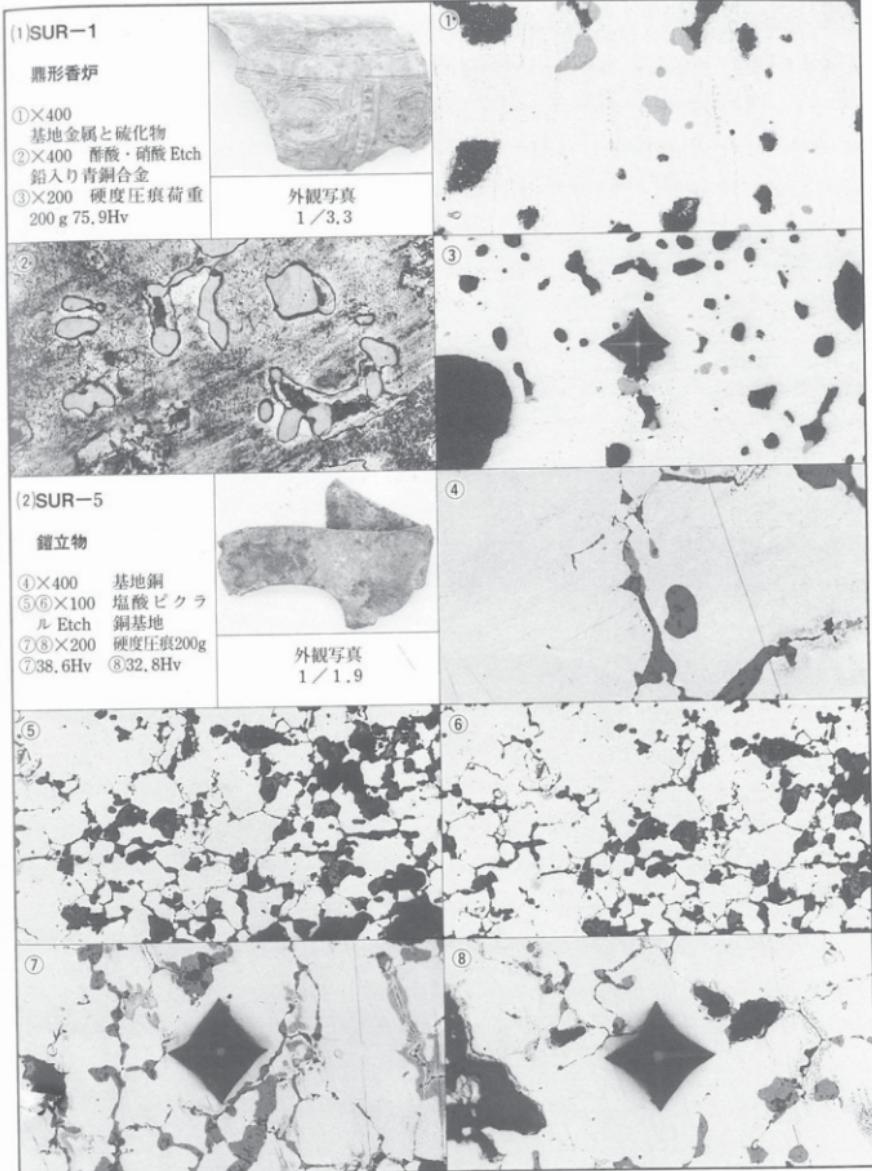


Photo. 1 鼎形香炉・鎧立物の顯微鏡組織

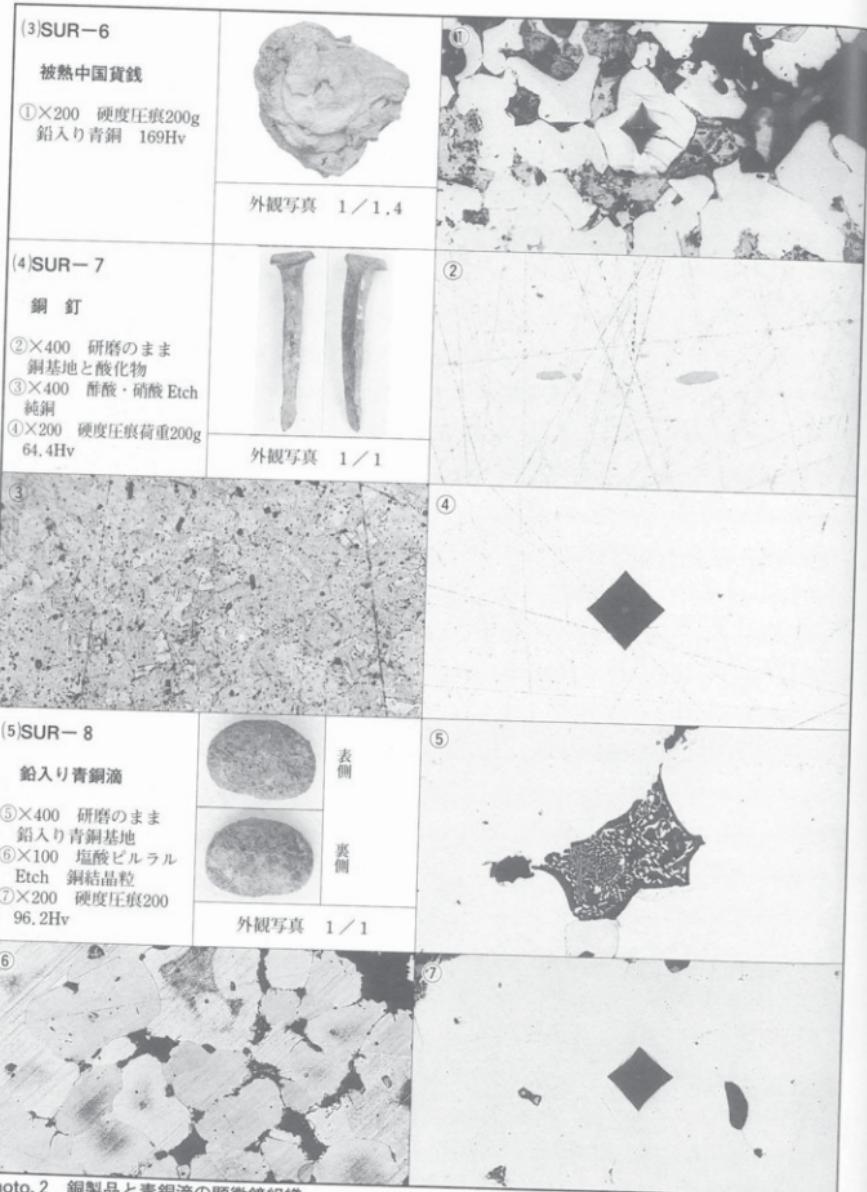


Photo. 2 銅製品と青銅滴の顕微鏡組織

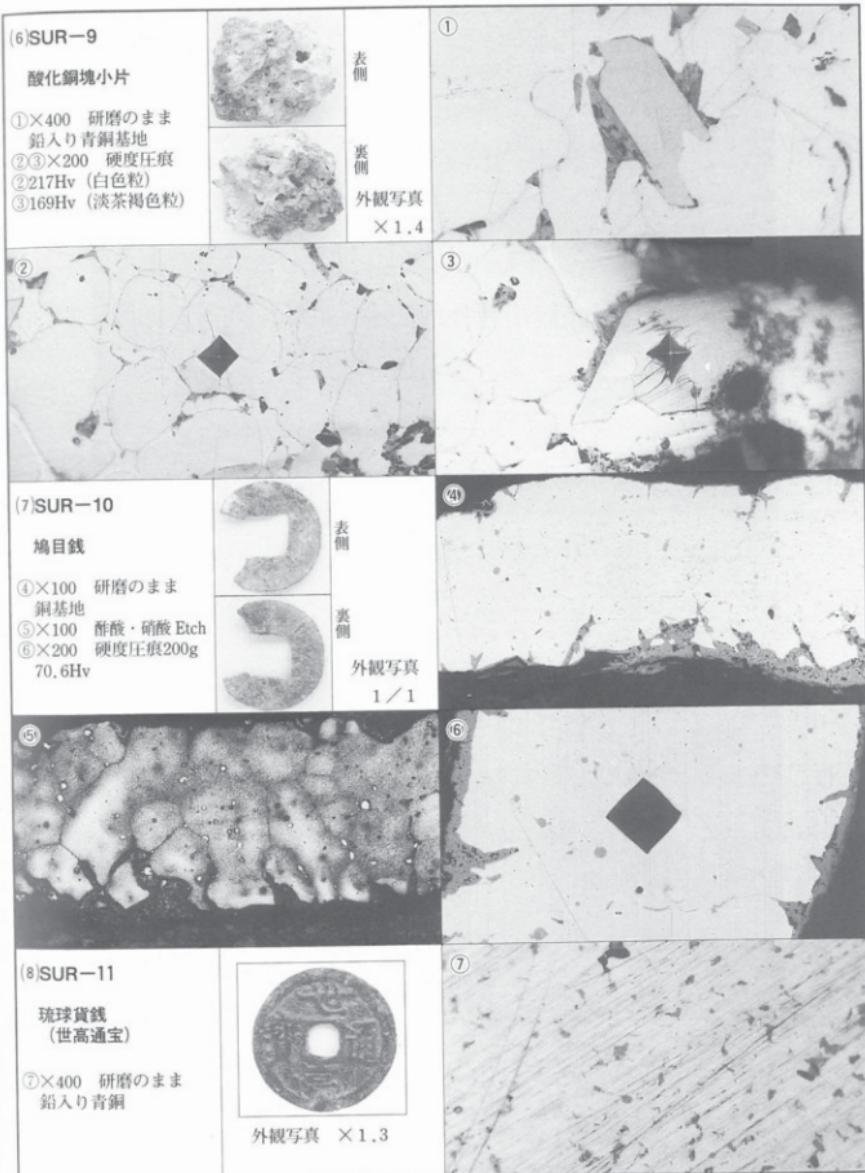


Photo. 3 銅塊と銅錢の顕微鏡組織

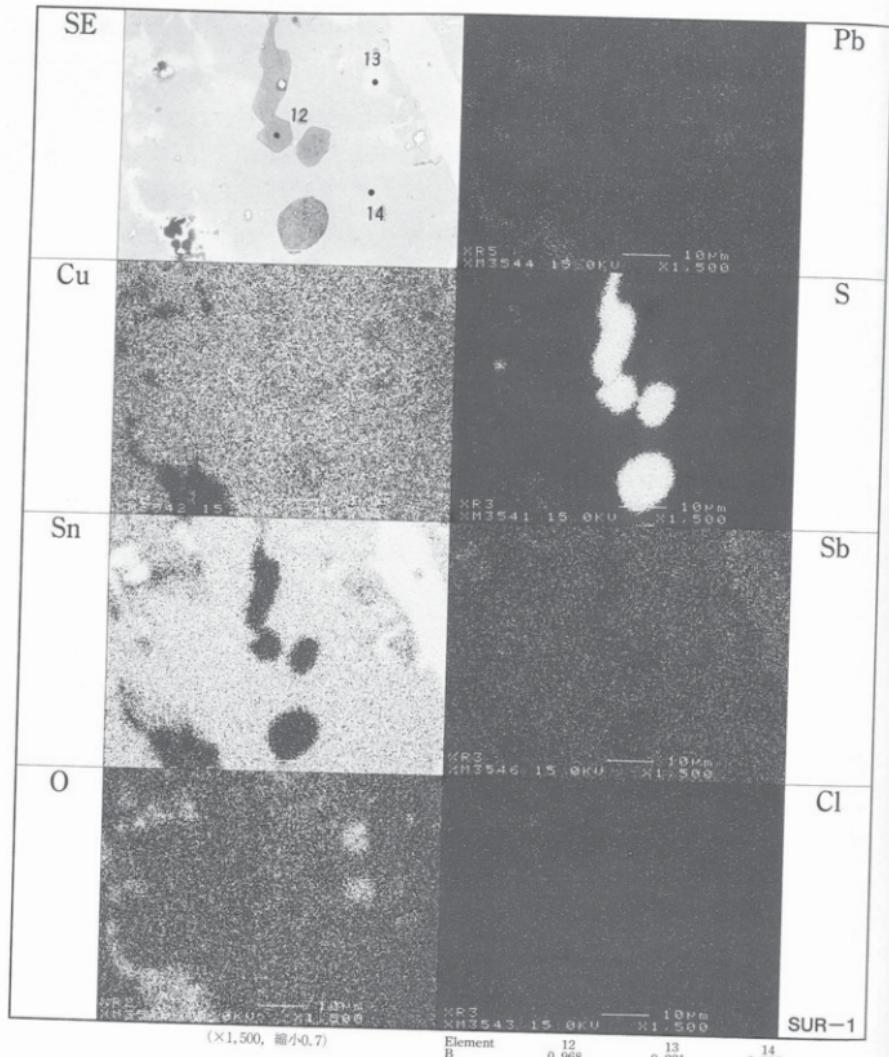
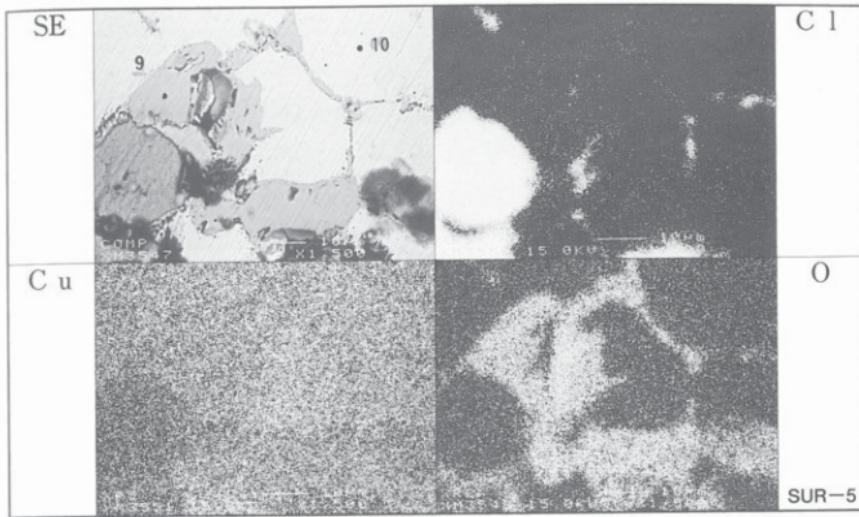


Photo. 4 鼎形香炉(SUR-1) の特性X線像と定量分析値

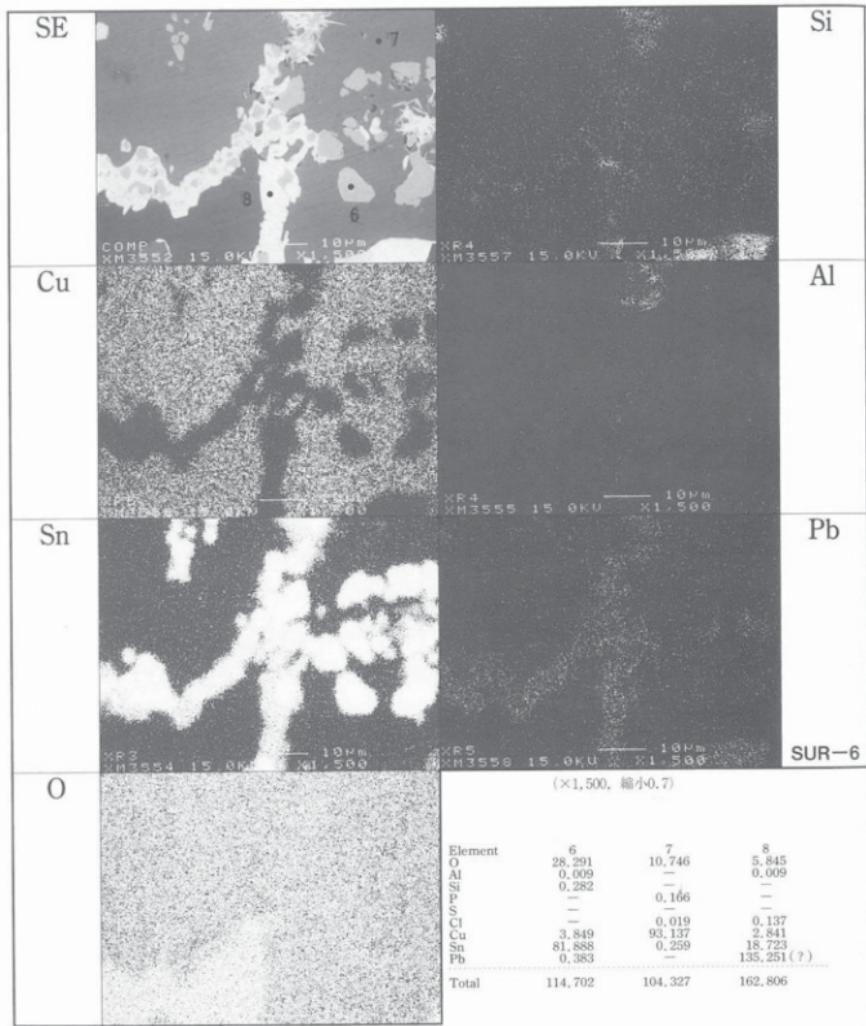


($\times 1,500$, 縮小0.7)

ZAF Metal	
Element	Wt(%)
O	3.210
Cl	0.603
Cu	96.188
Total	100,000
35 μ m 中エリアでの分析	

Element	9	10
O	10.698	—
Al	—	—
Si	0.030	0.095
P	0.147	0.158
S	—	—
Cl	0.170	0.055
Cu	94.368	103.997
Sn	—	0.021
Pb	1.970	5.360
Total	107,383	109,686

Photo. 5 錠立物(SUR-5) の特性X線像と定量分析値

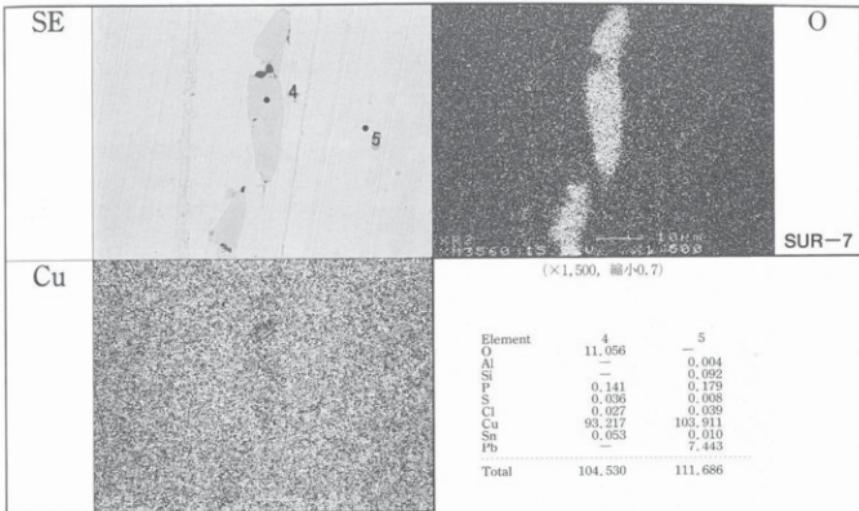


Element	6	7	8
O	28.291	10.746	5.845
Al	0.009	—	0.009
Si	0.282	—	—
P	—	0.166	—
S	—	—	—
Cl	—	0.019	0.137
Cu	3.849	93.137	2.341
Sn	81.888	0.259	18.723
Pb	0.383	135.251 (?)	—
Total	114.702	104.327	162.806

ZAF Metal	
Element	Wt(%)
O	15.278
Al	0.302
Si	0.365
Cu	47.343
Sn	17.861
Pb	18.852
Total	100.000

35 nm 中エリアでの分析

Photo. 6 被熱中國貨銭(SUR-6) の特性X線像と定量分析値



ZAF Metal	
Element	Wt. (%)
O	3.417
Cu	96.583
Total	100.000
35 μm 中エリヤでの分析	

Photo. 7 銅釘(SUR-7) の特性X線像と定量分析値

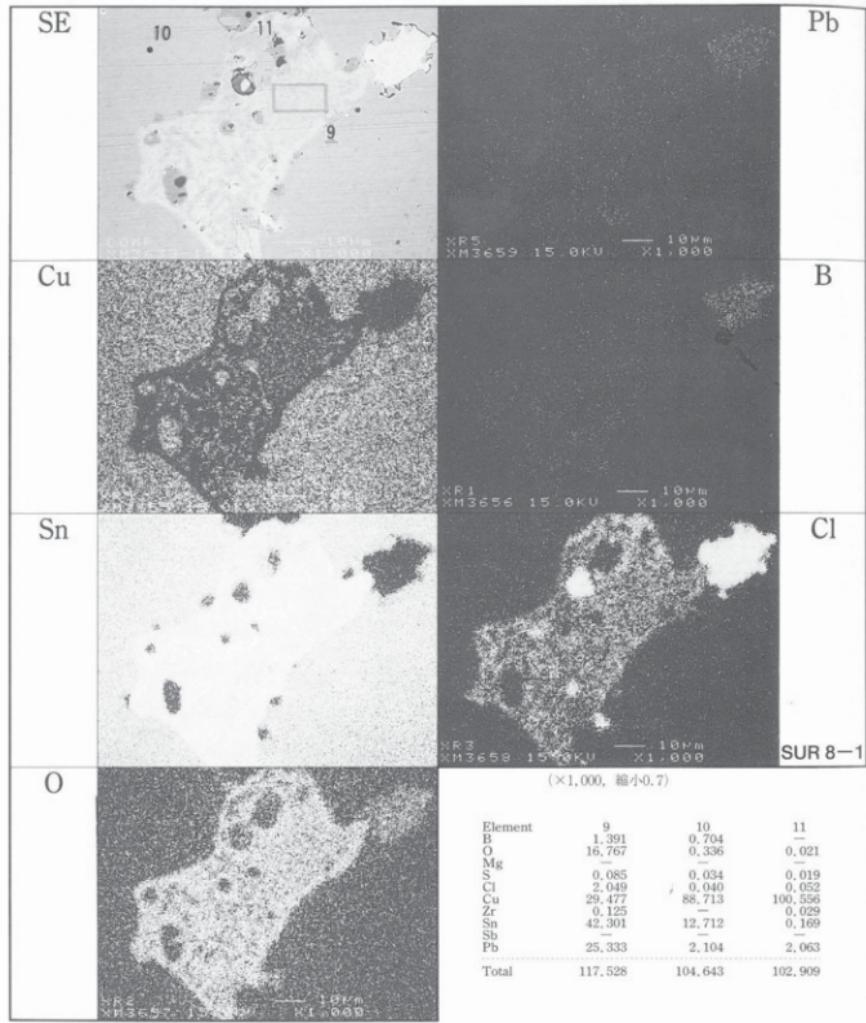


Photo. 8 鉛入り青銅滴(SUR-8-1) の特性X線像と定量分析値

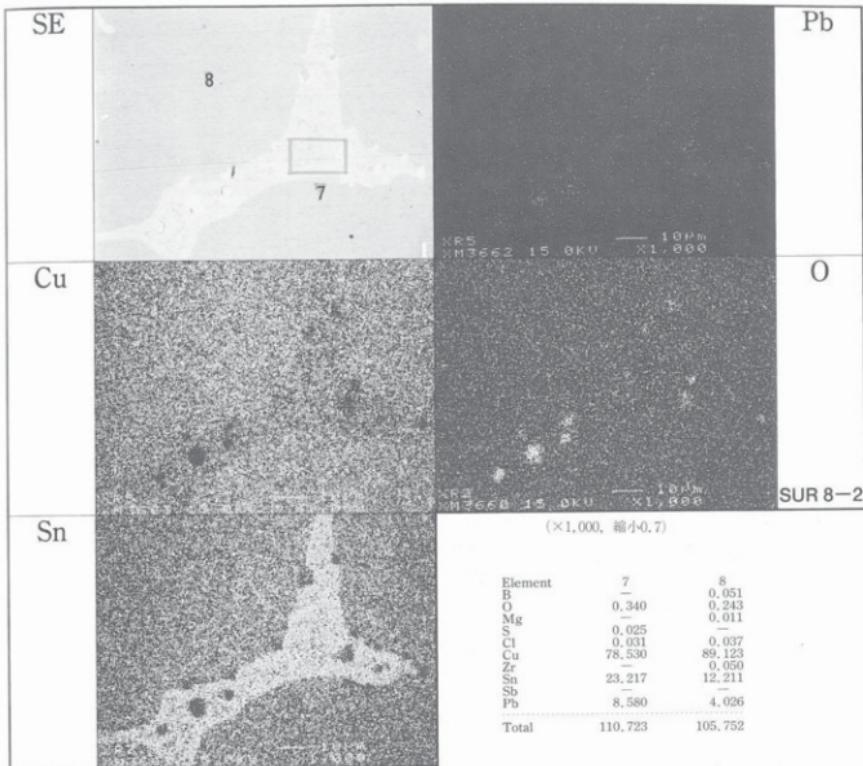
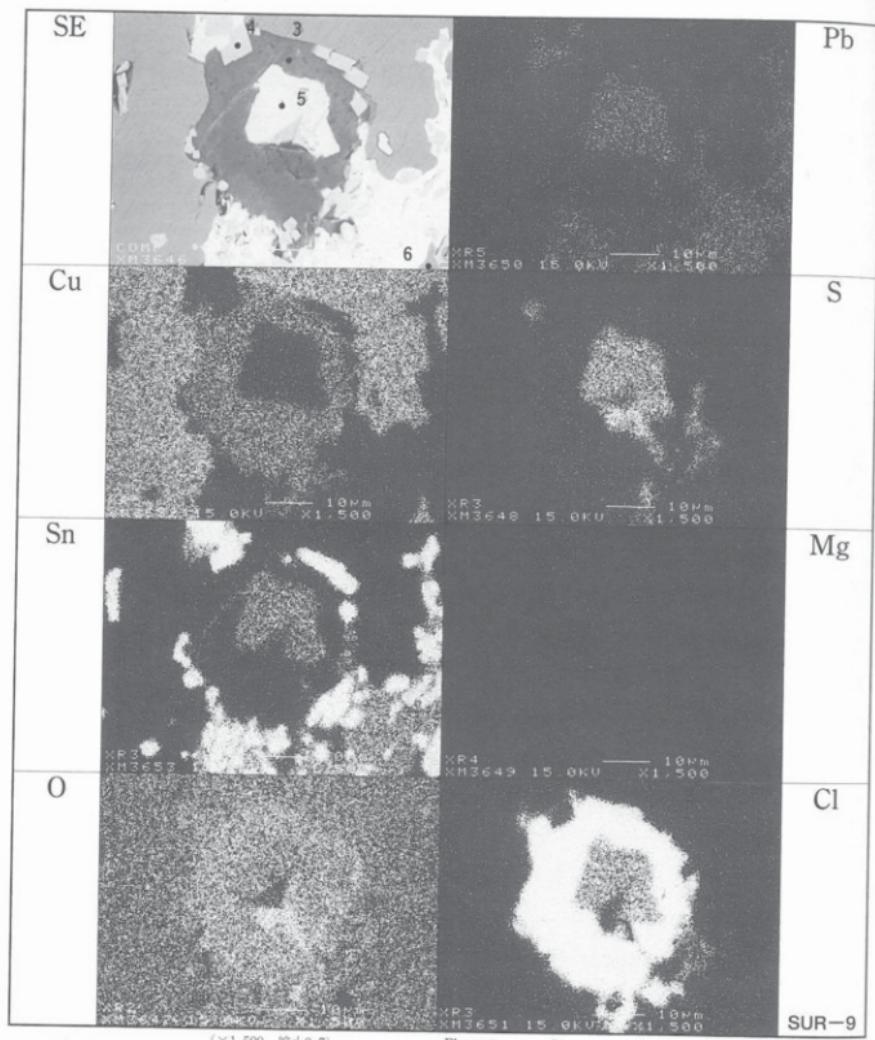


Photo. 9 鉛入り青銅滴(SUR-8-2) の特性 X 線像と定量分析値



($\times 1,500$, 縮小0.7)

Element	3	4	5	6
B	6,802	—	0,162	0,031
O	21,493	29,474	14,885	12,033
Mg	—	0,011	—	0,004
S	0,037	—	10,232	0,004
Cl	19,656	0,047	0,058	0,027
Cu	48,246	3,497	2,739	86,828
Zr	—	—	—	—
Sn	—	82,746	0,004	0,325
Sb	—	—	—	—
Pb	7,490	1,379	139,090	3,527
Total	103,724	117,154	167,170	102,779

Photo. 10 酸化銅塊小片(SUR-9) の特性X線像と定量分析値

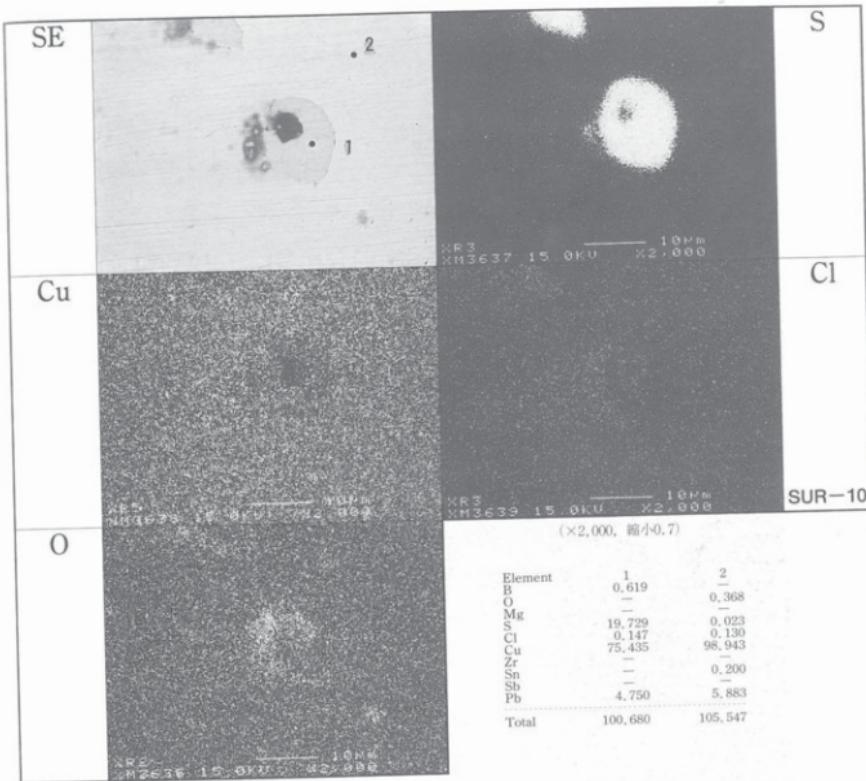
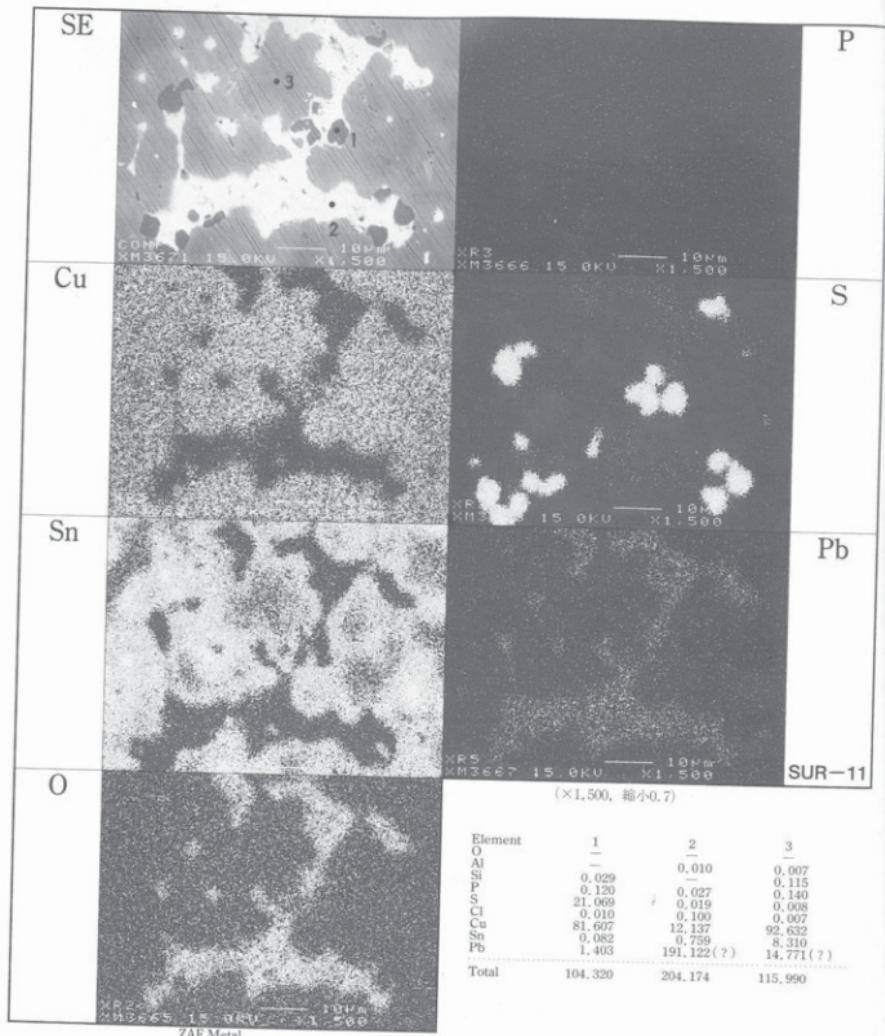


Photo. 11 塙目錢(SUR-10) の特性X線像と定量分析値



ZAF Metal	
Element	Wt. (%)
O	1.751
P	0.462
S	0.993
Cu	74.147
Sn	7.408
Pb	15.239
Total	100.000
35 μm中エリアでの分析	

Photo. 12 琉球貨銭（世高通宝）(S U R -11) の特性X線像と定量分析値



SUR 1 :

正面



裏面



SUR 5 :

正面



裏面



SUR 6 :

正面



裏面

Photo. 13 SUR 1: 鼎形香炉、SUR 5: 鎧立物、SUR 6: 被熟中国貨錢

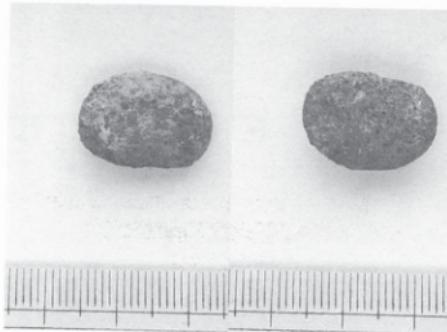


SUR 7: 鉄釘

正面

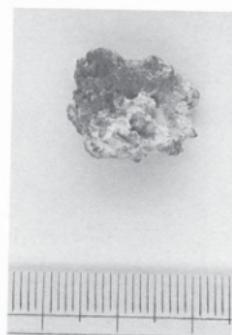
裏面

側面



SUR 8: 正面

裏面



SUR 9



SUR 10: 正面

裏面



SUR 11: 正面

裏面

Photo. 14 SUR 7: 鉄釘、8: 鉛入り青銅滴、9: 酸化銅塊小片、10: 鳩目錢、11: 琉球貨錢（世高通宝）

Fig. 1 鼎形香炉(SUR-1) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 (Photo. 4と対応)

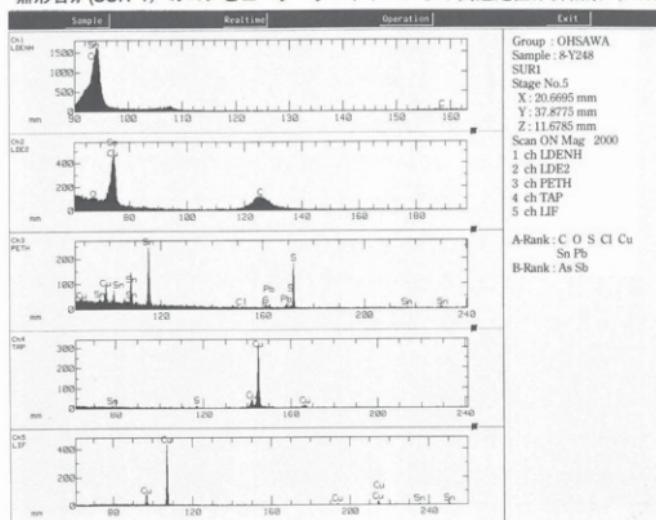


Fig. 2 鎧立物(SUR-5) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 (Photo. 5 に対応)

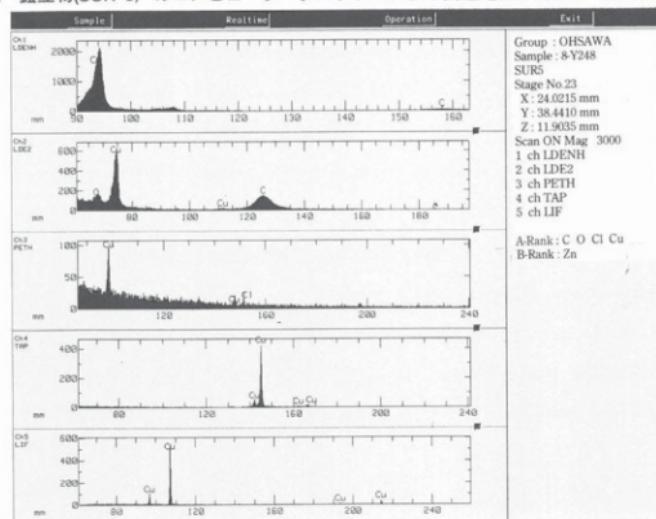


Fig. 3 被熱中国貨銭(SUR-6)のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 (Photo. 6に対応)

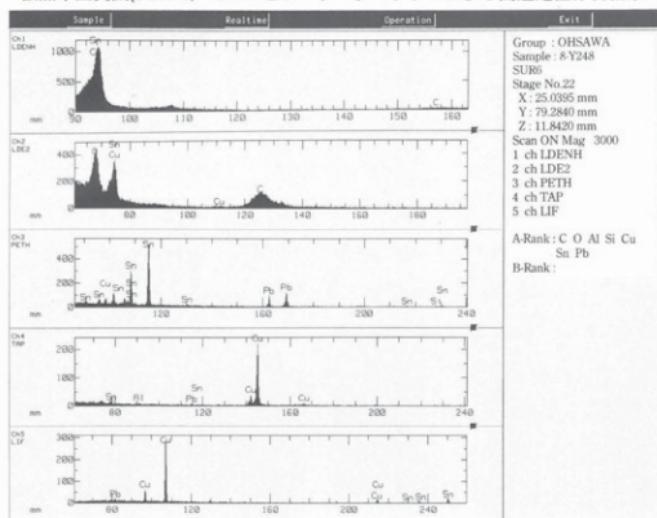


Fig. 4 銅釘(SUR-7)のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 (Photo. 7に対応)

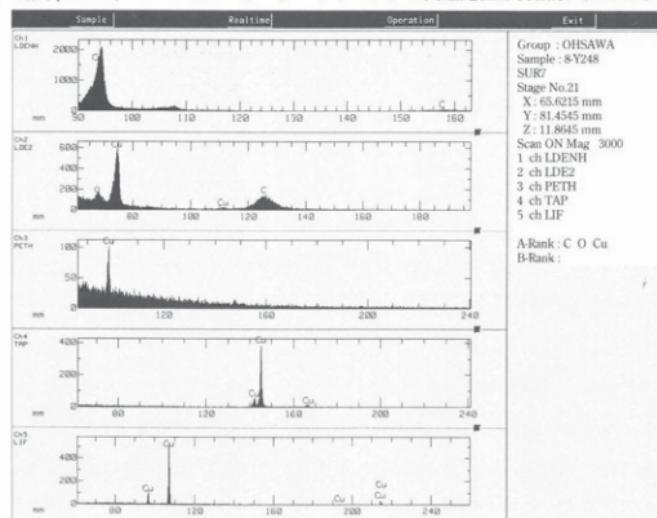


Fig. 5 鉛入り青銅滴(SUR-8) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 (Photo. 8に対応)

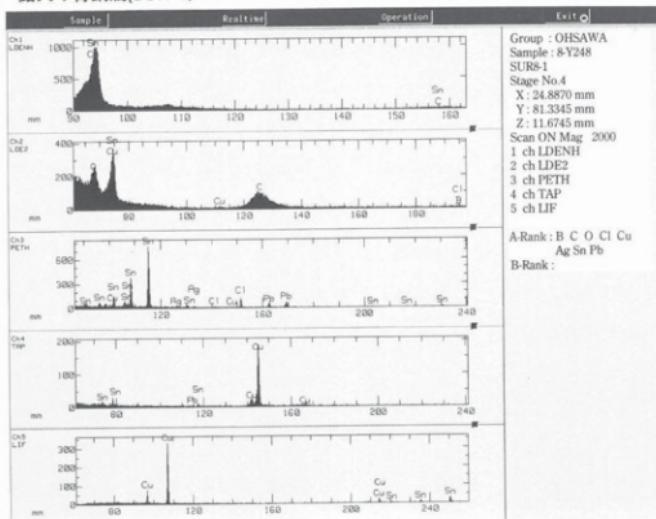


Fig. 6 鉛入り青銅滴(SUR-8) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 (Photo. 9に対応)

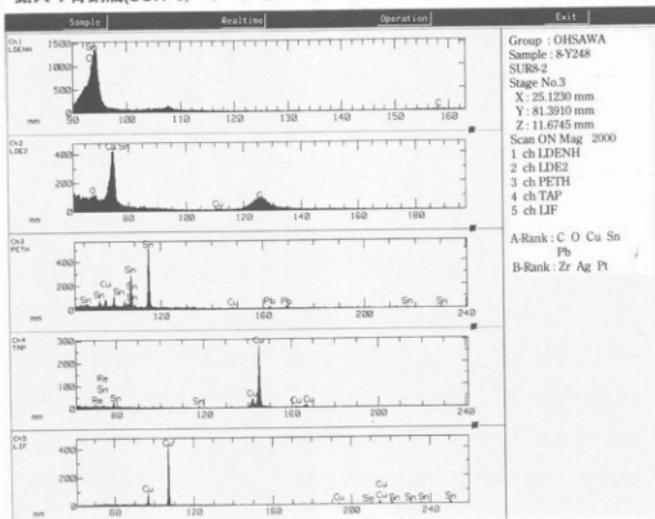


Fig. 7 酸化銅塊小片(SUR-9) 中銅部のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 (Photo. 10に対応)

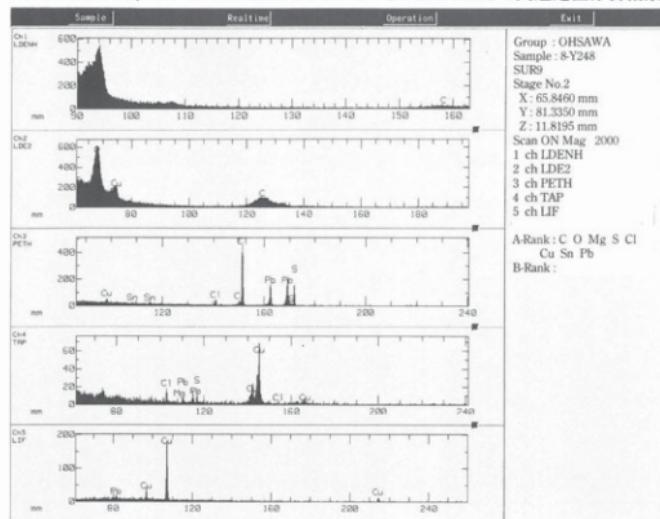


Fig. 8 鳩目錢(SUR-10) のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 (Photo. 10に対応)

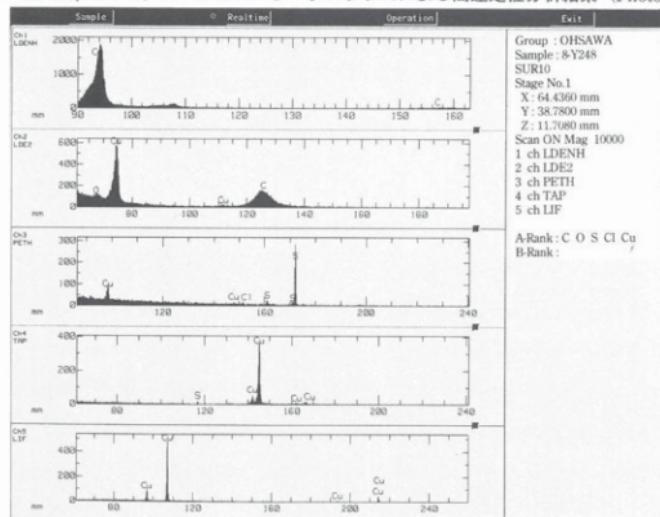


Fig. 9 琉球貨銭：世高通宝(SUR-11)のコンピュータープログラムによる高速定性分析結果 (Photo. 11に対応)

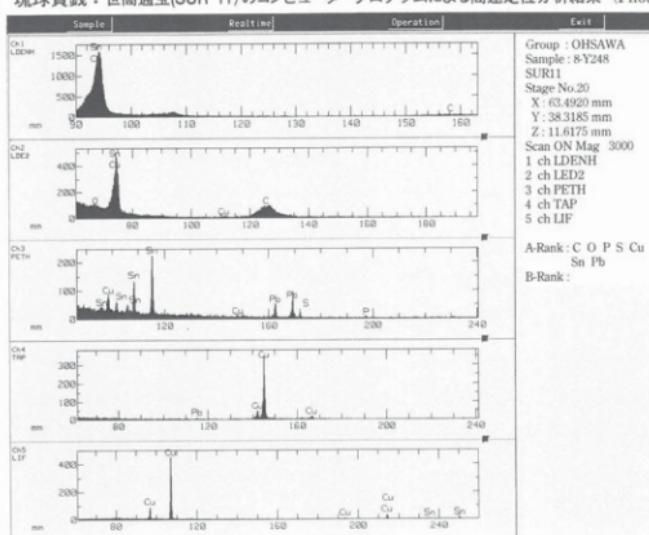


Photo. 15 SUR-1 鼎形香炉 (1目盛りの単位は1mm)

首里城関係主要年表

年 代	王 統	主 な 事 項	中国	中国暦	日本	和暦	主 な 事 項
607年		隋の煬帝、朱寛を琉球に派遣。	629年	舒明 1		>	このころ『隋書』(流求国伝)編集(～656年)
753年		麁真ら阿兒奈波に漂着する。					鎌倉幕府創立。
1187年	舜天 1	舜天即位と伝わる。					蒙古、國号を元とする。
1260年	英祖 1	英祖王即位と伝わる。	1271年	至元 8	1192年	建久 3	元軍日本襲来(文永の役)。
1296年	英祖 38	沖繩本島に元軍襲来という。		至元 11	1274年	文永 11	元軍日本襲来(弘安の役)。
1350年	察度 1	察度王即位(添浦按司から王となり首里へ)		至元 18	1281年	弘安 4	鎌倉幕府滅ぶ。
1372年	察度 23	中山王察度、はじめて明に入貢。		元統 1	1333年	元弘 3	室町幕府成立。
1389年	察度 40	察度、朝鮮(高麗)と通好する。	1338年	至元 4	1338年	延元 3	元滅び、明建国。
1392年	察度 43	高世層理殿で遊観する。	1368年	洪武 1		>	景德鎮珠山山麓に御器廠を設け監督官を置き焼造一説に景德鎮御器廠はこの年に設けられる。
1404年	武寧 9	冊封使、はじめて来琉。	1369年	洪武 2			
1406年	尚思紹 1	シャム(タイ)船渡來し交易。					
1416年	尚思紹 11	察度王統亡び、尚思紹、中山王となる。(第一尚氏)					
1421年	尚思紹 16	尚巴志、山北王摩安知を討つ。					
1427年	尚巴志 6	バレンバン(インドネシア)と交易はじまる。					
1428年	尚巴志 7	龍潭を掘り安国山を築く。					
1429年	尚巴志 8	国門(中山門)を創建。					
1430年	尚巴志 9	尚巴志、山南王他魯毎を滅ぼし全島を統一する。					
1453年	尚金福 4	ジャワ(インドネシア)との交渉はじまる。					
1454年	尚泰久 1	志魯・布里の乱、首里城炎上。					
1459年	尚泰久 5	琉球銭貨、大世通宝が初めて鋳造。					
1461年	尚泰久 6	護佐丸・阿麻和利の乱。					
1463年	尚徳 3	万国津梁の鐘を鋳造。					
1466年	尚徳 6	王府失火で倉庫などを焼く。					
1470年	尚円 1	琉球銭貨、世高通宝が初めて鋳造。	1467年	成化 3	1467年	応仁 1	応仁の乱始まる。
1477年	尚真 1	マラッカ(マレーシア)へ使者を派遣。					
1490年	尚真 14	室町幕府に使いを遣わし、京にて「鉄砲」を試射する。					
1494年	尚真 18	尚円(金丸)即位。(第二尚氏)。					
1500年	尚真 24	琉球銭貨、金圓世宝が初めて鋳造。					
1501年	尚真 25	首里城歡会門、久慶門創建。	1477年	成化 13	1477年	文明 9	応仁の乱終わる。
1506年	尚真 30	与那国に朝鮮濟州島漁民金非衣ら漂着する。					
1508年	尚真 32	バタニ(タイ)と初めて交易。					
1522年	尚真 46	円覺寺の宗廟を設立。					
1529年	尚真 3	八重山、アカハチ・ホンガワラの乱。					
		玉陵を築く。					
		久米島、具志川按司を征討。					
		首里城北殿創建。					
		与那国、鬼虎の乱。					
		首里城守礼の門創建。					

首里城関係主要年表

年代	王統	主な事項	中国	中国暦	日本	和暦	主な事項
1532年 1546年 1554年	尚清6 尚清20 尚清28	「おもろのさうし」巻1編集。 首里城東南の城壁工事完成。 倭寇を防ぐため屋良座森城竣工。	1543年	嘉靖22	1531年 1543年	享禄4 天文18	一向一揆、越前朝倉氏を破る。 鉄砲伝来。
1556年 1605年	尚元1 尚寧17	倭寇を撃退する。 湧田窯にて「萬曆33年」銘入りの瓦器が焼成される。	1572年 1600年 1603年	隆慶5 萬曆28 萬曆31	1572年 1600年 1603年	元亀3 慶長5 慶長8	室町幕府滅ぶ。 関が原の戦い。 江戸幕府開く。
1609年 1616年	尚寧21 尚寧28	慶長の役。薩摩軍侵攻。 薩摩より朝鮮陶工、張一官、 安一官、安三官をつれ帰り、 湧田窯を開く。	1616年	萬曆44		>	満州王朝興る。
1623年	尚豊3	「おもろさうし」巻3以下となる。 首里城南殿創建。	1634年 1636年	崇禎7 崇禎9	1634年 1637年	寛永11 寛永14	鎮国令。 満州王朝、国号を清とする。 島原の乱(～1638年)。 明朝滅亡。
1628年 1660年 1665年	尚豊8 尚質13 尚質18	首里城正殿焼失。 平田典通ら諫方仲左衛門より 上焼物秘伝書を譲り受ける。	1644年 1662年	崇禎10 康熙1	順治1	>	明王殺害完全滅亡。
1671年	尚貞3	首里城正殿の再建工事始まり、 瓦葺に建て改められる。					
1672年	尚貞4	平田典通、中国から「五色玉 諸焼物葉掛け」の法を学び帰 国。					
1682年	尚貞14	陶工を牧志村壺屋に集住させ る。					
1709年 1712年 1724年	尚貞41 尚益3 尚敬12	首里城正殿、南殿、北殿焼失。 首里城北殿、南殿再建。 仲村渠致元、八重山山田平等 に窯を作り壺および上焼を伝 授。					
1726年	尚敬14	八重山、山田平等窯より「雍 正4年丙午」銘入り無釉陶器 が焼成。	1726年	雍正4			
1729年 1730年	尚敬17 尚敬18	首里城正殿重修される。 仲村渠致元、薩摩の立野と苗 代川において陶器の焼法を伝授。					
1731年	尚敬19	仲村渠致元、湧田にて磁器を 焼く。					
1739年	尚敬27	漏刻門前に日時計を置き時刻 を計る。					
1753年	尚穆3	首里城内に寝廟殿、世添御殿 を創建。					
1768年	尚穆17	地震の被害にあった首里城正 殿を重修。					
1846年 1853年 1857年	尚育12 尚泰6 尚泰10	首里城正殿重修。 ペルリ提督来琉、首里城訪問。 中城御殿(世子殿)を当蔵へ 移転。	1840年	道光20	1776年 1789年	> > >	アメリカの独立宣言。 フランス革命。 アヘン戦争。
1874年 1879年	尚泰27 尚泰32	琉球王国最後の進貢船渡清。 首里城明渡し、熊本鎮台分遣 隊駐留。	1894年	光緒16	1867年 1868年	慶応3 明治1	江戸幕府倒れる。 王政復古。
1897年	明治30	沖縄県師範学校、首里城から 当蔵に移転。					
1908年	明治41	中山門、腐朽のための充却撤 去。					
1909年	明治42	首里城跡、首里区に払い下 げる。	1911年	宣統3		>	中国に辛亥革命おこる。清朝 滅亡。

首里城関係主要年表

年 代	王 統	主 な 事 項	中国	中国曆	日本	和暦	主 な 事 項
1912年	明治45 (大正1)	首里城に第一小学校ができる。 広福門、奉神門が撤去される。	1912年		1912年 1914年 1917年	明治45 大正 3 大正 6	中華民国成立。 第1次世界大戦はじまる。 ロシア革命。
1924年	大正13	沖縄神社創建し正殿を拝殿とする。					
1925年	大正14	正殿国宝指定。					
1927年	昭和 2	国補助による正殿の解体修理実施。					
1931年	昭和 6	正殿の解体修理工事完成。					
1933年	昭和 8	歓会門、瑞泉門、白銀門、守礼門等国宝指定。					
1936年	昭和11	伊東忠太・鎌倉芳太郎の両氏による首里城跡ほかの発掘調査(～1937)。					
1944年	昭和19	首里城跡、地下に第32軍指令部塹が構築。					
1945年	昭和20	首里城の建物や石垣等、沖縄戦で焼失。					
1992年	平成 4	首里城正殿は復元される。					

<参考資料>

- 宮城栄昌・高宮廣衛編『沖縄歴史地図』<歴史編> 柏書房 1983年。
- 沖縄タイムス社『沖縄大百科事典』 別巻 1983年。
- 日本史料集成編纂会『中国・朝鮮の史籍における 日本史料集成 明寛録之部 1』 国書刊行会 1979年。
- 池田豪史・津波古聰『灰釉碗の話』『沖縄県立博物館紀要』 第17号 1991年。
- 沖縄県教育委員会『重新校正 中山世鑑』 1983年。
- 沖縄県教育委員会『湧田古窯跡(I)』 1993年。
- 阿利直治『沖縄県石垣市山田平等窯址、慶田川窯址、黒石川窯址』『黒石川窯址』石垣市教育委員会 1993年。
- 沖縄県教育委員会『首里城の歴史概略』『首里城(一南殿・北殿跡の遺構調査報告一)』 1995年。
- 兵庫理藏鉄調査会『日本出土鉄統覧』 1996年版。

中国(元・明・清代)年代表

Periods of Chinese History (Yuan, Ming and Qing Dynasties)

元 時 代 · (Yuan Dynasty)	1271年～1368年
明 時 代 · (Ming Dynasty)	1368年～1644年
洪 武 · (Hong-wu)	1368年～1398年
建 文 · (Jian-wen)	1399年～1402年
永 葉 · (Yong-le)	1403年～1424年
洪 熙 · (Hong-xi)	1425年
宣 德 · (Xuan-de)	1426年～1435年
正 続 · (Zheng-tong)	1436年～1449年
景 泰 · (Jing-tai)	1450年～1457年
天 順 · (Tian-shun)	1457年～1464年
成 化 · (Cheng-hua)	1465年～1487年
清 時 代 · (Qing Dynasty)	1644年～1911年
順 治 · (Shun-zhi)	1644年～1661年
康 熙 · (Kang-xi)	1662年～1722年
雍 正 · (Yong-zheng)	1723年～1735年
乾 隆 · (Qian-long)	1736年～1795年
嘉 慶 · (Jia-qing)	1796年～1820年

注: 東京国立博物館「東京国立博物館版目録・中国陶磁篇Ⅱ」1990年を編集しなおしたものである。

謝意

1994年11月～1995年12月までの二年度にまたがる発掘調査、そして本報告書の作成を無事に終えることができました。

発掘調査にあたられた作業員や嘱託調査員の方々には、風雨が強く肌寒い冬場から蒸し風呂のような夏場まで体力と神経の消耗する発掘作業や遺構実測でずいぶん無理や面倒をおかけしました。

諸先生方、学兄の皆様には発掘調査・資料整理期間中には遺構解釈や遺物の鑑定で御指導・御検討をいただきました。

また、報告書作成の途中で、県立博物館での企画展「史跡首里城跡『京の内』の出土品展」(11/1～11/16) や那覇市立壱屋焼物博物館開館記念特別展「陶磁器に見る大交易時代の沖縄とアジア」(2/1～3/20) の二つの展示会が開催されたため、原稿執筆、実測、トレイス、復元、写真撮影、展示品の搬出と搬入などで若狭・首里的両資料室はパニック寸前の状態で誰とはなく自主的に残業をし、無事に二つの展示会を終え、本報告書も刊行されました。これもひとえに多くの方々の協力によるものであり、その方々への感謝の念が堪えません。

おわりに、国指定史跡首里城跡の復元整備にともなう発掘調査で、常日頃から発掘調査の便宜をとられた沖縄開発庁沖縄総合事務局 国営沖縄記念公園事務所ならびに同首里出張所、海洋博覧会記念公園管理財団首里城管理センターの職員・関係者の方々には衷心から感謝を申し上げます。

1998年3月

沖縄県文化財調査報告書 第132集

首里城跡

—京の内跡発掘調査報告書（I）—

発行年 平成10年（1998年）3月
発行 沖縄県教育委員会
編集 沖縄県教育庁文化課
〒900-0021 那覇市泉崎1丁目2番2号
TEL. 098(866)2731
印刷 (有)サン印刷
〒901-1111 南風原町字兼城577番地
TEL. 098(889)3679 (代)

© 沖縄県教育委員会 1998 Printed in Japan
許可なく本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

表 青磁牡丹唐草文花瓶（中国 元 14C）

裏 青花松梅樹文双耳花瓶（中国 明初 14C末～15C前半）

